大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第71集

西秣大迫遺跡・春畑遺跡・カシミ遺跡
今成館跡・木内遺跡・丸尾城跡

－東九州自動車道（県境～宇佐間）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（１）－

２０１４

大分県教育庁埋蔵文化財センター

西秣大迫遺跡・春畑遺跡・カシミ遺跡

今成館跡・木内遺跡・丸尾城跡

－東九州自動車道（県境～宇佐間）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（１）－

序　文

本書は、大分県教育委員会が西日本高速道路株式会社の依頼により実施した東九州自動車道建設事業（県境～宇佐間）に伴う木内遺跡をはじめとした６ヶ所の遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

遺跡の所在する中津市と宇佐市は、大分県最大の広大な平野が広がり、弥生～古墳時代には、県下を代表する多くの遺跡が確認されています。また、古代には、虚空蔵寺跡をはじめとした寺院が造営され、九州でも最も濃密に仏教文化が華開いた地域でもありました。

本書で報告する遺跡群のうち、中津市域では、西秣大迫遺跡・春畑遺跡・カシミ遺跡において南北朝～戦国時代の良好な集落が確認できました。また、宇佐市域では、木内遺跡・今成館の中世集落や、それを見下ろす位置にある戦国時代の丸尾城跡の調査を行いました。周辺の歴史環境に対する調査成果と合わせて、本地域における中世の社会を理解する上で貴重な発見が得られました。発掘調査成果をまとめた本書が埋蔵文化財に対する保護や啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力いただきました関係各位に対し衷心から感謝申し上げます。

平成26年３月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所　長　　宮　内　克　己

例　言

1　本書は東九州自動車道（県境～宇佐間）建設事業に伴い、大分県教育委員会が西日本高速道路株式会社の依頼により実施した大分県中津市に所在する西秣大迫遺跡・春畑遺跡・カシミ遺跡と大分県宇佐市に所在する今成館跡・木内遺跡・丸尾城跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、大分県教育庁埋蔵文化財センター職員の管理のもと、以下の通り、それぞれ委託して実施した。

年　度	遺　跡　名	委託業者名
平成21年	木内遺跡１次	株式会社　九州文化財総合研究所
	今成館跡	有限会社　九州文化財リサーチ
平成23年	西秣大迫遺跡	株式会社　アート
	カシミ遺跡	株式会社　九州文化財総合研究所
	春畑遺跡	株式会社　イビソク
平成24年	丸尾城跡	株式会社　イビソク
	木内遺跡２次	株式会社　イビソク

3　整理作業は、大分県教育庁埋蔵文化財センター職員の管理のもと、平成22・24・25年度に九州文化財総合研究所株式会社、平成23年度にイビソク株式会社にそれぞれ委託して実施した。

4　遺物の写真撮影は原田昭一が行った。

5　本遺跡出土遺物、実測図、写真はすべて大分県教育庁埋蔵文化財センターに保管されている。

6　本書の執筆・編集は、小柳和宏・原田昭一・越智淳平が行った。

目　次

序文・例言

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過……1

第２節　調査組織の構成……2

第２章　遺跡の立地と環境……4

第１節　地理的環境……4

第２節　歴史的環境……4

第３章　調査の成果……7

第１節　西秣大迫遺跡……7

1　調査の概要……7

2　遺構と遺物……7

1）土坑……7

2）掘立柱建物……7

3）出土遺物……11

3　小結……12

第２節　春畑遺跡……13

1　調査の概要……13

2　遺構と遺物……14

1）溝……14

2）土坑……21

3）柱穴……22

4）包含層・その他出土遺物……23

3　小結……26

第３節　カシミ遺跡……29

1　調査の概要……29

2　遺構と遺物……33

1）井戸……33

2）土坑……33

3）掘立柱建物……38

4）柵列……41

5）ピット……42

6）溝……43

7）出土遺物……45

3　小結……47

第４節　今成館跡……48

1　調査の概要……48

2　遺構と遺物……51

1）第１平坦面……51
2）第２平坦面……52
3）第３平坦面……58
4）第４平坦面……59
5）第５平坦面……62
6）第６平坦面……62
7）第７平坦面……62
8）第８平坦面……64
9）第９平坦面……70
10）第14平坦面……71
11）第15平坦面……71
12）第16平坦面……72
13）第17平坦面……72
14）第20平坦面……72
15）出土石塔……76
3　小結……80
第５節　木内遺跡……82
1　調査の概要……82
2　遺構と遺物……85
１次（平成21年度調査）Ⅰ・Ⅲ区
1）井戸……85
2）柵列……85
3）溝……86
4）土坑……87
5）ピット……90
6）包含層・表土出土遺物……92
１次（平成21年度調査）Ⅱ区
1）溝……99
2）土坑……113
3）包含層・表土出土遺物……114
２次（平成24年度調査）
1）土坑……117
3　小結……125
第６節　丸尾城跡……126
写真図版
報告書抄録

図　版　目　次

第１図　東九州道（県境－宇佐間）における調査箇所……1
第２図　遺跡の位置と周辺の歴史的環境①……5
第３図　遺跡の位置と周辺の歴史的環境②……6
第４図　西秣大迫遺跡周辺地形図（1/5,000）……7
第５図　西秣大迫遺跡遺構配置図（1/400）……9～10
第６図　西秣大迫遺跡SK1（1/40）……11
第７図　西秣大迫遺跡SB2（1/80）……11
第８図　西秣大迫遺跡出土遺物（1/3）……12
第９図　春畑遺跡周辺地形図（1/5,000）……13
第10図　春畑遺跡遺構配置図（1/200）……15～16
第11図　春畑遺跡調査区南北土層断面図（1/40）……17～18
第12図　春畑遺跡調査区東西土層断面図（1/40）……19～20
第13図　春畑遺跡SD1出土遺物（1/3）……21
第14図　春畑遺跡SD62出土遺物（1/3）……21
第15図　春畑遺跡SK56（1/20）……22
第16図　春畑遺跡SK56出土遺物（1/3）……22
第17図　春畑遺跡SK292（1/20）……23
第18図　春畑遺跡SK54（1/20）……23
第19図　春畑遺跡SP297ほか（1/20）……24
第20図　春畑遺跡SP289（1/20）……24
第21図　春畑遺跡SP289出土遺物（1/3）……24
第22図　春畑遺跡包含層出土遺物①（1/3）……25
第23図　春畑遺跡包含層出土遺物②（1/3）……26
第24図　カシミ遺跡周辺地形図（1/5,000）……29
第25図　カシミ遺跡遺構配置図（1/200）……31～32
第26図　カシミ遺跡SE136（1/80）……33
第27図　カシミ遺跡SE136出土遺物（1/3）……34
第28図　カシミ遺跡SK01（1/20）……34
第29図　カシミ遺跡SK02（1/20）……34
第30図　カシミ遺跡SK02出土遺物（1/3）……35
第31図　カシミ遺跡SK03（1/20）……35
第32図　カシミ遺跡SK154・155（1/80）……36
第33図　カシミ遺跡SK148（1/20）……36
第34図　カシミ遺跡SK53（1/80）……37
第35図　カシミ遺跡SK53出土遺物（1/3）……37
第36図　カシミ遺跡SK147（1/40）……38
第37図　カシミ遺跡SK150（1/40）……38
第38図　カシミ遺跡西区SK151（1/40）……38
第39図　カシミ遺跡SB10（1/60）……39
第40図　カシミ遺跡SB126（1/60）……40
第41図　カシミ遺跡SP172出土遺物（1/3）……41
第42図　カシミ遺跡SA54（1/60）……41
第43図　カシミ遺跡SA158（1/60）……41
第44図　カシミ遺跡SA163（1/60）……42
第45図　カシミ遺跡SA163出土遺物（1/3）……42
第46図　カシミ遺跡SP27（1/20）……42
第47図　カシミ遺跡SP27出土遺物（1/3）……42
第48図　カシミ遺跡ピット出土遺物（1/3）……43
第49図　カシミ遺跡溝状遺構出土遺物（1/3）……43
第50図　カシミ遺跡SD111・112・113・114・115（1/80）……44
第51図　カシミ遺跡出土遺物①（1/3）……45
第52図　カシミ遺跡出土遺物②（1/2）……45
第53図　カシミ遺跡出土遺物③（1/3）……45
第54図　今成館跡周辺地形図（1/5,000）……48
第55図　今成館跡遺構配置図（1/500）……49～50
第56図　今成館跡平坦地・トレンチ配置図（1/1,500）……51
第57図　今成館跡第１平坦面SK027（1/40）……51
第58図　今成館跡第１平坦面出土遺物（1/3）……52
第59図　今成館跡第２平坦面（1/200）……52
第60図　今成館跡第２平坦面土層断面図（1/70）……53
第61図　今成館跡第２平坦面出土遺物①（1/3）……53
第62図　今成館跡第２平坦面出土遺物②（1/1）……53
第63図　今成館跡第２平坦面ST240（1/40）……55
第64図　今成館跡第２平坦面ST240出土遺物①（1/3）……56
第65図　今成館跡第２平坦面ST240出土遺物②（1/6）……57
第66図　今成館跡第２平坦面SP248出土遺物（1/3）……58
第67図　今成館跡第３平坦面トレンチ土層断面図（1/70）……58
第68図　今成館跡第３平坦面出土遺物（1/3）……58
第69図　今成館跡第４平坦面（1/250）……59
第70図　今成館跡第４平坦面トレンチ断面図（1/70）……60
第71図　今成館跡第４平坦面SP229（1/20）……60
第72図　今成館跡第４平坦面SP229出土遺物（1/3）……61
第73図　今成館跡第４平坦面出土遺物（1/3，1/1）……61
第74図　今成館跡第５平坦面土層断面図（1/50）……61
第75図　今成館跡第５平坦面出土遺物（1/3）……62
第76図　今成館跡第７平坦面SK107（1/20）……62
第77図　今成館跡第７平坦面SK107出土遺物（1/3）……63
第78図　今成館跡第７平坦面SK136出土遺物（1/3）……63
第79図　今成館跡第７平坦面SK149出土遺物（1/3）……63
第80図　今成館跡第７平坦面出土遺物（1/3）……64
第81図　今成館跡第８平坦面トレンチ土層断面図（1/70）……65～66
第82図　今成館跡第８平坦面SX243出土遺物（1/3）……67
第83図　今成館跡第８平坦面SK244出土遺物（1/3）……67
第84図　今成館跡第８平坦面SP241（1/20）……68
第85図　今成館跡第８平坦面SP241出土遺物（1/3）……68
第86図　今成館跡第８平坦面出土遺物①（1/3）……69
第87図　今成館跡第８平坦面出土遺物②（1/3）……70
第88図　今成館跡第９平坦面トレンチ土層断面図（1/70）……71
第89図　今成館跡第９平坦面出土遺物（1/3）……71
第90図　今成館跡第14平坦面出土遺物（1/3）……71
第91図　今成館跡第15平坦面トレンチ断面図（1/50）……71
第92図　今成館跡第15平坦面出土遺物（1/3）……71
第93図　今成館跡第16平坦面出土遺物（1/3）……72
第94図　今成館跡第17平坦面東斜面石塔（1/20）……72
第95図　今成館跡第17平坦面石塔（1/4）……73
第96図　今成館跡第17平坦面出土遺物（1/3）……74
第97図　今成館跡第20平坦面SX239（1/25）……74
第98図　今成館跡第20平坦面SX239出土遺物……75
第99図　今成館跡第20平坦面出土遺物（1/3）……75
第100図　今成館跡所在石塔①（1/8）……76
第101図　今成館跡縄張り図……80
第102図　木内遺跡周辺地形図（1/5,000）……82
第103図　木内遺跡調査区配置図（1/800）……82
第104図　木内遺跡１次Ⅰ区遺構配置図（1/200）……83
第105図　木内遺跡１次Ⅲ区遺構配置図（1/200）……84
第106図　木内遺跡１次Ⅲ区SE005出土遺物（1/3）……85
第107図　木内遺跡１次Ⅲ区SE005（1/40）……85
第108図　木内遺跡１次Ⅲ区SA015（1/40）……86
第109図　木内遺跡１次Ⅲ区SD004土層断面図（1/40）……86
第110図　木内遺跡１次Ⅲ区SD004出土遺物（1/3）……86
第111図　木内遺跡１次Ⅲ区SK007（1/20）……87
第112図　木内遺跡１次Ⅲ区SK007出土遺物（1/3）……88
第113図　木内遺跡１次Ⅰ区SK001・S002・S003（1/40）……88
第114図　木内遺跡１次Ⅲ区SK010（1/40）……89
第115図　木内遺跡１次Ⅰ区SK010出土遺物（1/3）……89
第116図　木内遺跡１次Ⅲ区SX008（1/40）……89
第117図　木内遺跡１次Ⅰ区SX008出土遺物（1/3）……90

第118図　木内遺跡１次Ⅲ区SX009（1/40）……90
第119図　木内遺跡１次Ⅰ・Ⅲ区ピット（1/20）……90
第120図　木内遺跡１次Ⅰ・Ⅲ区ピット出土遺物（1/3）……91
第121図　木内遺跡１次Ⅰ・Ⅲ区包含層・表土出土遺物①…92
第122図　木内遺跡１次Ⅰ・Ⅲ区包含層・表土出土遺物②…93
第123図　木内遺跡１次Ⅰ・Ⅲ区包含層・表土出土遺物③…94
第124図　木内遺跡１次Ⅱ区遺構配置図（1/200）……95
第125図　木内遺跡１次Ⅱ区SD001（1/100）…… 97～98
第126図　木内遺跡１次Ⅱ区SD001出土遺物①（1/3）……99
第127図　木内遺跡１次Ⅱ区SD001出土遺物②（1/3）…… 100
第128図　木内遺跡１次Ⅱ区SD002（1/100）…… 101
第129図　木内遺跡１次Ⅱ区SD002遺物出土状態（1/40）… 101
第130図　木内遺跡１次Ⅱ区SD002出土遺物（1/3）…… 101
第131図　木内遺跡１次Ⅱ区SD003・005（1/100）… 103～104
第132図　木内遺跡１次Ⅱ区SD003出土遺物①（1/3）…… 105
第133図　木内遺跡１次Ⅱ区SD003出土遺物②（1/3）…… 106
第134図　木内遺跡１次Ⅱ区SD003出土遺物③（1/3）…… 107
第135図　木内遺跡１次Ⅱ区SD003出土遺物④（1/3）…… 108
第136図　木内遺跡１次Ⅱ区SD003出土遺物⑤（1/3）…… 109
第137図　木内遺跡１次Ⅱ区SD003出土遺物⑥（1/3）…… 110
第138図　木内遺跡１次Ⅱ区SD003出土遺物⑦（1/3）…… 111
第139図　木内遺跡１次Ⅱ区SD003出土遺物⑧（1/1）…… 111
第140図　木内遺跡１次Ⅱ区SD005出土遺物①（1/3）…… 112
第141図　木内遺跡１次Ⅱ区SD005出土遺物②（1/4）…… 112
第142図　木内遺跡１次Ⅱ区SK004 …… 113
第143図　木内遺跡１次Ⅱ区SK004出土遺物（1/3）…… 113
第144図　木内遺跡１次Ⅱ区縄文時代包含層出土遺物（1/3）
…… 114
第145図　木内遺跡１次Ⅱ区出土遺物（1/3）…… 115
第146図　木内遺跡２次遺構配置図（1/100）…… 116
第147図　木内遺跡２次SK002（1/20）…… 117
第148図　木内遺跡２次SK002出土遺物①（1/3）…… 118
第149図　木内遺跡２次SK002出土遺物②（1/2）…… 119
第150図　木内遺跡２次SK002出土遺物③（1/3）…… 119
第151図　丸尾城跡平面図（1/2,000）…… 127

表　目　次

第１表　西秣大迫遺跡出土遺物一覧表（土器）……12
第２表　西秣大迫遺跡出土遺物一覧表（石器）……12
第３表　春畑遺跡出土遺物観察表（土器）……28
第４表　カシミ遺跡出土遺物観察表（土器）……46
第５表　カシミ遺跡出土遺物観察表（石器）……46
第６表　今成館跡出土遺物観察表（土器）①……77
第７表　今成館跡出土遺物観察表（土器）②……78
第８表　今成館跡出土遺物観察表（石器・石製品）……79
第９表　今成館跡出土遺物観察表（土製品）……79
第10表　今成館跡出土遺物観察表（瓦）……79
第11表　今成館跡出土遺物観察表（金属製品）……79
第12表　木内遺跡出土遺物観察表（土器）①…… 120
第13表　木内遺跡出土遺物観察表（土器）②…… 121
第14表　木内遺跡出土遺物観察表（土器）③…… 122
第15表　木内遺跡出土遺物観察表（土器）④…… 123
第16表　木内遺跡出土遺物観察表（石器）…… 123
第17表　木内遺跡出土遺物観察表（土製品）…… 123
第18表　木内遺跡出土遺物観察表（瓦）…… 124
第19表　木内遺跡出土遺物観察表（銭貨）…… 124
第20表　木内遺跡出土遺物観察表（金属製品）…… 124

写　真　図　版　目　次

写真図版１（西秣大迫遺跡）
調査区全景（南から）、２区全景、１区全景
１区SB2・SD3・SP14、１区SB2、２区SK19…… 128
写真図版２（春畑遺跡）
調査区全景（南から）、調査区全景
南北トレンチ堀土層断面、SK56、SK292、SK54 …… 129
写真図版３（カシミ遺跡）
調査区全景（東から）、西区全景、西区SB126ほか
東区全景、西区SE136、東区SK01・02・03 …… 130
写真図版４（カシミ遺跡）
東区SK01、東区SK02、東区SK03、東区SB10
東区SB126、東区SA158・SA163、東区SA54
東区SD111ほか…… 131
写真図版５（今成館跡）
調査区遠景（南から）、調査区全景（南西から）
第１・２・３・４平坦面、調査区全景（東から）
SK027、ST240 …… 132
写真図版６（今成館跡）
ST240、ST240人骨出土状態、SA252、SP229、
第４平坦面整地層土層断面図、SK107、SK244・SP241… 133
写真図版７（今成館跡）
SK244、SP241、第15平坦面土塁状遺構、SX239
今成館跡出土遺物…… 134
写真図版８（木内遺跡）
１次調査区全景（南から）、１次調査区全景（北から）
１次調査区全景（西から）、１次調査区全景
１次調査Ⅲ区SE005
１次調査Ⅲ区SA015（南東から）…… 135
写真図版９（木内遺跡）
１次調査Ⅲ区SD004（南から）、１次調査Ⅲ区SK007
１次調査Ⅲ区SK001・002・003
１次調査Ⅲ区SK001、１次調査Ⅲ区SK002
１次調査Ⅲ区SK003、
１次調査Ⅲ区SK001・002・003完掘状態
１次調査Ⅲ区SX008・009 …… 136
写真図版10（木内遺跡）
１次調査Ⅲ区SX008・009完掘状態
１次調査Ⅱ区全景、１次調査Ⅱ区SD001
１次調査Ⅱ区SD002、１次調査Ⅱ区SD003・005
１次調査Ⅱ区SK004、２次調査Ⅱ区全景
２次調査Ⅱ区SK002…… 137
写真図版11（木内遺跡・丸尾城跡）
木内遺跡出土遺物、丸尾城跡遠景（西から）…… 138

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

東九州自動車道は、福岡県北九州市を起点とし、大分県、宮崎県を経由して鹿児島県鹿児島市に至る高速道路であり、東九州を縦断する主要幹線道路である。全区間開通の暁には、すでに供用している九州縦貫自動車道及び九州横断自動車道等と一体となり循環型高速交通ネットワークを形成し、東九州地域はもとより九州全体の産業、経済、観光の発展に大きな期待が寄せられている。

平成25年３月末までには約241km（供用率55％）が開通しており、現在、約154kmの区間で事業が進められている。約109kmの延長距離を測る県内では、平成11年に東九州自動車道として初となる「大分米良～大分宮河内間」が供用開始され、引き続き、「大分宮河内～津久見間」が平成13年に、「津久見～佐伯間」については平成20年に供用開始された。

「築上～宇佐間」については、平成18年の第２回国土開発幹線自動車道建設会議において、西日本高速道路株式会社が有料道路方式にて整備することになり、基本計画区間の「宇佐～速見間」については、「高速自動車国道に並行する一般国道自動車専用道路」として、宇佐別府道路（延長22.4km）が供用されている。

大分県下の路線区である県境～宇佐間（延長14km）は、大分県と福岡県の県境にあたる山国川から宇佐ＩＣまでの区間であり、現在、事業が進行している。この路線は、大分県北部を代表する古代寺院である虚空蔵寺跡が所在する宇佐市山本地区を起点に宇佐市の山稜部から中津市三光の深水・秣地区の谷部に抜け、佐知地区の広い平野に至る地区には、縄文時代から中世に及ぶ良好な遺跡群が存在することがかねてより認識されていた。大分県教育委員会では、対象区域において詳細な遺跡の確認が必要と判断し、西日本高速道路株式会社と協議を開始した。平成13年度より路線内の遺跡分布調査を実施し、用地買収が進行した平成20年度より随時、買収地の試掘調査を実施し、遺構・遺物が確認できた遺跡の本調査を行った。

本調査は、まず、平成21年７～８月に宇佐市木内遺跡から行った。今回の報告分に関する実施箇所について、調査期間は以下の通りである。

１．西秣大迫遺跡　２．春畑遺跡　３．カシミ遺跡
４．今成館跡　５．木内遺跡　６．丸尾城跡

第１図　東九州道（県境－宇佐間）における調査箇所

遺　跡　名	住　所	調　査　期　間	整理年度
西秣大迫遺跡	中津市三光西秣	平成23年８月～10月	平成24年
春畑遺跡	中津市三光下秣	平成24年１月～３月	平成24年
カシミ遺跡	中津市三光下深水	平成23年６月～８月	平成24年
今成館跡	宇佐市今成	平成21年11月～平成22年２月	平成24年
木内遺跡１次	宇佐市木内	平成21年７月～８月	平成22～23年
木内遺跡２次	宇佐市木内	平成24年11月	平成25年
丸尾城跡	宇佐市木内	平成24年６月	平成25年

第２節　調査組織の構成

調　査　主　体　　大分県教育委員会

現　場　作　業

【西秣大迫遺跡】

小　矢　文　則	大分県教育委員会教育長	
山　口　博　文	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
坂　本　嘉　弘	同	次長
宮　内　克　己	同	次長兼一般事業班参事(総括)
小　柳　和　宏	同	受託事業班課長補佐（総括）
原　田　昭　一（調査担当）	同	受託事業班主幹

【春畑遺跡】

小　矢　文　則	大分県教育委員会教育長	
山　口　博　文	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
坂　本　嘉　弘	同	次長
宮　内　克　己	同	次長兼一般事業班参事(総括)
小　柳　和　宏	同	受託事業班課長補佐（総括）
越　智　淳　平（調査担当）	同	受託事業班主事

【カシミ遺跡】

小　矢　文　則	大分県教育委員会教育長	
山　口　博　文	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
坂　本　嘉　弘	同	次長
宮　内　克　己	同	次長兼一般事業班参事(総括)
小　柳　和　宏	同	受託事業班課長補佐（総括）
田　中　裕　介（調査担当）	同	一般事業班主幹

【今成館跡】

小　矢　文　則	大分県教育委員会教育長	
佐　藤　英　一	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
坂　本　嘉　弘	同	次長
小　柳　和　宏	同	受託事業班主幹（総括）
原　田　昭　一（調査担当）	同	受託事業班主幹

【木内遺跡（１次)】

小　矢　文　則	大分県教育委員会教育長	
佐　藤　英　一	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
坂　本　嘉　弘	同	次長
小　柳　和　宏	同	受託事業班主幹（総括）
原　田　昭　一（調査担当）	同	受託事業班主幹

【木内遺跡（２次)】

野　中　信　孝	大分県教育委員会教育長
山　口　博　文	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長

宮内克己	同	次長
小柳和宏	同	受託事業班課長補佐（総括）
友岡信彦（調査担当）	同	受託事業班主幹

【丸尾城跡】

野中信孝	大分県教育委員会教育長	
山口博文	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
宮内克己	同	次長
小柳和宏	同	受託事業班課長補佐（総括）
友岡信彦（調査担当）	同	受託事業班主幹

整理作業

【平成22年度（木内遺跡１次）】

小矢文則	大分県教育委員会教育長	
山口博文	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
坂本嘉弘	同	次長
宮内克己	同	次長兼一般事業班参事(総括)
小柳和宏	同	受託事業班課長補佐（総括）
原田昭一	同	受託事業班主幹

【平成23年度（木内遺跡１次）】

小矢文則	大分県教育委員会教育長	
山口博文	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
坂本嘉弘	同	次長
宮内克己	同	次長兼一般事業班参事(総括)
小柳和宏	同	受託事業班課長補佐（総括）
原田昭一	同	受託事業班主幹

【平成24年度（今成館跡、今成近世墓、カシミ遺跡、春畑遺跡、西秣大迫遺跡）】

小矢文則	大分県教育委員会教育長	
山口博文	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
宮内克己	同	次長
小林昭彦	同	次長兼一般事業班参事(総括)
小柳和宏	同	受託事業班課長補佐（総括）
原田昭一	同	一般事業班主幹

【平成25年度（木内遺跡２次）】

野中信孝	大分県教育委員会教育長	
宮内克己	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
小林昭彦	同	次長
小柳和宏	同	受託事業班参事（総括）

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

東九州自動車道の予定地である大分県宇佐市と中津市は大分県北部の宇佐平野に位置する市町村であり、北には瀬戸内海の周防灘を望む。

東九州自動車道の予定地である山国川から宇佐ＩＣまでの区間は、大分県と福岡県の県境にあたる山国川中流域の平野部から、犬丸川上流域の中津市三光西秣・下深水の谷部を通り、宇佐市の山稜に挟まれた谷状地形を抜け、宇佐ＩＣに通ずる。

いずれの遺跡も、丘陵地や丘陵斜面の裾野、あるいは微高地上に営まれた遺跡である。カシミ遺跡、春畑遺跡、西秣大迫遺跡などが位置する犬丸川上流域の中津市三光西秣・下深水の谷部の南には標高513mを測る八面山が聳え立ち、その北側斜面は八面山から丘陵地は緩やかに伸び、裾野は開析谷や樹枝状に伸びた低丘陵が入り組む地形となっている。

また、宇佐市に位置する丸尾城跡、木内遺跡、今成館跡なども、八面山と同様に標高406mを測る稲積山や標高539mを測る石山の北側斜面の裾野に位置し、開析谷や樹枝状に伸びた低丘陵が入り組む地形となっている。

第２節　歴史的環境

今年度の調査箇所は、西秣大迫遺跡、春畑遺跡、カシミ遺跡が所在する犬丸川上流域の中津市三光西秣・下深水の谷部と今成館跡、木内遺跡、丸尾城跡が所在する宇佐市今成・木内地区は、古代・中世において、重要遺跡が集中する地域である。

中津市三光西秣・下深水においては、縄文時代の遺跡としては、香紫庵遺跡・挟万田遺跡や池ノ下・能元遺跡から縄文時代晩期の遺物が出土している。また、池ノ下・能元遺跡からは陥穴も確認されている。

弥生時代には、微高地や丘陵上に生活空間や墓地を営み、谷状平野に水田を拓いている。岡崎遺跡では石蓋土坑墓や石棺墓からなる墓域が確認されている。

犬丸川が流れる平野の田口・下秣地区の北側丘陵には、洗添横穴群・野辺田横穴墓群・天神原横穴墓群などの横穴墓や、倉迫二ツ塚古墳群・三ツ塚古墳群などの古墳群がみられる。

中津市三光西秣・下深水周辺では、古代には８世紀代に創建されたとされる塔ノ熊廃寺が犬丸川上流域の谷状平野に突き出た丘陵先端尾根上に営まれ、その周囲から10世紀の瓦を焼成した塔ノ熊瓦窯跡も調査されており、古代に仏教文化が花開いた地でもあったことがわかる。塔ノ熊廃寺の周囲には、８世紀後半の集落遺跡である香紫庵遺跡や、これよりやや下る平安期の集落遺跡である挟万田遺跡が平野部から確認されている。また、池ノ下・能元遺跡からは二彩陶器が出土している。

中世には、田口氏・秣氏・深水氏などの土豪の活躍の舞台となり、各氏は岡崎城（地神城）・秣城・ズリヤネ城を山城としている。ズリヤネ城付近の深水邸から発見された14世紀の土師質土器皿・銭貨・五徳等が納められた備前焼大甕の埋納遺構は特筆すべきものである。また、この一帯には石造物もみられ、長谷寺や香紫庵の宝塔は南北朝期に遡るものである。

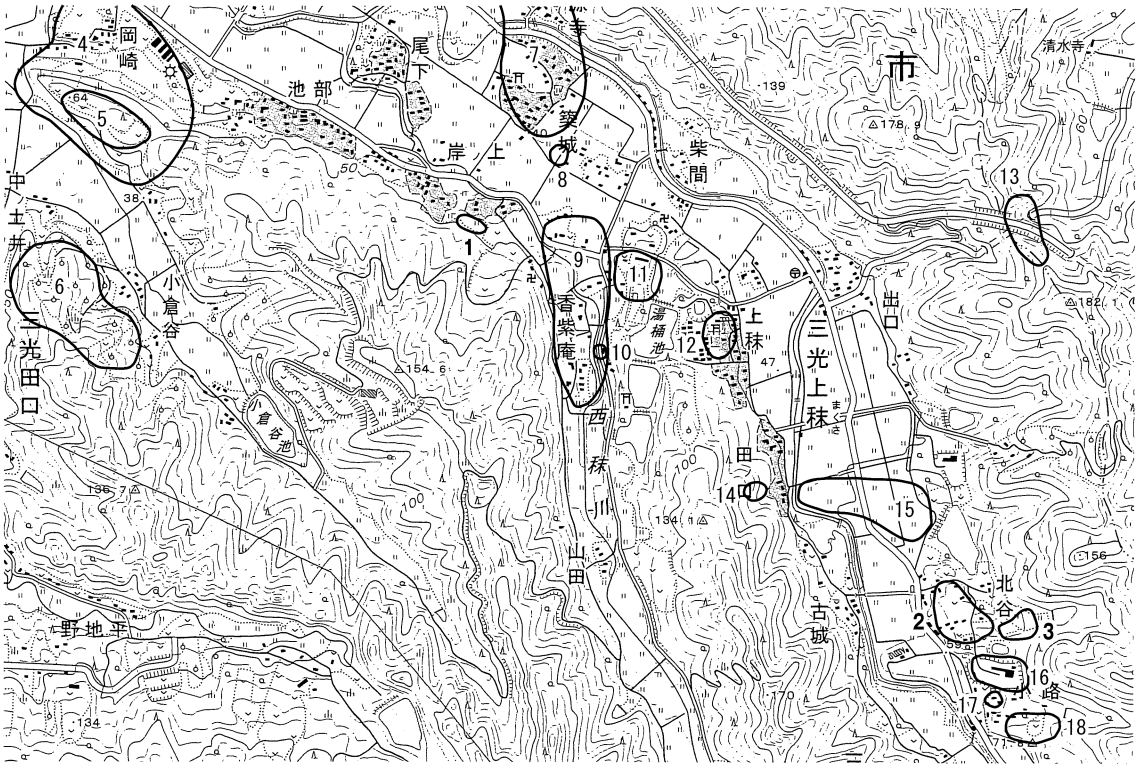
また、この谷の南側には中津平野から仰ぎ見る八面山（標高659.4m）が位置している。八面山は修験の霊山として位置付けられ、平安後期の紀年銘をもつ３本の経筒が、北麓の三光村大字田口字山下から発見されており、近くの大字成恒字瑞雲寺から出土した誕生仏・青磁・白磁等も経塚から出土したのではないかと推定されている。また、山頂付近の箭山神社境内には徳治３年（1308）銘の角塔婆も残されており、八面山周辺には仏像を含めて古代から中世におよぶ仏教遺物が数多くみられる。

一方、宇佐市域に位置する宇佐市今成・木内地区周辺にも遺跡が濃密にみられる。当地は宇佐市域の中でも平野から山稜域に入る境界域にあたり、伊呂波川流域の谷状平野と丘陵に挟まれた環境にある。

当地には宇佐平野で代表的な神奈備型の霊山として位置付けられている稲積山（406m）が所在する。この山中には平安後期の紀年銘をもつ石柱塔婆が出土している。また、稲積山の山麓に位置する大同元年（806）開基

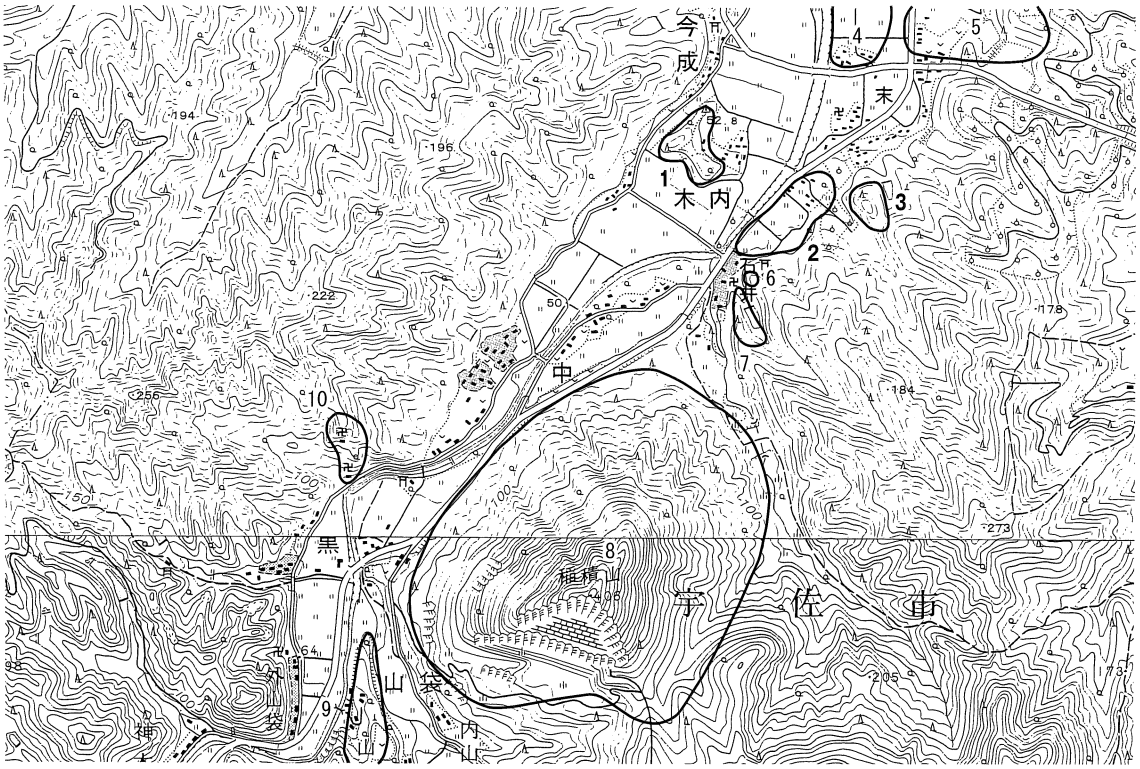
の妙楽寺から経筒や四耳壷・写経紙を巻いた経巻などからなる平安後期の埋経遺物が発見されている。このほかにも、妙楽寺には南北朝期の紀年銘をもつ板碑２基が存在する。

このほかにも、周辺には古代仏教遺跡が色濃く残されている。宇佐市内最大の灌漑用水池である小倉の池の湖底の浅瀬に古代寺院の礎石が並び、８世紀の古瓦や須恵器・土師器等が発見され、小倉の池廃寺の存在が確認されている。また、稲積山とは谷を隔てた丘陵の中腹の岩屋に存在する天福寺奥の院には、天平時代の作風を示す塑造の三尊仏と平安時代前期の作とみられる60数体にのぼる木彫仏群が伝えられている。これらは廃寺となった周辺の寺々から持ち込まれたものと考えられており、周辺に古代寺院が存在していた可能性がうかがえる。このように当地は古代仏教文化が華開いた証拠となる文化財が数多く残る地域である。



１．西秣大迫遺跡　２．春畑遺跡　３．カシミ遺跡　４．岡崎遺跡　５．岡崎城跡（地神城）　６．田口遺跡　７．大源寺遺跡　８．挾万田遺跡　９．香紫庵遺跡　10．香紫庵宝塔　11．塔ノ熊廃寺・塔ノ熊窯跡　12．上秣城跡　13．上山田横穴墓群　14．灰床遺跡　15．池ノ下・能元遺跡　16．ズリヤネ城跡　17．深水邸埋納遺跡　18．下深水小路遺跡

第２図　遺跡の位置と周辺の歴史的環境①（国土地理院　1/25,000「土佐井」「宇佐」）



1．今成館跡　2．木内遺跡　3．丸尾城跡　4．松垣遺跡　5．末遺跡　6．妙楽寺板碑
7．妙楽寺経塚　8．稲積山遺跡　9．山袋城跡　10. 天福寺奥の院遺跡

第３図　遺跡の位置と周辺の歴史的環境②（国土地理院　1/25,000「宇佐」）

第３章　調査の成果

第１節　西秣大迫遺跡

１　調査の概要

西秣大迫遺跡は大分県中津市三光西秣に位置する。調査区は犬丸川と犬丸川の支流である西秣川に挟まれた谷部の平野を見下ろす山付きの集落の背後に広がる畑地に位置する。この位置は集落の緩斜面の境界地にあたり、ここから山稜地につながる。

調査区は、畑地単位に１区（581㎡）と２区（784㎡）に分けて調査を行った。発掘調査の結果、中世の溝や掘立柱建物跡、焼土坑などが発見され、遺構内や遺構を覆う包含層から土師質土器・瓦器・瓦質土器・青磁などが出土した。

２　遺構と遺物

１）土坑

調査区全域から10基の土坑が検出できた。出土遺物がみられず、帰属時期が不明のものも多いが、中世～近世に営まれたものが多いと思われる。中でもSK19は土坑内から焼土が出土している。

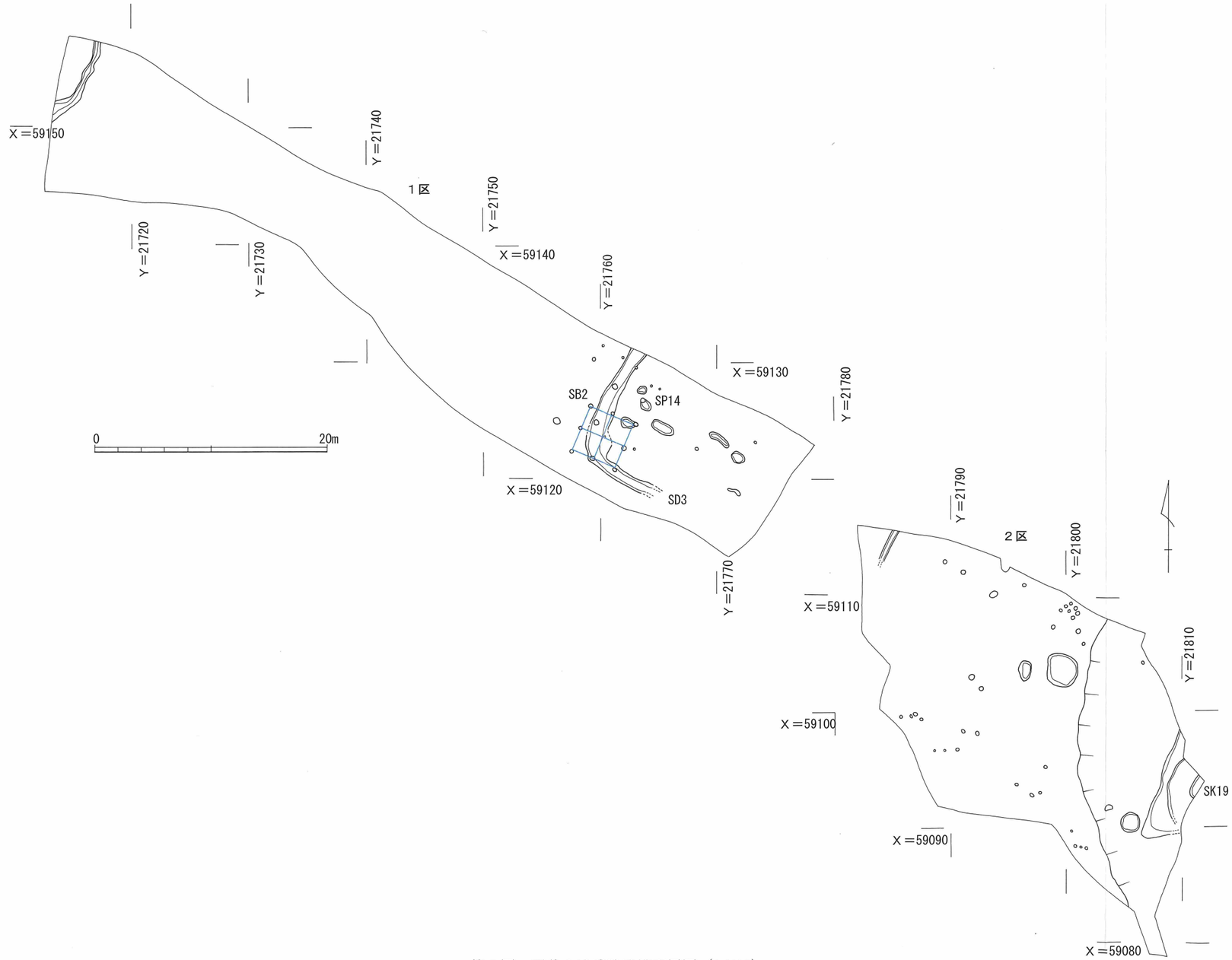
SK19（第６図、写真図版１）

１区の南端に一部が検出できた土坑である。長径1.6m以上、短径0.8m以上、深さ0.4mを測る楕円形土坑である。埋土中に少量の土器片と炭化物を含み、中央に50×50㎝、厚さ20㎝程度の焼土塊が出土している。

２）掘立柱建物

調査区から60基をこえるピットが検出できた。明確には柱痕等が確認できたものはないが、掘立柱建物１棟が

第４図　西秣大迫遺跡周辺地形図（1/5,000）



第５図　西秣大迫遺跡遺構配置図（1/400）

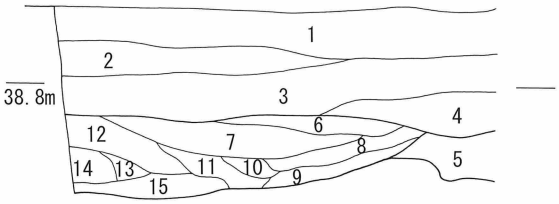
復元できた。

SB２（第７図、写真図版１）

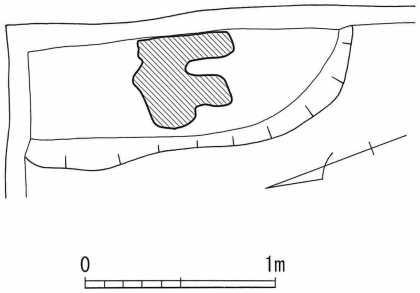
２区の南側にSD３と切合いをもつ建物方位N－23°－Eの掘立柱建物であり、身舎面積は17.64㎡を測る。規模は梁間２間（4.2m）、桁行２間（4.2m）の総柱建物である。

３）出土遺物

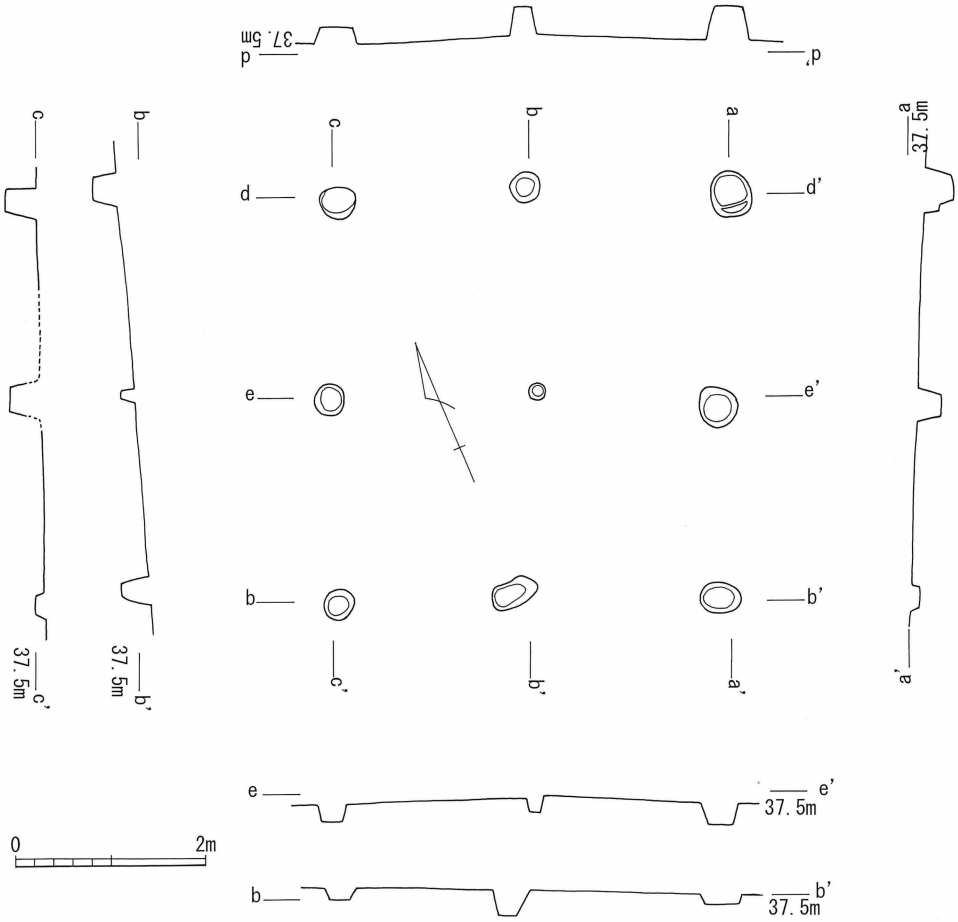
出土遺物は第８図４がSP14から出土した以外はほとんどの遺物が包含層中から出土しており、明確に遺構の時期を決める資料に乏しい。１・２は龍泉窯系青磁碗である。３は土師質土器小皿、４は土師質土器杯である。３は器高0.8cm、復元径6.8cmを測り、４は器高2.1cm、復元径10.0cmを測る。両者とも底部に回転糸切り痕が確認できる。５～８は、瓦器椀である。５は器形が復元できる個体であるが、内外面とも摩滅しており、高台が貼り付けられているかどうかも確認できなかった。９は瓦質土器擂鉢である。内面に横方向の刷毛目の上から縦方向の擂目を入れている。10は瓦質土器甕底部片である。内面にヨコハケ、外面に格子目タタキがみられる。11は砥石である。12～14は土師質土器鍋である。



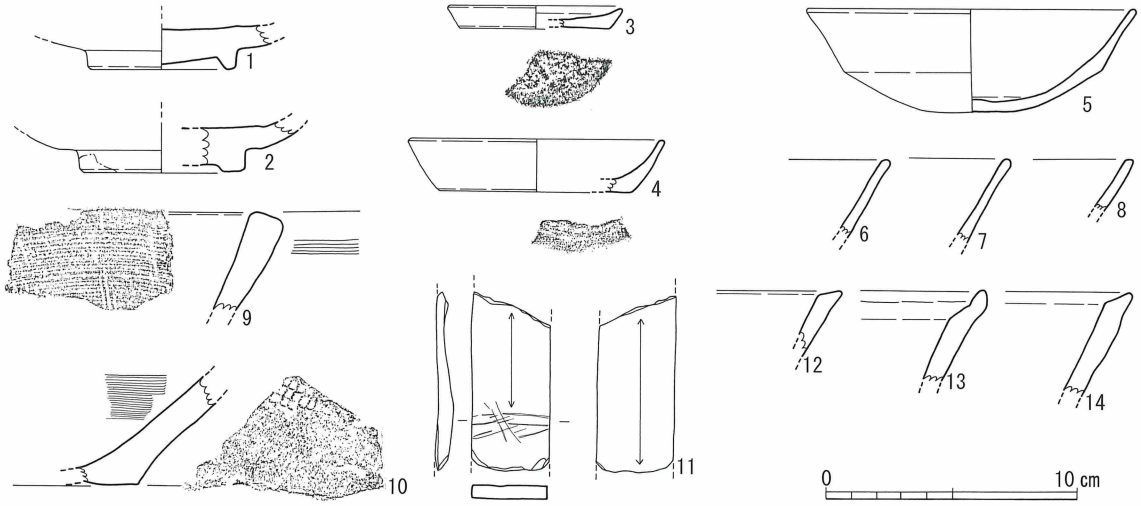
1．表土　2．灰黄褐色シルト　3．にぶい黄褐色シルト
4．黒褐色シルト（にぶい黄褐色シルトが少量混入）
5．黒褐色シルト（褐色砂・5～20cmの礫が混入）　6．にぶい黄褐色シルト
7．黒褐色シルト（土器片・炭化物混入）　8．黒褐色シルト（炭化物混入）
9．灰黄褐色シルト（炭化物を多量、焼土ブロックを少量含む）
10．黒褐色シルト（炭化物・焼土ブロックを含む）
11．褐色粘土（焼土ブロック・灰黄褐色シルト混入）
12．灰黄褐色シルト（炭化物を多量、焼土ブロックを少量含む）
13．黒褐色シルト（炭化物を含む）　14．灰黄褐色シルト（炭化物混入）
15．炭化物（灰黄褐色シルト混入）



第６図　西秣大迫遺跡SK1（1/40）



第７図　西秣大迫遺跡SB2（1/80）



第８図　西秣大迫遺跡出土遺物（1/3）

第１表　西秣大迫遺跡出土遺物観察表（土器）

図版番号	遺物番号	種類	器形	生産地	法量（cm）（　）は復元径			遺構名
					口径	底径	器高	
4	1	青磁	碗	龍泉窯		5.8		
	2	青磁	碗	龍泉窯		6.4		包含層
	3	土師質土器	小皿		(6.8)	(6.0)	0.9	包含層
	4	土師質土器	坏		(10.0)	(7.6)	2.1	SP14
	5	瓦器	椀		12.8		4.1	包含層
	6	瓦器	椀					
	7	瓦器	椀					包含層
	8	瓦器	椀					包含層
	9	瓦質土器	擂鉢					包含層
	10	瓦質土器	甕					包含層
	12	土師質土器	鍋					包含層
	13	土師質土器	鍋					
	14	土師質土器	鍋					包含層

第２表　西秣大迫遺跡出土遺物観察表（石器）

図版番号	遺物番号	種類	材質	寸法（cm）								遺構名
				部位							重量	
5	11	砥石			タテ	(6.9)	ヨコ	3.1	厚さ	0.6	19.6	包含層

3　小結

西秣大迫遺跡は犬丸川と犬丸川の支流である西秣川に挟まれた谷部の平野を見下ろす山付きの集落の背後に広がる畑地に位置し、ここから山稜地につながる。調査の結果、中世の溝や掘立柱建物跡、焼土坑などが発見され、遺構内や遺構を覆う包含層から土師質土器・瓦器・瓦質土器・青磁などが出土した。遺物の時期は14世紀代におさまるものが多いため、遺構群はこの時期のものである可能性が高い。

一般的に大分県下における中世集落は、14世紀後半に集村化が進み、戦国期にそのピークを迎え、現在に残る集落景観は中世集落を踏襲する場合が多い。西秣集落も戦国期の石塔が残存するなど、14世紀後半以降に集村化したことがうかがえる。西秣大迫遺跡は現集落の背後の畑地であるため、集落の主体部とは外れた位置にある。それゆえ、集落縁辺の遺構群である可能性が高い。明確な生活単位が把握できない遺構群の様相もそれを反映しているものかもしれない。

調査中に雨天の場合、鉄砲水が出て、幾度となく調査を中断しなければならない状況に陥った。生活空間としては、このような劣悪な環境にある。遺構の貧弱さは、そのまま集落内の生活空間としての劣悪さを反映しているものであろう。

（原田　昭一）

第２節　春畑遺跡

１　調査の概要

試掘調査は、現地が住宅地であったことから、コンクリート基礎及びアスファルト部分を除いた箇所で重機を用いて実施した。北側の道路に面した箇所で大型の溝を、調査区中央から柱穴を検出した。併せて調査区内から土師質土器等の遺物が確認された。その結果、中世の遺跡であることが判明したため、現地の字名から春畑遺跡と遺跡の新規登録を行い、本調査が必要と判断した。

本調査は、重機によるコンクリート基礎等の撤去を行った後、表土除去をした。その後、人力で褐色粘質土の遺物包含層を掘り下げたところ、調査区の中央では暗褐色～明褐色シルトの地山を、周辺ではにぶい黄褐色粘質土の遺物を含む整地層を確認したため、同じ高さで遺構の検出を実施した。しかし、整地層と遺構埋土の土色が非常に類似していることから、遺構の検出が困難な状況であった。一方で、調査区の南北及び東西に設けた土層確認のためのベルトから、調査区中央を最高所として、四方に地山が下がっている状況が確認された。そこで、整地層には土師質土器等の遺物が含まれていることから、人力で当該層を掘り下げながら、遺構の検出を行った。その結果、ほとんどの遺構は、地山上面での検出となった。

なお、遺構の番号は、遺構の大小・性格にこだわらず、確認された順に番号をつけ、調査後に遺構の性格・時期を決定した。なお、遺構数は溝・土坑・柱穴あわせて441基が検出されたが、そのうち約90％の393基が柱穴であった。

当遺跡の基本層序を確認するために、調査区の中央を通る南北及び東西の土層確認用のベルトを設定した。調査前に住宅地であったことから部分的にコンクリートや撹乱部分が認められるものの、非常に良好な状況であった。以下、南北ベルトの１層をN1層、東西ベルトの２層をE2層として表記する（第11・12図）。

基本層序は、表土がN16層・E2層のにぶい黄褐色土、E3層の褐色土として認められる。その下層のN17層・E9層の褐色粘質土は、炭化物や土師質土器の小片を含むことから遺物包含層として捉えた。N18層やE10層は暗

第９図　春畑遺跡周辺地形図（1/5,000）

褐色粘質土で、炭化物や土師質土器の小片を含んでおり、上層のN17層やE9層と同様の特徴を持つ。しかし、遺構が検出されたことやN17層やE21層といった土層断面上で遺構埋土と想定される層が検出されたこと、遺跡の最高所が標高65.75mであることをふまえると、N18層やE10層は、周辺に向かって下がっている当該箇所を平坦にするために盛土された整地層の可能性が高いと考えられる。調査区の北半（C-3～C-6区）や東半（C・D-5・6区）では、上述の様相が確認された。

西側～南西部（D-2～4区）は、第12図４段目のE16～E26層の箇所のように複雑な堆積状況を示す箇所が認められる。しかし、概ねE13・E16・E20層のように基本的な堆積関係は北半や東半と同じと考えられる。一方で、E-4～5区に広がる一段下がった平坦面やその南側の落ち込みはE31層のにぶい黄褐色シルトを最下層として、E29・26・27層は、自然堆積による土層と考えられるため、遺跡の廃絶後にE23層より南側の層が堆積したと想定している。

2　遺構と遺物

調査区全体が、北側と東側の道路と南側の水田より約２～３m高い平坦面となっており、西側は緩やかな斜面となっている。調査区南部に、一段下がった10m×８mの平坦面が広がり、そこからもう一段下がった８m×６mの平坦面が認められる。調査区南端では、一段上がった平坦面の端部が確認されている。

遺構は、溝、土坑、柱穴が確認されており、その大半が南西部に集中している。以後、溝、土坑、柱穴の順に詳述する。

1）溝

溝は、調査区平坦面を取り囲むSD1と平坦面に認められる溝に大別される。後者は、浅く不整形な数条の溝が並んでいるものが多い。そのうち、性格の明らかなものとしては、SD62とSD321がある。SD62とつながっている調査区外の溝が、耕作地端の水路及び区画として使用されていることから、SD62は区画溝の可能性が高い。SD321は、昭和時代の防空壕の跡である。

SD1（第10・11・13図、写真図版２）

SD1は調査区を取り囲むようにはしる溝である。方形の平坦面の北辺42m、東辺30.5m、西辺12mを囲む一連の溝である。なお、西辺は、調査区外に延びているが、周辺地形からは東辺と同様に南東端まで約30m延びているものと想定される。幅は西・北・東辺の北半で5.5mを測る。断面は、Ｖ字形をしており、深さは２mを測る。

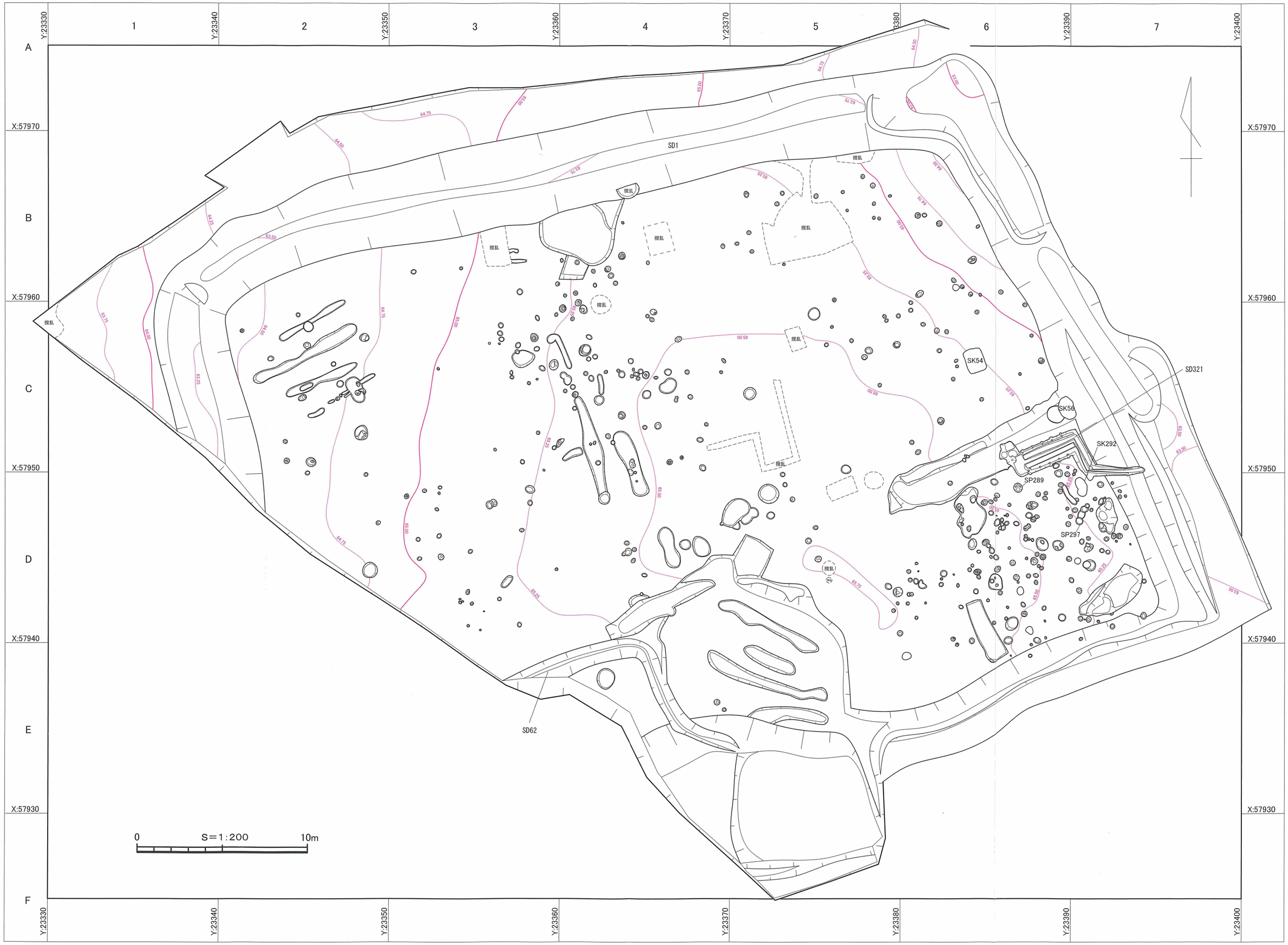
土層の堆積状況は、第11図に示した。N1～９層は瓦やガラス片等の出土遺物から近代～現代の埋土と考えられる。SD1は、近世にはN10層まで埋没し、やや浅くなった状態で機能していた可能性もある。N14・15層が一部グライ化していることやN7～９層に水酸化作用によるマンガンが混じることをふまえると、溝の下半には自然に寄る帯水も考慮する必要がある。雨天時には溝全体に水がたまっていたこともその傍証となると考えられる。

なお、平坦面の東辺南半と南辺東半は、溝の底部の確認するために水田の表土を除去したが、溝の外側の立ち上がりが確認されなかったため、当初から溝がめぐっていなかったと考えられる。現在一段低くなった箇所を水田として利用していることから判断すると、地形状溝を作る必要性がなかった可能性が高い。東辺は、排水管を通す等の行為により一部撹乱が認められる。

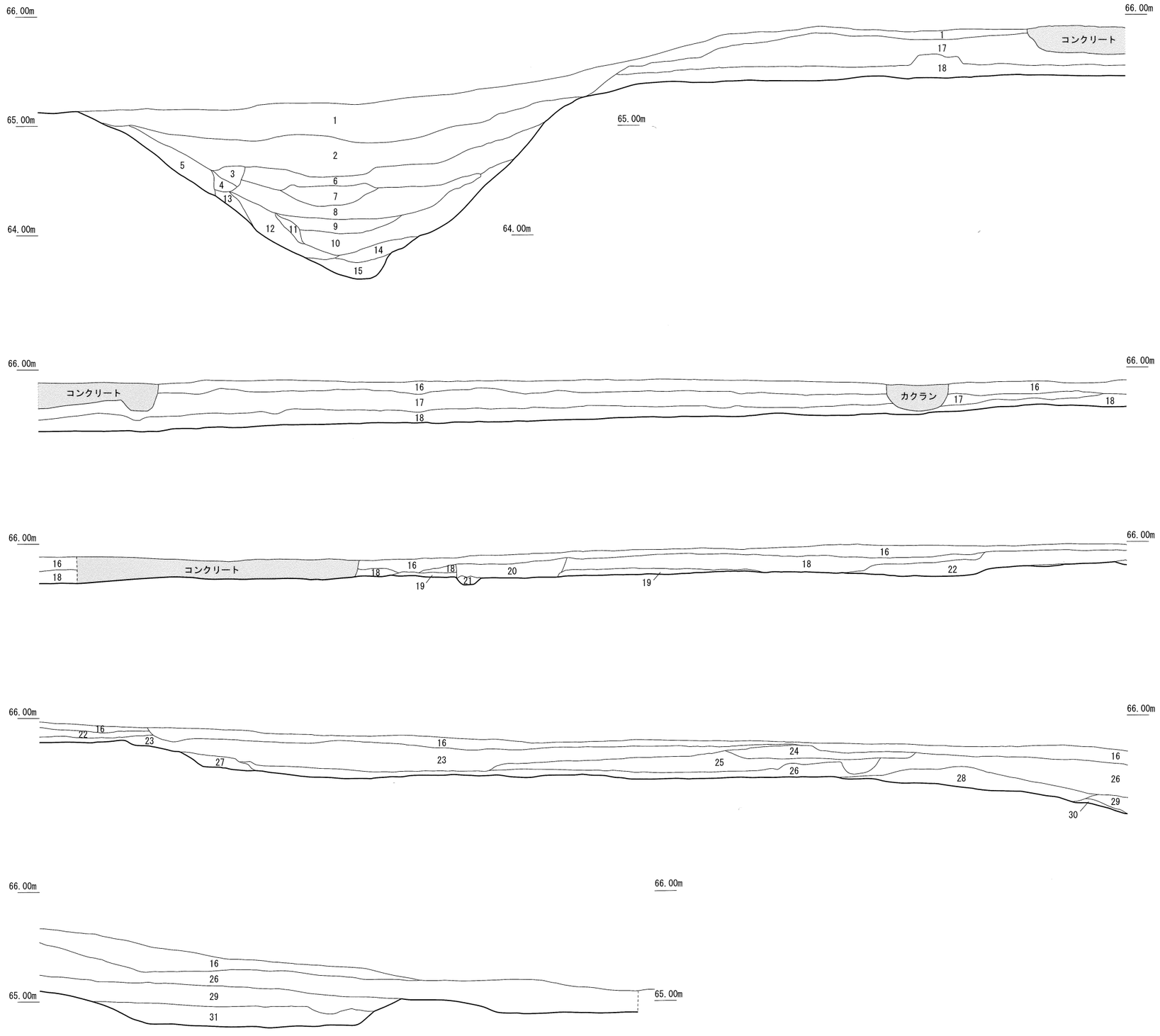
地形からは、進入口として北側に土橋等を設けている可能性を考慮して調査を行ったが、現在の進入口であった箇所を含めて、土橋や木橋設置のための柱穴等の進入口に関する明確な遺構は確認されていない。

遺物は、N1～９層からは、近代以降の瓦・金属・ガラス片が確認された。また、N10層以下からは、土師質土器片が少数確認されたが、図化に耐えうる大きさではなかった。唯一図化が可能であったものは、第13図１の瓦質鉢の底部～胴部片である。平坦な底部から口縁部に向かって丸みを帯びてやや開きながらたちあがる。外面全体にヘラケズリを施した後で、胴部のみナデ調整を行っている。外面底部から胴部下半には、ススの付着が認められる。内面は工具によるナデ調整が認められる。中世の所産であろう。

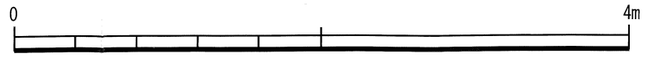
SD1の時期は、遺物及び他の遺構の年代から、15～16世紀の範疇に収まると考えられる。



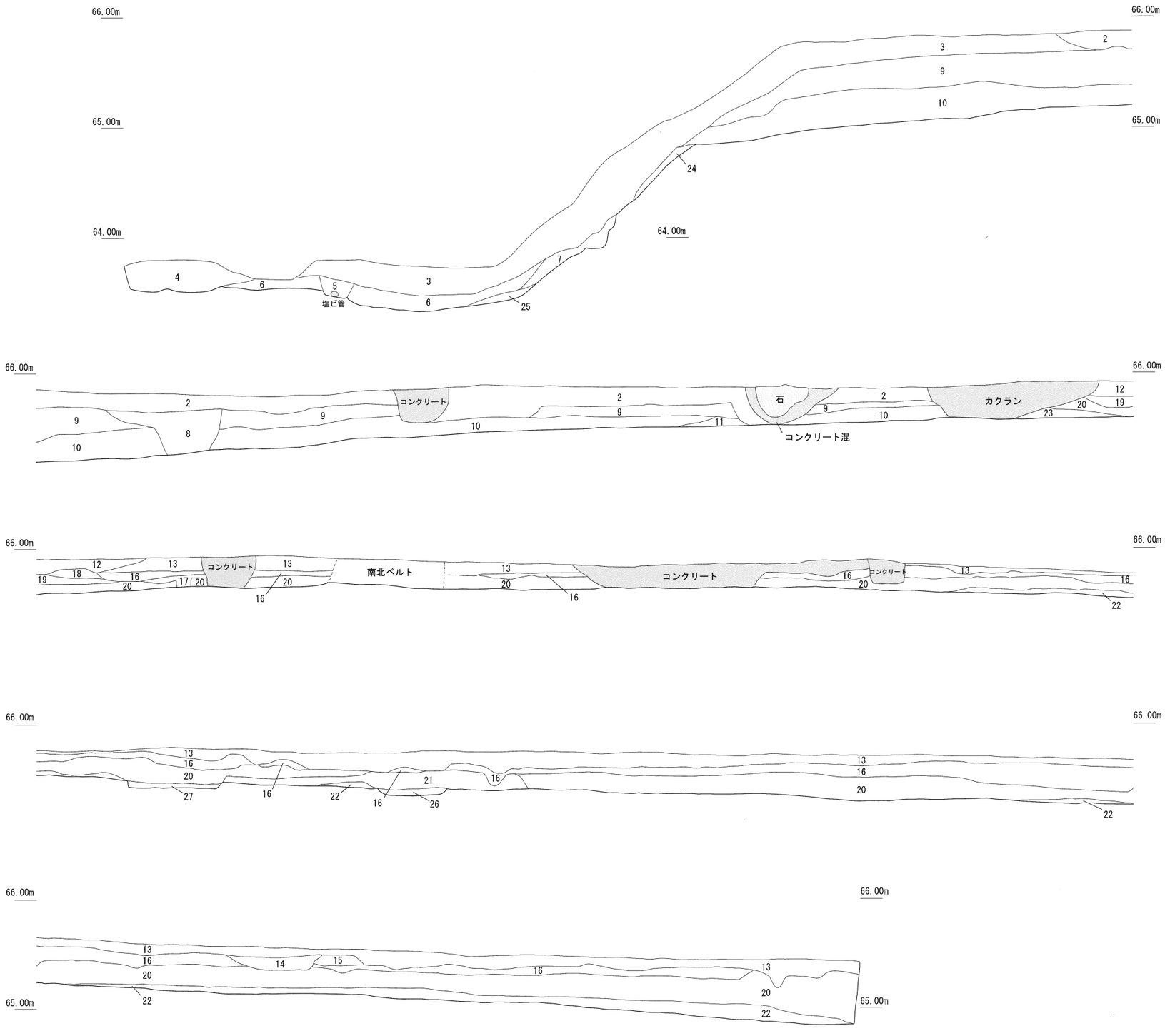
第 10 図　春畑遺跡遺構配置図（1/200）



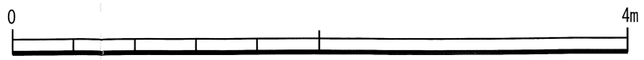
1 10YR4/4 粘質土・7.5YR5/6 シルト　木の根多い〔盛土〕
2 10YR2/2 黒褐色粘質土・10YR7/6・6/6 明黄褐色シルト　木の根・近代遺物多い〔盛土〕
3 10YR3/4 暗褐色粘質土　炭化物多い
4 10YR 褐色粘質土
5 7.5YR5/8 明褐色粘質土
6 10YR4/4 褐色粘質土　マンガン混じる
7 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（粘性弱い）　マンガン少量混じる
8 10YR3/4 暗褐色粘質土（しまり強い）　マンガン混じる、近代の瓦片・金属片・ガラス片含む
9 10YR3/3 暗褐色粘質土　マンガン混じる、近代瓦片含む
10 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　マンガン混じる
11 10YR4/6 褐色シルト
12 7.5YR4/6 褐色シルト
13 7.5YR5/6 明褐色粘質土（粘性弱い）
14 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト　下半分はグライ化している
15 10YR4/2 灰黄褐色シルト　グライ化している
16 10YR4/3 にぶい黄褐色土
17 10YR4/4 褐色粘質土　土師器小片・炭化物少量含む
18 10YR3/4 暗褐色粘質土　土師器小片・炭化物少量含む
19 10YR4/6 シルト
20 10YR3/3 粘質土・7.5YR4/4 シルト
21 10YR3/3 粘質土
22 10YR3/4 粘質土　炭・土師器少量
23 7.5YR4/6 シルト・10YR3/3 シルト
24 10YR3/4 シルト
25 10YR4/3 シルト
26 10YR3/3 シルト
27 7.5YR4/6 シルト
28 10YR4/3 シルト
29 10YR3/4・4/4 シルト
30 10YR3/6 シルト
31 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト



第 11 図　春畑遺跡調査区南北土層断面図（1/40）



1　10YR3/4 暗褐色土（弱粘性）　コンクリート片含む〔カクラン〕
2　10YR4/3 にぶい黄褐色土　木の根少量含む〔盛土〕
3　7.5YR4/4 褐色・10YR3/3　木の根多量含む〔盛土〕
4　10YR4/3 にぶい黄褐色土　〔盛土〕
5　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土　塩ビ管あり
6　10YR4/4 褐色粘質土
7　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
8　10YR3/4 暗褐色土　やや砂っぽい
9　10YR4/4 褐色粘質土　炭化物・土師器小片・木の根少量含む〔包含層〕
10　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土　炭化物・土師器小片・木の根少量含む
11　10YR3/4 暗褐色土　やや砂っぽい、炭化物・土師器小片少量含む
12　10YR3/3 暗褐色土
13　10YR6/4 にぶい黄橙土　〔盛土・南北ベルト 16 と同じ〕
14　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（弱粘性）
15　10YR4/4 褐色粘質土（弱粘性）
16　10YR4/4 褐色土　炭化物・土師器小片少量含む〔包含層・南北ベルト 17 と同じ〕
17　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
18　10YR4/4 褐色土（やや砂っぽい）
19　10YR3/3 暗褐色粘質土　炭化物少量含む〔包含層〕
20　10YR3/4 暗褐色粘質土　炭化物少量含む〔包含層・南北ベルト 18 と同じ〕
21　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　〔包含層〕
22　10YR3/4 暗褐色シルト　〔地山か〕
23　10YR3/4 暗褐色シルト　〔地山か〕
24　7.5YR5/6 明褐色シルト　〔地山か〕
25　10YR4/6 褐色シルト
26　10YR3/4 暗褐色シルト
27　10YR3/4 暗褐色シルト



第 12 図　春畑遺跡調査区東西土層断面図（1/40）

SD62（第10・14図）

SD62は、E-3・4区にかけて、蛇行しながらはしる溝である。長さ18.4m、幅0.88mを測る。断面はV字形で、深さは0.69mである。調査区外の西側にのびる溝とつながっていたと考えられる。調査区南側の平坦面につながっていることから、排水溝としての機能が想定される。

遺物は、土師質土器片が若干出土したが、図化が可能なものは、第14図２の瓦質鍋口縁部片１点のみである。外面にススが付着しており、使用の痕跡は残るものの、調整は摩滅が著しく不明である。

遺物の出土が僅少で判断材料が少ないが、区画溝としての性格を考慮すれば、SD1と同じ時期のものと考えられる。

２）土坑

土坑は、調査区中央部と南西部で多く検出された。しかし、不整形で浅く、遺物も認められない土坑が大半を占めるため、性格が不明なものが多い。以下、特徴的な遺構や遺物の出土したものについて記述する。

SK56（第15・16図、写真図版２）

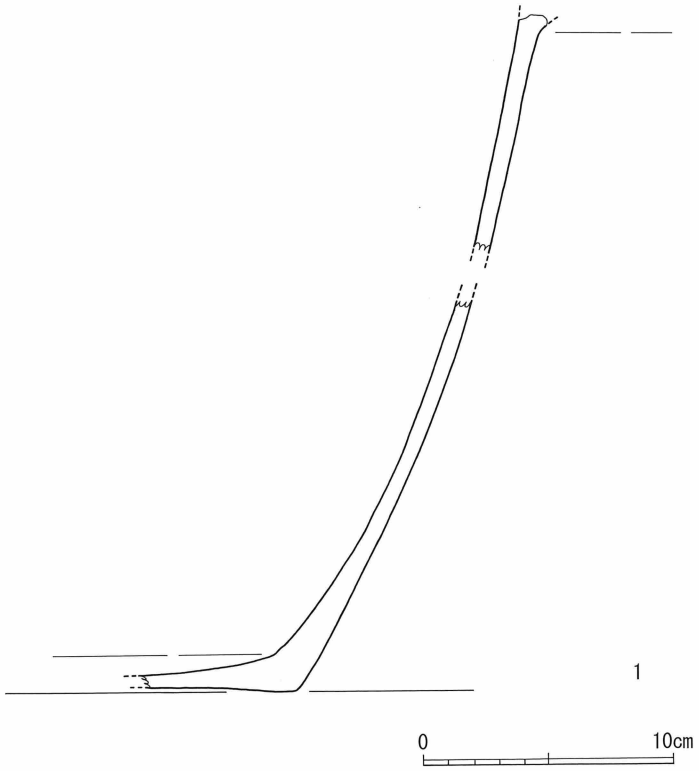
SK56は、C-6区で確認された土坑であり、南北1.36m、東西0.88mの楕円形を呈する。検出上面で20cm前後の石材が、中央を空けて南北に固まっている状況を確認した。また、あわせて、長さ15cmを最長として人骨片が石材の南側集中部を中心に認められた。深さは0.2mで、すり鉢状を呈するが、石の上面まで埋土があったとすれば、0.35mが想定される。５層は、褐色シルトで炭化物が混じっており、４層が焼土層である。３層はにぶい黄褐色シルトで２層も同じ土であったが、被熱を受けた焼土層の可能性もある。１層は、石材の直下に人骨が集中し、炭化物と焼土が大量に混じっている層である。

遺物は１層中から、第16図３の土師質土器の高台付椀が１点出土した。当初は破片であったが、接合を行うと完形品となった。半球形を呈する椀部と、ハの字状にふんばる高台を有する。口径は10.7cm、器高は7.0cmを測る。調整は、摩滅で不明な箇所が多いが、外面の高台及び口縁部は回転ヨコナデ調整、内面は丁寧なナデ調整が認められる。

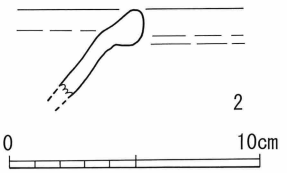
人骨等の出土から墓と考えられる。時期は、遺物が僅少で決め手に欠くが、15～16世紀の範疇に収まると考えられる。

SK292（第17図、写真図版２）

SK292は、D-6区の遺構が集中している箇所で確認された土坑である。長軸1.13m、短軸0.56mの南北に長い不整形な楕円を呈する。北側に15cm～20cmの川原石や割石が認められた。その南側には５cmの小礫が円を描くように配置されており、柱穴を想定しながら調査を行った。土坑の深さは0.12mと非常に浅いため柱穴の可能性は非常に低い。ただ



第13図　春畑遺跡SD1出土遺物（1/3）



第14図　春畑遺跡SD62出土遺物（1/3）

し、前述の川原石は中央やや南側に向かってすり鉢状に落ち込んでおり、何らかのものを配置した可能性がある。埋土は暗褐色シルトが全体に広がっており、石の上下で差は認められなかった。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、他の遺構と同様に15～16世紀の範疇に収まると考えられる。

SK54（第18図、写真図版２）

SK54は、C-6区のほぼ中央に位置する土坑で、周辺には柱穴が散在している。やや南北に長い長方形を呈し、長軸1.42m、短軸1.10mを測る。深さは0.3mと浅い。外周の幅30cmの範囲を中心に不整形に炭化物が集中して広がっていた。埋土は炭化物を少量含む褐色シルトが確認された。床面では、北側で幅0.3m、南側で幅1.13mにわたって焼土を含む暗茶褐色シルトが最大３cmの厚さで認められた。

遺構の性格は不明であるが、SK54の南側のSK56やSK292をはじめ、炭化物や焼土を含む遺構が散見されることから、これらの遺構との関連性が想定される。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、他の遺構と同様に15～16世紀の範疇に収まると考えられる。

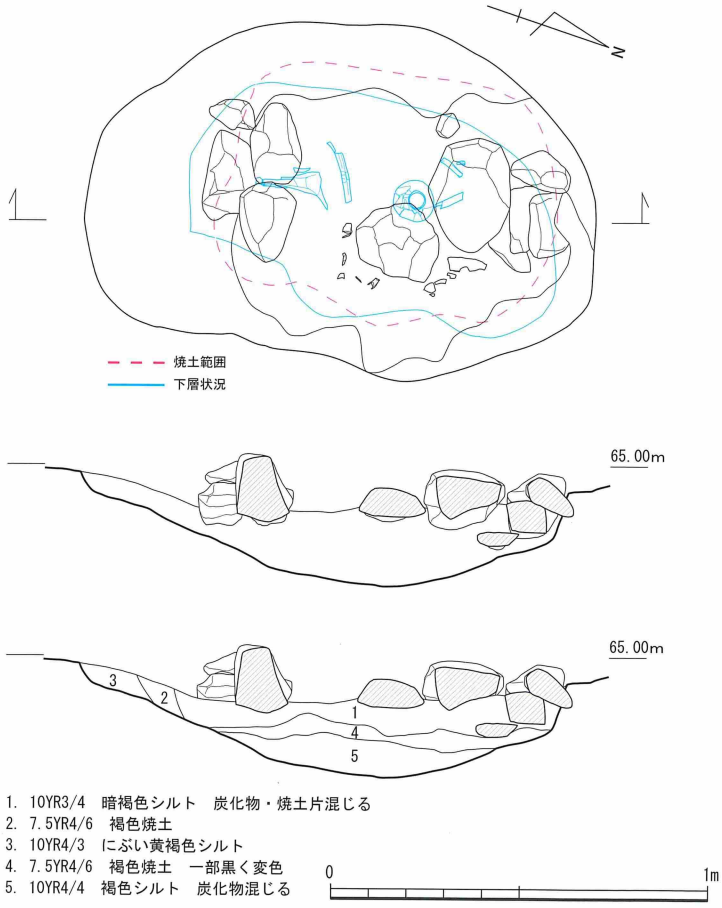
３）柱穴

柱穴は、当遺跡で最も多い遺構で、393基が認められる。全体に散在しているが、D-6・7区の調査区南東部分に約100基が集中している。もう一つの集中部がC-3・4区の中央北側であり、70基近くが確認されている。集中部では、柱穴列や建物跡等の復元の検討を行ったが、復元は困難であった。しかし、下述するSP299のように一定の深さが認められるものや礫の集中等から何らかの施設があったものと考えられる。

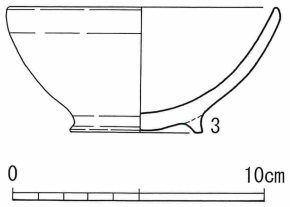
なお、遺物が出土した遺構は、SP289のみである。

SP297・SP300・SP298・SP299（第19図）

SP297・SP300・SP298・SP299は、柱穴等の遺構が集中するD-7区に所在する。いずれも直径0.25～0.4m程度の柱穴である。SP299が最も深く、0.23mが残存しており、約20cmの直方体の石材が認められる。SP297・SP300・SP298は、いずれも0.1m程度しか残っていないが、SP300やSP298は、その上部に礫の集中が認められることから、少なくとも深さ0.2mはあったと想定される。調査の方法でも述べたとおりであるが、遺構形成面である整地層での遺構検出が困難であったことを示すものである。



第15図　春畑遺跡SK56（1/20）



第16図　春畑遺跡SK56出土遺物（1/3）

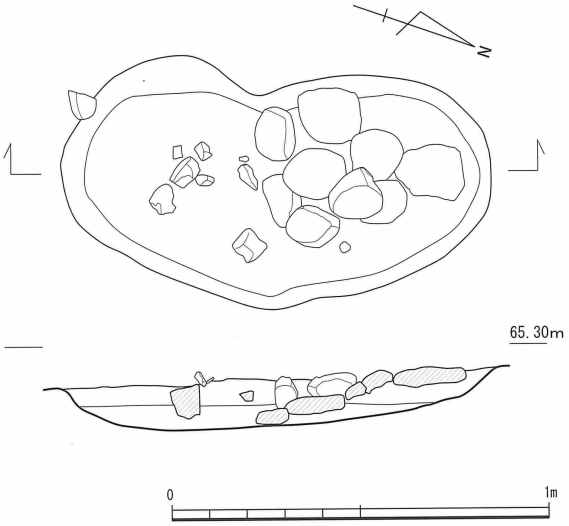
遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、他の遺構と同様に15～16世紀の範疇に収まると考えられる。

SP289（第20・21図）

SP289は遺構の集中するD-6・D-7区のうち最も北側に認められる柱穴である。平面は円形を呈し、長軸0.48m、短軸0.46mと当遺跡内では大きめの柱穴といえる。深さは0.08mと非常に浅いが、北側の段は柱の抜取り痕と考えられることから、上部が相当失われているか、柱穴そのものがあまり深くなかったものと考えられる。

遺物は、土師質土器皿が４点と瓦質擂鉢片が１点出土した。土師質土器皿は、第21図４がほぼ完形、５及び６が底部完形で口縁部の1/2～2/3が残存している。７は約2/3が残存している。口径は6.0cm～6.8cmで、器高は0.7～1.0cmを測る。調整はいずれも内外面が剥離をしており不明である。底部は回転糸切りで切り離されており、５・７は、糸切り後の板状圧痕が認められる。８の瓦質擂鉢は底部片で、復元すると底部径14.0cm、残存高5.8cmである。外面は指圧痕とナナメハケ調整が、底部はケズリ調整が施される。内面はナデ調整後、４条のスリ目が１単位として認められる。

遺物の時期からは、15～16世紀の遺構と考えられる。



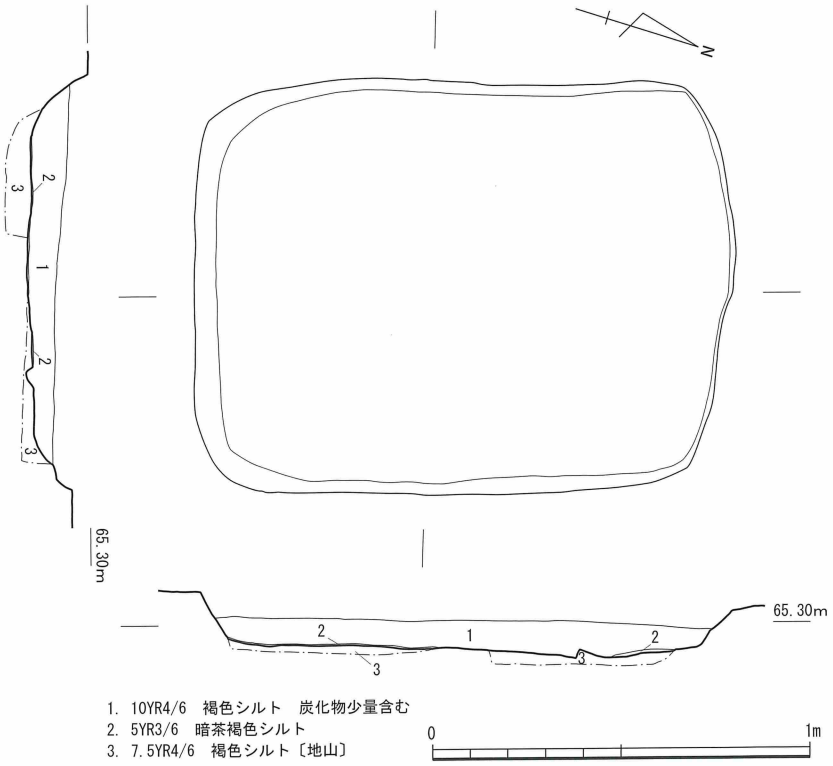
第17図　春畑遺跡SK292（1/20）

4）　包含層・その他出土遺物（第22・23図）

表土や遺物包含層、整地層中、地山上面で出土した遺物について、以下述べていく。遺物は、遺跡全体でコンテナケース５箱と非常に僅少であった。その中で数量的には、土師質土器と考えられる小片が最も多い。

遺物の種類としては、中世の土師質土器・瓦質土器が中心で、その他に中国製青磁が認められる。また、近世の陶磁器類が表土等から出土した。器種は、椀等の食膳具がわずかに認められるほかは、鉢・鍋といった調理具、甕・火鉢が散見される。

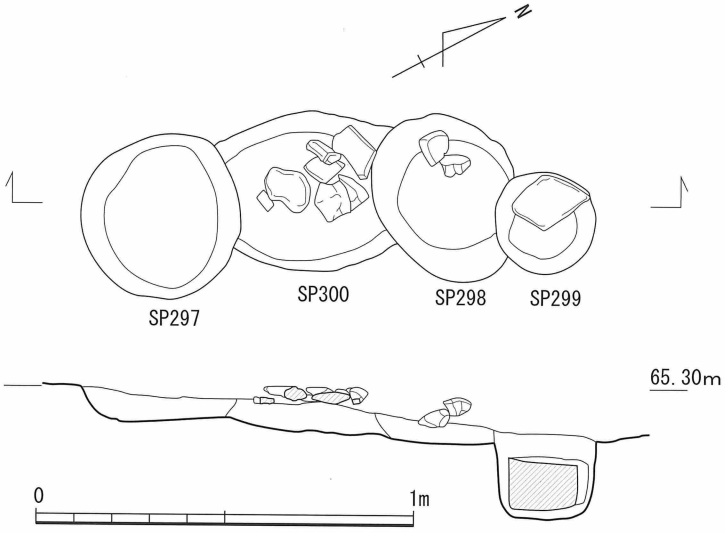
第22図９は土師質土器の鉢の口縁部片で、口縁部は断面三角形に張り出しており、口縁部直下に直径１cmの円形の窪みの列が認められる。内外面ともナデ調整を施す。10は、瓦器椀の口縁部～胴部片で、手捏ねで成形されている。内外面ともナデ調整が認められる。器形から14世紀代の所産と考えられる。11は、青磁碗の口縁部で、復元した口径は17.0cmである。内面には草花文が描かれており、器形及び文様から12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。12は、土師質壺胴部片であるが、内外面の調整は摩滅して不



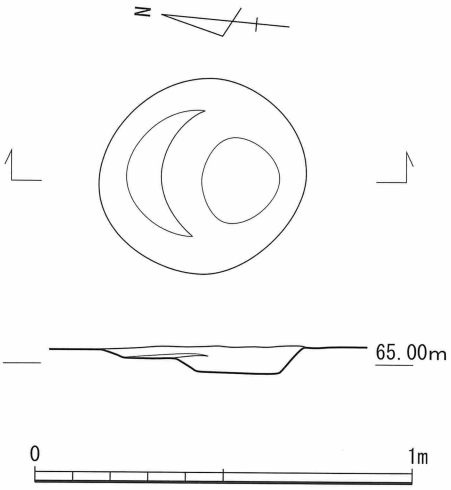
第18図　春畑遺跡SK54（1/20）

明である。

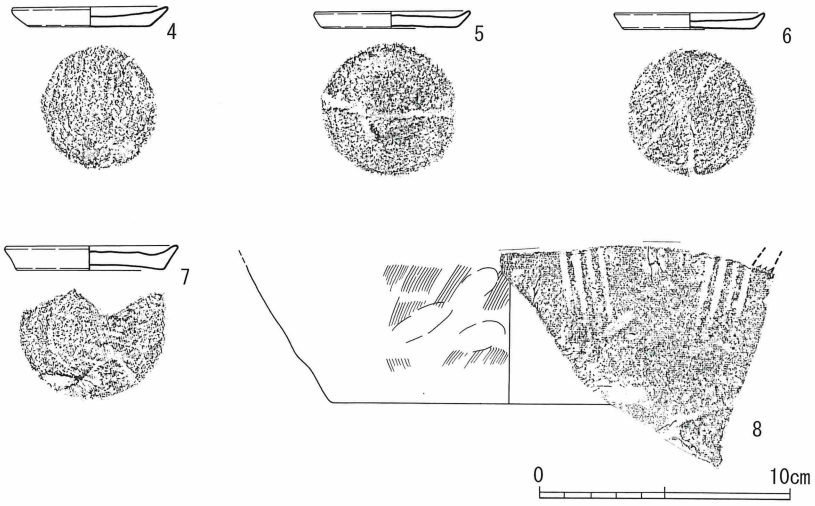
13～15は土師質土器の鍋である。13は、口縁部をくの字状に折り曲げて内外面に稜線が認められる。14は、内面にナデ調整による窪みが認められる。15は口縁部直下でいったん段があり、口縁端部は方形を呈する。14と15は外面の口縁部下にケズリ調整が認められる。16は、瓦質土器の鍋口縁部片で、口縁端部は断面円形を呈する。外面の胴部は縦方向のケズリ調整を行い、内外面とも口縁部はヨコナデ調整を施す。17～21は土師質土器の鉢である。17は口縁部に向かってやや外方に直線的に開いていくもので、口縁端部は断面三角形である。18は、外面に薄く粘土帯を貼り付けるもので、内外面ともヨコナデ調整が認められる。19は、復元口径19.4cmで丸みを帯びた浅い皿形を呈する。外面は横方向のヘラケズリ調整後、口縁部にナデ調整を施す。20は、口縁部が逆「ハ」の字状にのびる形態で、口縁端部は方形を呈する。外面は胴部に縦方向のケズリ調整が、口縁部に工具による横方向のナデ調整が施される。内面はナナメハケ後工具によるナデ調整を行っている。21は、鉢の底部片でスリ目から擂鉢であることがわかる。１単位３条のスリ目が底部と胴部内面に認められる。22は、メンコ状土製品であり、長さ3.7cm、幅3.9cmを測る。



第19図　春畑遺跡SP297ほか（1/20）



第20図　春畑遺跡SP289（1/20）

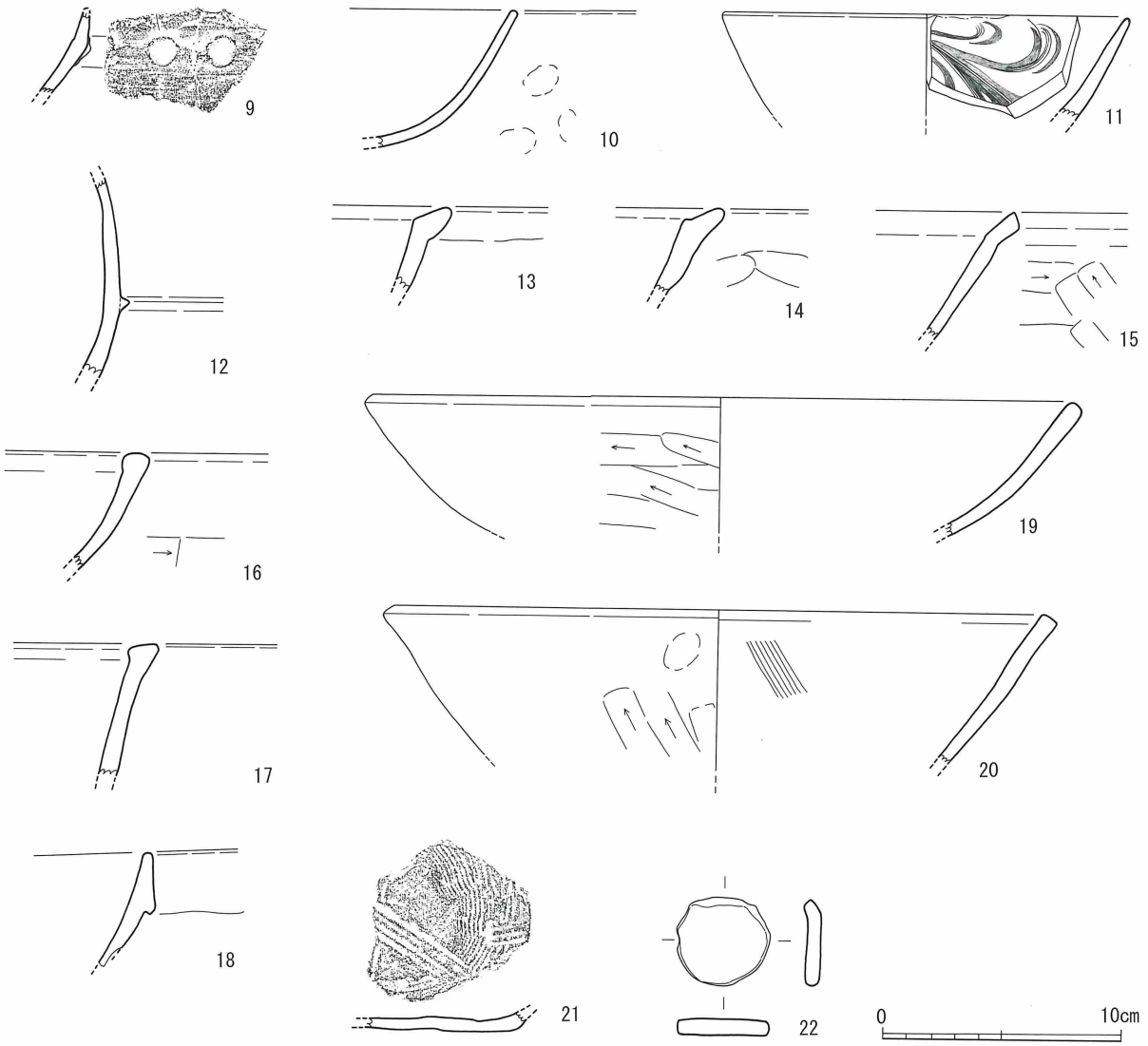


第21図　春畑遺跡SP289出土遺物（1/3）

23～26は瓦質土器の鉢である。23は内面のスリ目から擂鉢と考えられる。復元口径は26.4cmで、器壁は1.1cmを測る。胴部から口縁部に直線的にのびて、断面は方形を呈する。内外面ともナデ調整を施す。１単位４条のスリ目が放射状に底部中央からのびる状況が想定される。24は、口縁部がほぼ直立して立ち上がる形態を示す。25は、口縁部が大きく外反し、端部外面は断面三角形である。内面はヨコハケ調整が認められる。26は、わずかに外反しながら、口縁部に向かって立ち上がり端部は逆長靴形を呈する。27は瓦質土器の甕と考えられる。外面の口縁部下に沈線が１条認められる。口縁部は直立しており、端部上面は面をなす。内外面とも調整は摩滅により不明である。

28～31は、瓦質土器の火鉢である。28は、直立した口縁部で、端部に向かって器壁が厚くなっている。口縁部下に２条の断面三角形の突帯が認められる。29も直立した口縁部をもち、端部上面は面をなす。口縁部下に２条の断面台形の突帯による区画が認められる。区画内に、菱形のスタンプで押された文様が５cm間隔で認められる。30は、直立した口縁部であり、外面に粘土帯を貼り付けて断面台形としている。その３cm下に断面三角形の突帯をつくり、区画としている。区画内には、不明瞭であるが菊文のようなスタンプで押された文様が認められる。31は火鉢の底部から脚部片である。調整は全てケズリ後ヨコナデ調整を施している。

32・33は、近世～近代の陶磁器である。32は、肥前系の染付け磁器碗である。器形から丸碗か端反り碗と考えられる。内外面とも施釉は貫入が認められる。時期は19世紀代であろう。33は磁器碗でいわゆる「型紙摺り」で



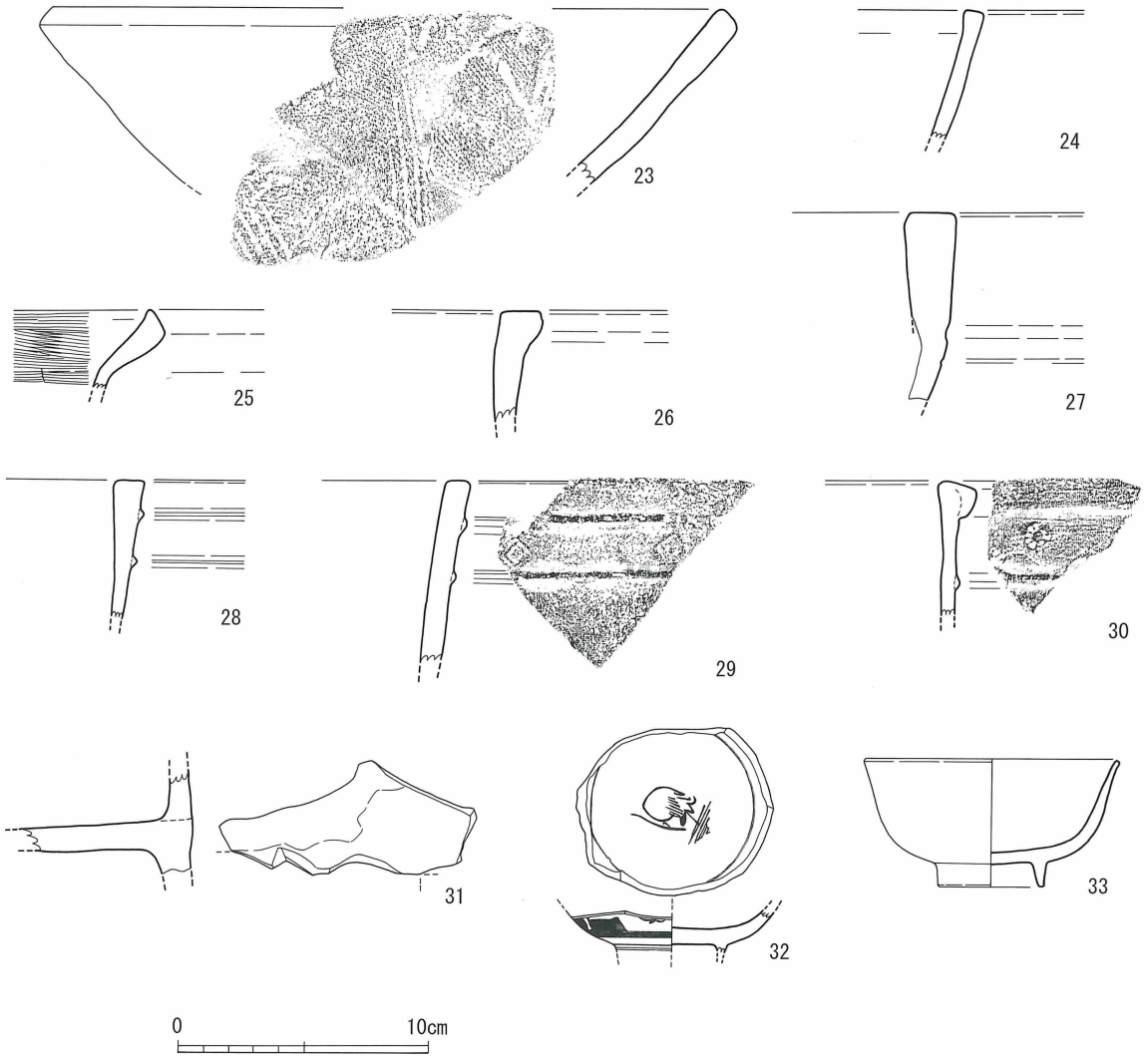
第22図　春畑遺跡包含層出土遺物①（1/3）

ある。復元した口径は10.0cm、器高5.1cmを測る。時期は19世紀後半の範疇と考えられる。

3　小結

春畑遺跡は、50m×30mの方形に区画された平坦面を幅5.5mのV字形の溝で囲んでいる中世の城館跡の一部であることが判明したことが最大の成果である。内部の使用方法は柱穴列や建物跡が復元できないため、詳細は不明であるが、土坑等が確認されることから、一定期間の利用が想定される。しかし、遺物が僅少であることも踏まえるとその期間はあまり長くないか、短期的な期間の利用を繰り返すものであった可能性が高い。遺跡の時期は、遺物が僅少ではっきりしないが、15～16世紀の範疇に収まるものと考えられる。ただし、2点ではあるが、12世紀後半～13世紀前半の龍泉窯系青磁や14世紀代の瓦器椀が認められることから、遺構の中心時期より以前に何らかの使用を行っていた可能性もある。

なお、春畑遺跡は今回の調査区で完結するものではなく、南側の一段高くなった畑の所在する平坦地にも広がっていたと考えられる。現在水路や耕作地の段差等で区画がなされており、中世以来の景観を残している可能性が非常に高い。また、その範囲の南限は、現在林となっている箇所が想定される。今回調査した箇所は、30～50mの方形区画が複数で構成される、いわゆる連郭式の城館の一部と考えられる。複数の区画をもつ中世城館の例としては、宇佐市大字上時枝の時枝城等があり、微高地や丘陵先端部の平坦地を利用しながら、城館を築いたものと考えられる。なお、遺跡の西側平坦地には、板碑2基と五輪塔の部材が確認され、その特徴から戦国期の所産と想定される。



第23図　春畑遺跡包含層出土遺物②（1/3）

春畑遺跡は、今回の調査を行うまで、遺跡の存在が知られておらず、大分県教育委員会の中世城館調査でもその存在は明らかにされていなかった〔小柳編2003〕。中津市三光上秣～下深水周辺には下深水城（ズリヤネ城と同一か）、ズリヤネ城、上深水城、秣城等の中世城館が知られており、そのうち、位置や遺構が確認されているものとして、ズリヤネ城と秣城がある。ズリヤネ城は、標高71mの丘陵先端部の平坦面に「コ」の字形の溝を作ることで、東西74m、南北64m以上の方形区画を作りだし、掘立柱建物跡１棟、土坑４基、井戸２基が検出されている。出土遺物は、12～16世紀の幅をもつが、15世紀後半から16世紀前半に主体があるとしており〔三光村教育委員会編　1989〕、遺構もこの時期のものと考えられる。また、ズリヤネ城の丘陵一帯は、宇都宮氏の一族である深水氏の本貫地であり、『豊前故城址』には、「下深水村城址」に深水氏の代々の居城として建久７年に築かれ、天正16年に破却されたとある〔小柳編2004〕。深水氏は宇佐郡衆として文献上にもその名をみることができる。例えば、「宇佐郡三拾六人衆到着状案」（三重野・櫻井編2002の323に所収「香下文書」増補訂正編大友史料20）では、大友宗麟が豊前国龍王山城に到着した宇佐郡衆の1人として深見壱岐守の名が見え、安心院氏、松本氏に次いで３番目の記載となっている。これらのことから、深水氏が中世に旧下毛～宇佐郡地域で重要な役割を果たしていることがわかる。

春畑遺跡はズリヤネ城とほぼ同じ時期に展開した遺跡であり、ズリヤネ城の所在する丘陵の約350m北側に位置することから、密接な関係が想定される。今後は、今回の調査地外の区画の調査による城館としてのあり方やズリヤネ城との関連性等の検討を行う中で、三光の秣～深水地区の中世の歴史を明らかにしていくことが必要である。

（越智　淳平）

【参考文献】

小柳和宏編　2003『大分の中世城館　第３集　地名表・分布図編』大分県文化財調査報告書第161輯　大分県教育委員会

小柳和宏編　2004『大分の中世城館　第４集　総論編』大分県文化財調査報告書第170輯　大分県教育委員会

三光村教育委員会編　1989『三光村の遺跡』　三光村教育委員会

原田昭一編　2013『大分の中世石造遺物　第１集　分布図・地名表編（上）』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第70集　大分県教育庁埋蔵文化財センター

三重野誠・櫻井成昭編　2002『大分の中世城館　第１集　文献史料編１』大分県文化財調査報告書第148輯　大分県教育委員会

第３表　春畑遺跡出土遺物観察表（土器）

図版番号	遺物番号	種類	器形	生産地	法量（cm）（　）は復元径			遺構名
					口径	底（高台）径	器高	
13	1	瓦質土器	鉢					SD01
14	2	瓦質土器	鍋					SD62
16	3	土師質土器	椀		10.7	5.2	5.0	SK56
21	4	土師質土器	小皿		6.2	4.8	0.8	SP89
	5	土師質土器	小皿		6.1	5.3	0.7	SP289
	6	土師質土器	小皿		(6.0)	5.2	0.7	SP289
	7	土師質土器	小皿		6.8	5.9	1.0	SP289
	8	瓦質土器	擂鉢			(14.0)		SP289
22	9	土師質土器	鉢					包含層
	10	瓦器	椀					包含層
	11	青磁	碗	竜泉窯	(17.0)			包含層
	12	土師質土器	壺					包含層
	13	土師質土器	鍋					包含層
	14	土師質土器	鍋					包含層
	15	土師質土器	鍋					包含層
	16	瓦質土器	鍋					包含層
	17	土師質土器	鉢					包含層
	18	土師質土器	鉢					包含層
	19	土師質土器	鉢		(19.4)			包含層
	20	土師質土器	鉢		(17.0)			包含層
	21	土師質土器	擂鉢					包含層
	22	土師質土器	メンコ状土製品					包含層
23	23	瓦質土器	擂鉢		(26.4)			包含層
	24	瓦質土器	鉢					包含層
	25	瓦質土器	鉢					包含層
	26	瓦質土器	鉢					包含層
	27	瓦質土器	甕					包含層
	28	瓦質土器	火鉢					包含層
	29	瓦質土器	火鉢					包含層
	30	瓦質土器	火鉢					包含層
	31	瓦質土器	火鉢					包含層
	32	磁器	碗		(10.0)	4.2	5.1	包含層
	33	磁器	碗	肥前				包含層

第３節　カシミ遺跡

１　調査の概要

カシミ遺跡は大分県中津市大字三光下深水に位置する。調査区は犬丸川と谷部の平野を見下ろす丘陵裾部の高台の集落の背後に広がる畑地に位置する。

調査区は、東区（340㎡）と西区（1730㎡）に分けて調査を行った。発掘調査の結果、中世の溝や掘立柱建物跡、柵列、土坑、井戸などが発見され、遺構内や遺構を覆う包含層から土師質土器・瓦器・瓦質土器・青磁などが出土した。

第24図　カシミ遺跡周辺地形図（1/5,000）

第25図　カシミ遺跡遺構配置図（1/200）

第25図　カシミ遺跡遺構配置図（1/200）

2　遺構と遺物

1）井戸

西区の中央において井戸が１基検出できた。木製の井筒や石組等は確認できなかったが、形態や湧水の有無等で判断した。

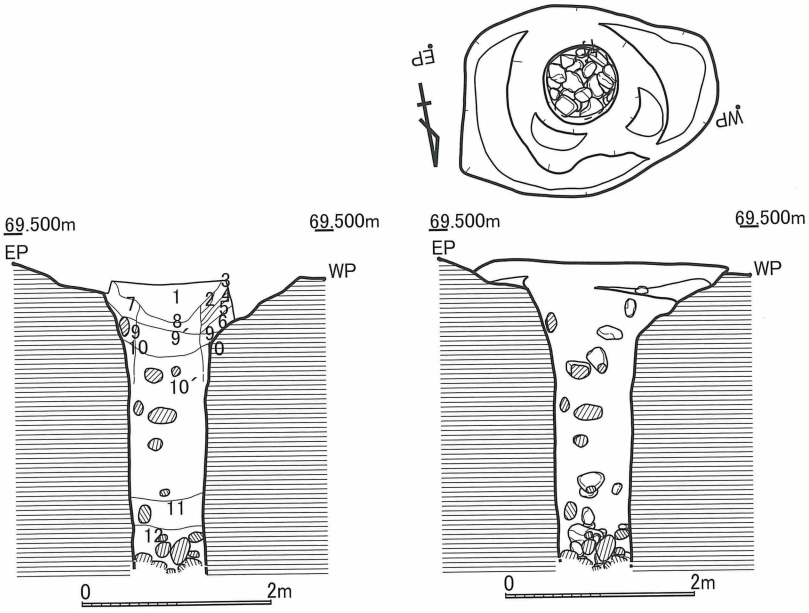
西区SE136（第26図、写真図版3）

長径約280cm、短径180cmを測る検出形態が楕円形を呈する井戸である。この楕円形土坑を40cm程度掘り下げた深さで井筒の痕跡と思える円形プランが確認できた。井筒は径約40cmを呈し、検出面からの深さ約3.5m程度の深さまで掘削を行ったが、以下については、安全を考慮して完掘は果たせなかった。井戸内埋土から５～40cm程度の礫が出土したが、いずれも埋土中に混入したものである。11層中から土器片が出土したが、いずれも細片の土師質土器が少量出土したのみであった。２～10層は井筒の裏込め土であり、この層中からも遺物が出土したが、いずれも細片の土師質土器が少量出土したのみであった。

出土遺物は第27図に示した。１は底径12.2cmを測る瓦質擂鉢である。２・３は瓦質鍋の口縁部、４は瓦質火鉢である。

2）土坑

調査区全域から数多くの土坑が検出できた。出土遺物がみられず、帰属時期が不明のものも多いが、中世～近世に営まれたものが多いと思われる。中には、焼土坑が３基含まれている。東区の中央よりやや南側３基が集中していた。S02を中央にその両側を同様な円形土坑が挟むもので、この３基は相互に関連をもつものと考えられる。



1 暗灰褐土　砂まじり。しまりなし。地山土がなじんでいる。
　平面ではっきりと輪郭がおさえられた。井筒上部に掘り込まれた埋土。
2 灰褐土　粘性あり。地山土がわずかにまじる。
3 灰茶褐土　地山土がまとまっている(なじんでいない)。粘性あり。
4 灰褐土　2層と同質。
5 灰茶褐土　地山土がまとまっている(なじんでいない)。粘性あり。
6 淡灰褐土　2層と同質。まじりがほとんどない。
7 黄灰褐土　砂まじり。地山土がややなじんでいる。粘性はあまりない。
8 暗黄灰褐土　7層に比べ地山土のまじりが少ない。粘性ややあり。
9 暗灰グライ層　粘性が強い。地山のまじりがある。
10 暗灰グライ層　粘性が強い。他の土のまじりはほとんどない。
9´・10´　井筒内埋土。裏込め土と比べガリでかいた際ボソボソとして表面がさかだちまとまりがない。
　　(9・10層は比較的まとまっており、ボソボソとはしない)
11 灰褐グライ層　この層のあたりから土器片・種が出土しはじめる。
12 暗灰グライ土と茶灰グライ土がまじる。レキが多くみられる。人為的に埋められたブロック土がグライ化している漢字。

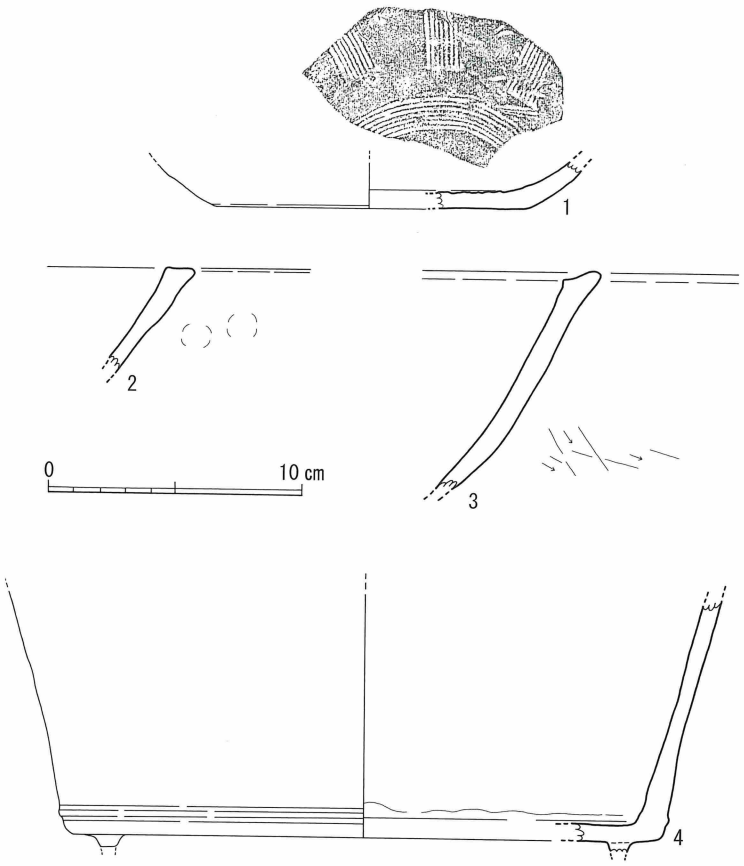
第26図　カシミ遺跡SE136（1/80）

東区SK01（第28図、写真図版３・４）

東区中央やや南から検出された土坑である。３基が並ぶ土坑の最も東側に位置するものである。径80cm、深さ15cmを測る円形土坑である。最下層に1.5cm程度の厚さの炭層が堆積し、この炭層中には２～３cm程度の大きさの炭が多く含まれていた。土坑の側面は被熱による赤変硬化が北以外の各面に確認できた。土坑内埋土は自然堆積層であろうが、炭や焼土が少量混入していた。遺物は細片の土師質土器がきわめて少量出土したが、実測図化できるものでもなく、時期を示すことができるものでもなかった。

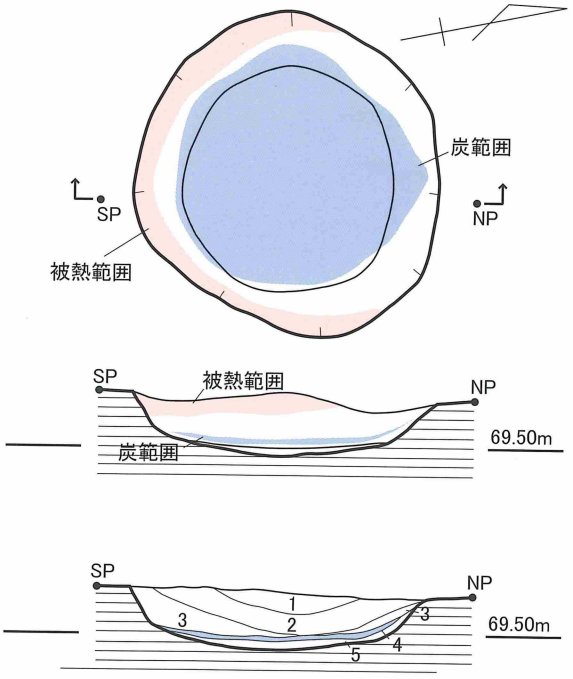
東区SK02（第29図、写真図版３・４）

東区中央やや南から検出された土坑である。３基が並ぶ土坑の中央に位置するものである。長径80cm、短径40cm、深さ５cmを測る楕円形土坑である。土坑の上部のほとんどを削平してしまい、床面のみ残存していたものであろう。一面に１～２cm程度の厚さの炭層が堆積し、床面上に被熱による赤変硬化が４箇所に残されていた。床面上層から完存の土師質土器皿が１点出土している。



第27図　カシミ遺跡SE136出土遺物（1/3）

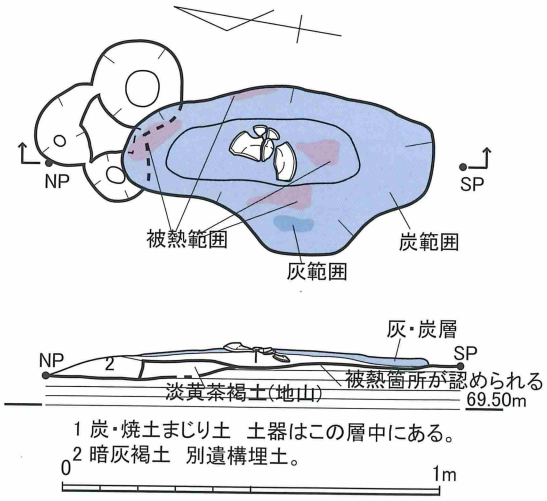
出土遺物は第30図に示した。口径13.5cmを測る土師質土器椀である。焼土坑であるため、２次焼成を受け、瓦質から変質したものかもしれない。



1 灰褐土　粘性あり。2mm前後の焼土粒まじり。自然堆積か
2 暗灰褐土　粘性あり。炭がまじる。自然堆積か
3 灰茶褐土　炭・焼土粒が比較的多くまじる。砂まじり。自然堆積か
4 炭層（2～3cm大の炭化材多く入る）
5 4層と比べ炭化材のまじりは少ない。掘りすぎか

0　1m

第28図　カシミ遺跡SK01（1/20）



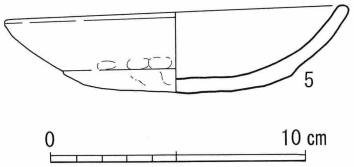
1 炭・焼土まじり土　土器はこの層中にある。
2 暗灰褐土　別遺構埋土。

0　1m

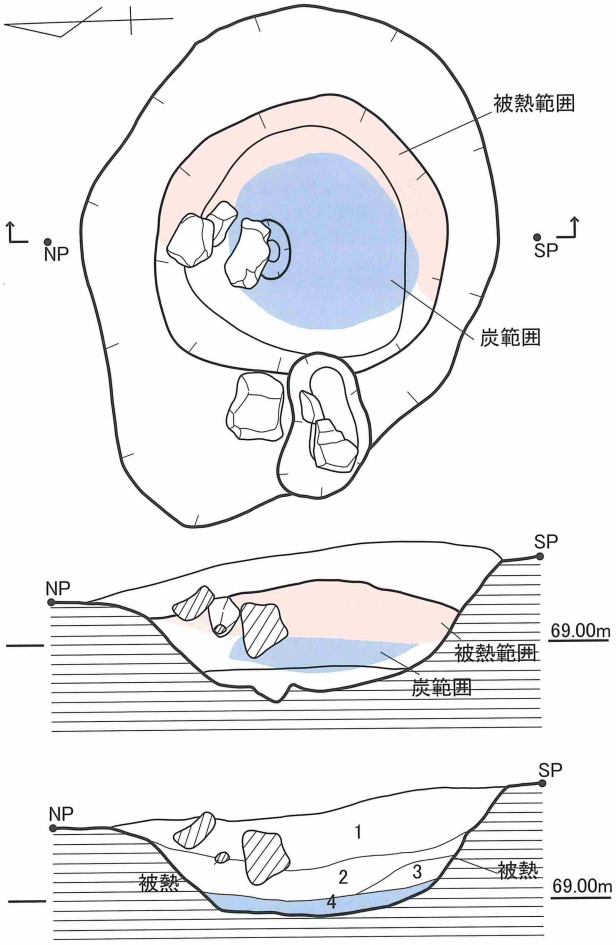
第29図　カシミ遺跡SK02（1/20）

東区SK03（第31図、写真図版３・４）

東区中央やや南から検出された土坑である。３基が並ぶ土坑の東端に位置するものである。長径130cm、短径110cm、深さ35cmを測る楕円形土坑である。この土坑には中位に屈曲部があり、屈曲部下は径80cm、深さ15cmを測る円形土坑を呈する。最下層に厚さ４cm程度の炭層があり、土坑の側面は被熱による赤変硬化が東半分の面に確認できた。土坑内埋土は自然堆積層であろうが、炭や焼土が少量混入していた。遺物は、全く確認できなかった。



第30図　カシミ遺跡SK02出土遺物（1/3）

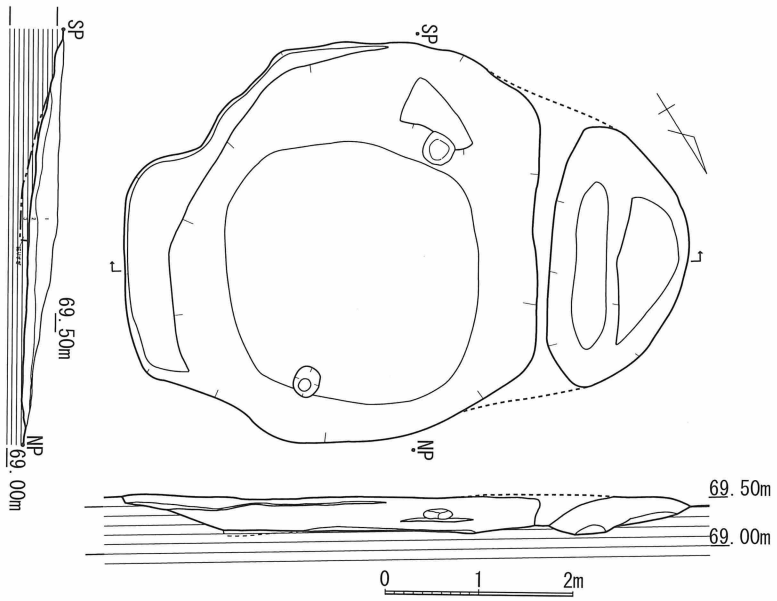


1 暗灰褐土　2～3mm大の炭・焼土粒まじり。粘性あり。他の土のまじりこみは少ない。
　こぶし大のレキ(地山土中に含まれる)まじり。白色粒まじり。自然堆積
2 灰褐土　粘性あり。2mm大の炭粒まじり。自然堆積
3 灰茶褐土　3mm大の炭・焼土粒が多くまじる。かたくしまる
4 炭層

第31図　カシミ遺跡SK03（1/20）

SK154・155（第32図）

SK154は西区西端から検出された径４ｍ深さ40cmを測る大型の土坑である。この土坑に隣接して西側にこの続きのものと思える半月状土坑SK155があるが、両者は一連のものであろう。SK154は瓦器椀片をはじめとして少量の土師質土器が出土しているが、いずれも小片で図化できる大きさではなかった。しかし、瓦器椀の形態からSK154は14世紀に属するものと考えられる。



1 灰褐土　焼土・炭粒まじり。砂まじり。遺物はほとんどこの層中より出土。上層。
2 黒褐土　まじりはない。砂まじり。遺物はほとんど出土しない。下層。
3 2層との境の方では炭・焼土(3mm大)粒がまじっていたため掘下げていた。地山土。

第32図　カシミ遺跡SK154・155（1/80）

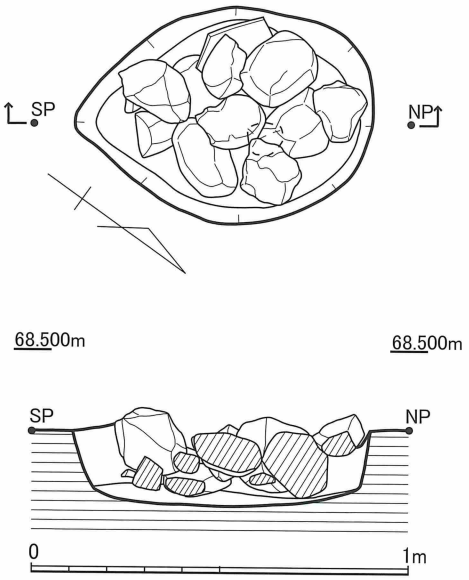
西区SK148（第33図）

S148は西区北西端から検出された長径80cm、短径55cm、深さ20cmを測る楕円形土坑である。拳大から人頭大の礫が充填されており、なかには土器片もみられる。土器片は土師質土器甕や器種不明のものが多いが、図化できる大きさのものはなかった。中～近世のものであろう。

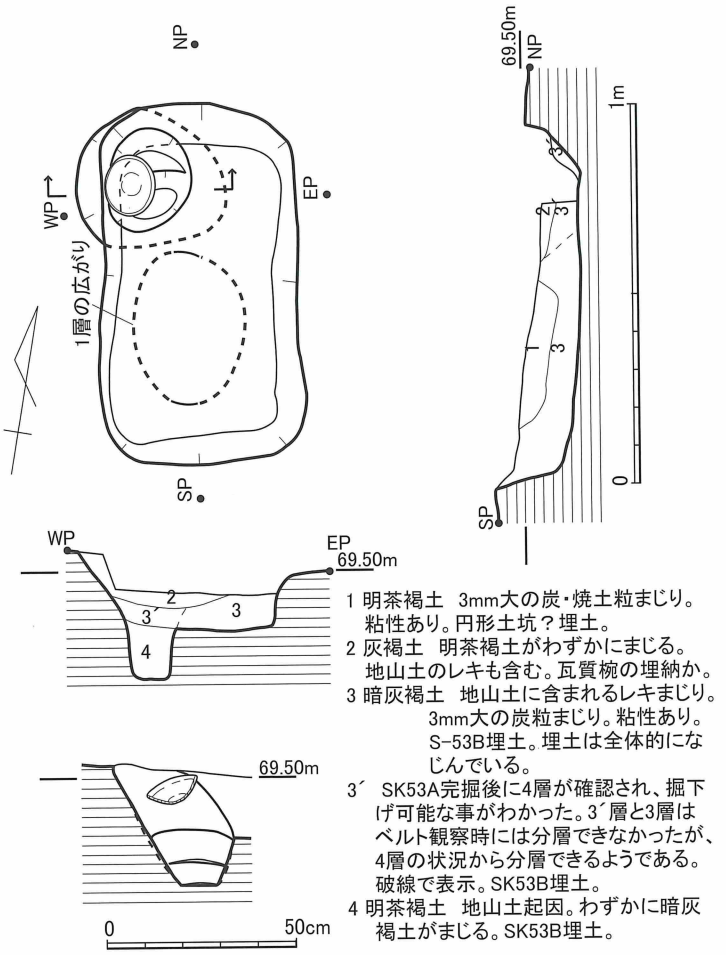
西区SK53（第34図）

SK53は西区中央やや南から検出された縦95cm、横50cm、深さ15cmを測る長方形土坑である。この土坑の北西隅にピット状の遺構が確認できたが、同一遺構か、土坑とピットが切り合ったものかについては、判断できなかった。遺物は１点、ピット状の上部埋土から出土しているが、これについても判断しにくい。

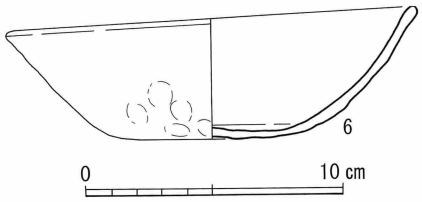
出土遺物は第35図に示した。口径15.9cm、器高５cmを測る瓦器椀である。高台はみられないが、貼り付けられた痕跡が確認できる。口縁部と口縁部外面２cm程度が黒変しており、他は灰色を呈する。



第33図　カシミ遺跡SK148（1/20）



第34図　カシミ遺跡SK53（1/20）



第35図　カシミ遺跡SK53出土遺物（1/3）

西区SK147（第36図）

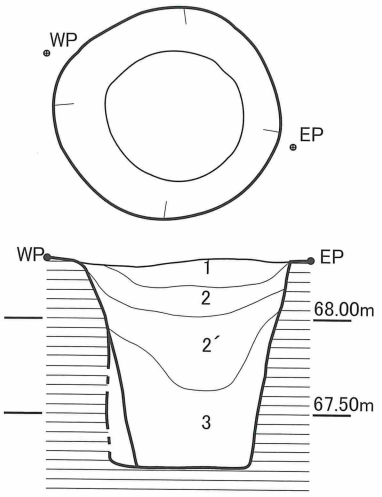
西区中央やや西側に位置する径約１ｍ、深さ110cmを測る円形土坑である。最下層は地山土により人為的に埋められていた。時期を示す遺物は確認できなかった。

西区SK150（第37図）

西区北端に位置する径約１ｍ、深さ50cmを測る円形土坑である。下層は地山土により人為的に埋められていた。遺物は瓦質土器が出土しているが、図化しうる遺物は確認できなかった。中世後半のものであろう。

西区SK151（第38図）

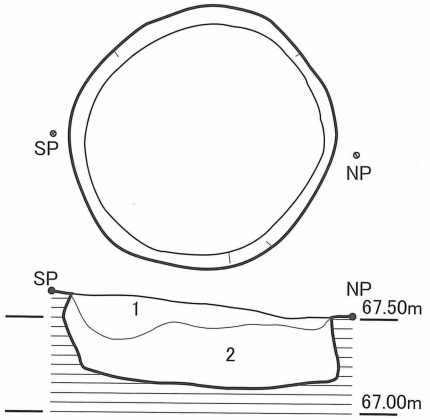
西区西端に位置する径約95cm、深さ70cmを測る円形土坑である。下層は地山土により人為的に埋められていた。時期を示す遺物は確認できなかった。様相はSK147と近似する。



1 淡灰褐土　粘性あり。地山土レキ粒がわずかにまじる。マンガン粒含む。
2 明灰褐土　粘性あり。まじりはなし。マンガン含む。
2´ 2層と比べやや地山土のまじりあり。
3 灰茶褐土　粘性あり。地山土レキ・土ブロックまじり。人為的に埋められた埋土。

0　1m

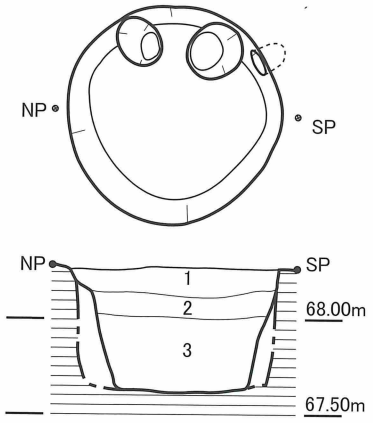
第36図　カシミ遺跡SK147（1/40）



1 暗灰褐土　砂まじり。まじりはほとんどなし。しまりなし。
2 黄灰褐土　黄褐地山ブロックまじり。埋戻した可能性高い。

0　1m

第37図　カシミ遺跡SK150（1/40）



1 淡灰褐土　マンガン粒まじり。粘性あり。
2 明灰褐土　粘性あり。
3 灰褐土　砂・地山土まじり。やや粘性あり。

0　1m

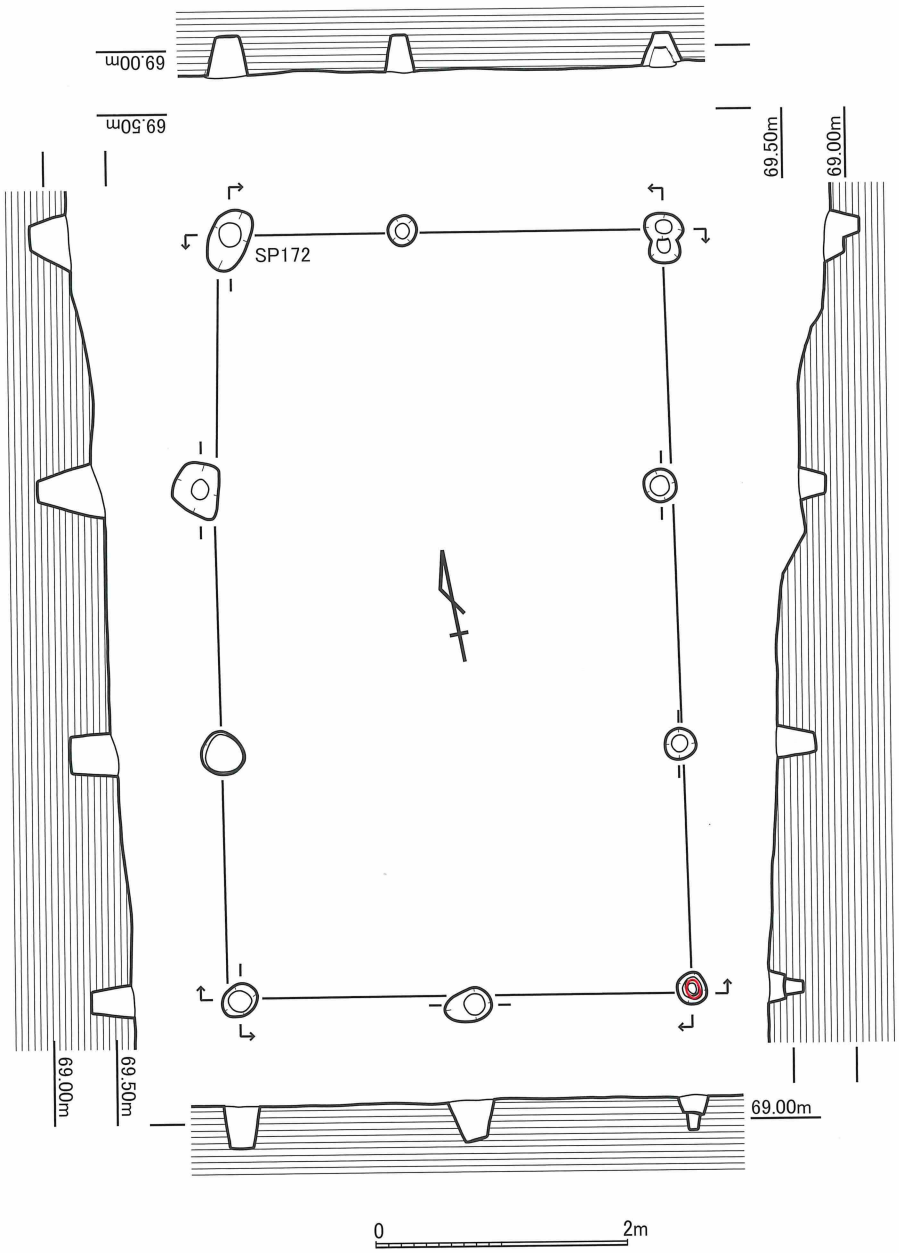
第38図　カシミ遺跡西区SK151（1/40）

3）掘立柱建物

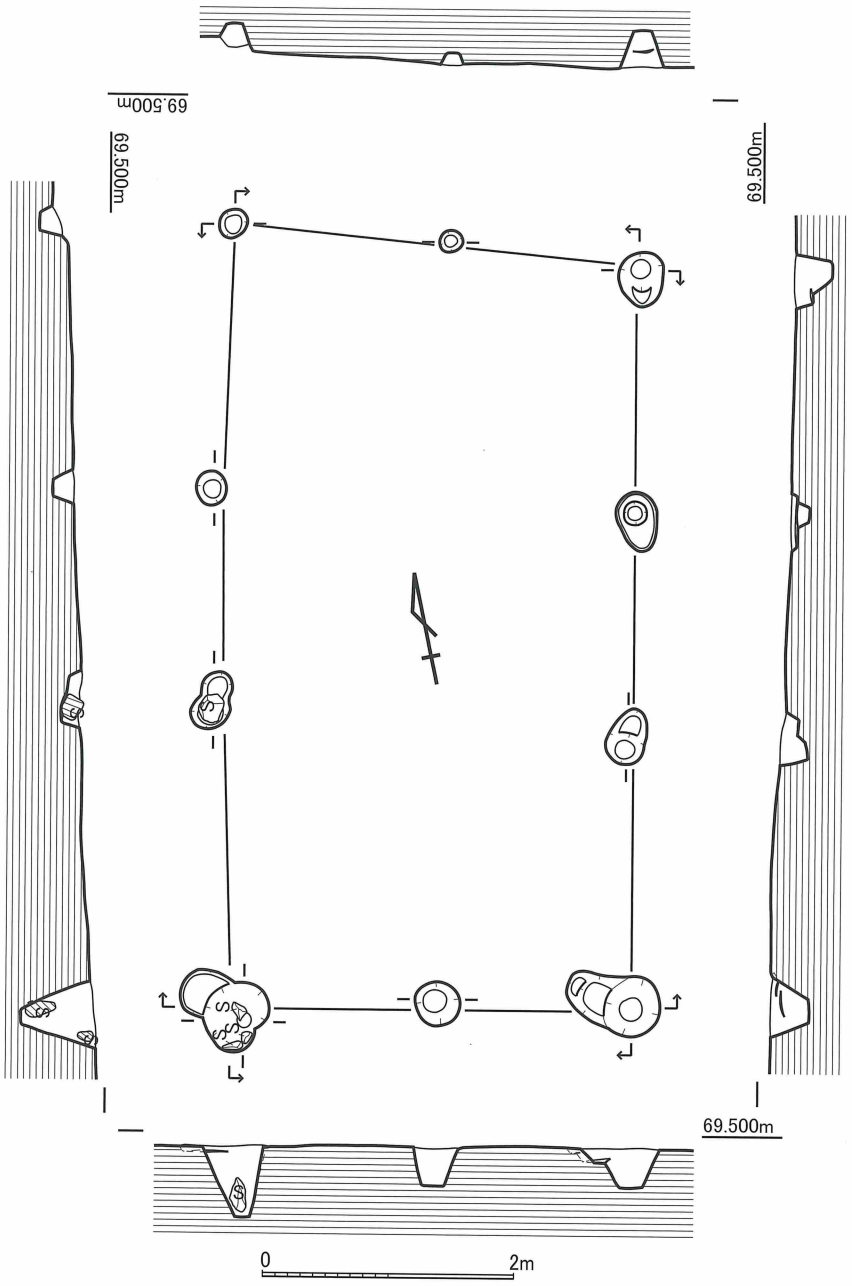
西区から500基をこえるピットが、また、東区からは70基をこえるピットが、それぞれ検出できた。西区中央において掘立柱建物２棟が復元できた。

SB10（第39図、写真図版４）

西区の中央に確認できた掘立柱建物であり、身舎面積は19.2㎡を測る。規模は梁間２間（3.2m）、桁行３間（６m）の建物である。柱穴からは細片の土器が少量みられたが、図化しうるものは北西端の柱穴（SP172）から出土した瓦質鉢の口縁部片のみであった。出土遺物は第41図に示した。中世後半のものであろうか。



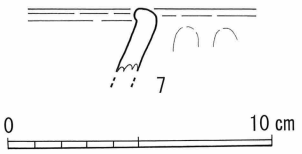
第39図　カシミ遺跡SB10（1/60）



第40図　カシミ遺跡SB126（1/60）

SB126（第40図、写真図版４）

西区の中央に確認できた掘立柱建物であり、身舎面積は19.2㎡を測る。規模は梁間２間（3.2m）、桁行３間（６ｍ）の建物である。柱穴からは中世に属する細片の土器が少量みられたが、図化しうるものはみられなかった。中世後半のものであろうか。



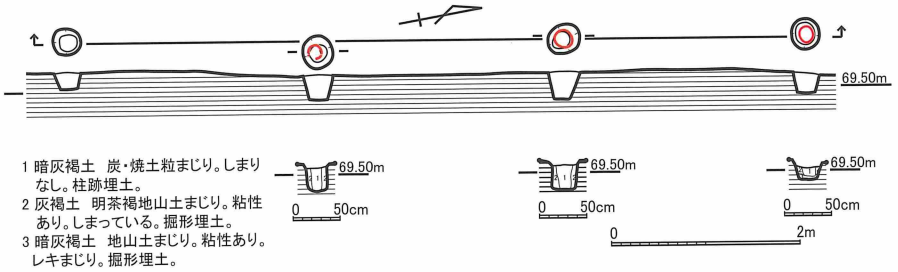
第41図　カシミ遺跡SP172出土遺物（1/3）

４）柵列

西区から500基をこえるピットが、また、東区からは70基をこえるピットが、それぞれ検出できた。西区において柵列が３列復元できた。

SA54（第42図、写真図版４）

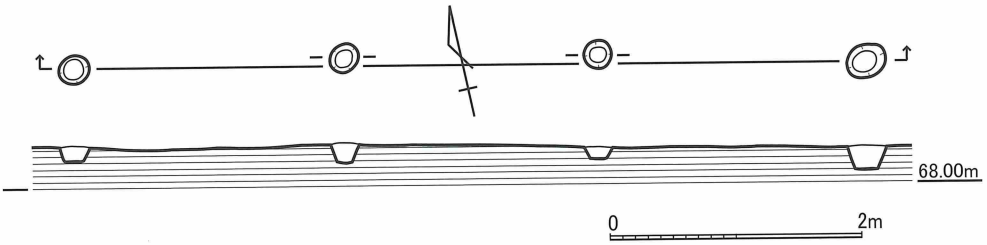
西区の南側に南北方向に延びる４基の柱穴列からなる柵列である。この柵列は調査区南端に接しているため、さらに南に延びる可能性がある。いずれも柱穴の心々間2.7mを測る。柱穴内から土器の出土は確認できず、時期の比定は困難である。



第42図　カシミ遺跡SA54（1/60）

SA158（第43図、写真図版４）

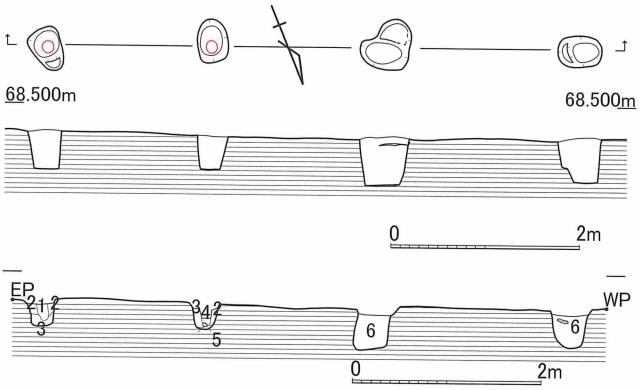
西区の北西側に東西方向に延びる４基の柱穴列からなる柵列である。SA163と近接するが、方位は若干異なる。中央の柱穴の心々間2.0m、両端の柱穴の心々間2.0mを測る。出土遺物は西端の柱穴から土師質土器片が出土しているが、図化しうる大きさではなかった。



第43図　カシミ遺跡SA158（1/60）

SA163（第44図、写真図版４）

西区の北西側に東西方向に延びる４基の柱穴列からなる柵列である。SA158と近接するが、方位は若干異なる。東側３基の柱穴の心々間1.8m、西側２基の柱穴の心々間2.2mを測る。出土遺物は各柱穴から少量の土師質土器が出土している。ほとんどが図化しうる大きさではなかったが、西から２番目の柱穴から瓦質鍋の口縁片が出土している。実測図は第45図に示した。

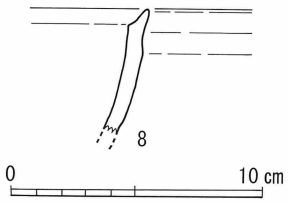


1 灰褐土　ボソボソとしてしまりなし。柱痕埋土。
2 灰褐土　しまりあり。
3 黄褐ブロックまじり(なじんでいない)。しまりあり。
4 灰黄褐土　しまりなし。柱痕埋土。
5 暗灰褐土　粘性あり。しまりあり。
6 灰褐土　黄褐地山土ブロックまじり(ややなじんでいる)。

第44図　カシミ遺跡SA163（1/60）

5）ピット

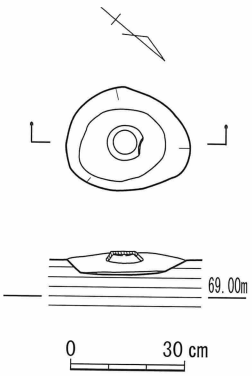
西区から500基をこえるピットが、また、東区からは70基をこえるピットが、それぞれ検出できた。前述したように掘立柱建物２棟、柵列が３列それぞれ復元できたほかに下記の通り確認できた。



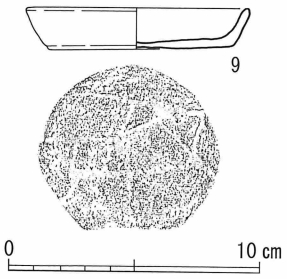
第45図　カシミ遺跡SA163出土遺物（1/3）

SP27（第46図）

SP27は西区中央から検出された長径30cm、短径25cm、残存する深さ５cmを測る楕円形土坑である。この中央には土師質土器坏が伏せた状態で出土しており、その実測図は第47図に示した。



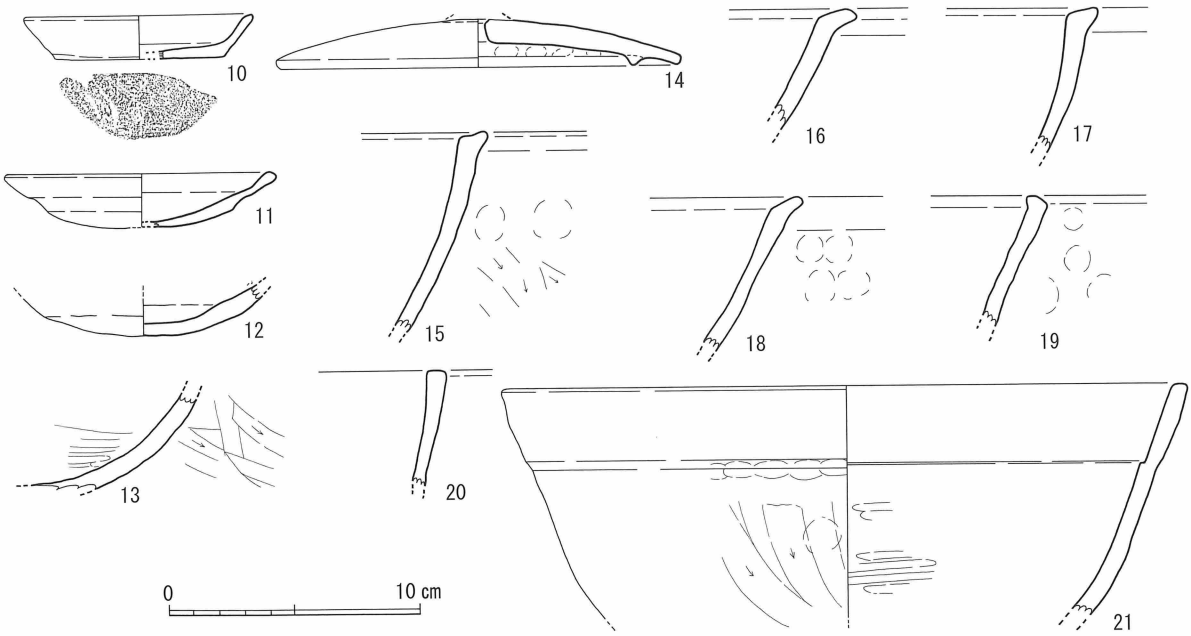
第46図　カシミ遺跡SP27（1/20）



第47図　カシミ遺跡SP27出土遺物（1/3）

ピット出土遺物（第48図）

10はSP64、11はSP118、12はSP92、13・21はSP137、14はSP90、15はSP119、16はSP86、17はSP91、18はSP100、19はSP39、20はSP31からそれぞれ出土したものである。10・11は土師質土器坏である。12は土師質土器であるが器種が明らかでない。14は土師質土器蓋である。15・16・17・18は土師質土器鍋である。19・20は土師質土器鉢である。21は瓦質鍋である。



第48図　カシミ遺跡ピット出土遺物（1/3）

6）溝

調査区の中から溝状遺構が数条確認されている。そのほとんどが現地形に伴う近代以降のものであろうが、なかには、中世の遺物が出土するものもみられる。

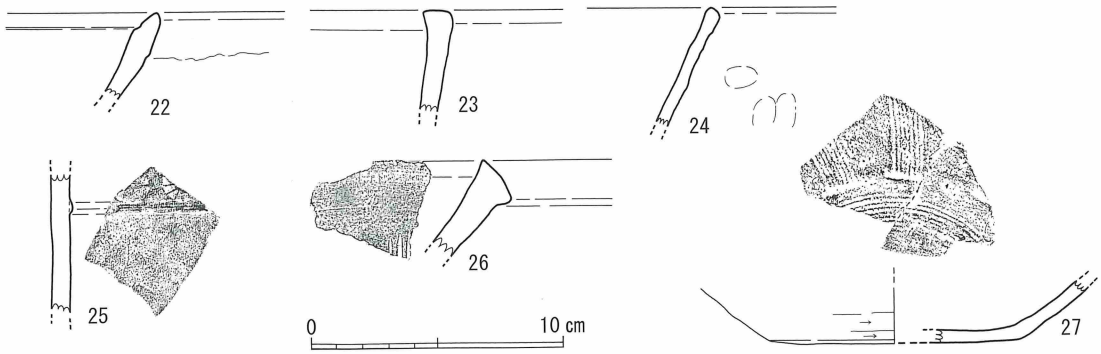
SD111・112・113・114・115（第50図、写真図版４）

調査区の中央に南北方向に走る溝の切り合いである。SD111・112・113は近代以降の造成であることがわかるが、SD114・115は中世に遡る可能性をもつ。SD115がSD114を切ることがわかる。

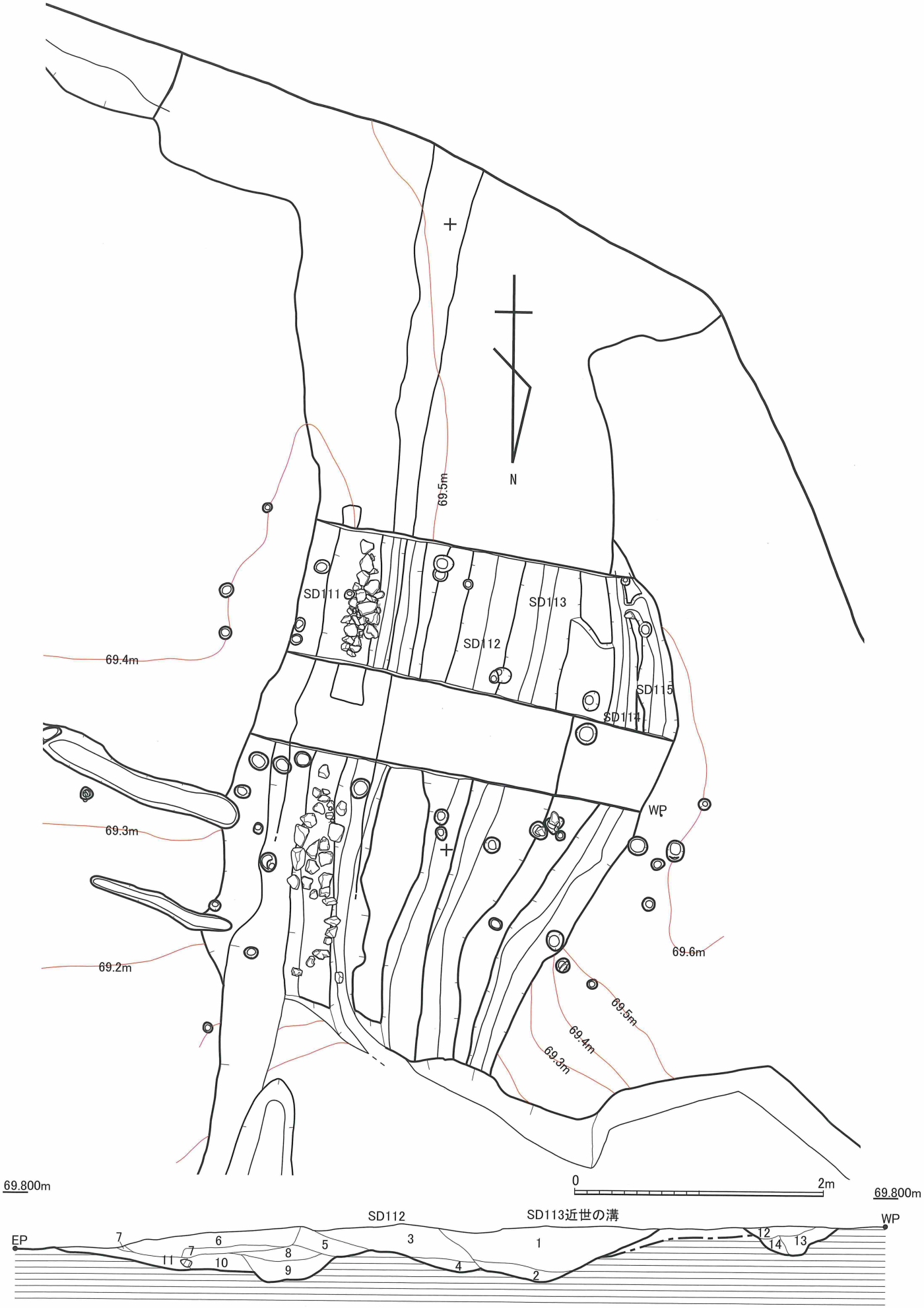
出土遺物は第49図27に示した。SD114・115のどちらから出土したものかは明らかでないが、瓦質擂鉢の底部片である。

溝出土土器（第49図）

溝状遺構から出土した遺物のうち図化できるものを第49図に示した。22・24・25はSD69、23はSD176、26はSD141からそれぞれ出土した。22は鍋であろうか。23・24は瓦質鉢、25は瓦質火鉢である。26は備前焼擂鉢である。



第49図　カシミ遺跡溝状遺構出土遺物（1/3）



1 灰黄褐土　砂まじり。3mm大の焼土粒・炭粒まじり。1cm大の小レキをわずかに含む。SD113近代の溝。
2 暗灰褐土　砂まじり。マンガンが多くまじる。やや粘性あり。SD113近代の溝。
3 灰黄褐土　砂まじり。1層に比べ焼土・炭粒のまじりは少ない。ややマンガンのまじりが多い。SD112近代の溝。
4 暗灰褐土　明茶褐土ブロック(地山)わずかにまじる。砂まじり。マンガンが多くまじる。やや粘性あり。SD112近代の溝。
5 暗灰褐土　砂まじり。マンガンを多く含む。
6 茶褐土　地山のまとまり。粘性が強く、しまっている。側溝3ないし4の掘削時土。
7 明灰褐土　砂まじり。マンガンがわずかにまじる。焼土粒わずかにまじる。SD111埋没後の側溝2の土手。
8 暗灰褐土　砂まじり。マンガンのまじりは少ない。SD111。8・3・5層の分層は明確ではない。近世の水田化時の石垣と側溝1の埋没土。
9 暗灰褐土　砂まじり。やや粘性あり。マンガンのまじりが多い。SD111。近世の水田化時の石垣と側溝1の埋没土。
10 暗灰褐土　硬化している。マンガンまじり。SD111。石垣の裏込め。
11 灰褐土　砂まじり。マンガンのまじりは少ない。石垣の裏込め。
12 暗茶褐土　地山土ブロックまじり。中世の溝か？
13 灰褐土　地山土粒まじり。マンガンを少し含む。SD115。中世の溝か？
14 淡灰褐土　砂まじり。まじりは少ない。SD114。中世の溝か？

第50図　カシミ遺跡SD111・112・113・114・115（1/80）

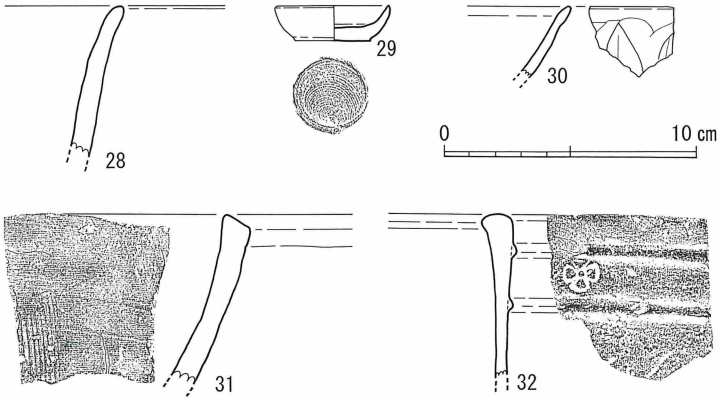
7）出土遺物（第51・52・53図）

調査区から出土した遺物を第51～53図に示した。このうち、遺構出土のものもみられるが、明らかに時期が異なり、埋土中に混入したものとしてここで紹介する。

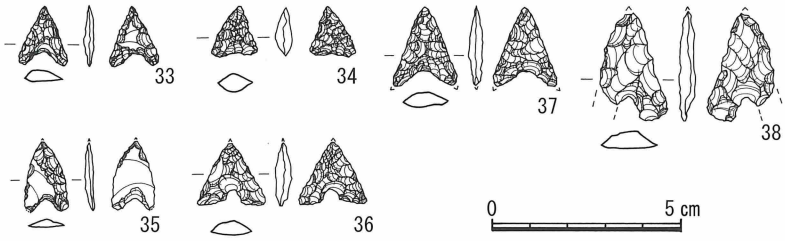
第51図28は土師質土器鉢である。29は土師質土器小皿であり、底部に回転糸切り痕がみられる。30は龍泉窯系青磁碗であり、鎬蓮弁文がみえる。31は瓦質擂鉢で、32は瓦質火鉢である。

第52図は石鏃である。34はチャート製、36・37・38は姫島産黒曜石製である。33・35はサヌカイト製である。

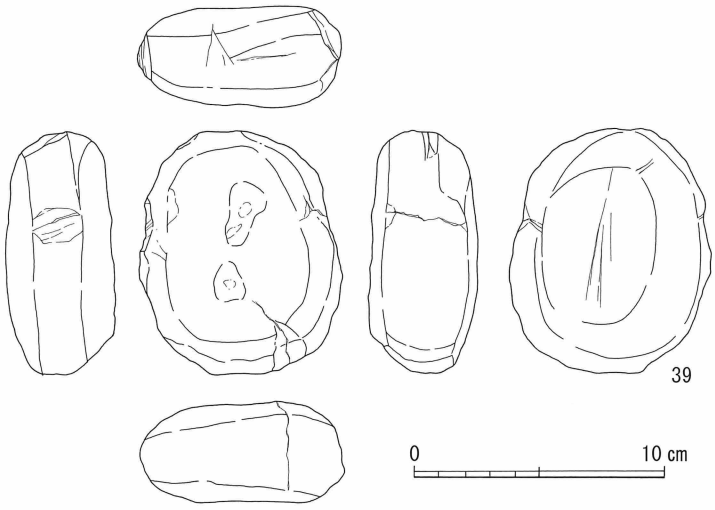
第53図は安山岩製叩き石である。



第51図　カシミ遺跡出土遺物①（1/3）



第52図　カシミ遺跡出土遺物②（1/2）



第53図　カシミ遺跡出土遺物③（1/3）

第４表　カシミ遺跡出土遺物観察表（土器）

図版番号	遺物番号	種類	器形	生産地	法量（cm）（　）は復元径			遺構名
					口径	底径	器高	
27	1	瓦質土器	擂鉢					SE136　灰褐グライ層11層
	2	土師質土器	鍋					SE136　灰褐グライ層11層
	3	土師質土器	鍋					SE136
	4	瓦質土器	火鉢			(23.2)		SE136　灰褐グライ層11層
30	5	土師質土器	椀		13.5		2.9 ～ 3.4	K02
35	6	瓦器土器	椀		15.9		4.8 ～ 5.0	K53
41	7	瓦質土器	鉢					SP172
45	8	瓦質土器	鍋					SA165
47	9	土師質土器	坏		8.9	7.2	1.7 ～ 1.8	SP27
48	10	土師質土器	坏		(9.0)	(6.8)	1.7	SP64
	11	土師質土器	坏		(10.2)		2.1	SP118
	12	土師質土器	不明					SP92
	13	瓦質土器	鍋					SP137
	14	土師質土器	蓋		(15.8)		1.9	SP90
	15	土師質土器	鍋					SP119
	16	土師質土器	鍋					SP86
	17	土師質土器	鍋					SP91
	18	土師質土器	鍋					SP100
	19	瓦質土器	鉢					SP39
	20	土師質土器	鉢					SP31
	21	瓦質土器	鍋		(27.2)			SP137
49	22	瓦質土器	鍋？					SD69
	23	瓦質土器	鉢					SD176
	24	瓦質土器	鉢					SD69
	25	瓦質土器	火鉢					SD69
	26	陶器	擂鉢	備前				SD141
	27	瓦質土器	擂鉢			(10.0)		SD114・115
51	28	土師質土器	鉢					
	29	土師質土器	小皿		4.5	3.0	1.4	
	30	青磁	碗	龍泉窯				
	31	瓦質	擂鉢					
	32	瓦質	火鉢					

第５表　カシミ遺跡出土遺物観察表（石器）

図版番号	遺物番号	種類	材質	寸法（cm）								遺構名
				部位							重量	
52	33	石鏃	サヌカイト？		タテ	1.6	ヨコ	1.3	厚さ	0.3	0.4	SD141
	34	石鏃	チャート		タテ	1.4	ヨコ	1.3	厚さ	0.5	0.6	
	35	石鏃	サヌカイト？		タテ	1.9	ヨコ	1.1	厚さ	0.1	0.4	SD140
	36	石鏃	姫島産黒曜石		タテ	1.7	ヨコ	1.9	厚さ	0.4	0.7	
	37	石鏃	姫島産黒曜石		タテ	2.1	ヨコ	1.7	厚さ	0.4	0.8	
	38	石鏃	姫島産黒曜石		タテ	2.9	ヨコ	1.8	厚さ	0.5	1.6	
53	39	タタキ石	安山岩		タテ	9.6	ヨコ	8.1	厚さ	4.3	366.5	SE71

3　小結

カシミ遺跡の調査において、14～16世紀の集落の遺構群を検出した。12～13世紀に遡る遺物も出土しているが、明確に時期が断定できる遺構の存在は確認できなかった。東区から検出された３基の焼土坑は近接し、相互に関連する遺構群であることが想定できるが、15世紀代のものと考えられる。断片的に確認できる遺物が中世後半におさまるものが多いため、遺構群はこの時期のものである可能性が高い。

一般的に大分県下における中世集落は、14世紀後半に集村化が進み、戦国期にそのピークを迎え、現在に残る集落景観は中世集落を踏襲する場合が多い。西秣集落も戦国期の石塔が残存するなど、14世紀後半以降に集村化したことがうかがえる。カシミ遺跡は現集落の背後の緩傾斜地の畑地であるため、集落の主体部とは外れた位置にある。それゆえ、集落縁辺の遺構群である可能性が高い。明確な生活単位が把握できない遺構群の様相も、それを反映しているものかもしれない。

中世、在地土豪である深水氏がズリヤネ城を拠点とした下深水の集落では、ズリヤネ城付近の深水邸から14世紀の土師質土器小皿・銭貨・五徳等が納められた備前焼大甕の埋納遺構が発見されている。これらの存在からしても南北朝期には確実に集落が営まれていたことがわかる。また、カシミ遺跡のすぐ北側の春畑遺跡では戦国期のものであると考えられる方形区画溝をもつ屋敷地も存在する。この一帯には中世石造物もみられ、秣川流域の谷状平野を見下ろす高台は集落を営むうえで絶好の場所であったことがわかる。春畑遺跡から南に延びる高台最高位の場所には方形区画をもつ屋敷地が連続する地形の名残がみえ、その行きつくところがズリヤネ城である。カシミ遺跡は屋敷地としての明確な単位も把握できず、この高台の集落縁辺部にの様相を現在に残す遺跡として認識すべきであろう。

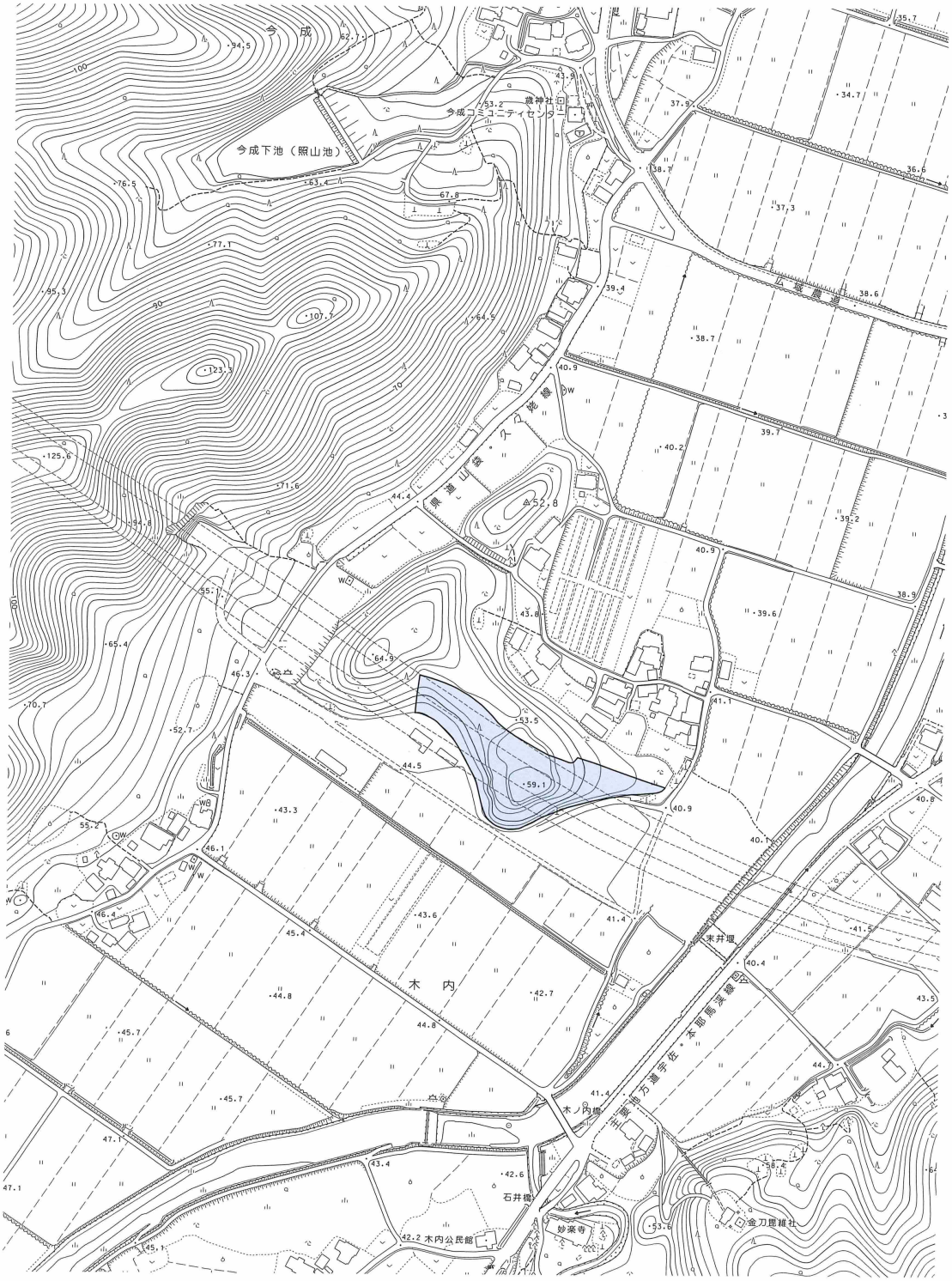
（原田　昭一）

第４節　今成館跡

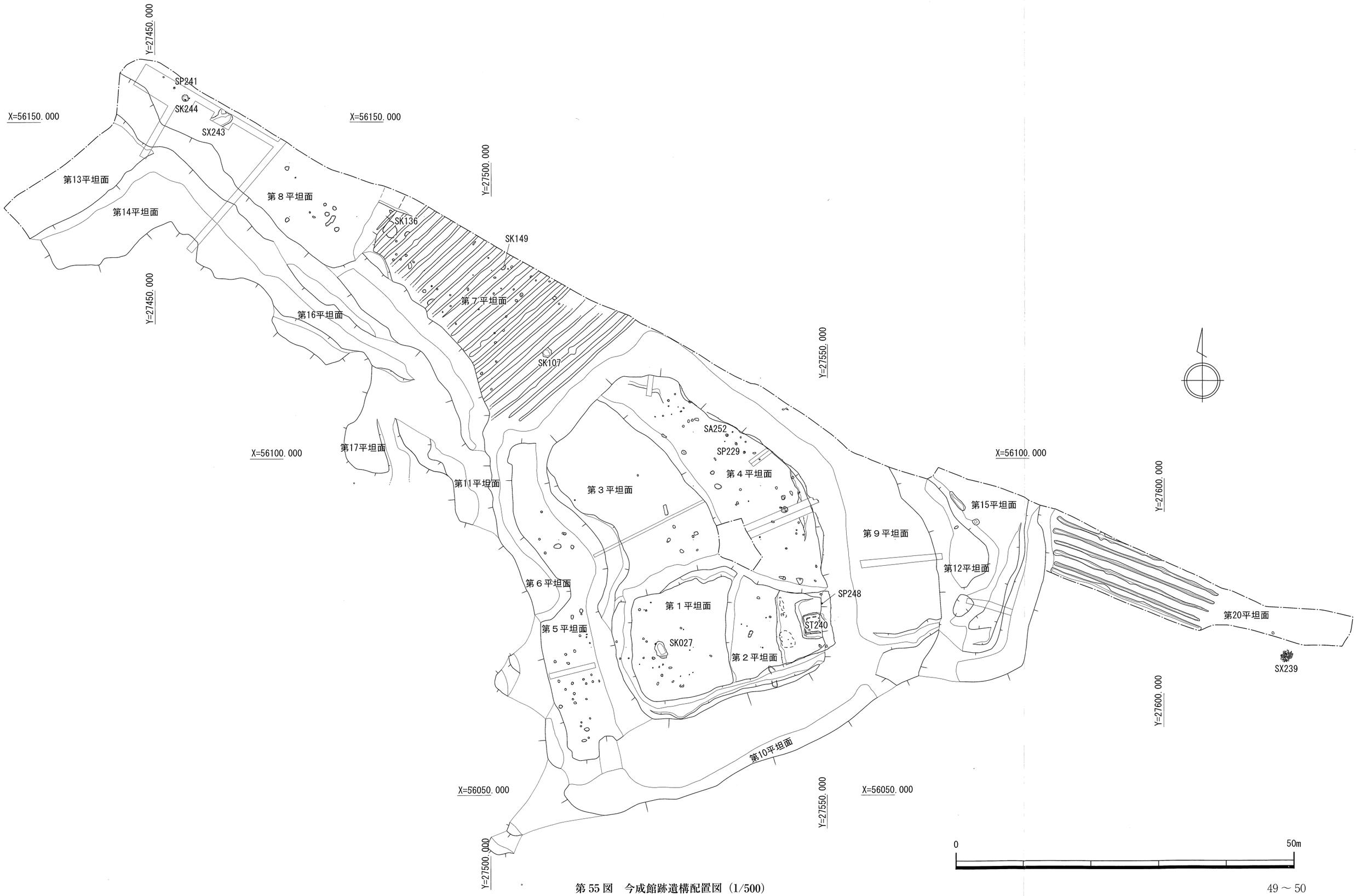
１　調査の概要

今成館跡は大分県宇佐市大字今成に位置する。調査区は伊呂波川流域の谷部の平野を閉塞する位置に存在する平野からの比高差15mを測る独立丘陵にある。現在の地形は、自然地形を削平し、平坦地を連続して造成している。

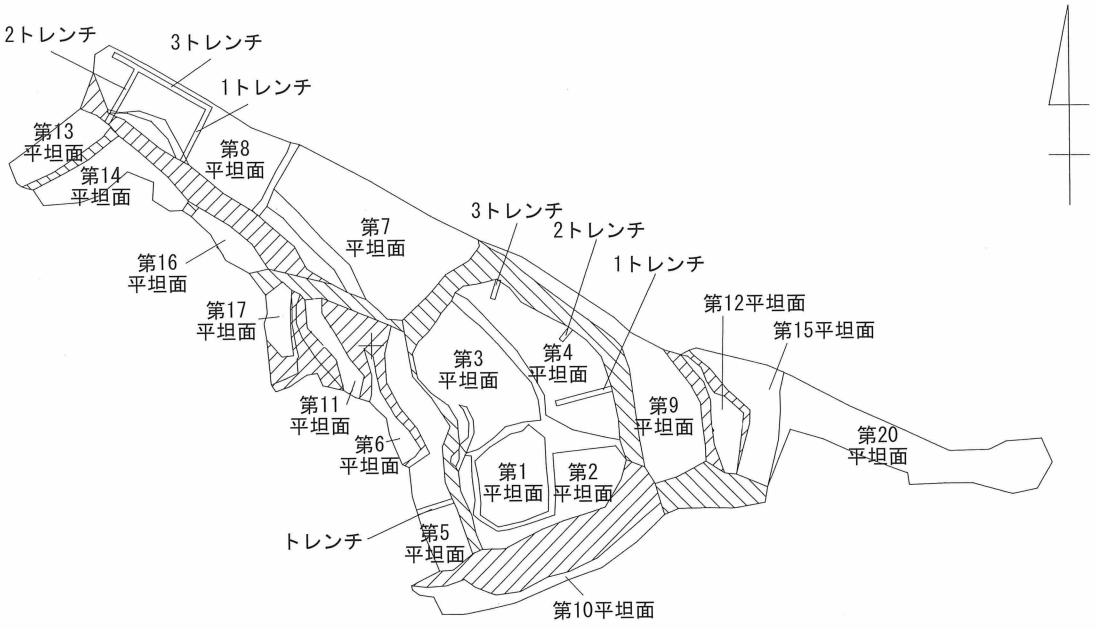
発掘調査の結果、中世以降の整地面や、柵列、土坑、墓などが発見され、整地層から土師質土器・瓦器・瓦質土器・青磁・白磁、および縄文土器などが出土した。



第54図　今成館跡周辺地形図（1/5,000）



第 55 図　今成館跡遺構配置図（1/500）



第56図　今成館跡平坦面・トレンチ配置図（1/1,500）

2　遺構と遺物

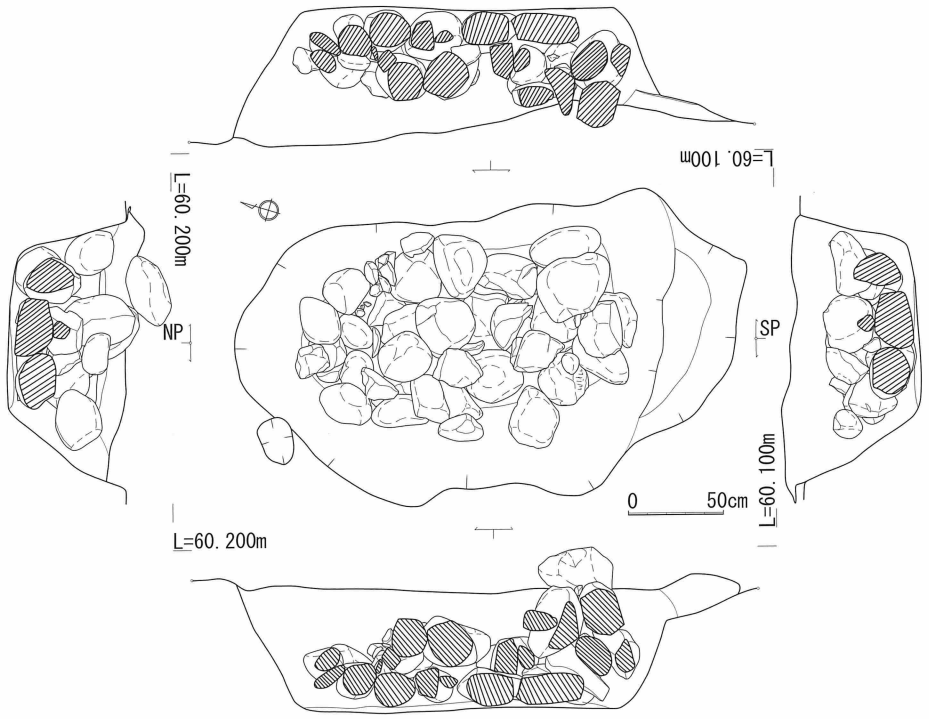
1）第１平坦面（第55図、写真図版５）

調査区最上部に位置する略方形の約400㎡を測る平坦地である。東に隣接する第２平坦面とは比高差約0.6m、北に隣接する第３平坦面とは比高差約1.4m、西に隣接する第５平坦面とは比高差約3.8m、南に隣接する第10平坦面とは比高差約7.0mをそれぞれ測る。

この第１平坦面でも、やや低位にある西側部分に土坑（SK027）やピット群が検出できた。ピット群には掘立柱建物や柵列としての並びは確認できなかった。

SK027（第57図、写真図版５）

第１平坦面西側部分から検出された長径2.3m、短径1.4m、深さ1.2mの長楕円形土坑である。埋土中には人頭

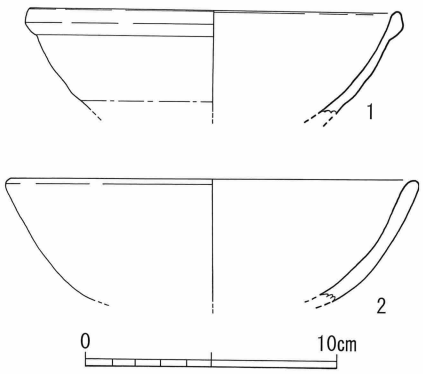


第57図　今成館跡第１平坦面SK027（1/40）

大の大きさの礫で埋め尽くされており、礫を埋めるため掘削された土坑のようにも見える。埋土中からは土器片等はきわめて少量出土したが、第58図２に出土遺物を図化した。

第１平坦面出土遺物（第58図）

第１平坦面からの出土遺物は第58図に示した。１は包含層中から出土した白磁碗である。玉縁をもつ特徴を有する。２はSK027から出土した瓦器椀である。



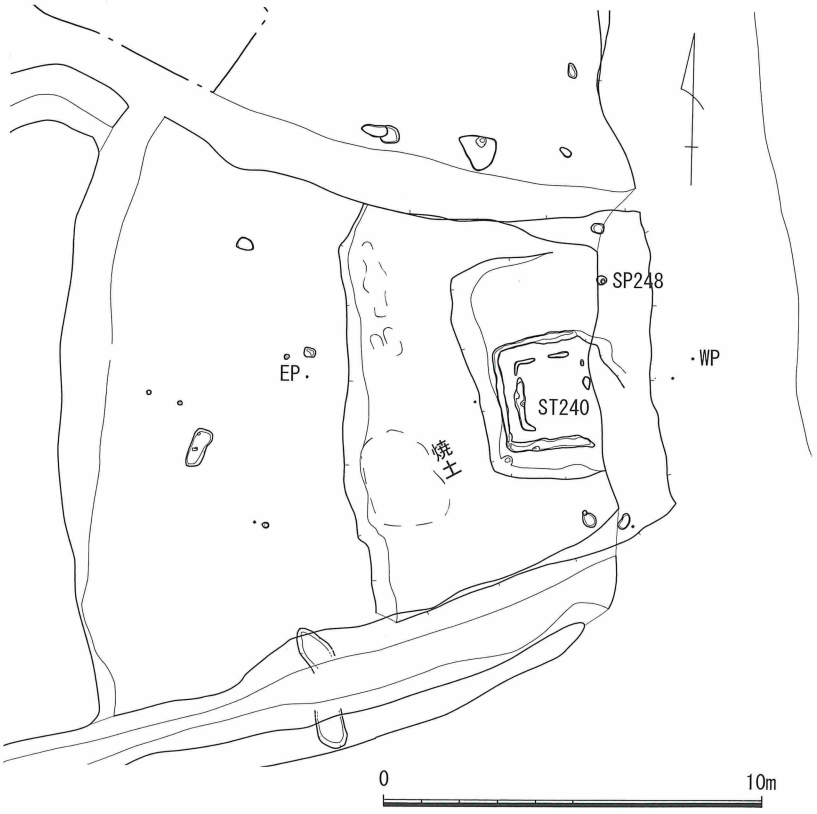
第58図　今成館跡第１平坦面出土遺物（1/3）

２）第２平坦面（第55・59図、写真図版５）

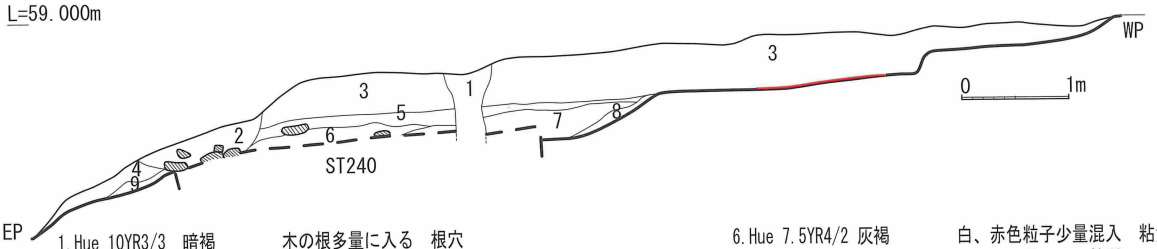
調査区最上部に位置する第１平坦面の東に隣接する約220㎡を測る平坦地である。北に隣接する第４平坦面とは比高差約1.2m、南に隣接する第10平坦面とは比高差約6.4m、東に隣接する第９平坦面とは比高差約5.0mをそれぞれ測る。

この第２平坦面には、本遺跡中でも、最も遺構が集中し、集石墓（ST240）をはじめ、土坑やピット群が検出できた。ピット群には掘立柱建物や柵列としての並びは確認できなかった。

第２平坦面の東側部分は30cm程度、削平され、この削平面下に集石墓（ST240）を造成していた。集石墓の西側にあたる３箇所に焼土面が確認できた。最も広い範囲は、1.8×2.5mの楕円形の範囲であり、その場所から出土した礫には焼成による赤変が確認できた。また、土師質土器小皿片（第61図８・９・12・13）や炭化した木片が出土した。これらの土器片は集石墓（ST240）出土の土器片と時期を同じくするが、この焼土面はST240を覆う層上にみられるため、被葬者の火葬に伴うものではない。



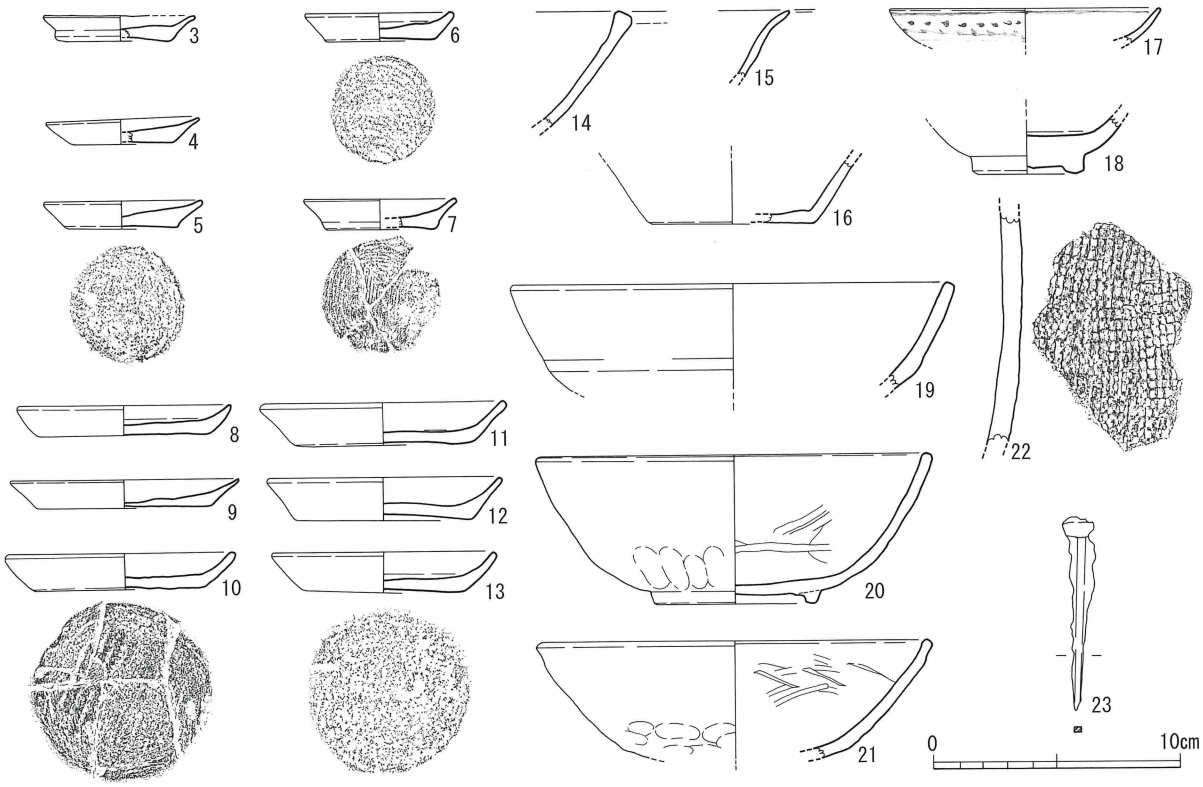
第59図　今成館跡第２平坦面（1/200）



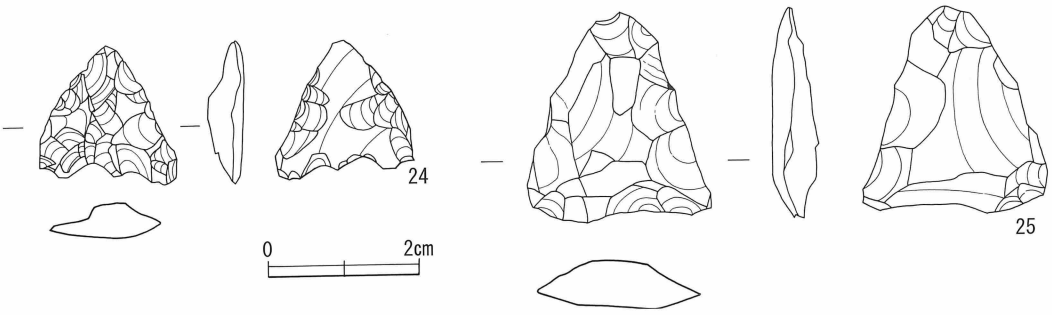
1. Hue 10YR3/3　暗褐　木の根多量に入る　根穴
2. Hue 7.5YR4/3 褐　しまりなし　木の根多量に入る　根穴
3. Hue 10YR3/3　暗褐　固く締まっている　白色粒、土器片多量混入（1層）
4. Hue 2.5YR5/6 明赤褐　締まりなし　混じりけのない赤土　粘質
5. Hue 2.5YR5/4 にぶい赤褐　明茶色土ブロック全体に混る　炭化物少量混入　粘質
6. Hue 7.5YR4/2 灰褐　白、赤色粒子少量混入　粘質
7. Hue 7.5YR3/1 黒褐　土器片中量混入　粘質
8. Hue 2.5YR3/1 暗赤灰　締まっている　粘質　地山
9. Hue 5YR4/2　灰褐　締まりなし　斜面堆積土

第60図　今成館跡第２平坦面土層断面図（1/70）

第２平坦面の土層堆積図は第60図に示した。３層は前述した焼土面を覆う層であり、中から遺物が比較的多く出土した。この層からの遺物は、焼土面から出土した第８図８・９・12・13の土師質土器坏と、16・17・18・19などである。３・５・６・７・10・11は６・７層出土であり、ST240に伴うものである可能性がひじょうに高い。４・14・15・20・21・22は５層中から出土している。23は鉄釘であり、３層出土であるが、ST240に伴うものが浮きあがった可能性をもつ。



第61図　今成館跡第２平坦面出土遺物①（1/3）



第62図　今成館跡第２平坦面出土遺物②（1/1）

第２平坦面出土遺物（第61・62図）

出土遺物は第61・62図に示した。第61図３～７は径６～７cmを測る土師質土器小皿である。５・６には外底に回転糸切り痕、７には外底に回転糸切りの上に板状圧痕がみえる。８～13は径９～10cmを測る土師質土器坏である。10には外底に回転糸切りの上に板状圧痕がみえる。14は瓦質土器鉢、15・16は口禿げ白磁皿である。17は碁笥底青花皿、18は龍泉窯系青磁碗である。19～21は瓦器椀であり、20には断面台形の高台が貼り付けられている。22は中世須恵器甕であり、表面に格子目タタキ、裏面にヘラナデがみられる。亀山窯産であろうか。23は鉄釘である。

第62図24・25は石鏃である。

ST240（第63図、写真図版５・６・７）

第２平坦面の東端から集石墓が確認できた。大きさ20～50cm程度の扁平な川原石を立てて、方形区画を２重に巡らせている。外側の区画は東端が斜面にかかり、流れて失われている。大きさは南北2.8mを測るため、東西も同等の規模をもっていたことが想定できる。内側の区画は東西・南北とも1.8mを測る。川原石は布掘り・ピットとも外側の面を合わせ、内側を埋めて配石している。この配石内から拳大の川原石が大量に出土したが、墓に貼りつけられていたものと考えられる。しかし、東部分ではこれらが流れており、原位地を保つものは少ない。

集石墓の南西部付近において、集石から浮いた状態で土師質土器小皿・坏が大量に出土している。これらの土器片に混じり、焼土粒や炭粒が集中して出土する範囲が確認できた。これらの遺物群はこの集石墓の祭祀に伴うものと考えられよう。

内側の集石内では、集石内から西側側石に近い位置で骨片が集石内から確認できた。直径20cmの範囲内で白色の細粒が確認できたが、形を留めるものではなく、採りあげに耐えうるものでなかった。なお、この周辺から釘等は出土しておらず、木製品の容器等に納められていたかどうかは確認できていない。なお、この集石中の埋土には土器片や炭化物が含まれている。

また、集石内から五輪塔部材が２基分出土しており、本来はこの集石墓に建てられていたものと推測できるが、散在するため本来の造立位置は確認できなかった。

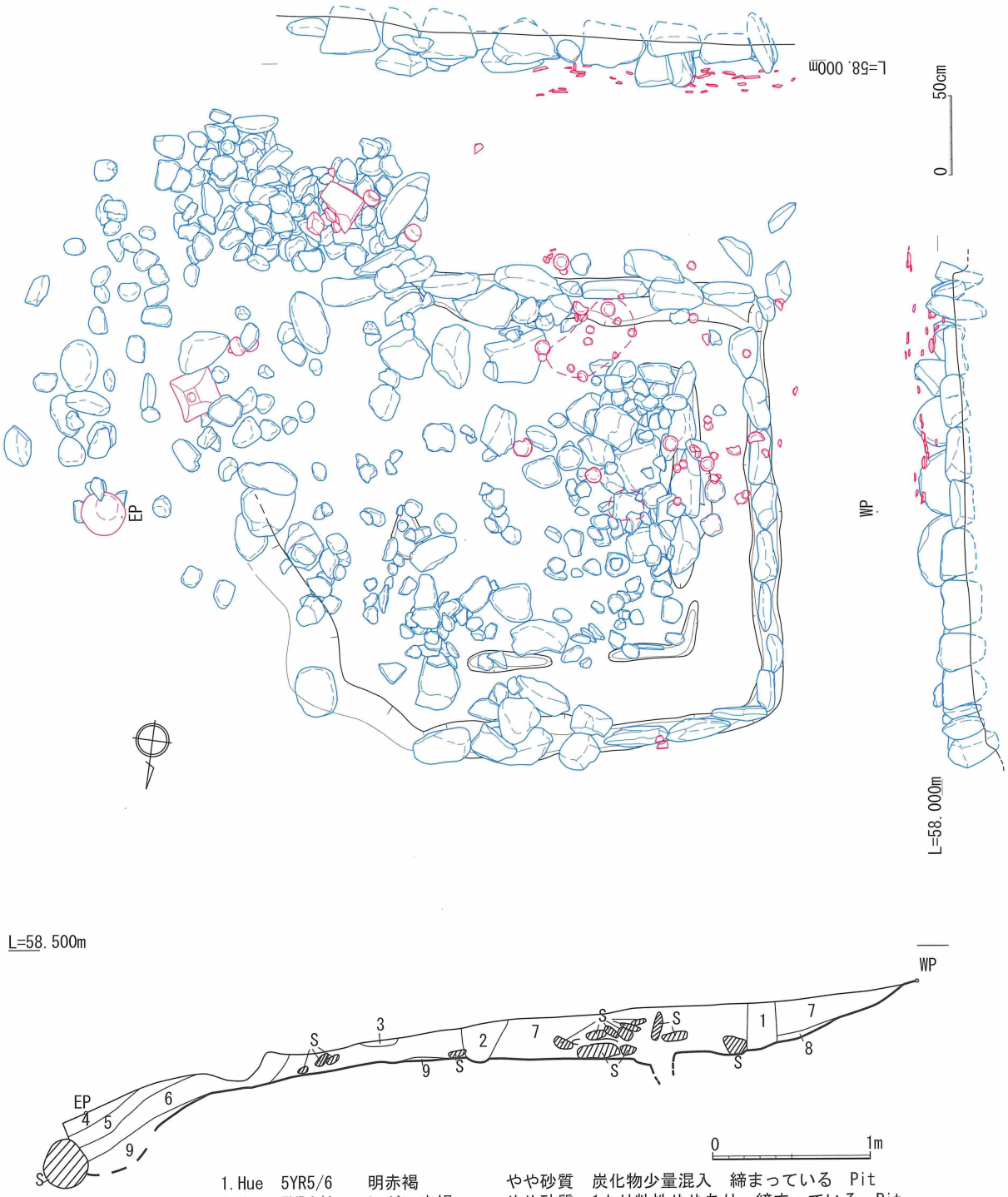
出土遺物は第64・65図に示した。第64図26～46は土師質土器小皿である。基本的には外底に回転糸切り痕がみられるが、30・31・37には外底に回転糸切りの上に板状圧痕がみえる。47～61は土師質土器坏である。47・50・52・53・58には外底に回転糸切りの上に板状圧痕がみえる。62～63は口禿げ白磁皿である。64は瓦器椀であり、高台はみられない。65は龍泉窯系青磁碗である。

第65図66・67は五輪塔空風輪である。空輪と風輪の間に帯をもつ特徴を有する。68は五輪塔火輪である。軒が真反りの形態をもち、下面を膨らませているが、整形が雑であり、バランスも悪い。69は五輪塔水輪である。70は五輪塔地輪であろう。高さが低い特徴をもつが、整形が雑であり、バランスも悪い。この五輪塔部材はいずれも整形・バランスとも悪い。

SP248（第66図）

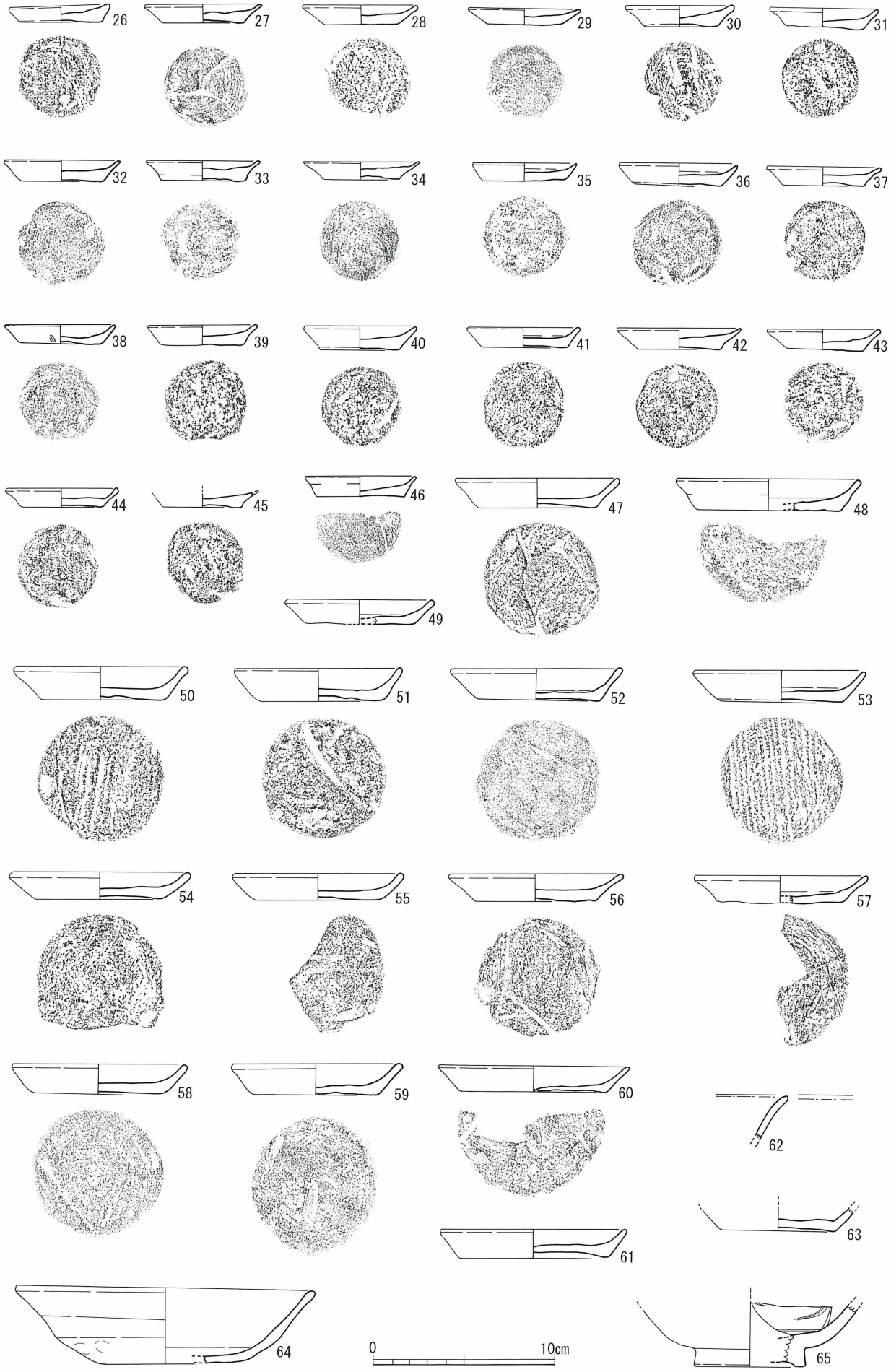
第２平坦面から少数例のピットがみられたが、ST240の北側から１基、ピットが検出され、埋土中から遺物が出土した。

出土遺物は第66図に示した。71は瓦器椀であり、断面三角形の高台を貼り付けている。

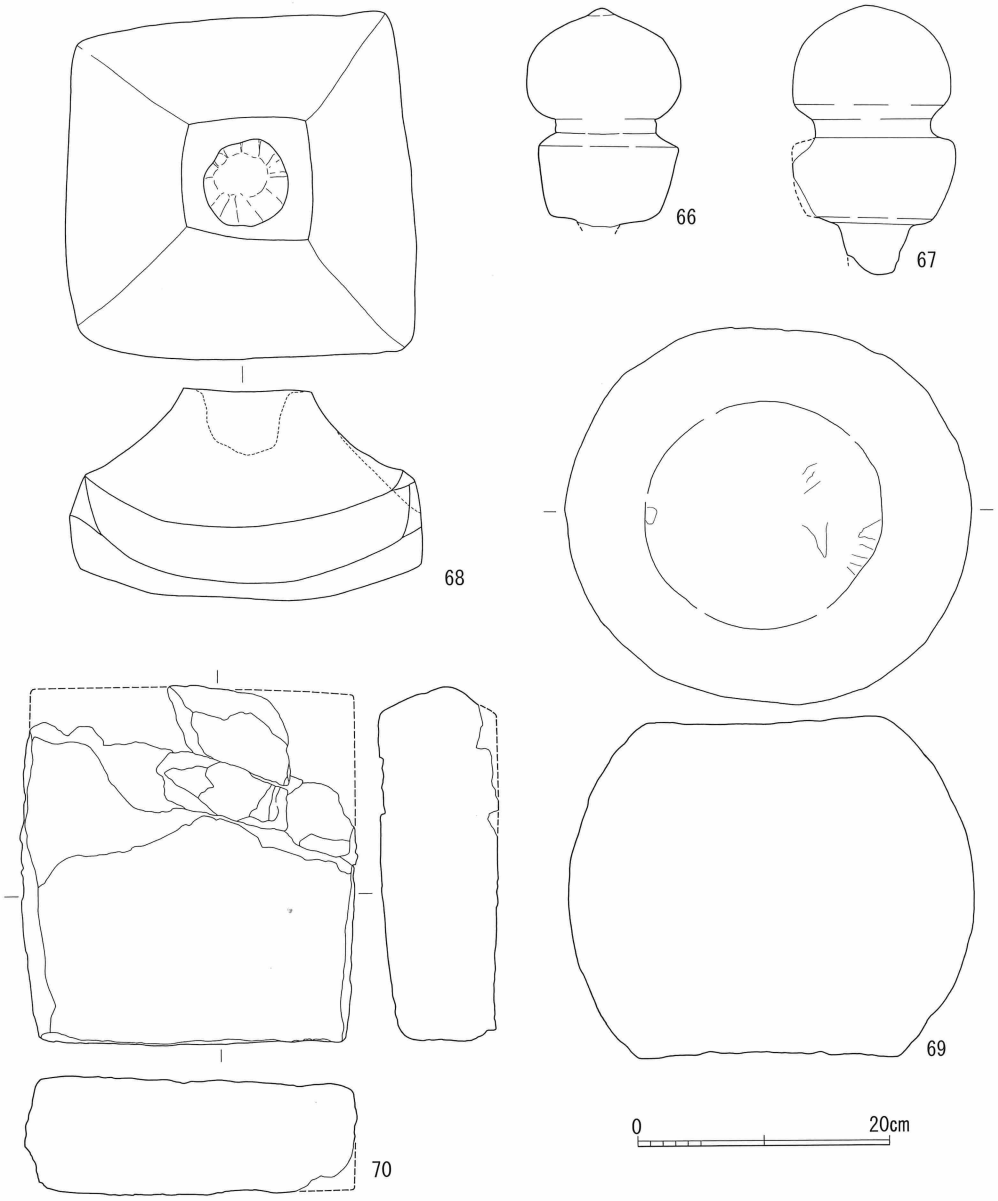


1. Hue	5YR5/6	明赤褐	やや砂質　炭化物少量混入　締まっている　Pit
2. Hue	5YR4/4	にぶい赤褐	やや砂質　1より粘性ややあり　締まっている　Pit
3. Hue	7.5YR7/8	黄橙	粘質　締まり悪い　ベルト土層の5層
4. Hue	10YR5/2	灰黄褐	粘質　締まりなし　根が多く入る
5. Hue	2.5YR5/5	明赤褐	粘質　締まりなし　地山の赤土と類似
6. Hue	5YR4/2	灰褐	粘質　締まり良い　根多量混入
7. Hue	7.5YR3/1	にぶい赤褐	粘質　締まり良い　土器片、炭化物少量混入
8. Hue	5YR5/3	にぶい赤褐	粘質　締まり良い　炭化物微量混入　粘性強い
9. Hue	2.5YR5/8	明赤褐	粘質　地山

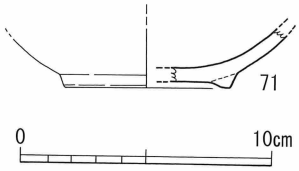
第63図　今成館跡第２平坦面ST240（1/40）



第64図　今成館跡第２平坦面ST240出土遺物①（1/3）



第65図　今成館跡第２平坦面ST240出土遺物②（1/6）



第66図　今成館跡第２平坦面SP248出土遺物（1/3）

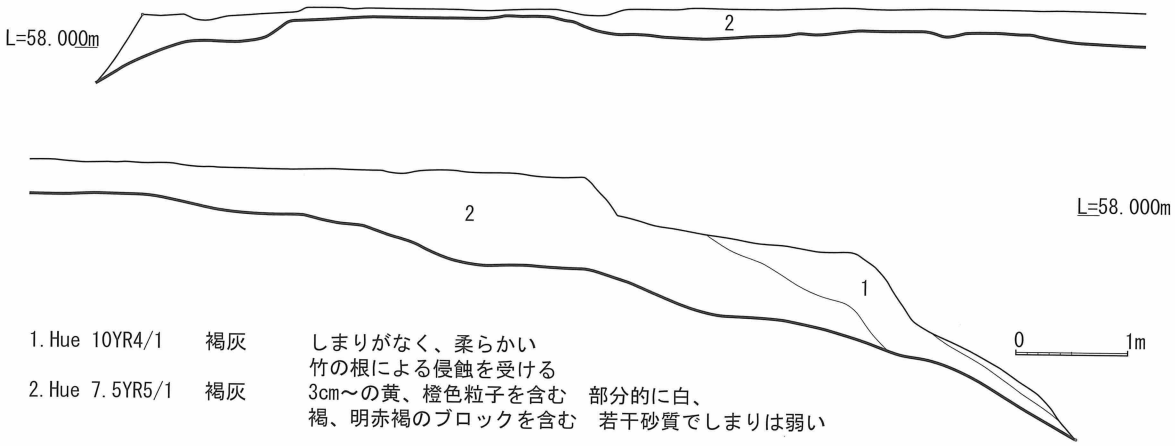
３）第３平坦面（第55図、写真図版５）

調査区最上部に位置する第１平坦面の北側に隣接する、やや南北に長い扇形を呈する約380㎡を測る平坦面である。東に比高差40～60cmを測る第４平坦面が、北に比高差3.4mを測る第７平坦面が、西に比高差2.4mを測る第５平坦面が存在する。

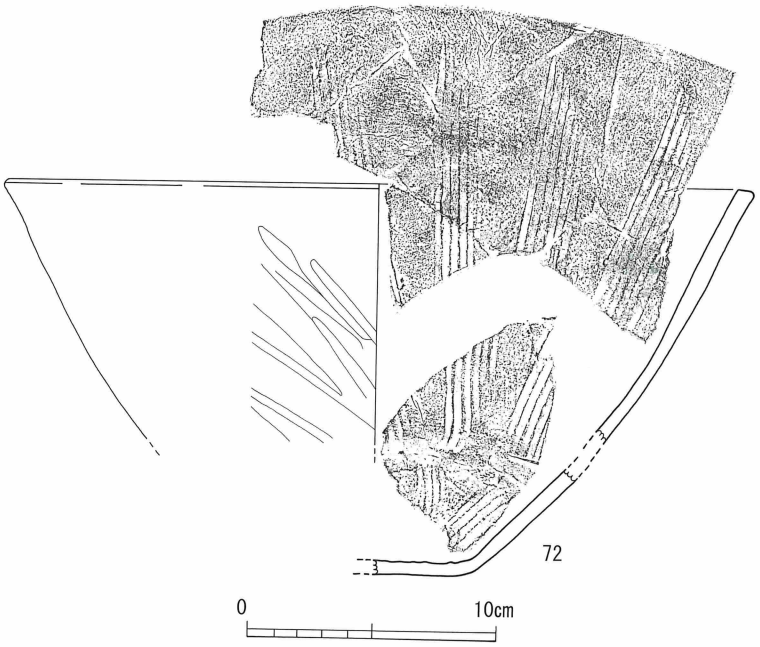
この第３平坦面では、遺構はきわめて少なく、少数の土坑とピット群が検出できたのみである。ピット群には掘立柱建物や柵列としての並びは確認できなかった。また、第67図にみられるようにトレンチの土層から本来の自然地形を造成し、平坦に加工したことがわかるが、その造成時期を明確にする遺物は出土しなかった。

第３平坦面出土遺物（第68図）

この第３平坦面から出土した遺物はきわめて少なく、図化できたものは第68図に示した。72は瓦質擂鉢である。



第67図　今成館跡第３平坦面トレンチ土層断面図（1/70）

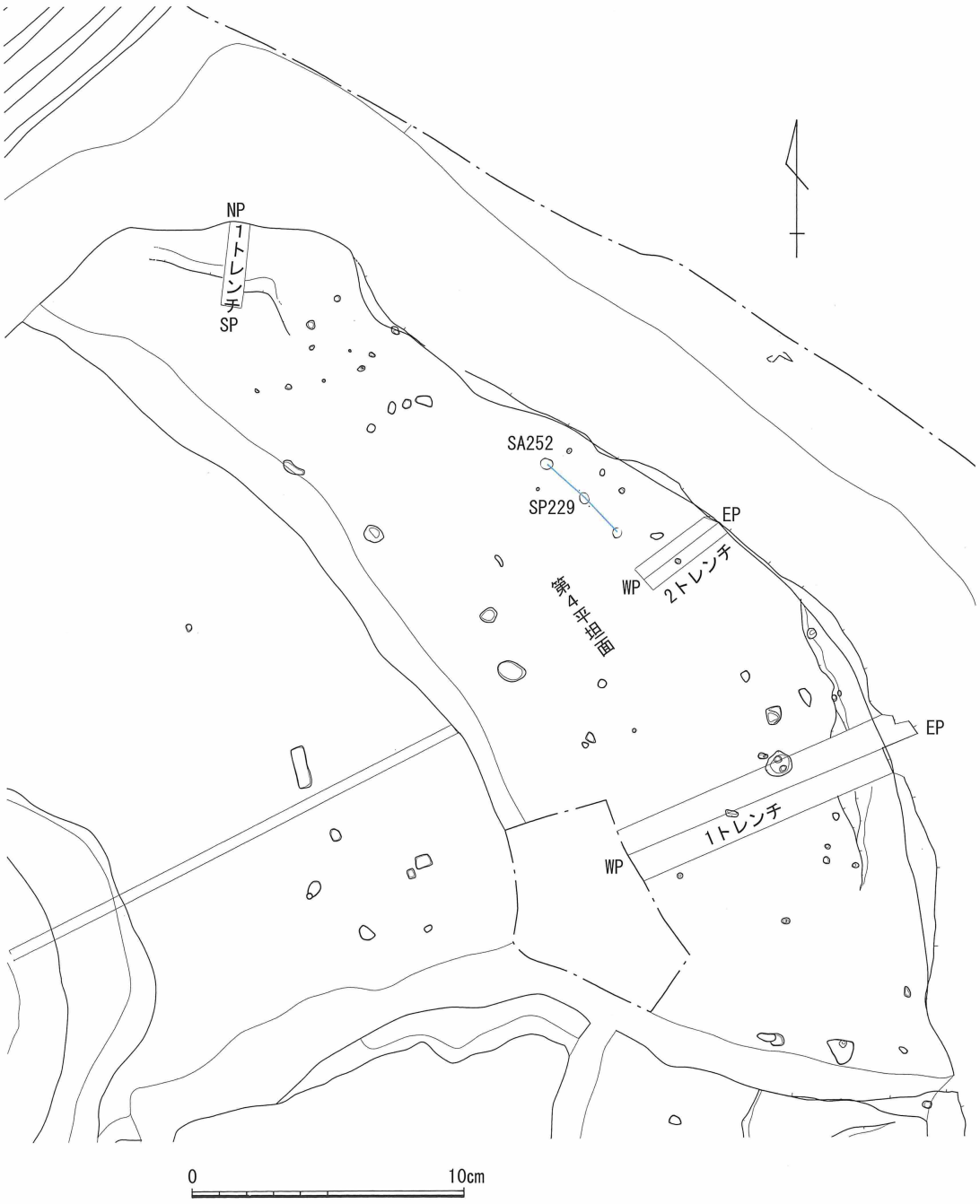


第68図　今成館跡第３平坦面出土遺物（1/3）

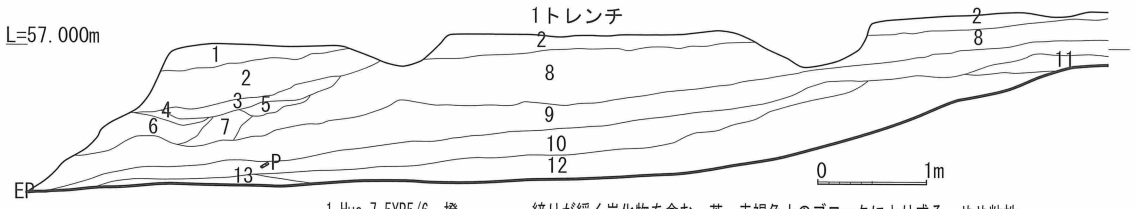
4）第４平坦面（第55・69図、写真図版５）

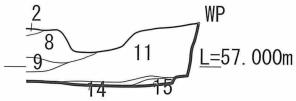
第２平坦面の北側、第３平坦面の北東側に隣接する、やや南北に長い扇形を呈する約600㎡を測る平坦面である。西の第３平坦面とは比高差40～60㎝、南の第２平坦面とは比高差約1.0m、東の第９平坦面とは比高差2.5mをそれぞれ測る。

この第４平坦面では、少数の土坑とピット群が検出できたが、ピット群にはSA252のように柵列としての並びが確認できたものもみられた。また、第70図にみられるように３箇所に設けたトレンチの土層から本来の自然地形を造成し、山側を削り、谷側を埋土して平坦に加工したことがわかるが、その造成時期は出土遺物から14世紀であることが想定できる。

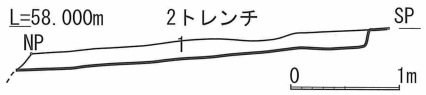


第69図　今成館跡第４平坦面（1/250）

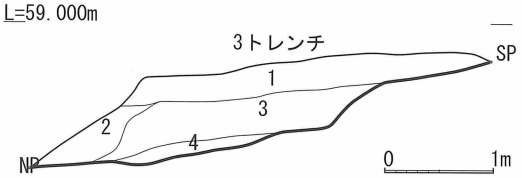




1. Hue 7.5YR5/6　橙　締りが緩く炭化物を含む　茶、赤褐色土のブロックにより成る　やや粘性
2. Hue 7.5YR3/3　暗褐　橙色粒子を含み3mm～5mm程度の炭化物を含む　締まっておりやや粘性
3. Hue 7.5YR4/3　褐　橙、黄色粒子、1mm大の白色粒子を含む　しまっておりやや粘性
4. Hue 5YR4/3　にぶい赤褐　3mm大の炭化物を含み、茶、赤褐色土のブロックから成る　締まりが緩くやや粘性
5. Hue 5YR4/1　褐灰　1mm程度の橙、黄、白色粒子を含み、締まっている　粘性あり
6. Hue 5YR5/6　明赤褐　1mm程度の橙、黄、白色粒子を含み、黄、茶色土ブロックより成る　締まっており粘性あり
7. Hue 7.5YR3/2　黒褐　5mm～1cm大の黄、橙色粒子を含み、締まっている　粘性あり
8. Hue 5YR4/4　にぶい赤褐　茶、赤褐、橙色土のブロックより成る　締まりは緩く、粘性
9. Hue 10YR4/3　にぶい黄褐　1mm大の橙、黄、白色粒子を多く含む　締まりが強く、やや粘性
10. Hue 10YR3/2　暗褐　締まっている　遺物混入　やや砂質
11. Hue 5YR3/2　暗赤褐　締まり無し　黄色土ブロック大多く含む　粘質
12. Hue 5YR6/8　橙　締まりややあり　砂質が強いが粘性ややあり　白色土ブロック少量含む
13. Hue 7.5YR7/2　明褐灰　砂質　地山
14. Hue 5YR7/8　橙　砂質　マンガン粒多く含む
15. Hue 7.5YR7/2　明褐灰　砂質　地山



1. Hue 7.5YR3/3　暗褐　橙色粒子を含み、3mm～5mm大の炭化物含む　締まっておりやや粘性あり



1. Hue 7.5YR3/3　暗褐　橙色粒子、炭化物を含む　締まっておりやや粘性
2. Hue 2.5Y3/2　黒褐　締まりが無く、砂質　竹の根による浸蝕を受けている
3. Hue 7.5YR4/3　褐　3mm～1cm大の橙、白色粒子、炭化物を含む　締まっておりやや粘性
4. Hue 5YR3/2　暗赤褐　締まっており粘性あり　黄、白色粒子、炭化物を含む

第70図　今成館跡第４平坦面トレンチ断面図（1/70）

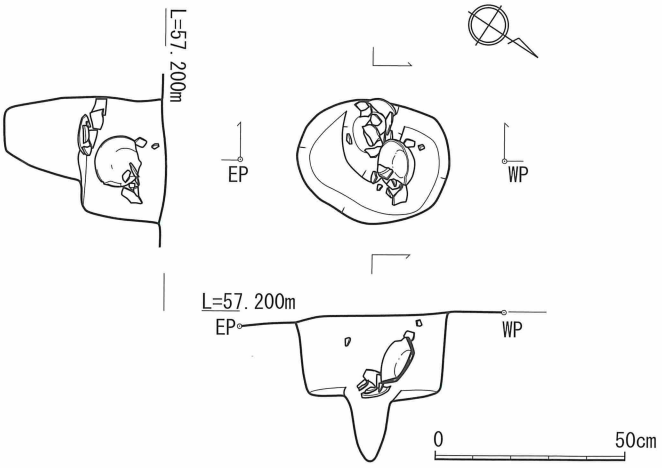
第４平坦面トレンチ土層断面図は第70図に示した。１トレンチ１層は地山ブロックを均したものである。２層は炭化物を含む遺物包含層であり、８層上に営まれた遺構群を覆う。４～８層は、地山土を主体とした整地のための盛土であり、この整地上に遺構が営まれている。９・10層は遺物がきわめて少ないが、12～13世紀の土器が含まれる包含層である。11～15層は地山より若干汚れているが、地山の範疇で捉えてよい堆積層であると考えられる。２トレンチ１層は１トレンチ２層に相当する層である。この位置では盛土整地はほとんどなされていない。３トレンチ１層は１トレンチ２層、２トレンチ１層に相当する層である。３トレンチ２～４層は地山の範疇で捉えてよい堆積層であると考えられる。このことから平坦面を比較的広く形成している第４平坦面南側部分において、盛土整地が行われたことがわかる。

SA252（第69図、写真図版６）

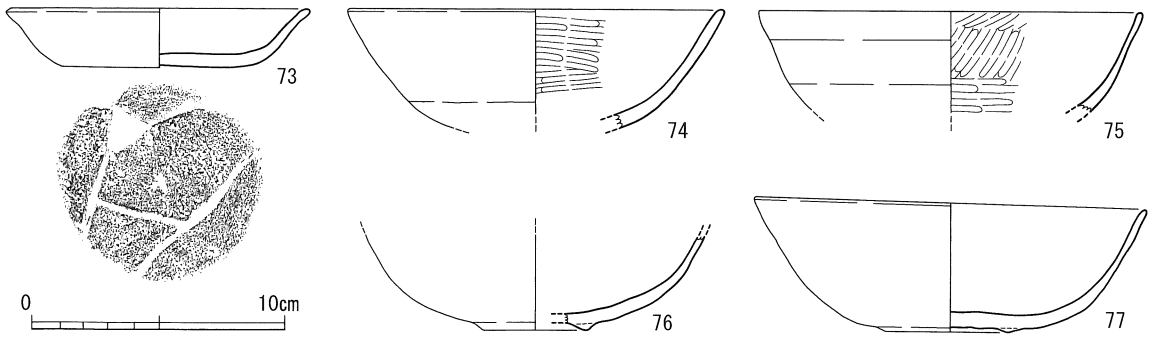
第４平坦面中央付近の谷に近い位置に３基のピットからなる柵列が検出された。径30～40cmを測る各ピットそれぞれの心心間は1.8mを測り、等高線に平行に並んでいる。各ピットとも柱穴痕は一段深く掘られており、中央のピットであるSP229からは比較的まとまった遺物が出土している。

SP229（第71図、写真図版６・７）

柵列であるSA252の中央のピットである。短径30cm、長径40cm、深さ20cmを測り、径15cmを測る柱痕部のみ深さ40cmを呈する。埋土は柱痕部と掘方の土層の違いは確認できず、また遺物も柱痕部・掘方両方にわたり確認できた。



第71図　今成館跡第４平坦面SP229（1/20）

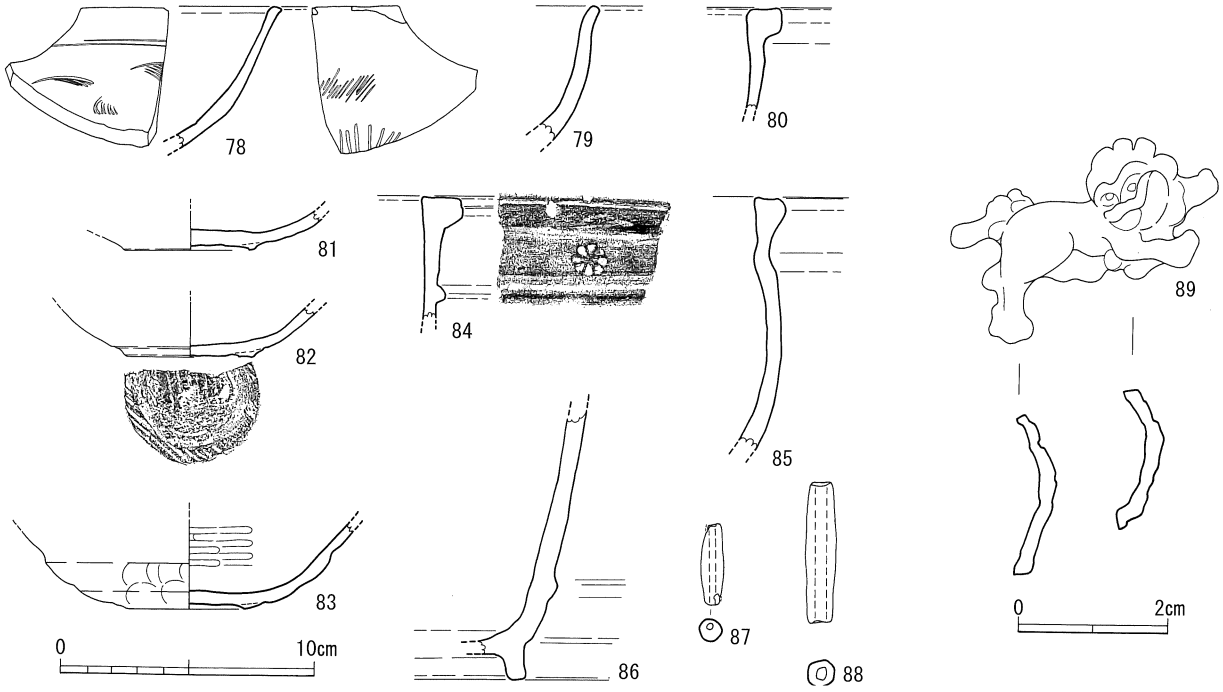


第72図　今成館跡第４平坦面SP229出土遺物（1/3）

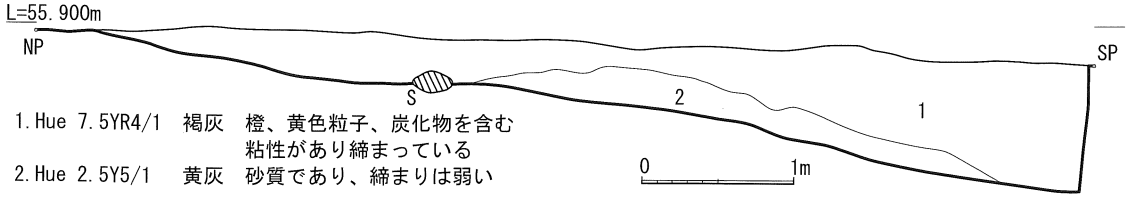
出土遺物は第72図に示した。73は土師質土器坏であり、外底に回転糸切り痕がみられる。74～77は瓦器椀である。76～77には高台が残るが、いずれも高さが低い断面三角形のものを貼り付けている。

第４平坦面出土遺物（第73図）

出土遺物は第73図に示した。78は同安窯系青磁碗であり、内面に櫛描文様がみえる。79は龍泉窯系青磁碗である。80・84・85・86は瓦質土器火鉢である。81・82・83は瓦器椀である。いずれの高台も高さが低い断面三角形のものを雑に貼り付けている。82には板状圧痕がみえる。87・88は土錘である。89は獅子をあしらった銅製目貫金具である。



第73図　今成館跡第４平坦面出土遺物（1/3，1/1）



1. Hue 7.5YR4/1　褐灰　橙、黄色粒子、炭化物を含む
　　粘性があり締まっている
2. Hue 2.5Y5/1　黄灰　砂質であり、締まりは弱い

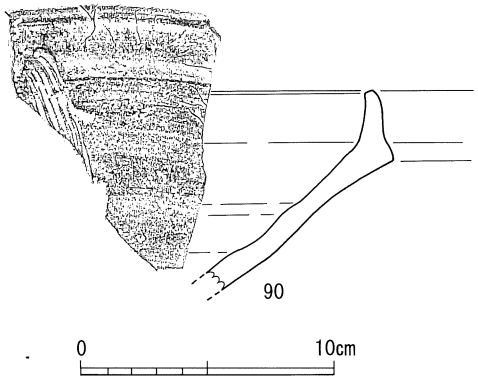
第74図　今成館跡第５平坦面土層断面図（1/50）

5）第５平坦面（第55図、写真図版５）

第１平坦面と第３平坦面の西側に細長く取り付く約300㎡を測る平坦面である。

この第５平坦面では、少数の土坑とピット群が検出できたが、ピット群には掘立柱建物や柵列としての並びは確認できなかった。また、第74図にみられるように、トレンチの土層から本来の自然地形を造成し、平坦に加工したことがわかるが、その造成時期を明確にする遺物は出土しなかった。

第５平坦面から遺物はほとんど出土していないが、図化できるものを第75図に示した。90は備前焼擂鉢である。



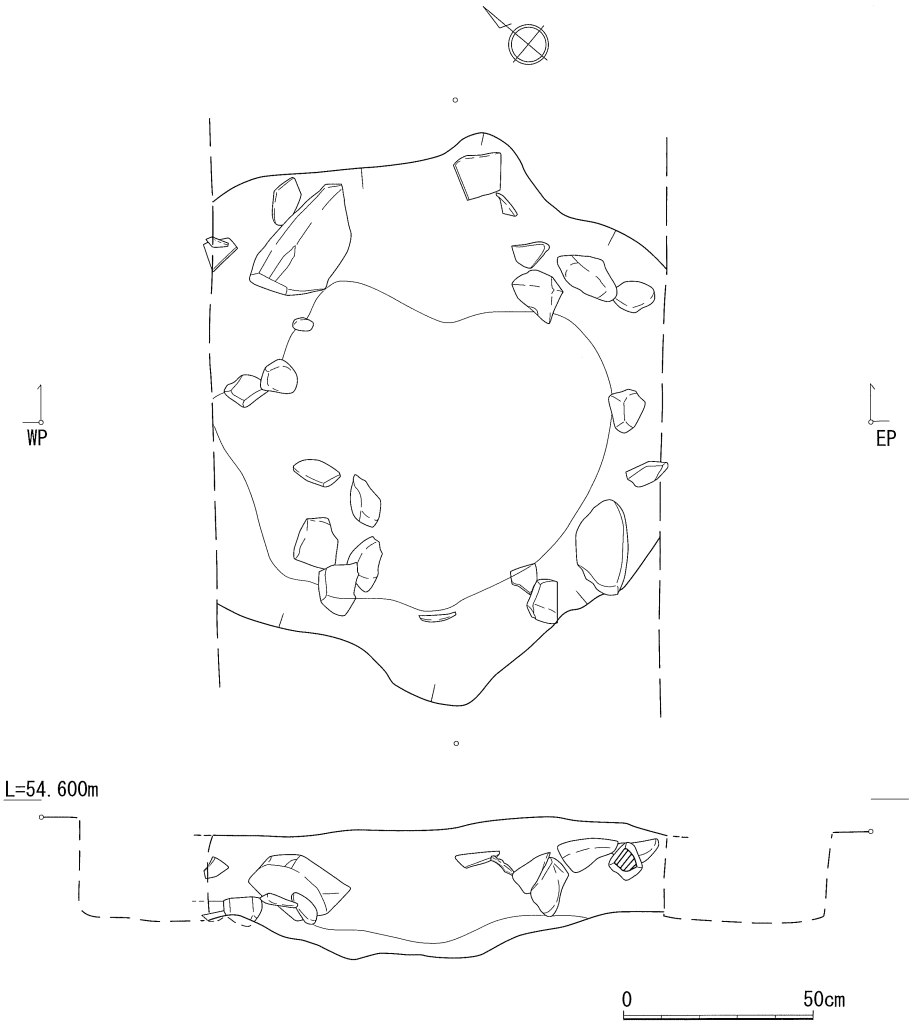
第75図　今成館跡第５平坦面出土遺物（1/3）

6）第６平坦面（第55図）

第５平坦面西に小さく取り付く南北に長い約50㎡を測る平坦面である。第５平坦面の北側が狭くなっている部分を補う位置関係にあり、北に細くなり第７平坦面にとりつく。第５平坦面とは比高差80cmを測り、東の丘陵裾とは３ｍの比高差をもつ。なお、この平坦面からはほとんど遺物が出土しておらず、遺構も確認されていない。

7）第７平坦面（第55図）

第３・４平坦面の北西に位置する最も広い平坦面である。調査区は450㎡の広さをもつが、この平坦面は北側の用地外に延びる。第７平坦面の北西にはさらに１ｍ低い第８平坦面があるが、この第７平坦面と第８平坦面は



第76図　今成館跡第７平坦面SK107（1/20）

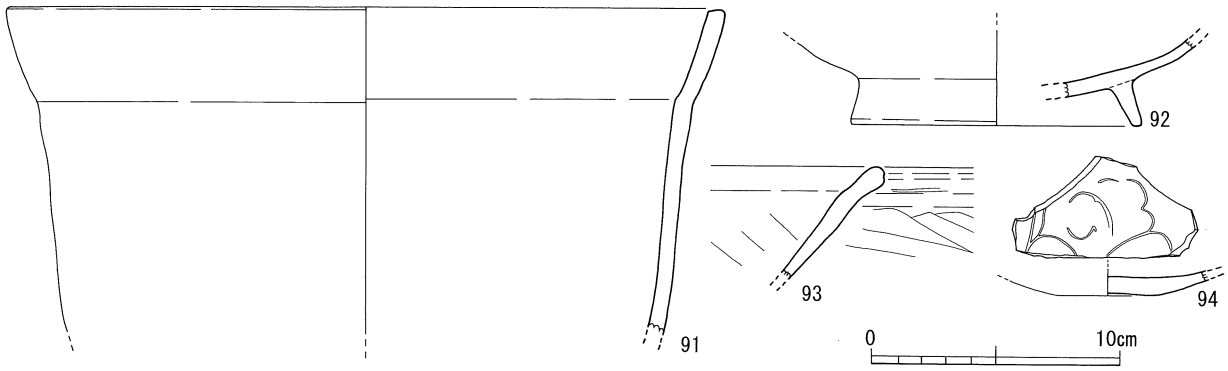
両側に聳える丘陵に挟まれた鞍部に造成された平坦面である。

第７平坦面は地山を削平して造成したことがわかるが、一面に現代の耕作痕である素掘り溝が検出できた。土坑やピット群が少数確認できたが、すべての遺構が、この素掘り溝に切られていた。

SK107（第76図、写真図版６）

第７平坦面の南西側において検出された径1.2m、深さ0.3cmを測る不定型土坑である。北西側と南東側を素掘り溝により切られているため確認はできない。地山の土質から本来は１m以上の深さをもつ土坑であったことが考えられる。埋土中に土器とともに角礫（山石）が含まれていた。

出土遺物は第77図に示した。91・93は瓦質土器鍋、92は瓦質土器鉢である。94は白磁である。内底に片切彫りの文様がみられる。

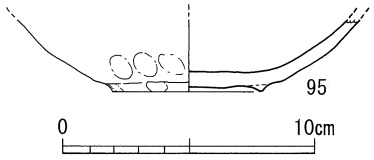


第77図　今成館跡第７平坦面SK107出土遺物（1/3）

SK136（第55図）

第７平坦面の北西端において検出された長径2.0m、短径1.5m、深さ６cmを測る浅い楕円形土坑である。中央を大きく素掘り溝により切られているため確認はできない。

少量の出土遺物のうち図化できるものを第78図に示した。95は瓦器椀であり、断面三角形の低い高台を貼り付けている。

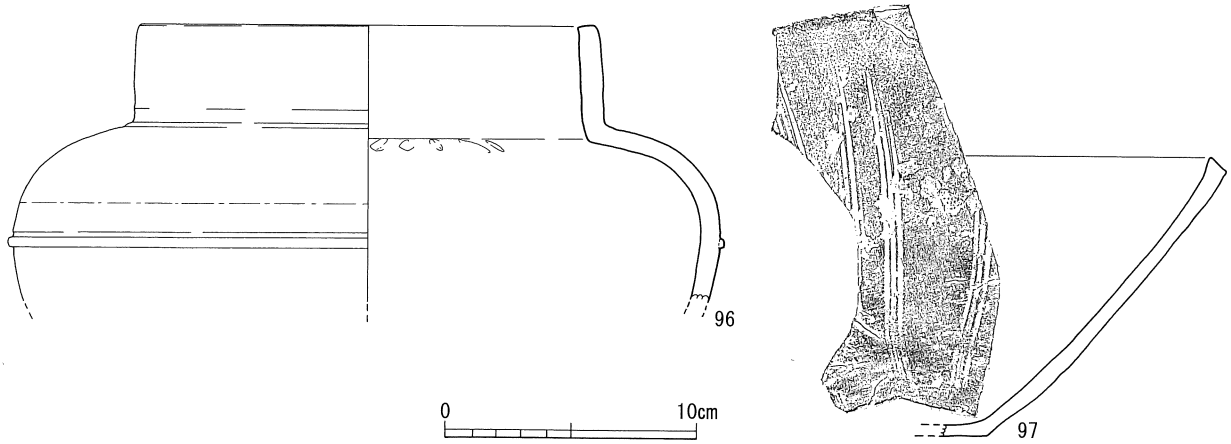


第78図　今成館跡第７平坦面SK136出土遺物（1/3）

SK149（第55図）

第７平坦面の中央北端において検出された径60cm、深さ15cmを測る楕円形土坑である。北西側を大きく素掘り溝により切られているため確認はできない。

少量の出土遺物のうち図化できるものを第79図に示した。96は瓦質土器風炉であろうか。２は瓦質土器擂鉢である。



第79図　今成館跡第７平坦面SK149出土遺物（1/3）

第７平坦面出土遺物（第80図）

出土遺物のうち図化できるものを第80図に示した。98・99は土師質土器小皿である。100は瓦質土器鉢であり、内外面に横方向のヘラミガキを施している。101は瓦質土器鍋、102は瓦質土器火鉢である。

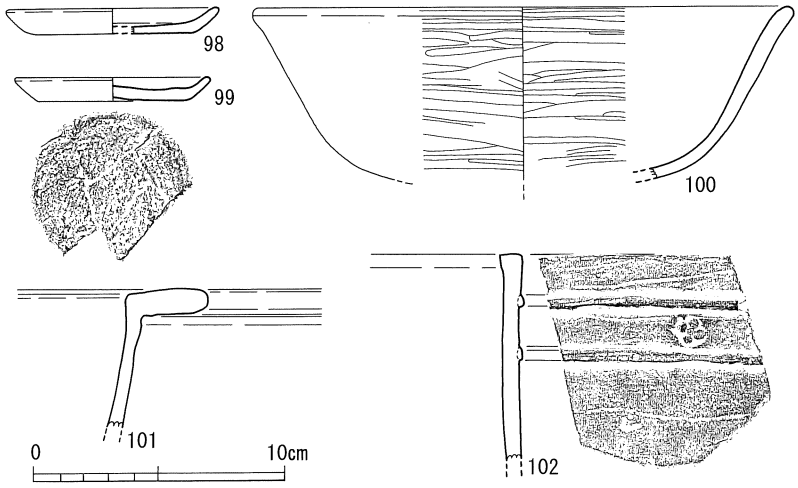
８）第８平坦面（第55図）

第７平坦面の北西に位置する平坦面である。調査区は約400㎡の広さをもつが、この平坦面は北側の用地外に延びる。尾根上の平坦面としては最も低位に位置する。この北西側には自然丘陵がみられ、造成された平坦地の端に位置する。この第８平坦地は包含層の厚い堆積がみられ、第７平坦面が深い削平を受けていることとは異なる。

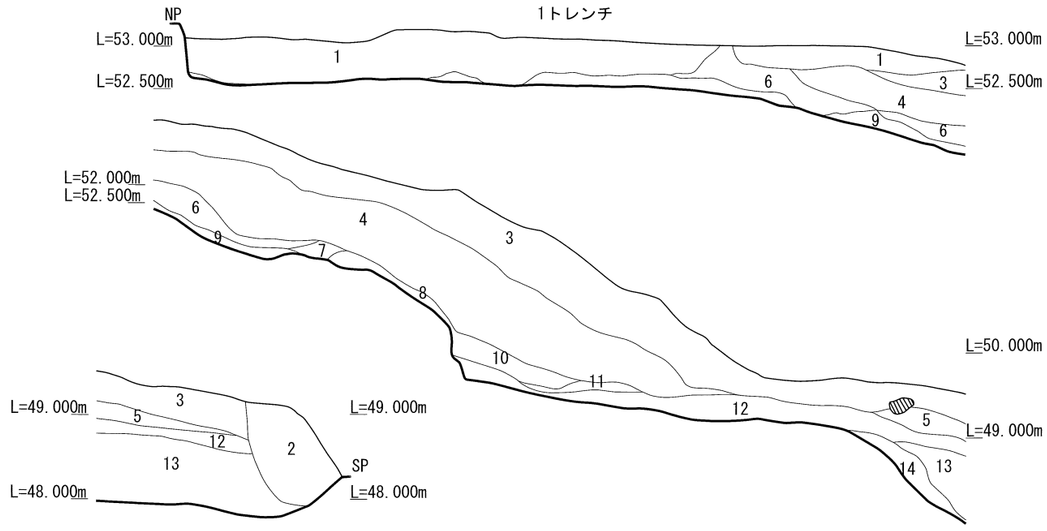
この箇所に尾根に垂直に１・２トレンチを、また、尾根に平行して３トレンチを設定した。

１トレンチ１層は現代の撹乱土、３層は表土である。６・10層は旧表土であり、近世の陶磁器が混入している。その上層である４層は遺物包含層であるが、近世以降の造成に伴うものであり、本来の堆積ではない。５・12・13・14層は、本来、同一層であろうが、地山上の包含層である。旧表土と考えられる土層が確認できないうえ、この地点の地山は赤土層がみられないため、かなり削平を受け、その上に包含層が堆積していることがわかる。

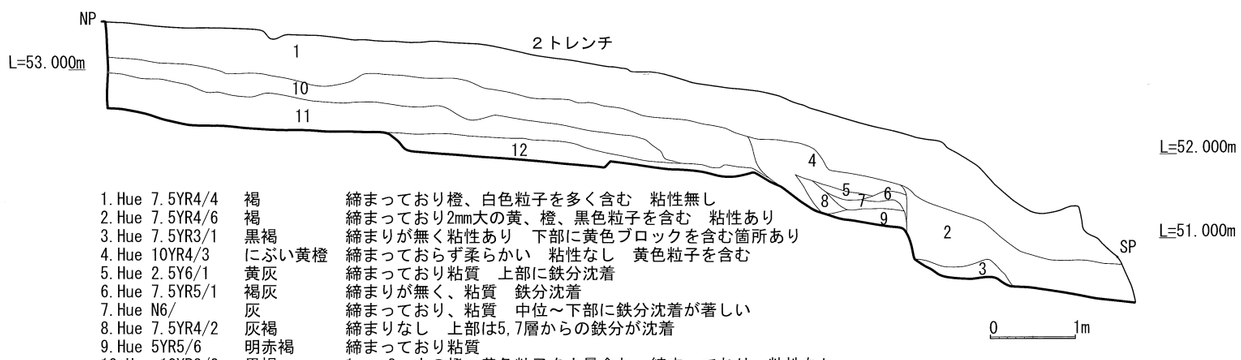
２トレンチ１・２層は中世の遺物が出土する包含層であるが、１トレンチ４層に相当し、近世以降の造成に伴うものであり、本来の堆積ではないと考えられる。10層は中世の遺構群を覆う遺物包含層である。11層は中世の遺構群のベース面になっている層であり、この上に13世紀の遺構群が検出された。12層は縄文時代早～前期の遺物包含層である。



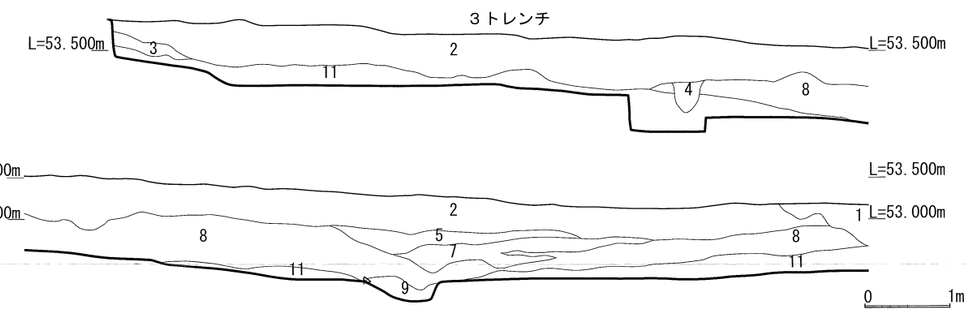
第80図　今成館跡第７平坦面出土遺物（1/3）

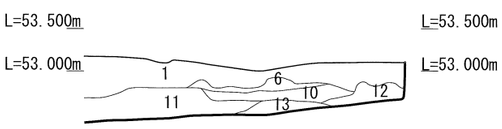


1.Hue 5YR4/1	褐灰	撹乱　転圧されており、まばらに地山の土が混じる
2.Hue 10YR4/4	褐	締まりがなく柔らかい　粘性無し　竹の根による浸蝕が著しい
3.Hue 7.5YR5/2	灰褐	締まり無し　粘性無し　竹の根による浸蝕が著しい
4.Hue 7.5YR3/1	黒褐	締まりが無く、1mm～5mm大の橙、黄、白色粒子を含む
5.Hue 5YR3/1	黒褐	締まり無し　粘性無し　樹根による浸蝕を受ける
6.Hue 10YR3/1	黒褐	土質、色調含め4層とほぼ同じ　若干粘性が強く、締まっている
7.Hue 2.5Y7/4	浅黄	地山　砂質　白、橙色粒子を含む　締まっている
8.Hue 2.5Y6/4	にぶい黄	地山　砂質　締まっている　3mm～1cm大の白、橙色粒子を含む
9.Hue 2.5Y6/2	灰黄	地山　白、黒色粒子を含み、締まっている　砂質
10.Hue 10YR5/2	灰黄褐	締まりが無く粘性なし　少量の黄、橙色粒子を含む
11.Hue 10YR7/2	にぶい黄橙	締まり、粘性共に無し
12.Hue 10YR5/3	にぶい黄橙	締まっており、粘性無し　1mm～3mm大の橙色粒子、炭化物を含む
13.Hue 7.5YR4/3	褐	締まっており、粘性　炭化物を多く含む
14.Hue 10YR6/2	灰黄橙	締まっており、粘性　炭化物を多く含む



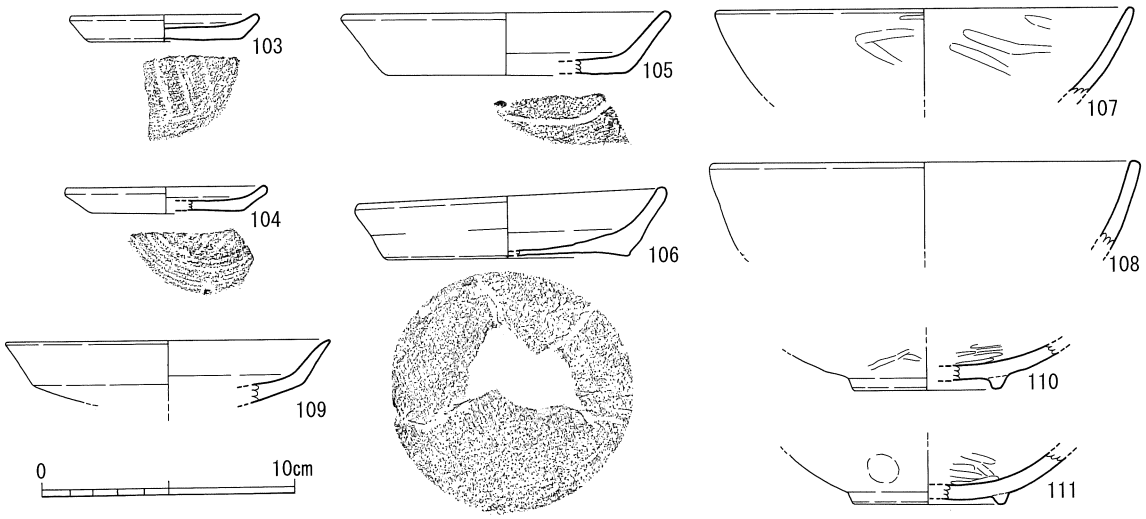
1.Hue 7.5YR4/4	褐	締まっており橙、白色粒子を多く含む　粘性無し
2.Hue 7.5YR4/6	褐	締まっており2mm大の黄、橙、黒色粒子を含む　粘性あり
3.Hue 7.5YR3/1	黒褐	締まりが無く粘性あり　下部に黄色ブロックを含む箇所あり
4.Hue 10YR4/3	にぶい黄橙	締まっておらず柔らかい　粘性なし　黄色粒子を含む
5.Hue 2.5Y6/1	黄灰	締まっており粘質　上部に鉄分沈着
6.Hue 7.5YR5/1	褐灰	締まりが無く、粘質　鉄分沈着
7.Hue N6/	灰	締まっており、粘質　中位～下部に鉄分沈着が著しい
8.Hue 7.5YR4/2	灰褐	締まりなし　上部は5,7層からの鉄分が沈着
9.Hue 5YR5/6	明赤褐	締まっており粘質
10.Hue 10YR3/2	黒褐	1mm～3mm大の橙、黄色粒子を少量含む　締まっており、粘性なし
11.Hue 7.5YR3/2	黒褐	締まっており、やや粘性あり　～3mm大の炭化物をまばらに含む
12.Hue 7.5YR2/2	黒褐	締まっており、粘性なし　斑に上部層と黒色の土が混ざっている





1.Hue 2.5Y5/1	黄灰	暗褐、茶、橙、黄白等のブロックより成る　固く締まっている
2.Hue 7.5YR4/6	褐	締まっており橙、白色粒子を多く含む
3.Hue 7.5YR3/1	黒褐	白、暗褐色のブロックを含む　粘性で固く締まっている　地山
4.Hue 10YR4/1	褐灰	1mm～3mm大の橙、黄色粒子を含む　しまっておらず粘性
5.Hue 7.5YR4/1	褐灰	3mm～1cm大の白、黄、橙色粒子、炭化物を含む　締まっており粘性
6.Hue 7.5YR6/4	にぶい黄橙	3cm～の白色ブロックを多く含み、一部鉄分沈着が見られる　粘性があり、固く締まる
7.Hue 2.5Y7/4	浅黄	1mm大の白色ブロックを含む　砂質
8.Hue 10YR3/2	黒褐	1mm～3mm大の橙、黄色粒子を少量含む　締まっている
9.Hue 2.5Y3/1	黒褐	炭化物を多く含み、1mm～の黄、橙色粒子を含む　粘性があり、締まっている
10.Hue 10YR5/6	黄褐	部分的に3mm大の白色土ブロックを含む　白、橙、黄色粒子を含む　やや粘質で締まっている
11.Hue 7.5YR4/3	褐	1mm大の白、黄、橙色粒子を含み、部分的に白色土ブロックを含む　やや粘性で締まっている　地山
12.Hue 5Y7/2	灰白	砂質であり締まっている　部分的に褐色ブロックを含む
13.Hue 10YR6/6	明黄褐	部分的に1cm～3cm大の暗褐土ブロックが混じる　やや砂質で締まっている

第81図　今成館跡第８平坦面トレンチ土層断面図（1/70）



第82図　今成館跡第８平坦面SX243出土遺物（1/3）

３トレンチは尾根に平行して設定したトレンチである。１層は現代の撹乱土、２層は中世の遺物が出土する包含層であるが、１トレンチ４層、２トレンチ１・２層に相当し、近世以降の造成に伴うものであり、本来の堆積ではないと考えられる。３・11層は地山であり、この上に堆積している５・７・８・９層はこの上にみられた自然地形の落ち込み（SX243）の埋土である。

SX243（第55図）

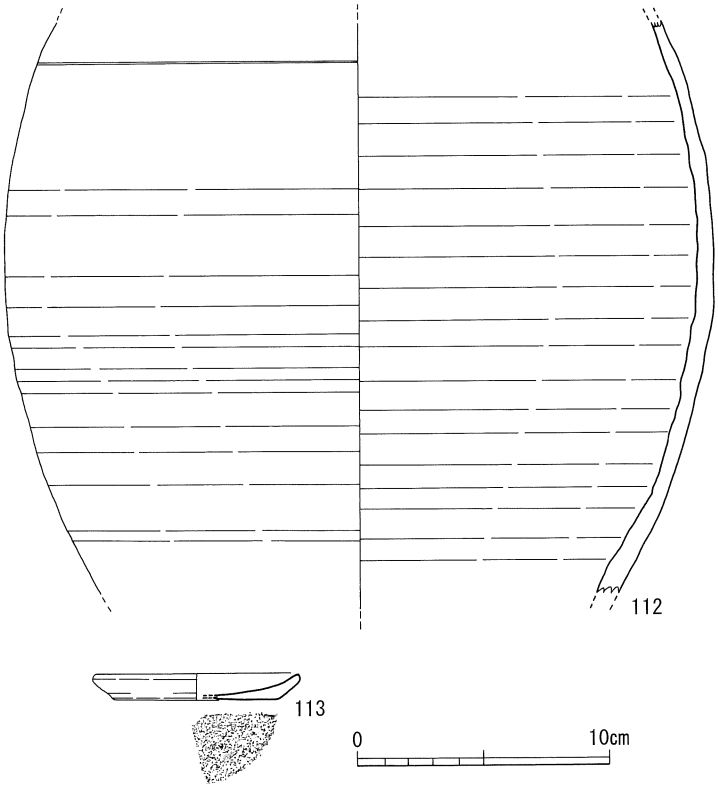
第７・８平坦面の両側丘陵の挟まれた鞍部平坦面の最も低い位置にある谷部の落ち込みである。３トレンチ５・７・８・９層がその埋土であり、出土遺物は、その谷部の落ち込みに流れ込んだ遺物であるが、２次堆積ではないと思える。

出土遺物は第82図に示した。103・104は土師質土器小皿である。両方とも回転糸切り痕の上に板状圧痕がみえる。105・106は土師質土器坏である。105には回転糸切り痕の上に板状圧痕がみえる。107・108・110・111は瓦器椀である。断面台形～三角形の高台を貼り付けている。109は龍泉窯系青磁皿であるが、腰部で折れる特徴をもつ。

SK244（第55図、写真図版６・７）

第８平坦面の鞍部平坦面自然地形の落ち込み（SX243）西側において検出された径100cm、深さ10cmの円形土坑である。

埋土中から遺物が出土し、図化できるものを第83図に示した。112は陶器瓶の胴部片である。内面は波打ち、施釉はみられない。外面には薄い釉が施されている。113は土師質土器皿である。

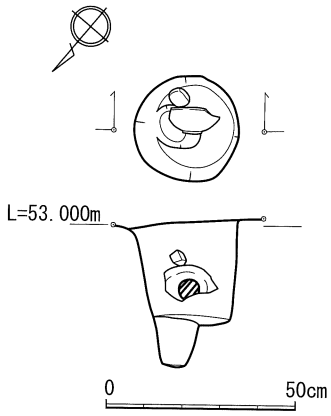


第83図　今成館跡第８平坦面SK244出土遺物（1/3）

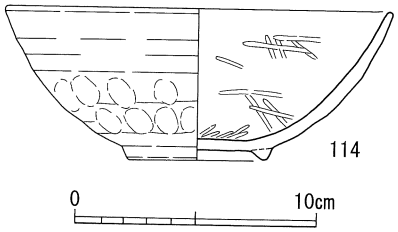
SP241（第84図、写真図版７）

第８平坦面の鞍部平坦面自然地形の落ち込み（SX243）西側において検出された径30cm、深さ40cmのピットである。北東方向に200cm離れてピットが、また、南東方向にSK244が存在するため、北側に掘立柱建物あるいは柵列の並びが存在する可能性が残る。

埋土中から遺物が出土し、図化できるものを第85図に示した。114は瓦器椀である。内面に磨きが施され、外面の腰部に指おさえが残り、断面三角形の高台が貼り付けられている。



第84図　今成館跡第８平坦面SP241（1/20）

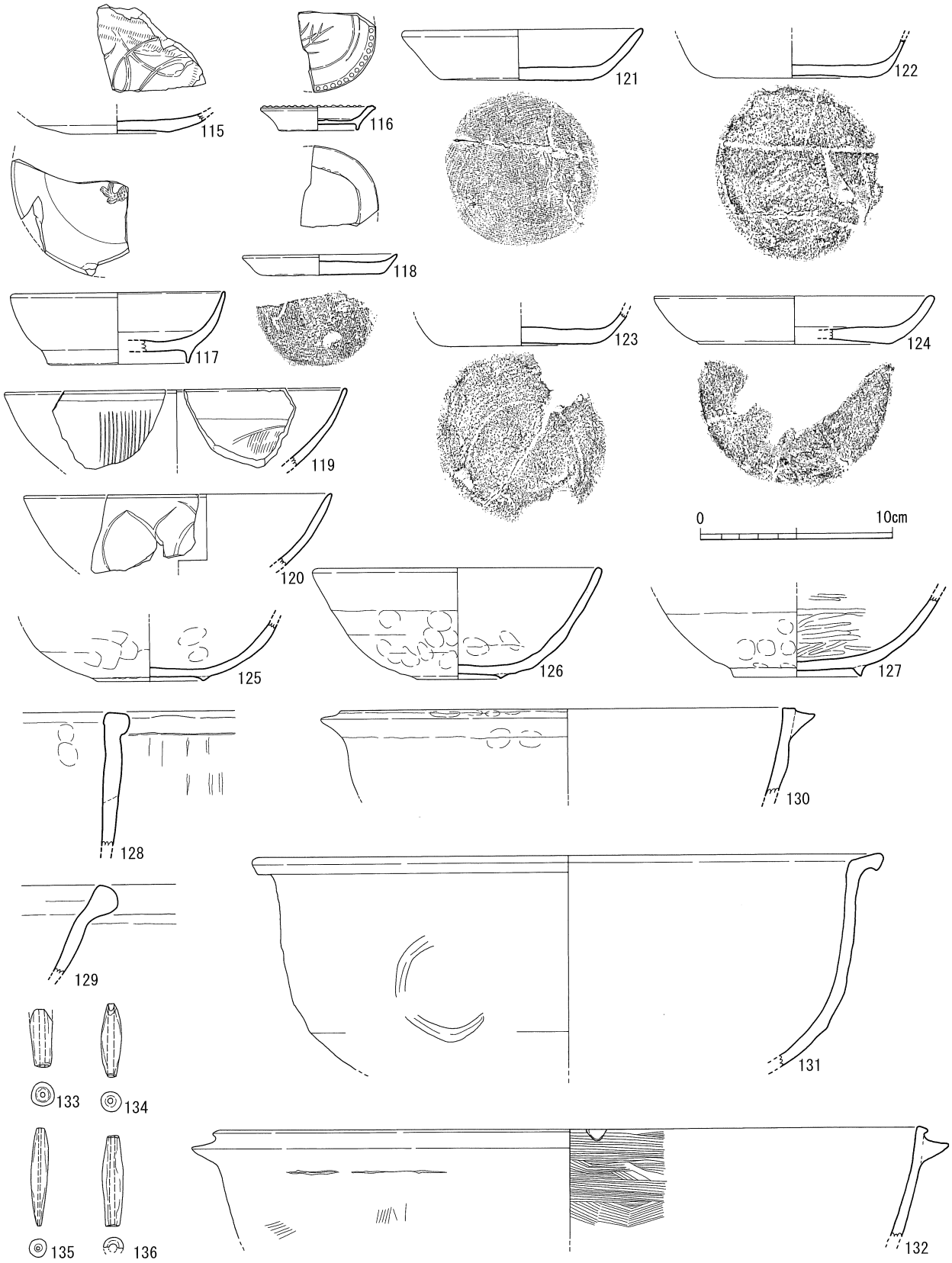


第85図　今成館跡第８平坦面SP241出土遺物（1/3）

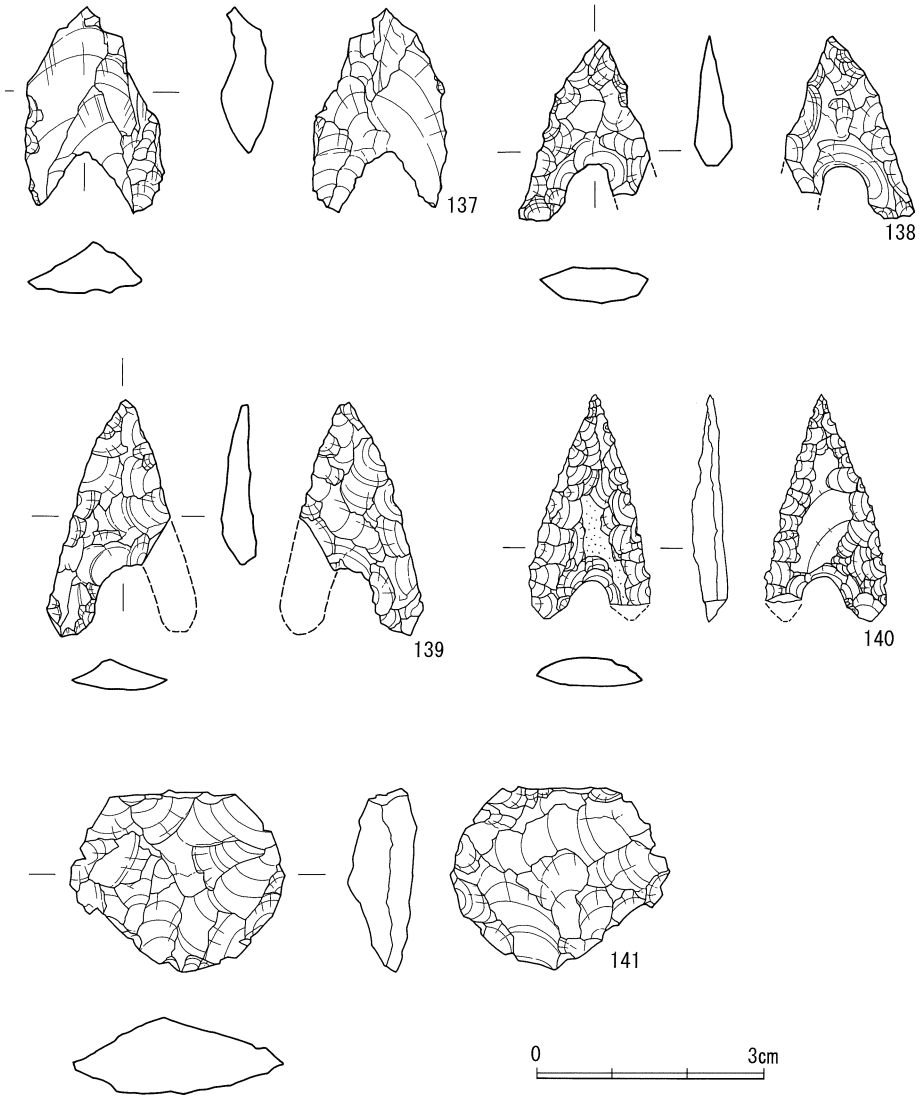
第８平坦面出土遺物（第86・87図、写真図版７）

出土遺物のうち図化できるものを第86・87図に示した。第86図115は同安窯青磁皿である。116は無釉磁器皿であり、近世以降のものであろう。117は龍泉窯系青磁皿であり、内底に双魚文がみえる。118は土師質土器小皿であり、外底に回転糸切り後に板状圧痕がみえる。119は同安窯青磁皿であり、内外面に櫛描文様がみえる。120は龍泉窯系青磁碗であり、外面に鎬蓮弁がみえる。121・122・123・124は土師質土器坏であり、外底に回転糸切り後に板状圧痕がみえる。125・126・127は瓦器椀である。127は断面三角形でしっかりした高台を貼り付けているが、125・126は低い高台を貼り付けている。128は瓦質土器火鉢である。129・130・131・132は土師質土器鍋である。133・134・135・136は土錘である。

第87図137・138・139・140は石鏃、141は掻器である。



第86図　今成館跡第８平坦面出土遺物①（1/3）



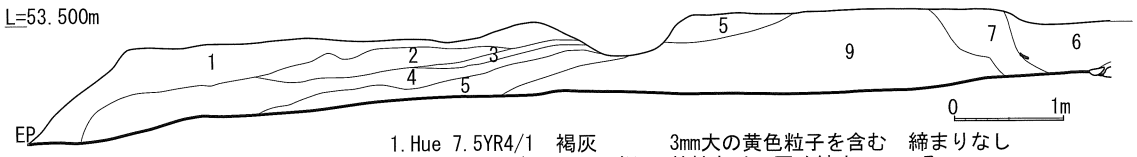
第87図　今成館跡第８平坦面出土遺物②（1/1）

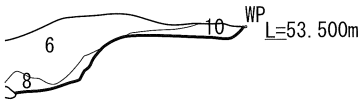
９）第９平坦面（第55図）

第２・４平坦面の北東に位置する平坦面である。形状は南北に長いが、この平坦面は北側の用地外に延びる。第２・４平坦面とは比高差2.5mの比高差を測り、第７平坦面とともに同じレベルの位置にとりつく。

第88図に示したように、第９平坦面にトレンチを入れて土層堆積を確認した。地山上に幾層もの土層堆積が確認できたが、出土遺物がほとんど確認できず、各層の時期は明言できない。また、遺構も皆無である。

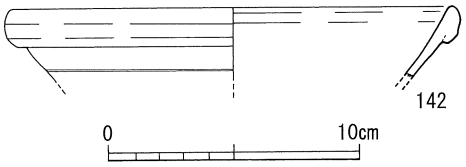
出土遺物もきわめて少なく、図化できたものは第89図に示した。142は玉縁をもつ白磁碗である。



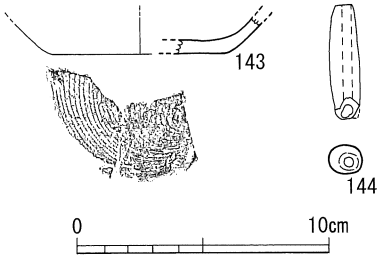


1. Hue 7.5YR4/1　褐灰　3mm大の黄色粒子を含む　締まりなし
2. Hue 7.5YR6/3　にぶい褐　粘性あり、固く締まっている
3. Hue 5YR8/4　淡橙　明橙、褐、黄色ブロックから成る　やや砂質で締まり無し
4. Hue 10YR5/1　褐灰　黄、橙、灰色のブロックから成る　やや砂質で締まりなし
5. Hue 7.5YR4/2　灰褐　1mm～3mm大の橙色粒子を含む　やや粘性で締まっている
6. Hue 7.5YR3/1　黒褐　5mm～1cm大の橙、黄色粒子を含む　粘性で締まっている上部は竹の根により浸蝕されている
7. Hue 5YR4/2　灰褐　5mm～1cm大の橙、黄色粒子、1mm～3mm大の白、黄色粒子、炭化物を含む　粘質で締まっている
8. Hue 5YR6/4　にぶい橙　橙色、褐色のブロックから成る　粘性があり、締まっている
9. Hue 10YR3/2　黒褐　1cm大の黄色ブロックを含む　粘性があり締まっている
10. Hue 2.5YR7/8　橙　締まっており粘性が強い　比較的均質である

第88図　今成館跡第９平坦面トレンチ土層断面図（1/70）



第89図　今成館跡第９平坦面出土遺物（1/3）



第90図　今成館跡第14平坦面出土遺物（1/3）

10）第14平坦面（第55図）

第８・13平坦面の南に位置する最下段の平坦面であり、形状は東西に長い。第８平坦面とは比高差４ｍ、第13平坦面とは比高差2.5mを測る。遺構は全く確認できず、平坦地のみの造成であった。

出土遺物もきわめて少なく、図化できたものは第90図に示した。143は土師質土器坏である。外底に回転糸切り痕がみえる。144は土錘である。

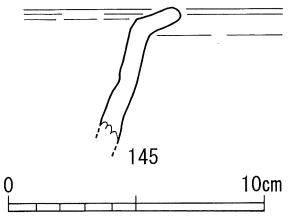
1. Hue 7.5YR8/8　黄橙　締まりが無く柔らかい　粘性なし　竹の根による浸蝕を受けている
2. Hue 7.5YR4/2　灰褐　締まっており、やや粘質　黄、橙、白色粒子と炭化物を含む　上部は竹の根の浸蝕が著しい
3. Hue 10YR3/1　黒褐　締まっており、やや粘質　もろく、橙色粒子を含む

第91図　今成館跡第15平坦面トレンチ断面図（1/50）

11）第15平坦面（第55・91図、写真図版７）

調査区の東側に位置し、上下を第12平坦面と第20平坦面に挟まれた南北に長い平坦面である。東側に位置する第20平坦面との間には南北に土類状の高まりがみられ、土層を把握するためにトレンチを入れた。その堆積状態の土層図は第91図に示した。幅1.5m、高さ70cm程度を測る高まりであったが、版築をはじめ堅固に構築した様子は確認できなかった。また、出土遺物も全く確認できず、その時期も明確にできなかった。

第15平坦面の出土遺物はきわめて少なく、図化できたものは第92図に示した。145は土師質土器鍋である。



第92図　今成館跡第15平坦面出土遺物（1/3）

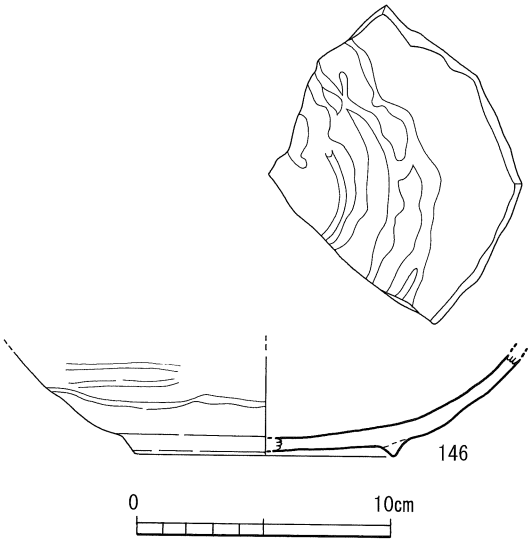
12）第16平坦面（第55図）

第14平坦面と並び、第７・８平坦面の南に位置する最下段の平坦面であり、形状は東西に長い。第８平坦面とは比高差４ｍ、第７平坦面とは比高差4.5ｍを測る。遺構は全く確認できず、平坦地のみの造成であった。

第16平坦面の出土遺物はきわめて少なく、図化できたものは第93図に示した。146は瓦器椀である。

13）第17平坦面（第55図）

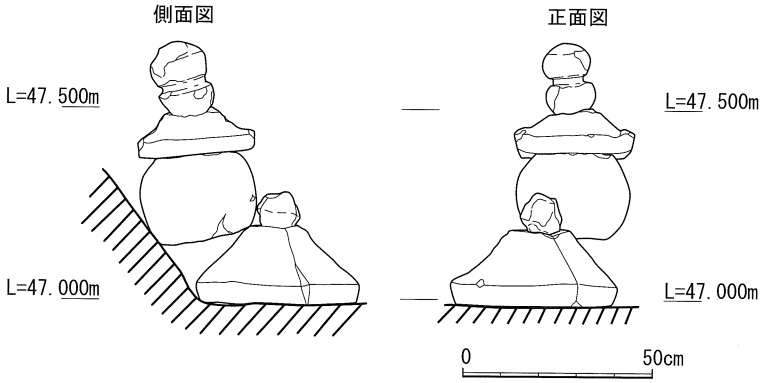
第16平坦面と並び、第７・８平坦面の南に位置する最下段の平坦面であり、形状は東西に長い。この平坦面には第94図に示したように、中世の五輪塔が組まれていた。空風輪と水輪が１点、火輪が２点確認できたが、本来の組合せかどうかは疑わしい。



第93図　今成館跡第16平坦面出土遺物（1/3）

第95図は石塔の実測図である。147は五輪塔空風輪である。空輪と水輪の間に帯をもつ形態的特徴をもつ。148・149は五輪塔火輪である。148は薄い露盤をもち、軒端を強く反る形態的特徴をもつ。150は五輪塔水輪である。

出土遺物は第96図に示した。151は土師質土器小皿であり、外底に回転糸切り後に板状圧痕がみえる。152・153は瓦器椀である。154・155は土師質土器鍋である。156は東幡系須恵器こね鉢である。



第94図　今成館跡第17平坦面東斜面石塔（1/20）

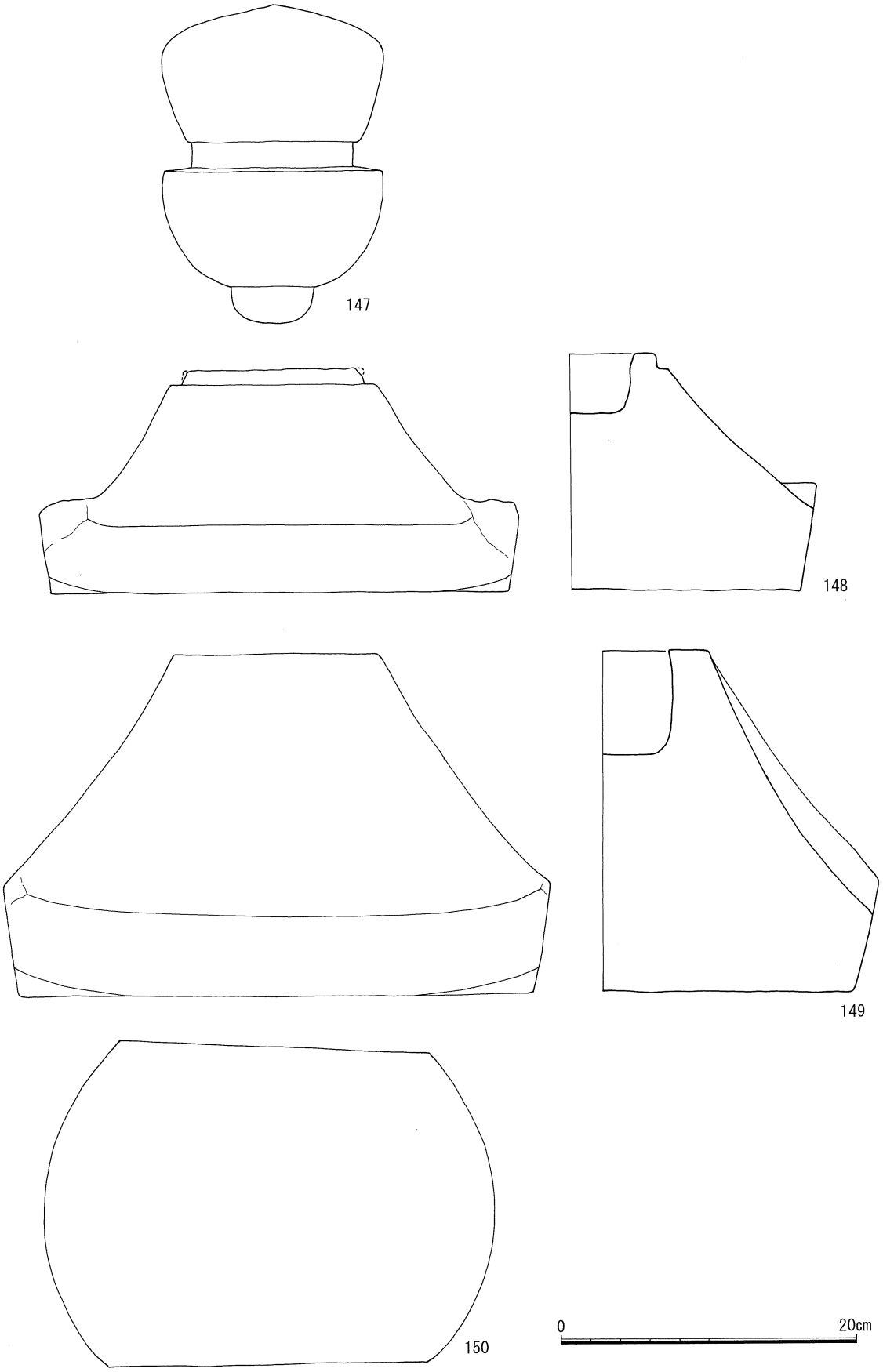
14）第20平坦面（第55図）

調査区の最も東側で低い東西に長い平坦地である。この平坦地は調査区に北側まで延びており、近年の耕作痕が西側部分で確認できた。

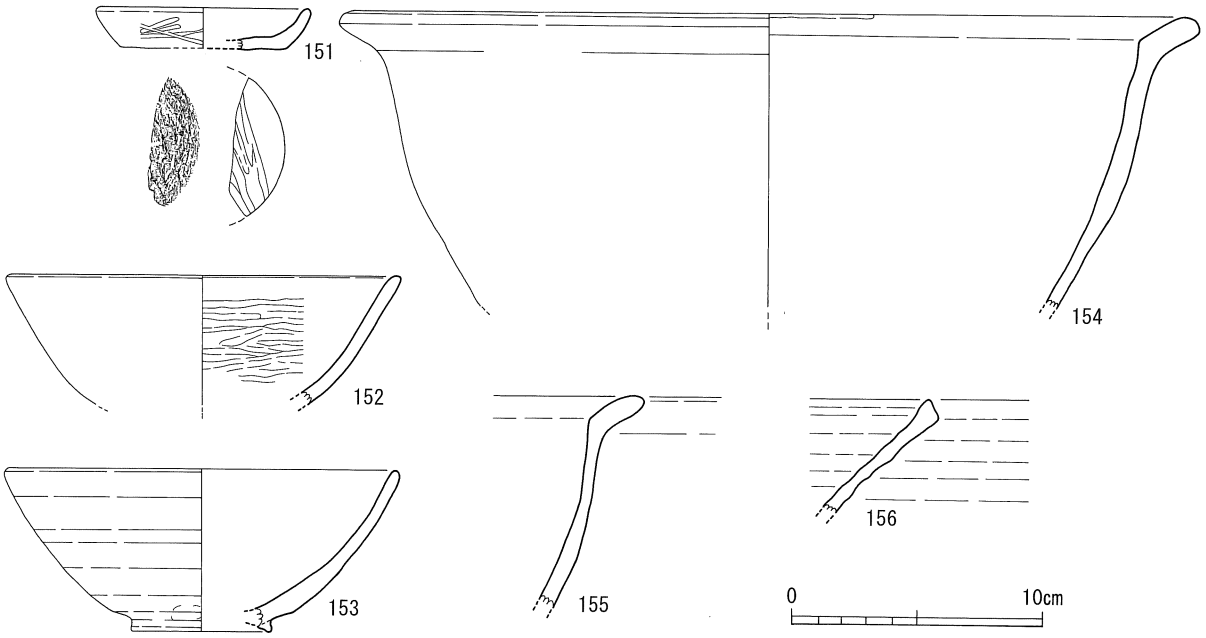
耕作痕が確認できる箇所の東側で東西1.5ｍ、南北2.0ｍ、高さ50cmの集石遺構（SX239）が確認できた。実測図は第97図に示したが、拳大から人頭大を超える大きさの礫中に石造物の部材が含まれていた。

この集石内からの出土遺物は第98図に示した。157は土人形の大黒天である。158は石仏であり、半肉彫りの坐像であることはわかるが、表面が風化しており、像様は明らかでない。159は宝珠であり、宝珠下に蓮弁がみえる。

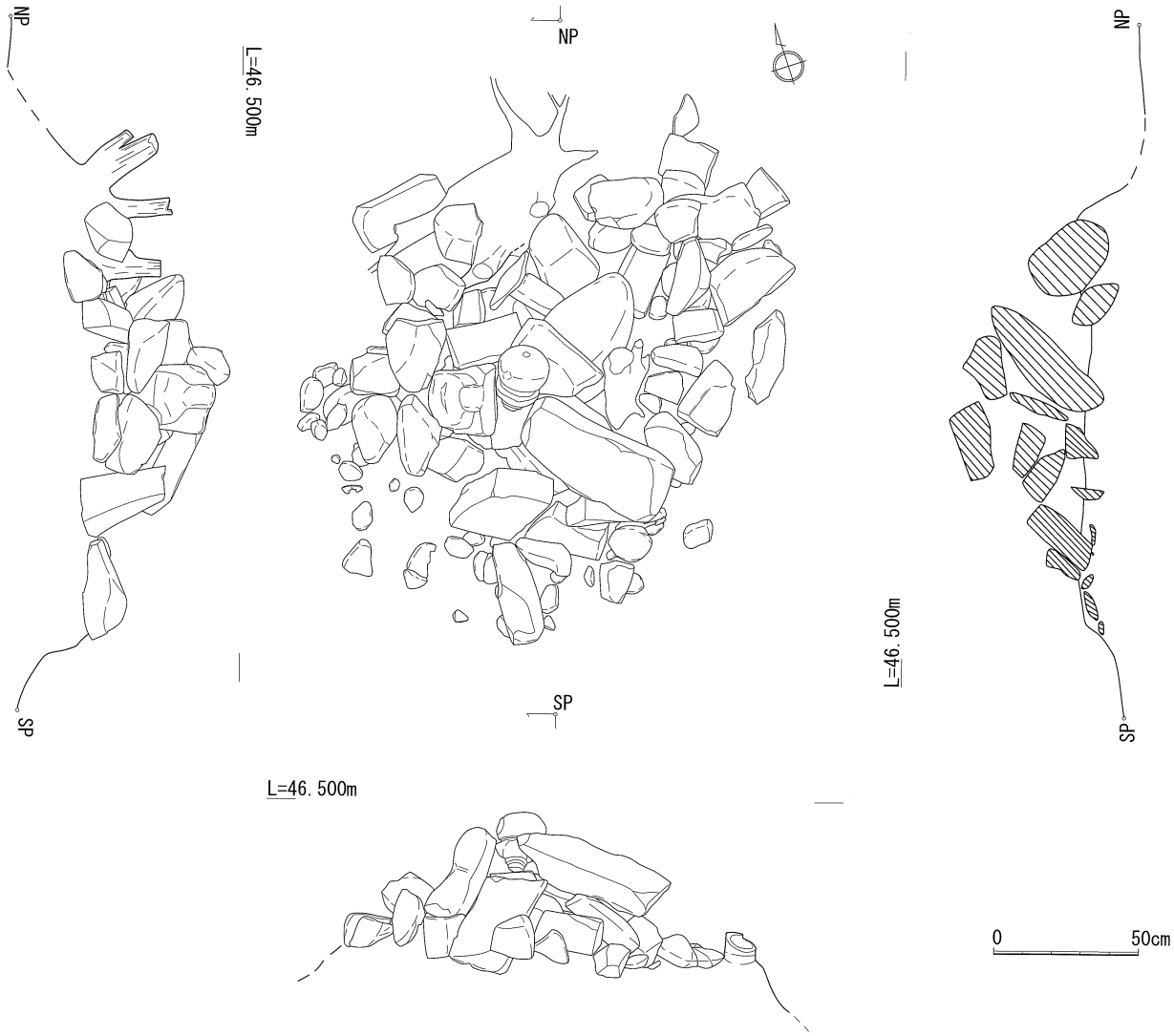
第20平坦面の出土遺物は第99図に示した。160は軒平瓦であり、唐草文がみえる。



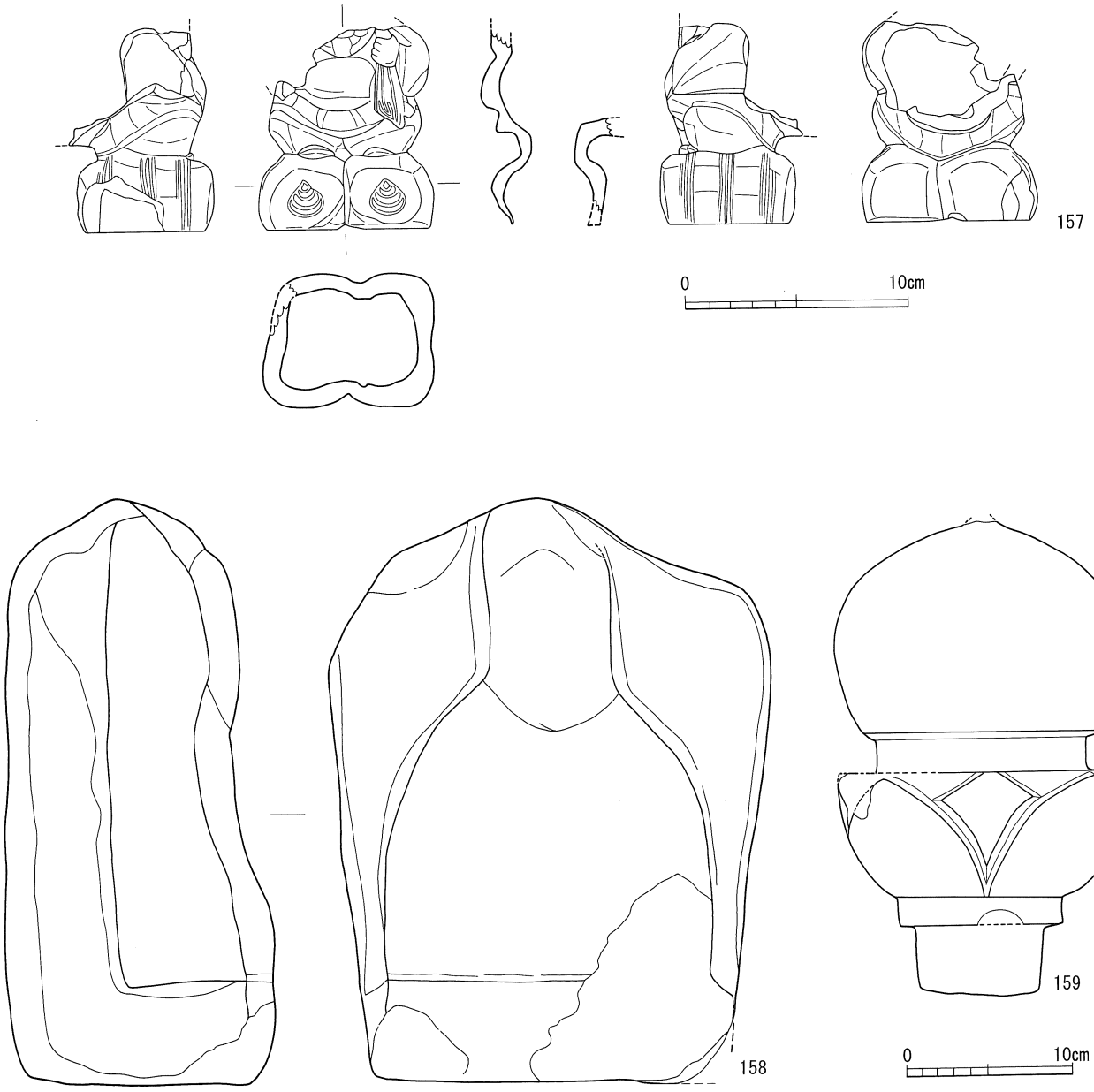
第95図　今成館跡第17平坦面石塔（1/4）



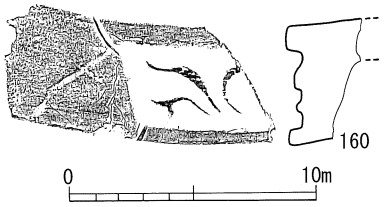
第96図　今成館跡第17平坦面出土遺物（1/3）



第97図　今成館跡第20平坦面SX239（1/25）



第98図　今成館跡第20平坦面SX239出土遺物（157は1/3、158・159は1/4）

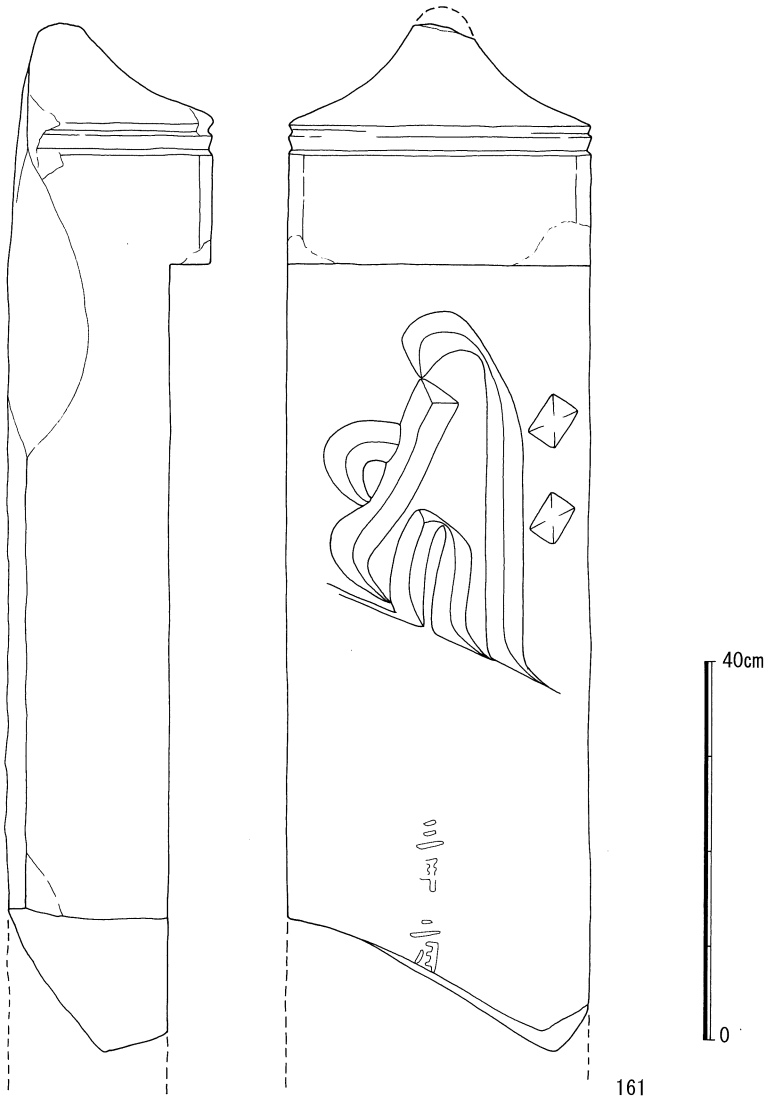


第99図　今成館跡第20平坦面出土遺物（1/3）

15）出土石塔（第46図）

調査区の南側裾に石塔が置かれていた。本来の原位地を保つものではないが、実測図を第100図に示した。第100図161は板碑である。下半が折損しているが、キリーク（阿弥陀如来）の梵字種子を大きく薬研彫りし、その下に銘文を刻んでいる。ほとんどは磨滅しているが、「□□三年□□二月□」と読める。額の突出、２条切込み、梵字種子の強さ等からみて鎌倉末～南北朝初頭のものであろう。

（原田　昭一）



第100図　今成館跡所在石塔（1/8）

第６表　今成館跡出土遺物観察表（土器）①

図版番号	遺物番号	写真図版番号	種類	器形	生産地	法量（cm）（　）は復元径			遺構名
						口径	底（高台）径	器高	
58	1		白磁	碗		(15.0)			第１平坦面
	2		瓦器	椀		(16.1)			第１平坦面SK027
61	3		土師質土器	小皿		6.0	4.0	1.0	第２平坦面６・７層
	4		土師質土器	小皿		6.1	4.1	1.0	第２平坦面５層
	5		土師質土器	小皿		6.4	4.5	1.1	第２平坦面６・７層
	6		土師質土器	小皿		6.0	4.5	1.1	第２平坦面６・７層
	7		土師質土器	小皿		(6.0)	(4.2)	1.2	第２平坦面６・７層
	8		土師質土器	坏		(8.4)	6.8	1.2	第２平坦面焼土面
	9		土師質土器	坏		(9.2)	9.0	1.1	第２平坦面焼土面
	10		土師質土器	坏		9.1	6.7	1.5	第２平坦面６・７層
	11		土師質土器	坏		(9.6)	(7.1)	1.7	第２平坦面６・７層
	12		土師質土器	坏		(9.4)	7.0	1.7	第２平坦面焼土面
	13		土師質土器	坏		9.0	6.5	1.6	第２平坦面焼土面
	14		瓦質土器	鉢					第２平坦面５層
	15		口禿げ白磁	皿					第２平坦面５層
	16		口禿げ白磁	皿			(6.4)		第２平坦面３層
	17		磁器	碁笥底皿			(10.9)		第２平坦面３層
	18		青磁	碗	龍泉窯		4.5		第２平坦面３層
	19		瓦器	椀		(17.6)			第２平坦面３層
	20		瓦器	椀		(15.5)	(6.4)	6.0	第２平坦面５層
	21		瓦器	椀		(15.5)			第２平坦面５層
	22		中世須恵器	甕	亀山				第２平坦面５層
64	26		土師質土器	小皿		5.4	4.5	0.9	第２平坦面ST240
	27		土師質土器	小皿		(6.2)	4.5	1.0	第２平坦面ST240
	28		土師質土器	小皿		6.2	4.0	1.0	第２平坦面ST240
	29		土師質土器	小皿		(6.0)	4.1	0.9	第２平坦面ST240
	30		土師質土器	小皿		(5.8)	4.1	1.1	第２平坦面ST240
	31		土師質土器	小皿		6.0	4.3	1.0	第２平坦面ST240
	32		土師質土器	小皿		6.2	4.6	1.1	第２平坦面ST240
	33		土師質土器	小皿		(6.0)	4.6	1.1	第２平坦面ST240
	34		土師質土器	小皿		(6.2)	4.2	1.0	第２平坦面ST240
	35		土師質土器	小皿		(5.6)	4.5	1.0	第２平坦面ST240
	36		土師質土器	小皿		6.4	4.8	1.1	第２平坦面ST240
	37		土師質土器	小皿		(6.2)	4.5	1.0	第２平坦面ST240
	38		土師質土器	小皿		6.0	4.5	1.0	第２平坦面ST240
	39		土師質土器	小皿		(6.0)	4.5	1.1	第２平坦面ST240
	40	7-1	土師質土器	小皿		6.0	4.3	1.3	第２平坦面ST240
	41		土師質土器	小皿		(6.2)	4.5	1.1	第２平坦面ST240
	42		土師質土器	小皿		(6.8)	4.6	1.2	第２平坦面ST240
	43		土師質土器	小皿		6.1	4.2	1.1	第２平坦面ST240
	44		土師質土器	小皿		5.9	4.5	1.0	第２平坦面ST240
	45		土師質土器	小皿			4.3		第２平坦面ST240
	46		土師質土器	小皿		5.9	4.8	1.1	第２平坦面ST240
	47		土師質土器	坏		8.8	6.6	1.6	第２平坦面ST240
	48		土師質土器	坏		9.8	7.9	1.8	第２平坦面ST240
	49		土師質土器	坏		(7.8)	(6.0)	1.3	第２平坦面ST240
	50		土師質土器	坏		9.2	6.7	1.8	第２平坦面ST240
	51	7-2	土師質土器	坏		8.8	6.8	1.8	第２平坦面ST240
	52		土師質土器	坏		9.0	6.6	1.7	第２平坦面ST240
	53		土師質土器	坏		9.5	6.8	1.7	第２平坦面ST240
	54		土師質土器	坏		(9.6)	7.0	1.5	第２平坦面ST240
	55		土師質土器	坏		(9.0)	(6.8)	1.5	第２平坦面ST240
	56	7-3	土師質土器	坏		(9.4)	6.6	1.5	第２平坦面ST240
	57		土師質土器	坏		(9.4)	(7.0)	1.5	第２平坦面ST240
	58		土師質土器	坏		9.5	7.0	1.6	第２平坦面ST240
	59		土師質土器	坏		8.8	6.8	1.7	第２平坦面ST240
	60		土師質土器	坏		10.2	8.0	1.4	第２平坦面ST240
	61		土師質土器	坏		(10.0)	(8.0)	1.6	第２平坦面ST240
	62		口禿げ白磁	皿					第２平坦面ST240
	63		口禿げ白磁	皿			(6.3)		第２平坦面ST240
	64		瓦器	碗		16.1		4.3	第２平坦面ST240
	65		青磁	碗	龍泉窯		(6.2)		第２平坦面ST240
66	71		瓦器	碗					第２平坦面SP248
68	72		瓦質土器	擂鉢		(30.0)			第３平坦面
72	73	7-5	土師質土器	坏		11.7	7.6	2.4	第４平坦面SP229
	74		瓦器	椀		(14.8)			第４平坦面SP229

第７表　今成館跡出土遺物観察表（土器）②

図版番号	遺物番号	写真図版番号	種類	器形	生産地	法量（cm）（　）は復元径			遺構名
						口径	底（高台）径	器高	
72	75		瓦器	椀		(15.2)			第４平坦面SP229
	76		瓦器	椀			(4.0)		第４平坦面SP229
	77	7-4	瓦器	椀		15.4	4.8	5.3	第４平坦面SP229
73	78		青磁	碗	同安窯				第４平坦面
	79		青磁	碗	龍泉窯				第４平坦面
	80		瓦質土器	火鉢					第４平坦面
	81		瓦器	椀			4.8		第４平坦面
	82		瓦器	椀			(4.8)		第４平坦面
	83		瓦器	椀			(4.8)		第４平坦面
	84		瓦質土器	火鉢					第４平坦面
	85		瓦質土器	火鉢					第４平坦面
	86		瓦質土器	火鉢					第４平坦面
75	90		陶器	擂鉢	備前焼				第５平坦面
77	91		瓦質土器	鍋		(28.7)			第７平坦面SK107
	92		瓦質土器	鉢			(11.6)		第７平坦面SK107
	93		瓦質土器	鍋					第７平坦面SK107
	94		白磁	皿			(4.0)		第７平坦面SK107
78	95		瓦器	椀			6.0		第７平坦面SK136
79	96		瓦質土器	風炉？		(18.0)			第７平坦面SK149
	97		瓦質土器	擂鉢					第７平坦面SK149
80	98		土師質土器	小皿		(8.2)	6.2	1.0	第７平坦面
	99		土師質土器	小皿		(7.5)	(6.0)	0.9	第７平坦面
	100		瓦質土器	鉢		(21.0)			第７平坦面
	101		瓦質土器	鍋？					第７平坦面
	102		瓦質土器	火鉢					第７平坦面
82	103		土師質土器	小皿		(7.4)	(6.0)	1.0	第８平坦面SX243
	104		土師質土器	小皿		(7.8)	(6.0)	1.0	第８平坦面SX243
	105		土師質土器	坏		(12.6)	(9.6)	2.4	第８平坦面SX243
	106	7-9	土師質土器	坏		12.0	9.6	2.4	第８平坦面SX243
	107		瓦器	椀		(16.2)			第８平坦面SX243
	108		瓦器	椀		(17.0)			第８平坦面SX243
	109		青磁	皿	龍泉窯	(12.8)			第８平坦面SX243
	110		瓦器	椀			(5.8)		第８平坦面SX243
	111		瓦器	椀			(6.0)		第８平坦面SX243
83	112		陶器	瓶					第８平坦面SK244
	113		土師質土器	小皿		(8.2)	(6.0)	1.0	第８平坦面SK244
85	114	7-6	瓦器	椀		(15.8)	5.8	6.2	第８平坦面SP241
86	115		青磁	皿	同安窯		5.2		第８平坦面３トレンチ
	116		磁器	皿		(6.1)	(4.2)	1.3	第８平坦面
	117	7-7	青磁	皿	龍泉窯	(11.0)	(7.2)	3.7	第８平坦面３トレンチ
	118		土師質土器	小皿		(7.9)	(6.4)	1.0	第８平坦面１トレンチ
	119		青磁	碗	同安窯	(17.5)			第８平坦面３トレンチ
	120		青磁	碗	龍泉窯	(15.4)			第８平坦面３トレンチ
	121	7-8	土師質土器	坏		12.3	7.8	2.6	第８平坦面３トレンチ
	122		土師質土器	坏			8.0		第８平坦面３トレンチ
	123		土師質土器	坏			8.0		第８平坦面３トレンチ
	124		土師質土器	坏		(14.3)	(10.0)	2.5	第８平坦面３トレンチ
	125		瓦器	椀		5.5			第８平坦面
	126		瓦器	椀		14.5	4.4	5.6	第８平坦面３トレンチ
	127		瓦器	椀			6.7		第８平坦面３トレンチ
	128		瓦質土器	火鉢					第８平坦面２トレンチ
	129		土師質土器	鍋					第８平坦面
	130		土師質土器	鍋		23.6			第８平坦面３トレンチ
	131		土師質土器	鍋		(32.2)			第８平坦面３トレンチ
	132		土師質土器	鍋		(36.0)			第８平坦面
89	142		白磁	碗		(17.3)			第９平坦面
90	143		土師質土器	坏			(7.0)		第14平坦面
92	145		土師質土器	鍋					第15平坦面
93	146		瓦器	椀			(7.6)		第16平坦面
96	151		土師質土器	小皿		(8.2)	(6.6)	1.6	第17平坦面
	152		瓦器	椀		(15.0)			第17平坦面
	153		瓦器	椀		(15.2)	(5.5)	6.4	第17平坦面
	154		土師質土器	鍋		(32.8)			第17平坦面
	155		土師質土器	鍋					第17平坦面
	156		中世須恵器	こね鉢	東播系				第17平坦面

第８表　今成館跡出土遺物観察表（石器・石製品）

図版番号	遺物番号	写真図版番号	種類	材質	法量（cm）（　）は復元径				遺構名
					縦（cm）	横（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	
62	24		石鏃		1.8	1.8	0.5		第２平坦面
	25		石鏃	サヌカイト？	2.8	2.5	0.6		第２平坦面
65	66		五輪塔空風輪	安山岩		12.2			第２平坦面ST240
	67		五輪塔空風輪	安山岩					第２平坦面ST240
	68		五輪塔火輪	安山岩	27.7	27.2	16.5		第２平坦面ST240
	69		五輪塔水輪	安山岩	26.0	29.0	26.0		第２平坦面ST240
	70		五輪塔地輪	安山岩	28.0	26.0	9.0		第２平坦面ST240
87	137		石鏃	黒色黒曜石	2.7	1.8	0.7	1.9	第８平坦面３トレンチ
	138		石鏃		2.4	1.7	0.5		第８平坦面２トレンチ下層
	139		石鏃	チャート	3.1	1.6	0.5	1.2	第８平坦面３トレンチ
	140		石鏃	黒曜石	3.0	1.6	0.4	1.5	第８平坦面
	141		掻器	チャート	2.4	2.9	0.9	6.1	第８平坦面３トレンチ
95	147		五輪塔空風輪	安山岩	21.5	15.0			第17平坦面
	148		五輪塔火輪	安山岩	15.0	32.0			第17平坦面
	149		五輪塔火輪	安山岩	23.0	36.5			第17平坦面
	150		五輪塔水輪	安山岩	22.0	30.2			第17平坦面
98	158		石仏	安山岩	34.8	26.6			第20平坦面
	159		宝珠	安山岩	28.2	17.4	17.4	6.0	第20平坦面
99	161		板碑	安山岩		32.0	22.0		

第９表　今成館跡出土遺物観察表（土製品）

図版番号	遺物番号	写真図版番号	器種	法量（cm）（　）は復元径				遺構名
				縦（cm）	横（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	
73	87		土師質土錘	5.6	1.2	9.2	0.4	第４平坦面
	88		土師質土錘	3.2	0.9	4.8	0.2	第４平坦面
86	133		土師質土錘		1.2		0.2	第８平坦面３トレンチ
	134		土師質土錘	3.8	1.0		0.2	第８平坦面
	135		土師質土錘	5.1	0.9		0.1	第８平坦面
	136		土師質土錘	4.8	1.1		0.2	第８平坦面３トレンチ
90	144		土師質土錘	4.5	1.2	5.9	0.4	第14平坦面
98	157		土人形大黒天	9.0	7.8			第20平坦面

第10表　今成館跡出土遺物観察表（瓦）

図版番号	遺物番号	写真図版番号	種類	器形	生産地	法量（cm）（　）は復元径			遺構名
						全長	幅	厚さ	
99	160		瓦	軒平瓦					第20平坦面

第11表　今成館跡出土遺物観察表（金属製品）

図版番号	遺物番号	写真図版番号	材質	器種	法量※（　）は残存数値		遺構名
					縦（cm）	横（cm）	
61	23		鉄	釘	7.8		第２平坦面３層
73	89		銅	目貫金具	2.7	3.5	第４平坦面

3　小結

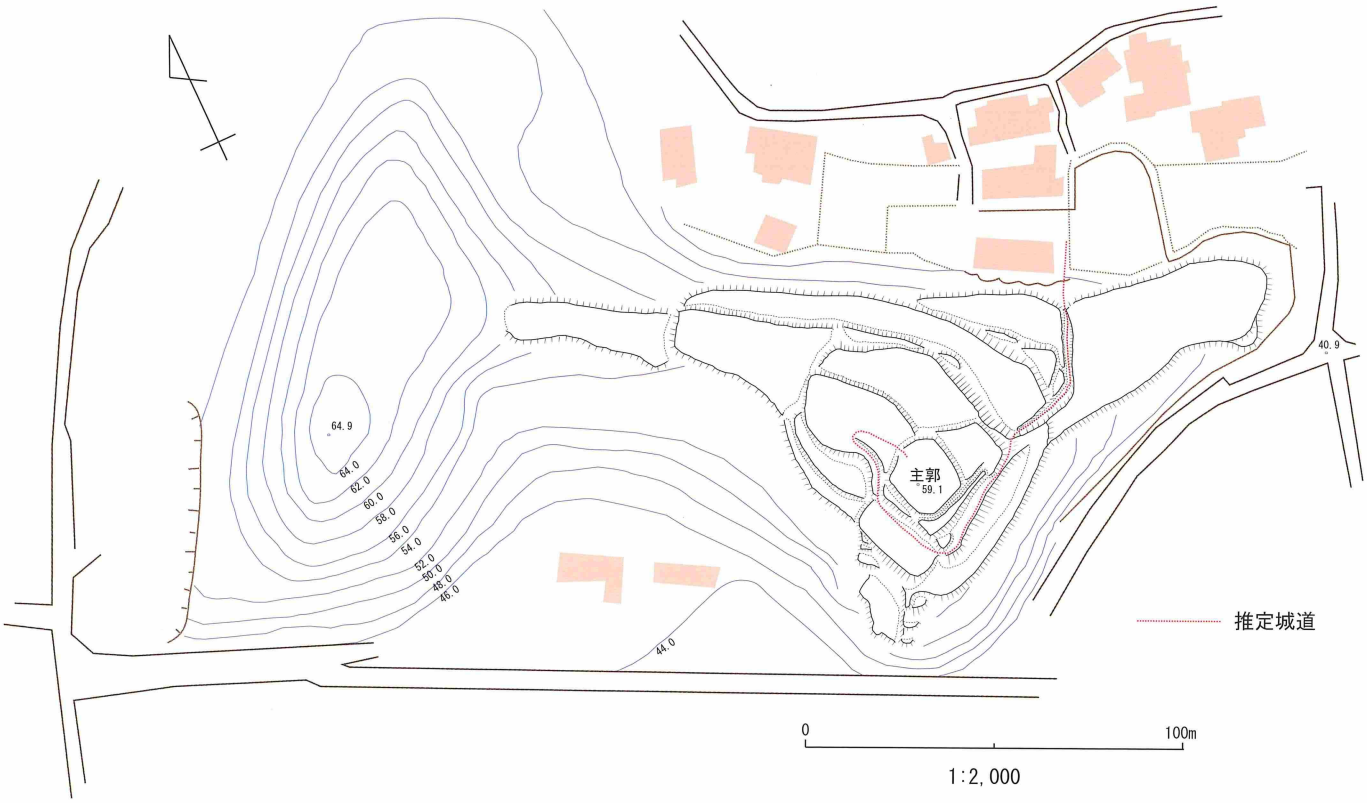
1．縄張りから見た「今成館」

今成館跡は、伊呂波川が作る平野の中に取り残された残蝕丘陵上に立地している。その残蝕丘陵は、現在の今成の集落を抱え込むようにＬ字状に折れ曲がり、おそらく洪水の時には集落を守る役割を果たしたであろう。今成館跡は、集落からの比高差20m弱のピーク部（標高59.1m）に16m×18mの略方形の主郭を、そしてその外側を２～３の帯曲輪がそれを取り巻いている。また、西側のピーク（標高64.9m）は全く造作はなされていないが、間に挟まれた鞍部（尾根）は平坦に加工して２段の曲輪を作っている。こちら側からの進入に対しては、堀切などは認められないので、柵や土塁等で守ったのであろう。一方、丘陵の東側の舌状に張り出した部分は現状で墓地として利用されており、大幅に改変されているが、本来城域ではなかったものと考えられる。

城道は集落側（北側）から小さな堀割状となって登っており、主郭の南側の帯曲輪を迂回させて、主郭には北西側から入らせる（図中の赤点線）。道の回し方は、川を挟んで向かい側の丸尾城とも通じるものがある。

築造の時期は、帯曲輪の一つから墓が見つかって、その帯曲輪は14世紀代に作られているのが判明したが、現状で見る縄張り構造全体が14世紀まで遡るものであるのかは、主郭部で遺物が出土しなかったことから判然としない。通常考えれば、13世紀から14世紀代にかけては、平地での館跡が一般的である。そして、15世紀になると小高い丘の上に館城を築く。「今成館」は、立地からはこの15世紀代に出現する館城そのものであるが、「館」をそのまま丘の上に上げたような館城の構造とは大きく異なっている。可能性としては、①南北朝期の動乱時に集落背後の丘陵を今見る構造の館として使った（その後の大きな改変はない）、②南北朝期の一時的な使用の後、15世紀代以降に本格的に改変して今見る構造となった、という二つである。どちらにしても、その時期に通有な「館」のあり方とは異なるものと言えよう。今後類例が見つかり、その位置付けが明らかになることを期待したい。

（小柳　和宏）



第101図　今成館跡縄張り図

2．発掘調査のまとめ

今回の調査区から12世紀後半～14世紀の整地面や、柵列、土坑、墓などが発見され、また、土師質土器・瓦器・瓦質土器・青磁・白磁などの遺物が比較的まとまって出土した。今成館跡から検出された遺構・遺物は、伊呂波川流域の谷部の平野を閉塞する位置に存在する平野からの比高差15mを測る独立丘陵の自然地形を削平し、平坦地を連続して造成している立地環境と不可分な関係にある。

特に、第１平坦面～第４平坦面は、周辺と画し、一段高い位置にあり、第２平坦面からは14世紀の集石墓が検出され、火葬骨であろうと考えられる骨片の細粉と祭祀に伴う土器類や石塔が確認できた。また、第４平坦面からは14世紀の整地面と同時期の柵列が検出され、この空間が14世紀代に整地され、利用されはじめたことがわかる。

同時期の周辺歴史環境を概観すると、今成館跡のすぐ南には、伊呂波川を挟み、トロイデ状の山容を示す標高406mの稲積山が存在し、今成館跡から望めば、南方に仰ぎ見る位置になる。稲積山山頂からは長寛元年（1163）銘をもつ石柱塔婆３基が発見されており、その銘文中には「僧頼厳聖人」の名がみえる。頼厳は彦山・求菩提山の中興の祖であり、稲積山麓の妙楽寺が終焉の地とされている。この妙楽寺境内からは、12世紀の埋経遺構３基が発見され、中から経筒や四耳壷、写経紙を巻いた経巻が出土している。また、寺院の東側奥には、貞和二年（1346）銘をもつ２基の板碑がみられ、このほかにも南北朝期以降の石造物群がみられる。

今成館跡からは鎌倉～南北朝時代の土坑・柱穴・柵列・集石墓等が確認されており、これらの遺構群が存在する時期には確実に妙楽寺が存在していたことがわかる。今成館跡から出土した石造物群も南北朝期のものが認められ、遺構群の時期と一致する。

周辺遺跡と比較すれば、14世紀に営まれた木内遺跡は、13世紀の遺構・遺物が乏しく、14世紀に盛行することに比較して、今成館跡は13～14世紀を通じて営まれている。また、中世後半期の遺構・遺物が少なくなっていくことは両者に共通する。

この地域の歴史環境を探るうえで、参考となる歴史史料に目を向けると、慶長３年（1598）、渡辺左馬入道浄蓮により記された『豊州城堡記』によれば、「木内城（丸尾城）」の項に「保元二年平判官兼頼之課ニ依テ千葉介常胤か三男武石権守成胤と申者東国より来而築之、始西山之法雲寺城ニ居後東山之丸尾城ニ移ルト云」とある。丸尾城は今回の調査で後述しているとおり、今成館跡や木内遺跡の東に位置する山城であるが、保元２年（1157）、はじめに「西山」の「法雲寺城」を築いたが、後に、この丸尾城に移ったことが記されている。この今成館跡が「西山」の「法雲寺城」にあたるものかについては、地元の伝承はまったく残されていない。また、城名である法雲寺についても同様である。今成館跡から出土する中世の遺物群が12世紀後半から出土していることは、『豊州城堡記』にみられる記録と「西山之法雲寺城ニ居」はじめた保元２年（1157）と一致し、興味深い印象をもつが、今後の検証に期待したい。

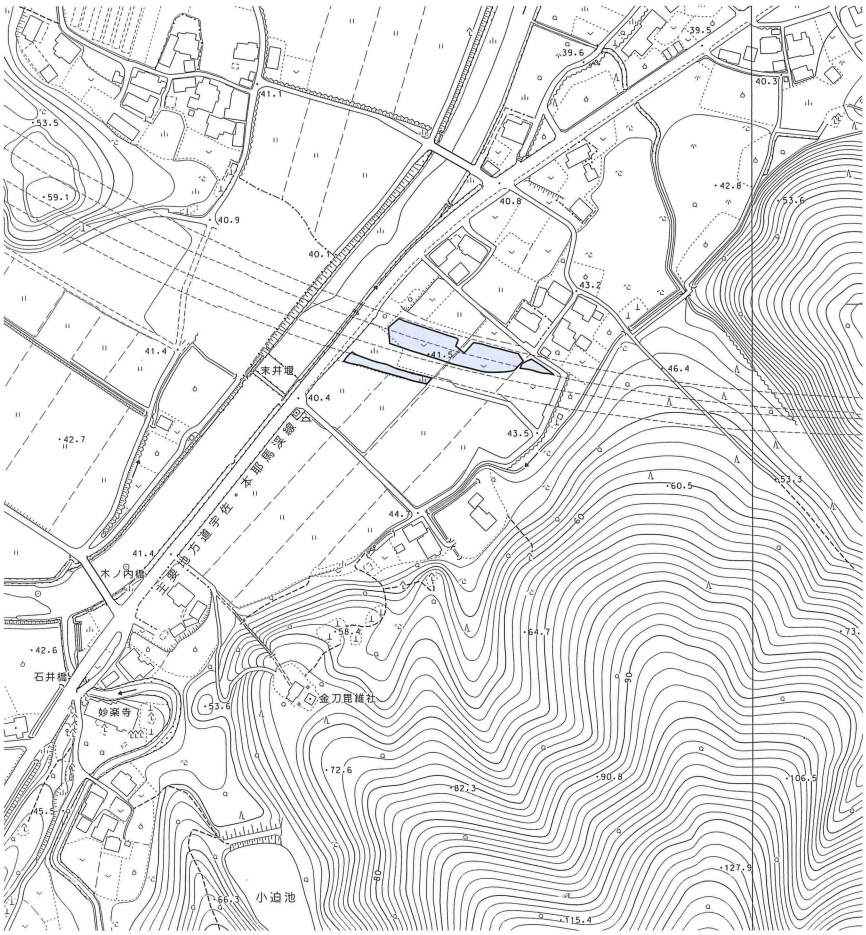
（原田　昭一）

第５節　木内遺跡

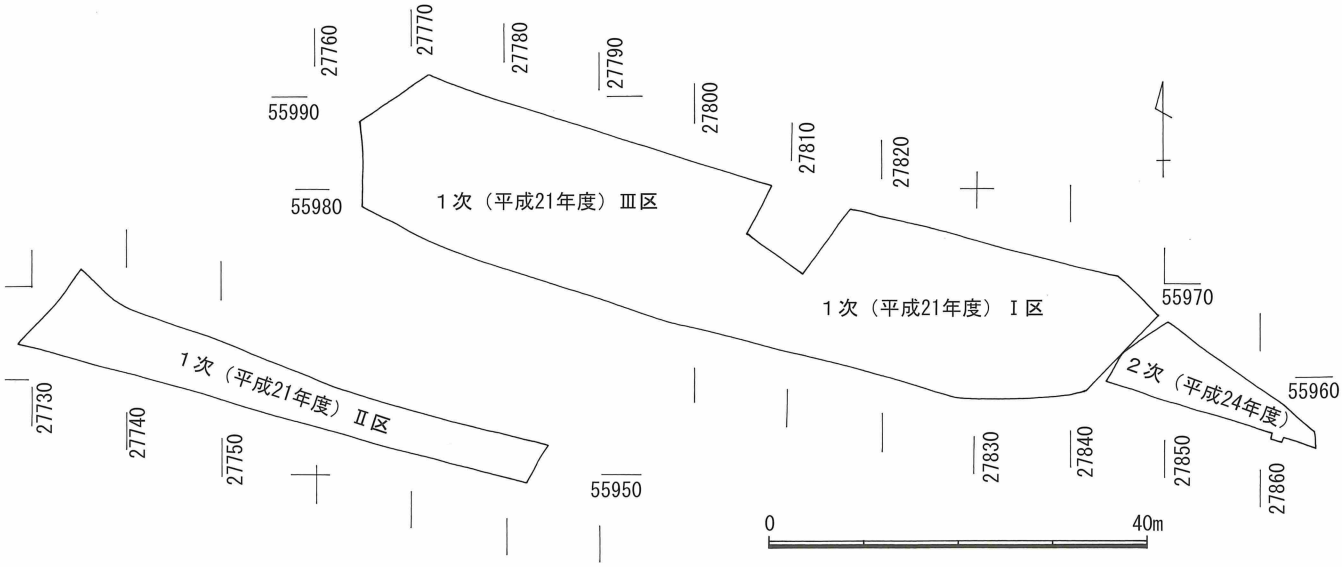
１　調査の概要

木内遺跡は大分県宇佐市大字木内に所在する。調査区は伊呂波川と谷部の平野を見下ろす丘陵裾部の段丘上に広がる水田地帯に位置する。

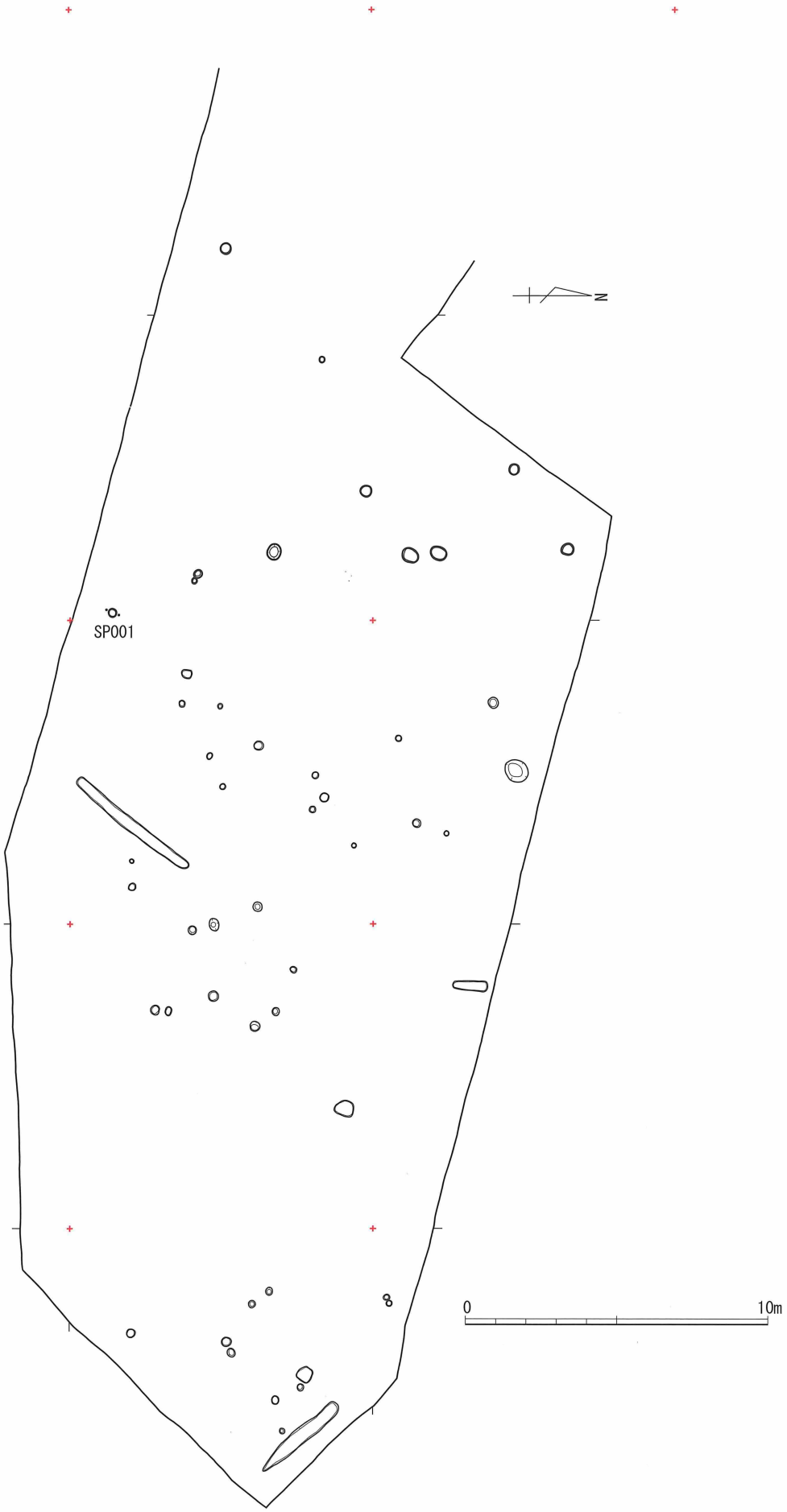
調査は、１次調査（平成21年度）と２次調査（平成24年度）の２ヶ次に分けて行った。発掘調査の結果、古代～近世の溝や掘立柱建物跡、柵列、土坑、井戸などが発見され、遺構内や遺構を覆う包含層から土師質土器・瓦器・瓦質土器・青磁、および縄文土器・土師器・須恵器などが出土した。



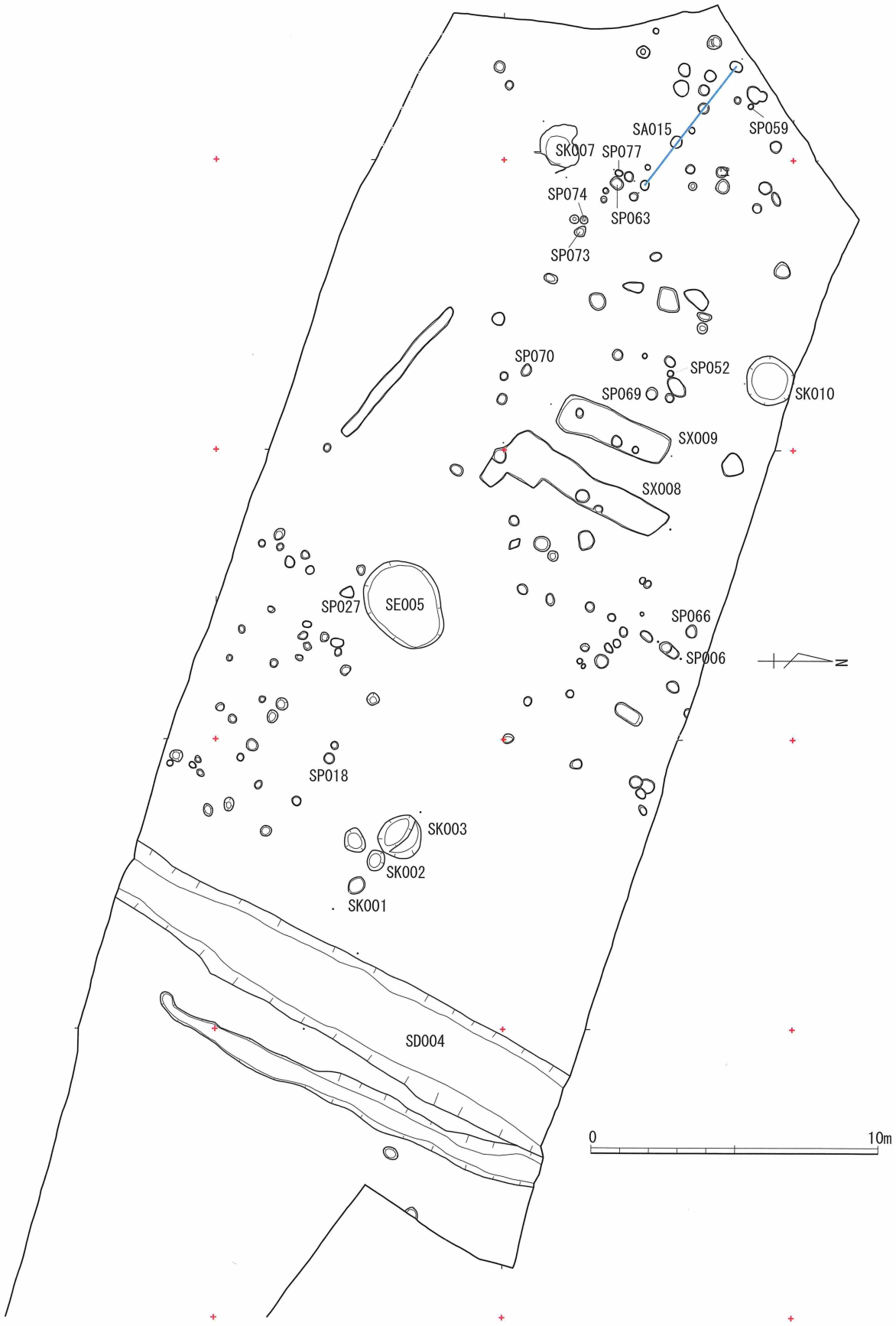
第102図　木内遺跡周辺地形図（1/5,000）



第103図　木内遺跡調査区配置図（1/800）



第104図　木内遺跡１次Ⅰ区遺構配置図（1/200）



第105図　木内遺跡１次Ⅲ区遺構配置図（1/200）

2　遺構と遺物

1次（平成21年調査）Ⅰ・Ⅲ区

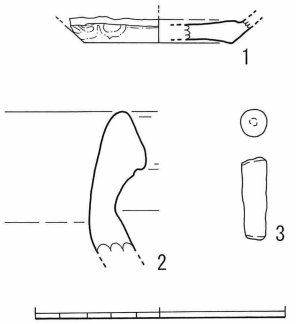
1）井戸

Ⅲ区中央から井戸が1基のみ検出できた。

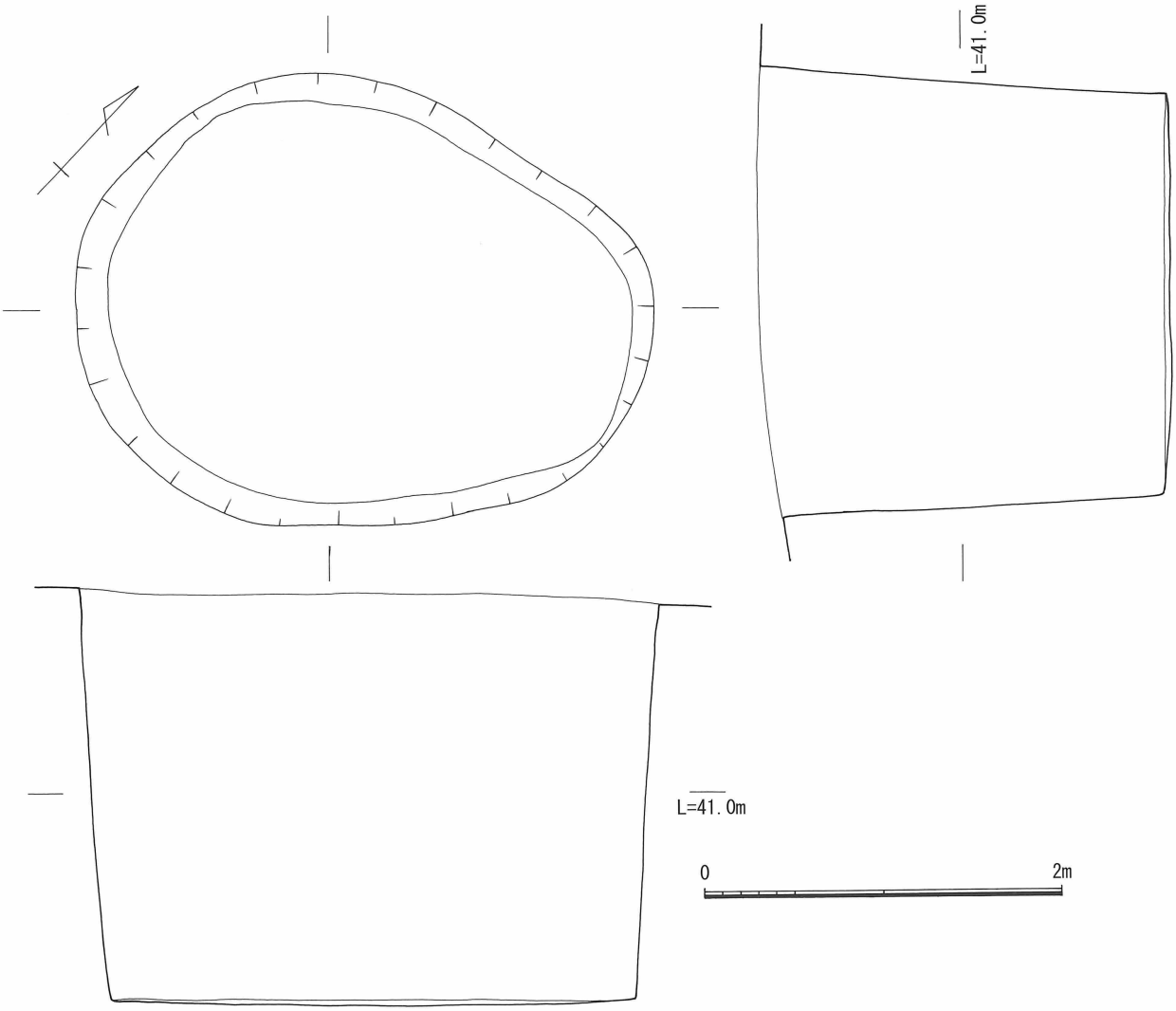
Ⅲ区SE005（第107図、写真図版8）

調査中に埋土が崩落したため、詳細な土層は残しえなかったが、井筒等の存在は確認できず、素掘りの井戸であることが観察できた。長径3.2m、短径2.4m、深さ2.3mを測る楕円形の掘形をもつ。出土遺物も乏しく、埋土中から極めて少量の遺物が出土したのみで、底部付近から出土したものはみられない。

出土遺物は第106図に示した。1は口禿白磁皿、2は瓦質土器、3は土錘である。



第106図　木内遺跡1次Ⅲ区SE005出土遺物（1/3）



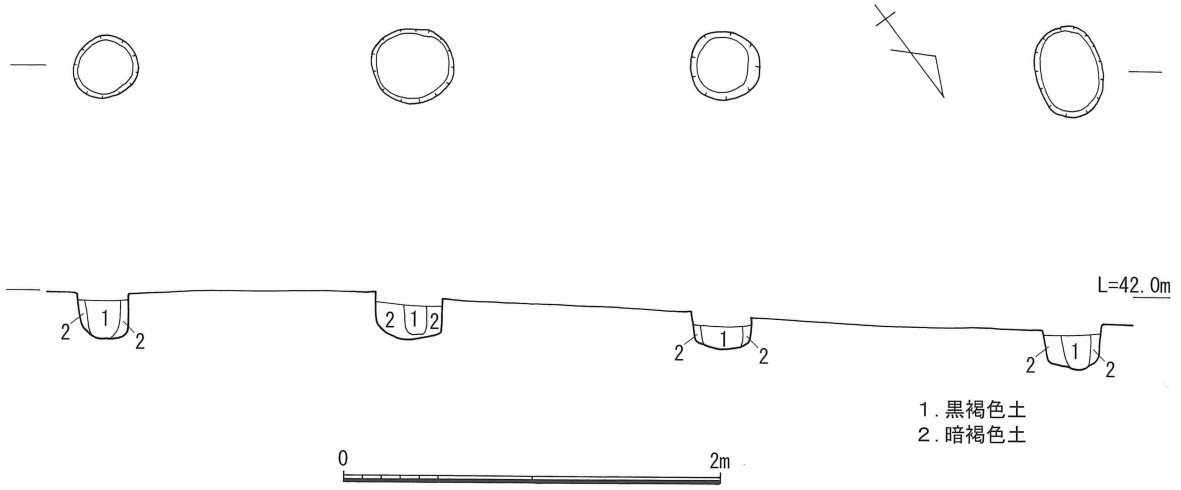
第107図　木内遺跡1次Ⅲ区SE005（1/40）

2）柵列

Ⅰ・Ⅲ区全域から180基を超えるピットが検出できた。掘立柱建物としての並びが確認できるものはみられなかったが、柵列と認識できるピットの並びが1条確認できた。

Ⅲ区SA015（第108図、写真図版８）

Ⅲ区の西端のピットが集中する箇所において、４基のピットの並びが確認でき、柵列として把握した。ピットの規模はいずれも径30～40cm、残存深20～25cm程度であり、いずれのピットにも柱痕が土層に観察でき、埋土もきわめて近似していた。このピット群は北西で調査区外に続く可能性があるため、さらに柵列は延びるかもしれない。



第108図　木内遺跡１次Ⅲ区SA015（1/40）

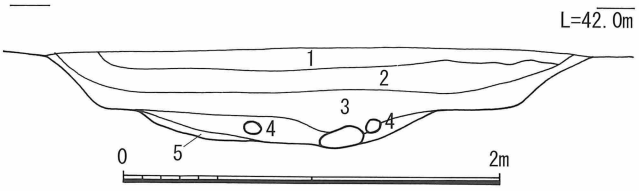
３）溝

Ⅰ・Ⅲ区全域から５条の溝が検出できた。出土遺物がみられず、帰属時期が不明のものも多いが、中世～近世に営まれたものが多いと思われる。

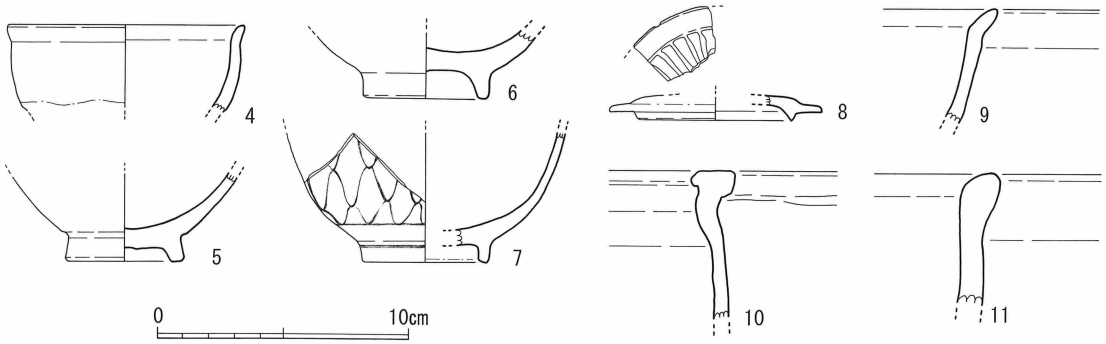
Ⅲ区SD004（第105・109図、写真図版９）

Ⅰ・Ⅲ区の境界付近に南北方向に延びる上幅４～6.6m、下幅1.2～2.4m、深さ0.3～0.5mを測る溝である。堆積土は一部底面に水性堆積層が認められ、耐水状態であった箇所も存在するが、溝を通して水流が認められる堆積状態ではなく、一部に水たまりがある程度で、空溝であったことがわかる。

1．にぶい黄褐色土（１mm程度の炭・焼土や４～５cm程度の礫を含む）
2．にぶい黄褐色土（１mm程度の炭・焼土や４～５cm程度の礫を含む）
3．にぶい黄褐色土（１mm程度の炭・焼土や４～５cm程度の礫を含む）
4．褐色粘質土（水性堆積土。１mm程度の焼土を少量含む。１cm程度の炭を多量に含む。１～10cm程度の礫を含む）
5．褐色粘土層（水性堆積土）



第109図　木内遺跡１次Ⅲ区SD004土層断面図（1/40）



第110図　木内遺跡１次Ⅲ区SD004出土遺物（1/3）

出土遺物は第110図に示した。４・５は唐津産鉄釉天目碗である。17～18世紀のものであろう。６は肥前産陶器碗であり、17世紀末～18世紀初頭のものである。７は肥前産磁器碗であり、1630～1660年代のものである。８は青磁蓋である。９は瓦質鉢、10・11は瓦質火鉢であろうか。

４）土坑

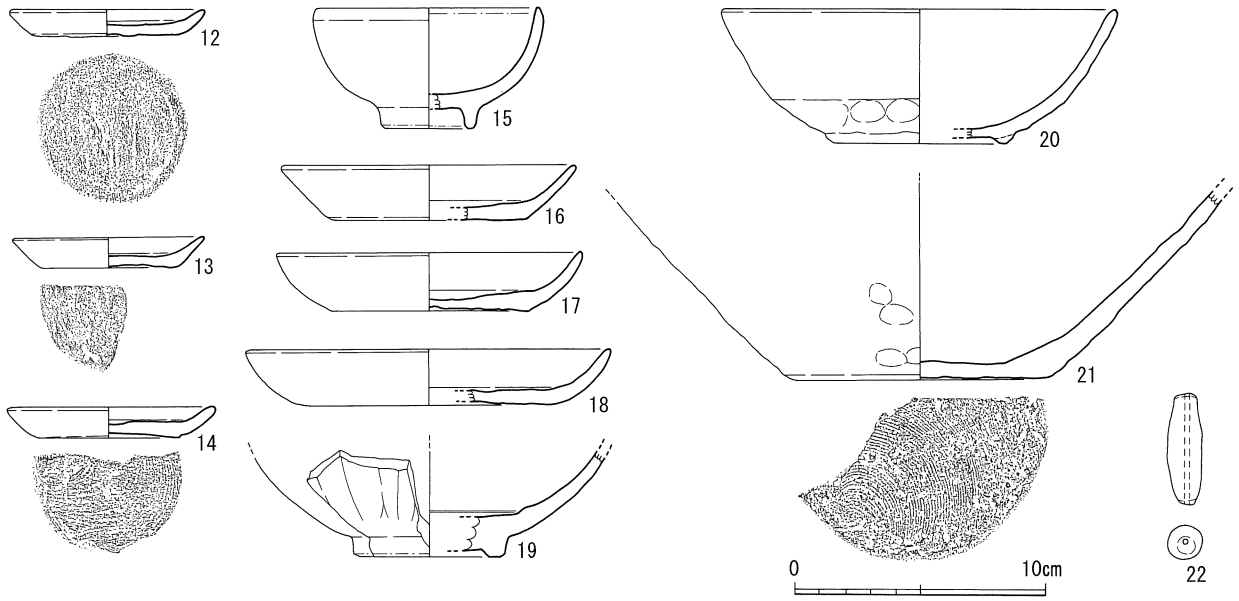
Ⅰ・Ⅲ区全域から10基の土坑が検出できた。出土遺物がみられず、帰属時期が不明のものも多いが、ほとんどが中世～近世に営まれたものであると思われる。

Ⅲ区SK007（第111図、写真図版９）

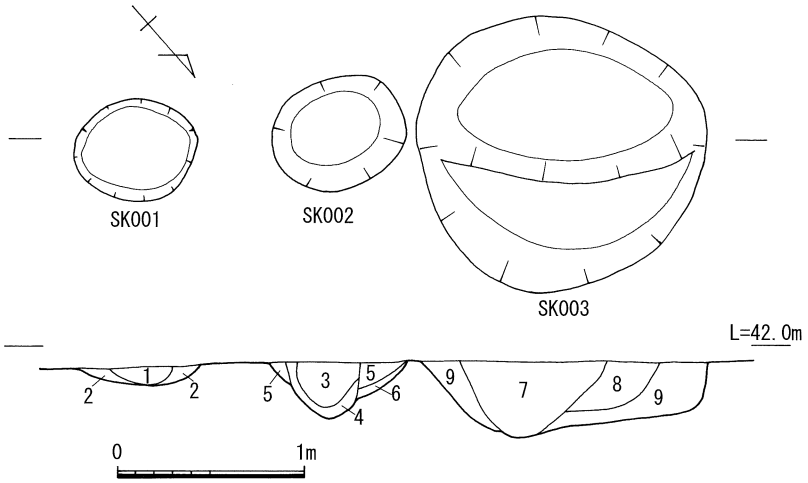
Ⅲ区西端付近から検出された土坑である。長径1.5m、深さ15cmを測る不定形土坑である。平面形も歪だが、床面も深さが一定でない。埋土中には土器とともに人頭大以下の大きさの川原石が存在する。

出土遺物は第112図に示した。12・13・14は土師質土器小皿である。底部外面には回転糸切り後に板状圧痕がみえる。16・17・18は土師質土器坏である。15は口禿げの龍泉窯系青磁碗である。19は龍泉窯系青磁碗であり、外面に鎬蓮弁文がみえる。20は瓦器椀である。内外面をナデで仕上げ、外面腰部以下に指頭圧痕を残す。底部には断面三角形の高台を貼り付けている。21は瓦質鉢である。内外面を指おさえやナデで仕上げ、底部外面は回転糸切りで切り離している。

第111図　木内遺跡１次Ⅲ区SK007（1/20）



第112図　木内遺跡１次Ⅲ区SK007出土遺物（1/3）



１．明褐色土（焼土が多く混じる）　２．黒褐色土（炭化物との混土層）　３．明赤褐色土（焼土が多く混じり、小礫を微量に含む）
４．暗褐色土（焼土と炭化物を含む）　５．灰褐色土（焼土を少量含む）　６．灰褐色土（５層より焼土を多く含む）
７．明赤褐色土(焼土が多く混じる)　８．明褐色土(小礫を微量に含み、褐色土の混土層)　９．黒褐色土(焼土を微量に含む炭化物層)

第113図　木内遺跡１次Ⅲ区SK001・SK002・SK003（1/40）

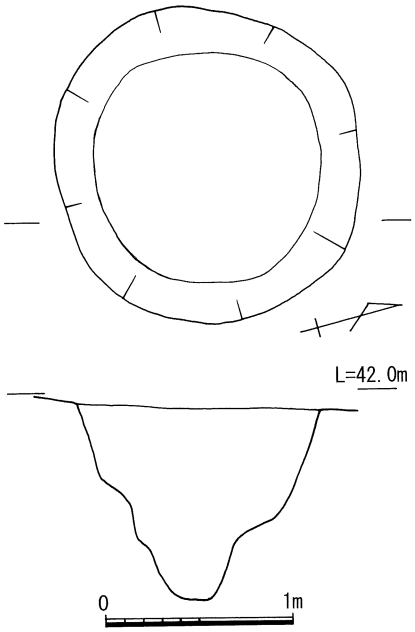
Ⅲ区SK001・SK002・SK003（第113図、写真図版９）

Ⅲ区中央付近から検出された３基の焼土坑である。３基とも別々の遺構であるが、様相が近似し一列に近接して並ぶため、一連の遺構群として、まとめて報告する。SK001は長径68cm、短径54cm、深さ７cm、SK002は長径74cm、短径60cm、深さ30cm、SK003は長径158cm、短径148cm、深さ65cmをそれぞれ測る。３基とも埋土の中心部に焼土を大量に含み、また、それを取り囲むように炭化物もみられる。なお、壁面には焼成のための赤変硬化は確認できなかった。これらの土坑群からは、遺物がほとんどみられず、帰属時期も明確ではない。

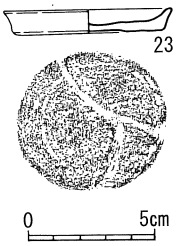
Ⅲ区SK0010（第114図）

Ⅲ区北端付近から検出された土坑である。長径170cm、短径156cm、深さ100cmを測る円形土坑である。埋土は上層の遺物包含層に近似する。

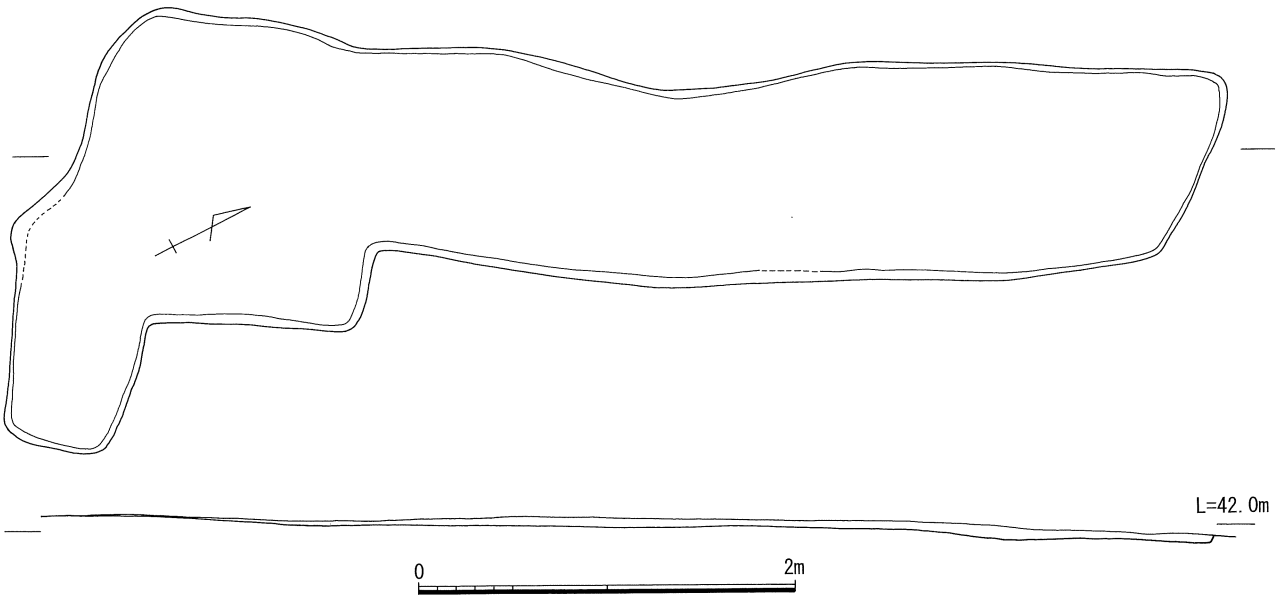
埋土中から少量の土器が出土し、図化できるものを第115図に示した。23は土師質土器小皿であり、底部外面に回転糸切り後、板状圧痕が確認できる。



第114図　木内遺跡１次Ⅲ区SK010（1/40）



第115図　木内遺跡１次Ⅰ区SK010出土遺物（1/3）

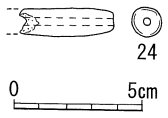


第116図　木内遺跡１次Ⅲ区SX008（1/40）

Ⅲ区SX008（第116図、写真図版９・10）

Ⅲ区中央付近からSX009と並んで検出された土坑である。長軸6.2m、短軸1.1m、深さ６cmを測る隅丸長方形土坑である。土坑としての残存はきわめて悪く、床面のみ残された状態である。埋土は炭化物からなり、土坑の床面が被熱により焼土化している箇所もみられる。遺構の性格として、炭窯である可能性が高い。

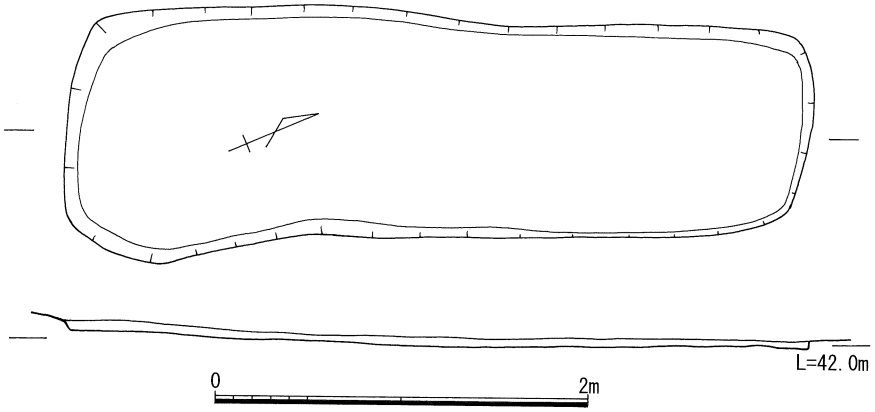
出土遺物はきわめて乏しく、図化できるものは第117図に示した。24は土師質の土錘であり、折損している。混入物であろう。



第117図　木内遺跡１次Ⅲ区SX008出土遺物（1/3）

Ⅲ区SX009（第118図、写真図版９・10）

Ⅲ区中央付近からSX008と並んで検出された土坑である。長軸3.9m、短軸1.2m、深さ６cmを測る隅丸長方形土坑である。土坑としての残存はきわめて悪く、床面のみ残された状態である。埋土は炭化物からなり、土坑の床面が被熱により焼土化している箇所もみられる。遺構の性格として、炭窯である可能性が高い。



第118図　木内遺跡１次Ⅲ区SX009（1/40）

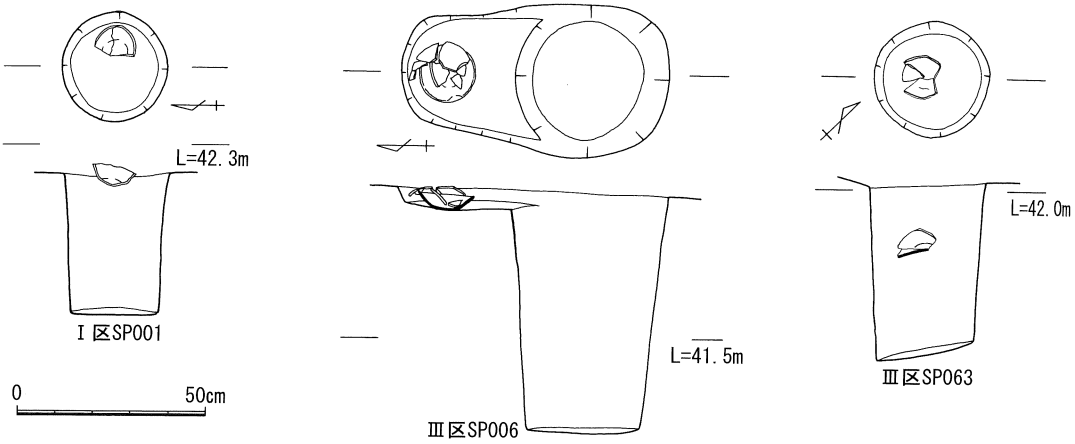
5）ピット

Ⅰ・Ⅲ区全域から170基をこえるピットが検出できた。出土遺物がみられず、帰属時期が不明のものも多いが、中世～近世に営まれたものが多いと思われる。

Ⅰ区SP001（第119図）

Ⅰ区中央南付近から検出されたピットである。径28cm、深さ37cmを測る円形ピットである。

検出面に近い位置で遺物が出土し、第120図に図化した。29は瓦質土器皿であり、外底に回転糸切り後に板状圧痕がみられる。32・34は瓦器椀である。

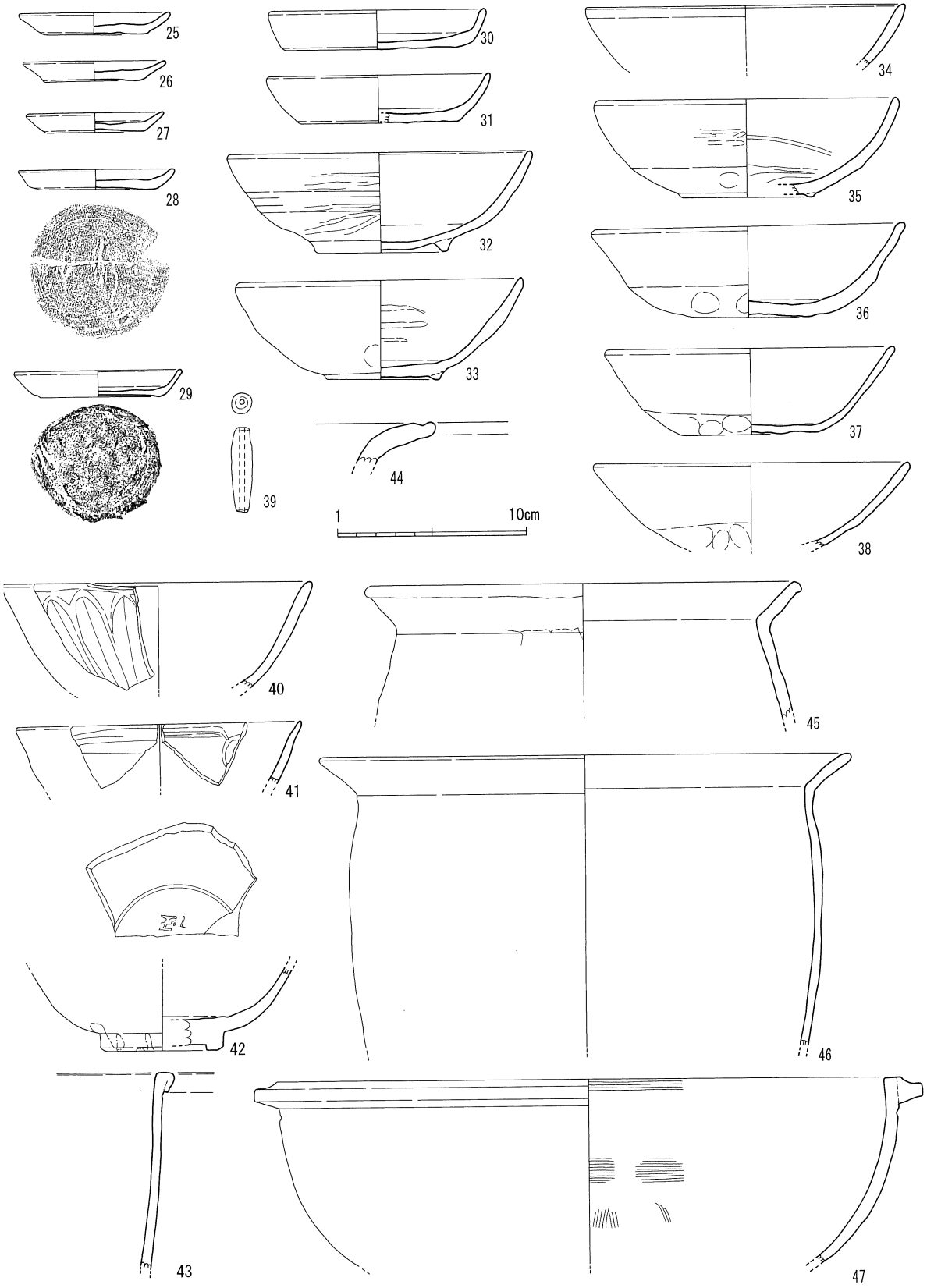


第119図　木内遺跡１次Ⅰ・Ⅲ区ピット（1/20）

Ⅲ区SP006（第119図）

Ⅲ区中央北端から検出されたピットである。２段に掘られたピットであり、２基が切り合っている可能性も残る。径40cm、深さ65cmを測る円形ピット横にさらに深さ５cmのピットがみられる。

浅い面に遺物が出土し、第120図に図化した。37・38は瓦器椀、41は龍泉窯系青磁碗である。



第120図　木内遺跡１次Ⅰ・Ⅲ区ピット出土遺物（1/3）

Ⅲ区SP063（第119図）

Ⅲ区北西部分から検出された円形ピットであり、径30cm、深さ45cmを測る。

遺構中位から遺物が出土し、図化できるものを第120図に示した。25・26・28は土師質土器小皿である。33は瓦器椀である。

ピット出土遺物（第120図、写真図版11）

本文中で遺構を報告したⅠ区SP001・Ⅲ区SP006・Ⅲ区SP063以外のピット出土遺物は下記のとおりである。それぞれの遺物が出土した遺構については、第12表に示した。27は土師質土器小皿である。30・31は土師質土器皿である。35・36は瓦器椀である。36は磨滅がいちじるしいが、高台が貼り付けられていたものであろう。40・42は龍泉窯系青磁碗であり、40には外面に鎬蓮弁文がみえる。44は常滑産陶器甕である。45・46は土師器甕である。47は土師質土器鍋である。

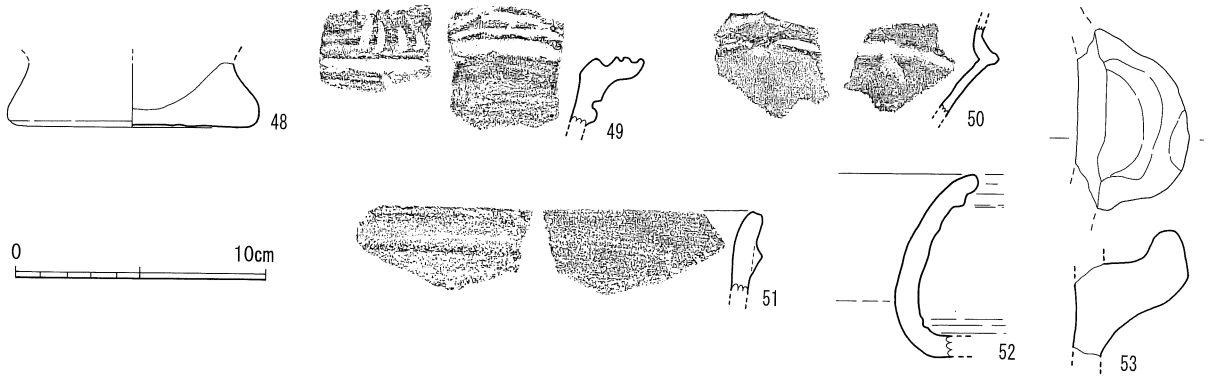
6）包含層・表土出土遺物（第121・122・123図、写真図版11）

遺構群を覆う包含層中および表土からの遺物は第121～123図に示した。

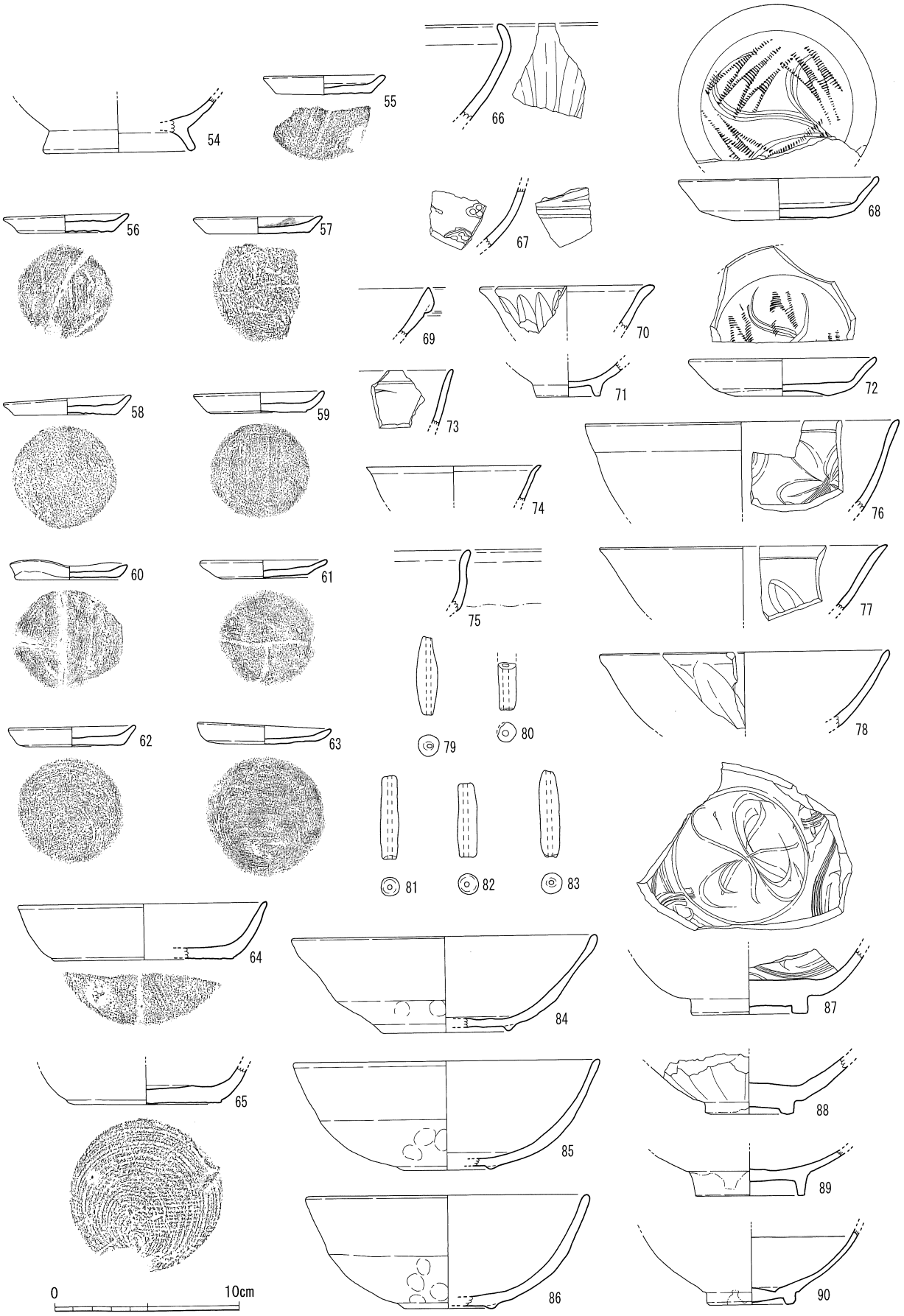
第121図48は縄文土器深鉢底部片である。49は縄文土器鉢口縁部片である。横方向の条痕文がみえる。50は縄文土器深鉢である。51は縄文土器鉢である。52は須恵器甕である。53は土師器甑の取手であろう。

第122図54は土師質土器椀である。55～63は土師質土器小皿、64・65は土師質土器坏である。66・73・76・77・78・87・88は龍泉窯系青磁碗、67は磁器碗である。68・72は同安窯系青磁皿で内底に櫛目文様がみえる。69は白磁玉縁碗である。70・71は龍泉窯系青磁小碗であり、同一個体であろう。外面に鎬蓮弁文がみえる。74は白磁皿、75は瀬戸美濃産天目碗である。79・80・81・82・83は土錘である。84・85・86は瓦器椀である。89・90は白磁碗である。

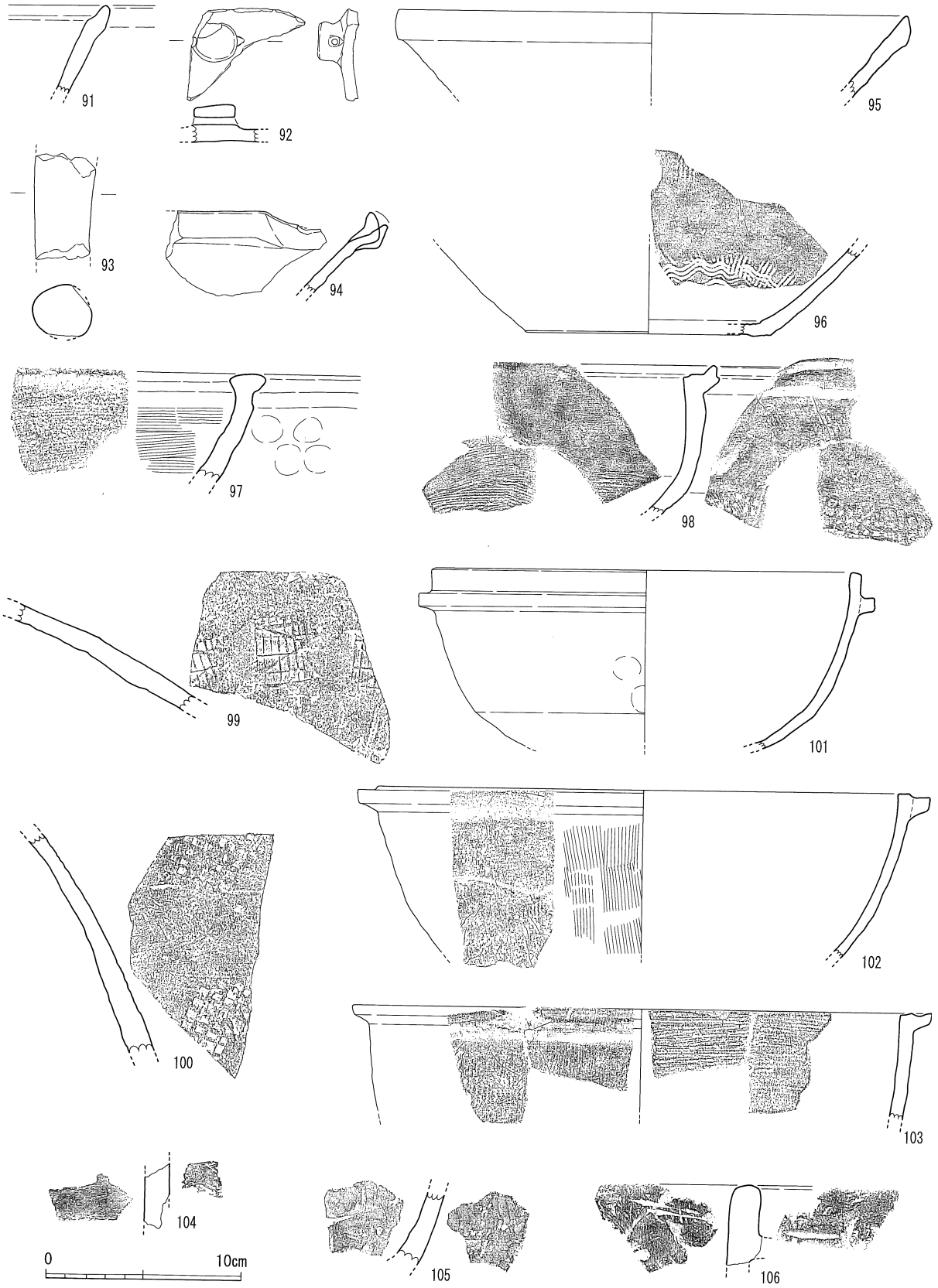
第123図91は瓦質土器鉢である。92瓦質土器の蓋であり、低い円形のツマミに穿孔がみられる。93は土師質土器鍋の脚部である。94・95は東播系須恵器片口鉢である。96は瓦質土器擂鉢である。97は土師質土器鉢である。98・101・102・103は土師質土器鍋である。98には内外面にハケ目がみられ、外底に格子目タタキがみられる。99・100は常滑焼甕であろうか。外面に格子目タタキがみられ、内面はナデ消している。104・105・106は滑石製石鍋片である。



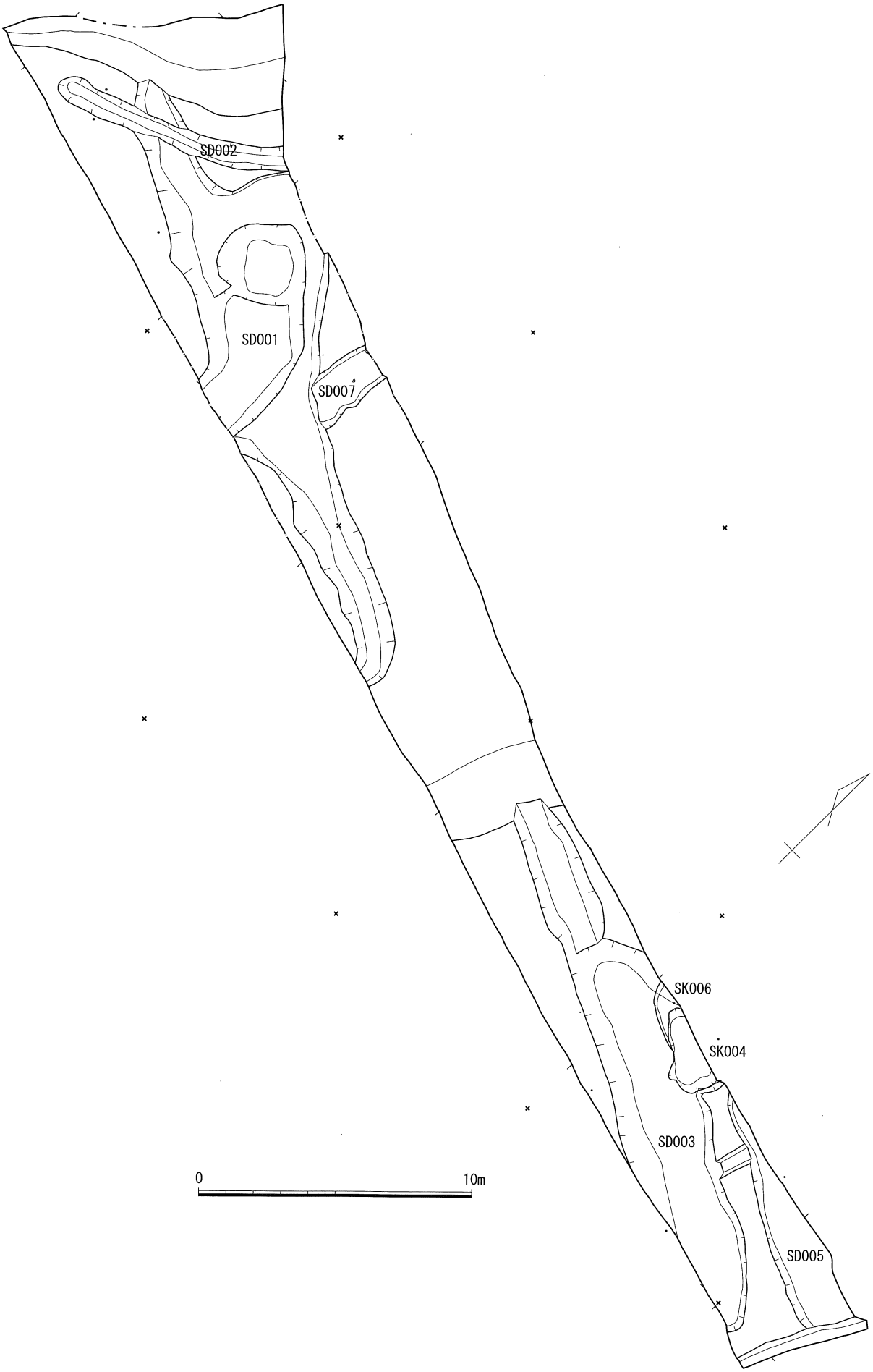
第121図　木内遺跡１次Ⅰ・Ⅲ区包含層・表土出土遺物①（1/3）



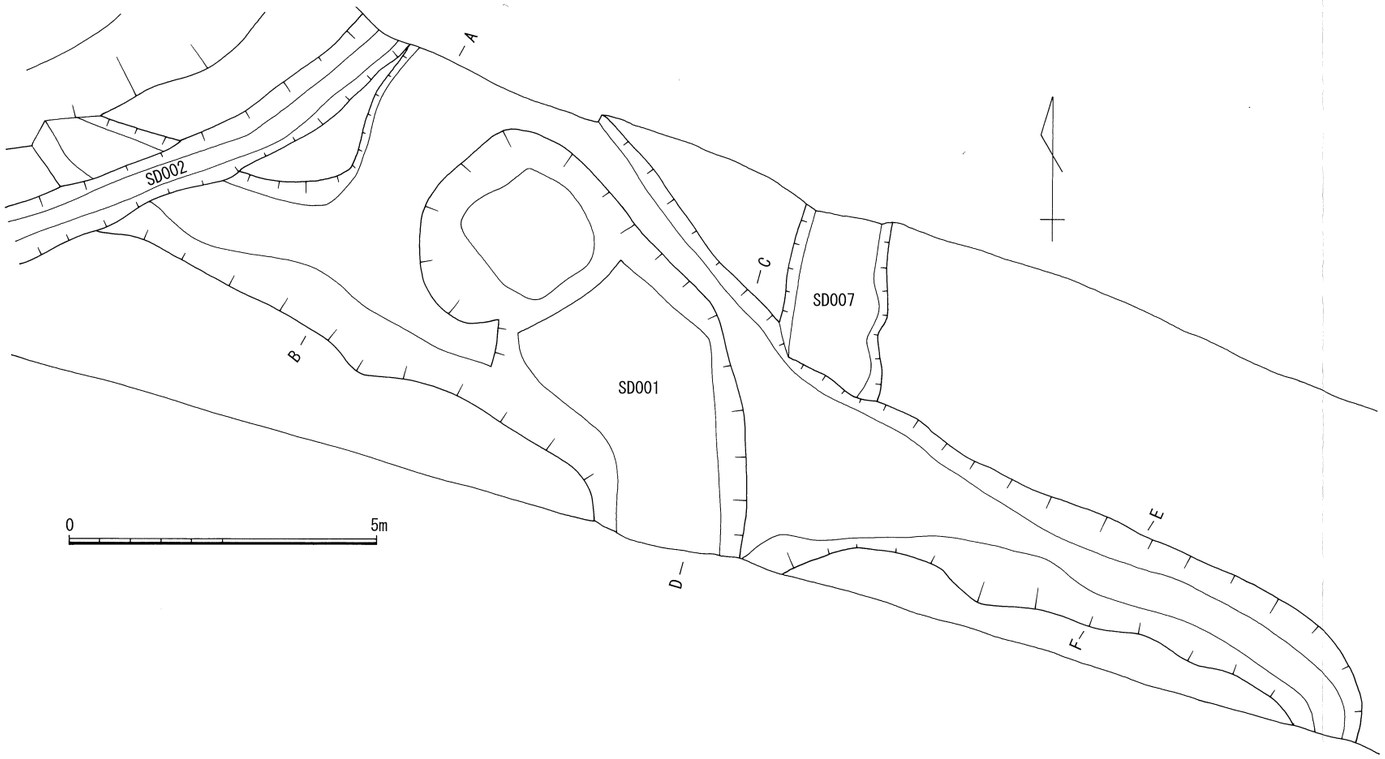
第122図　木内遺跡１次Ⅰ・Ⅲ区包含層・表土出土遺物②（1/3）

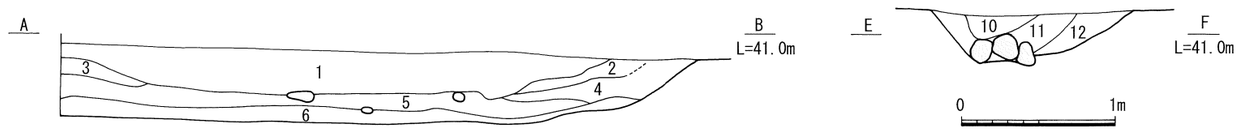


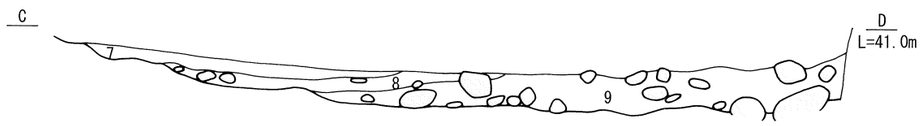
第123図　木内遺跡１次Ⅰ・Ⅲ区包含層・表土出土遺物③（1/3）



第124図　木内遺跡１次Ⅱ区遺構配置図（1/200）







1．灰褐色土（3～20cmの川原石をきわめて多く含む）　2．灰褐色土
3．灰黄褐色土　4．灰黄褐色土（3～10cmの川原石を多く含む）
5．灰黄褐色土（3～10cmの黄褐色土ブロックを少し含む。3～10cmの川原石を多く含む）
6．褐灰色土（3～10cmの川原石を多く含む）　7．にぶい黄褐色土（3～5cmの黄褐色土ブロックを含む）
8．灰黄褐色土（3～10cmの黄褐色土ブロックを少し含む。3～10cmの川原石を少量含む）
9．灰褐色～暗褐色砂質土（3～30cmの川原石を多く含む）　10．灰黄褐色土（3～20cmの川原石を多く含む）
11．灰黄褐色土（5～10cmの川原石を含む）　12．黄灰色土（3～10cmの川原石を多く含む）

第125図　木内遺跡1次Ⅱ区SD001（1/100）

1次（平成21年調査）Ⅱ区

1）溝

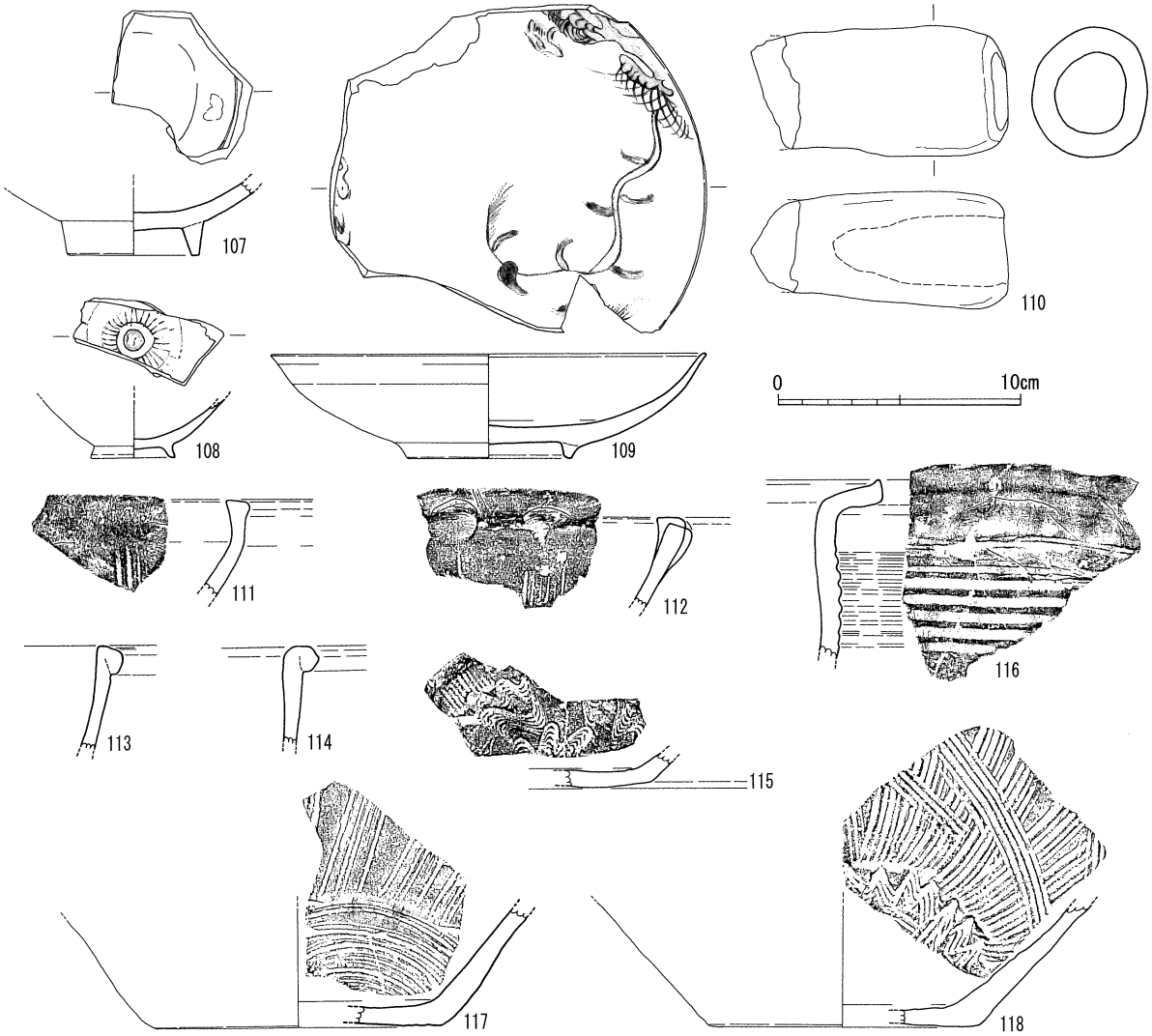
調査区全域から４条の溝が検出できた。形態が不定型のものが多く、調査区外に延びているため、溝の単位が妥当かどうか、今後の調査区外の調査により明確となろうが、仮に下記の遺構として把握しておく。

SD001（第125図、写真図版10）

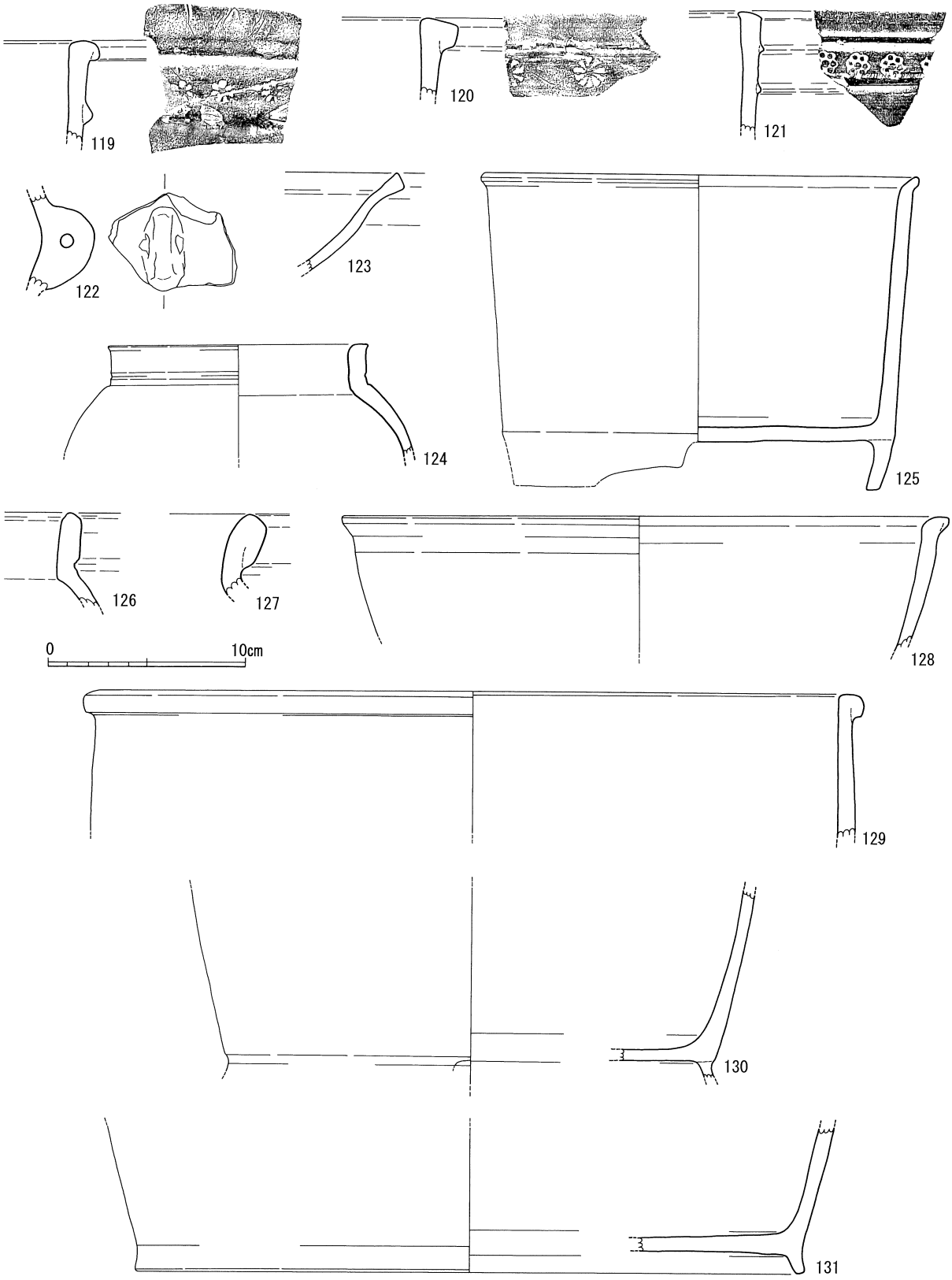
調査区の西側において確認できた不定型に近い溝状遺構である。調査区に北および西に延びる流れと南に２ケ所、延びる流れが確認できた。深さは20～50cm程度であり、一様ではない。地形の傾斜から南東から北東に向かい流下する溝であるが、拳大～人頭大の川原石ががきわめて多く含まれており、川原石で埋めた様相に近い。溝床面および埋土上層から出土する遺物が存在するため、一気に埋め戻された印象をうける。

出土遺物は第126・127図に示した。第126図107は龍泉窯系青磁碗である。108は伊万里産磁器碗であり、内底に朱色の文様がみえる。18世紀後半以降のものであろうか。109は初期伊万里皿である。110は土師質土器鍋の取手である。111・112・115・117・118は瓦質土器擂鉢である。113・114は瓦質土器火鉢、116は瓦質土器甕であろうか。

第127図119・120・121・129・130・131は瓦質土器火鉢である。122は土師質土器鍋の取手である。123は瓦質土器鍋であろうか。124瓦質土器瓶である。125は瓦質土器火鉢である。126・127瓦質土器甕であろうか。128は瓦質土器鉢である。



第126図　木内遺跡１次Ⅱ区SD001出土遺物①（1/3）

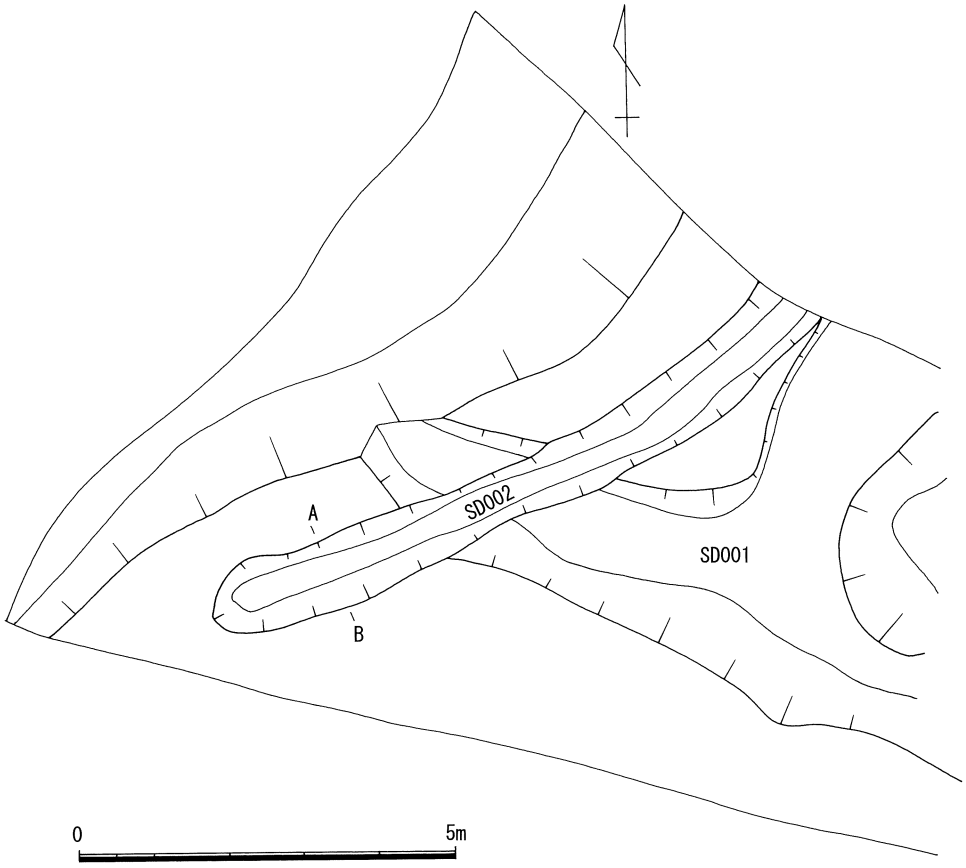


第127図　木内遺跡１次Ⅱ区S001出土遺物②（1/3）

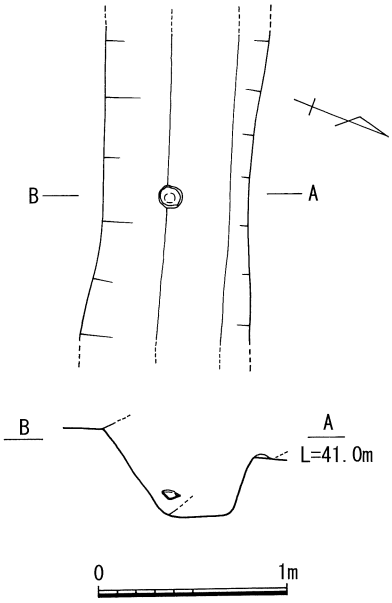
SD002（第125・128図、写真図版10）

調査区の西端において確認できた溝である。河岸段丘の縁辺に地形に平行して走る幅約１m、深さ20～30cmの溝である。溝の西端は終息し、東は調査区外に延びる。出土遺物は少なく、下層から一部を破損した土師質土器坏が出土している。

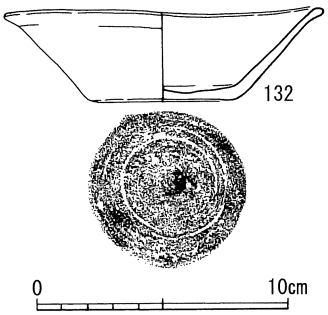
出土遺物は第130図に示した。132は土師質土器坏である。底部がヘラにより切り離されている。



第128図　木内遺跡１次Ⅱ区SD002（1/100）



第129図　木内遺跡１次Ⅱ区SD002遺物出土状態(1/40)



第130図　木内遺跡１次Ⅱ区SD002出土遺物（1/3）

SD003（第131図、写真図版10）

調査区の東側において確認できた東西方向に走る溝である。河岸段丘に営まれた水田の高位箇所である東側においてのみ確認でき、一段下の水田部分の西側においては確認できない。SD005と平行し、北側をSK004・006に切られているため、西に流下する溝と北に延びる箇所が確認できる。この北に延びる部分はSK005合流する可能性が高い。幅2.5m、深さ0.5～1.0cm程度であり、若干、細くなる西側の長さ６m部分の大きさは、幅1.4～2.2m、深さ30～40cmを測る。埋土中には拳大から１mを超える礫で埋め尽くされており、水田開削の際に不必要な礫を埋め込むために掘削された溝である様相をもつ。埋土中から出土する遺物は、上層出土、下層出土のものがしばしば接合するため、埋没した時期差はほとんどないものと思える。

出土遺物は第132図に示した。第132図133は瓦器椀である。134は龍泉窯系青磁皿であり、見込に「福」のスタンプがみられる。135は陶胎染付碗であり、外面に唐草文がみえる。17世紀末～18世紀前葉のものである。136は磁器の蓋である。137は上野高取焼陶器皿である。内外面に藁灰釉が施され、1600～1620年頃のものである。138は染付皿であり、17世紀末～18世紀前葉のものである。139は磁器皿であり、見込に蛇目釉剥ぎがみられる。140は唐津焼皿であり、見込に蛇目釉剥ぎがみられる。1690～1740年代のものである。141は唐津焼現川窯刷毛目碗である。142は唐津焼碗であり、内外面に鉄釉が施されている。17～18世紀のものであろう。143は肥前系陶器碗であり、17世紀末～18世紀前葉のものである。144は唐津焼陶器碗である。17世紀代のものである。145は唐津焼現川窯刷毛目鉢であり、1690～1740年代のものである。

第133図146は土師質土器鉢、147・148・149・150・151・152は瓦質土器鉢である。153・154は瓦質土器鍋である。154は瓦質土器鍋取手、155は瓦質土器鍋足である。156・157・158・160は瓦質土器擂鉢である。159は瓦質土器こね鉢である。

第134図161は土師質土器鍋である。162・163・164・166・167は瓦質土器火鉢、165・173・174・175・176は瓦質土器鉢である。168・169・170・172は瓦質、171は土師質の甕である。

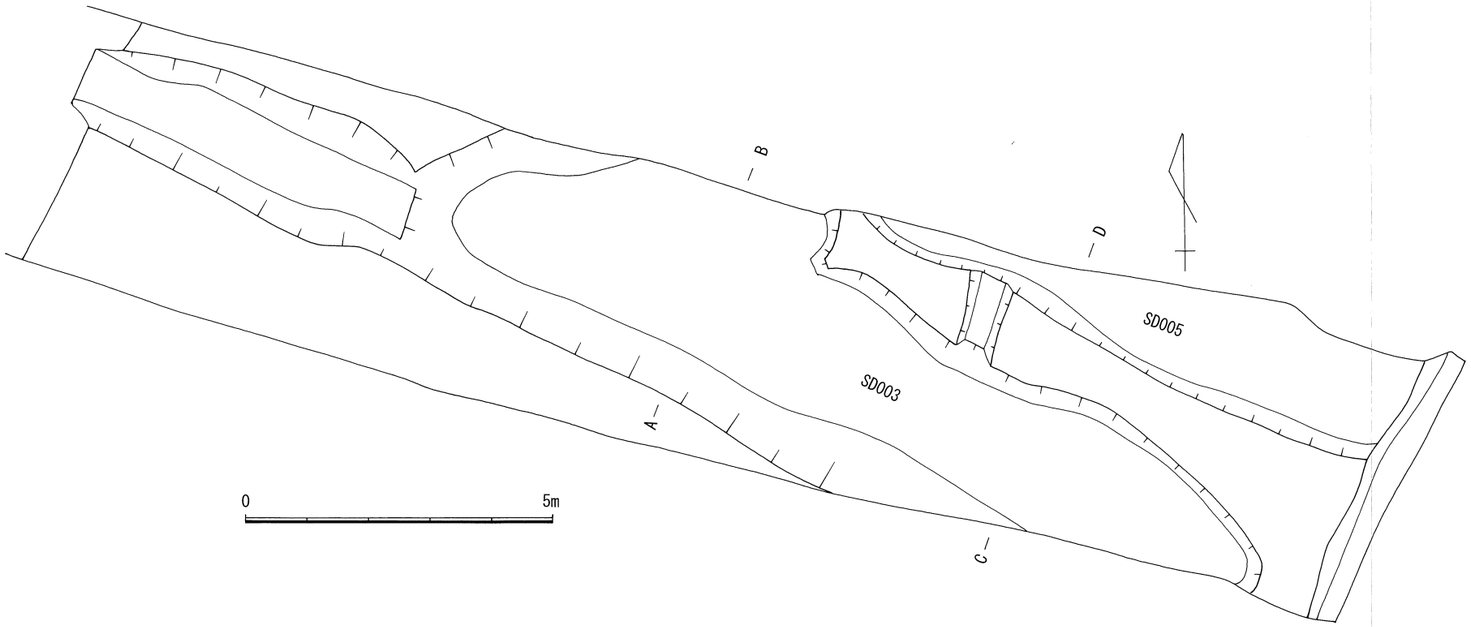
第135図177・178・179・180は瓦質土器火鉢である。181は瓦質土器甕である。

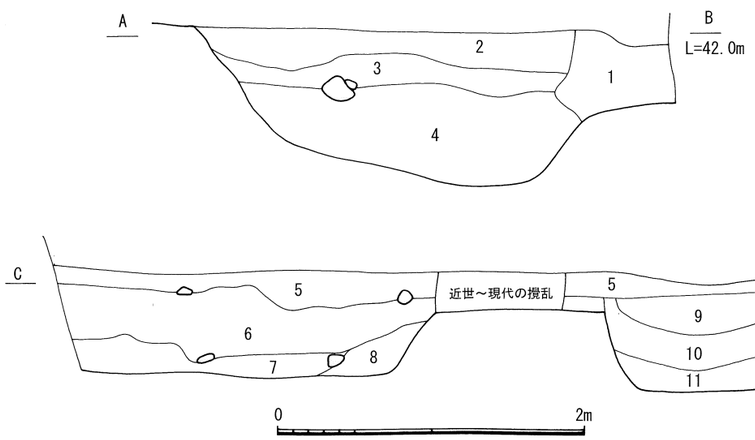
第136図182・184は瓦質土器甕、183は瓦質土器火鉢である。

第137図185・186・187・188は石臼上臼、189は石臼下臼である。いずれも安山岩製で主溝により６区画されたものと考えられ、１区画には185は４本、186は５本、187は６本、188は５～６本、189は４～５本の副溝が彫られている。

第138図190・191は平瓦である。190の凹面に布目痕、凸面に縄目のタタキ痕がみられる。古代瓦の混入であろう。

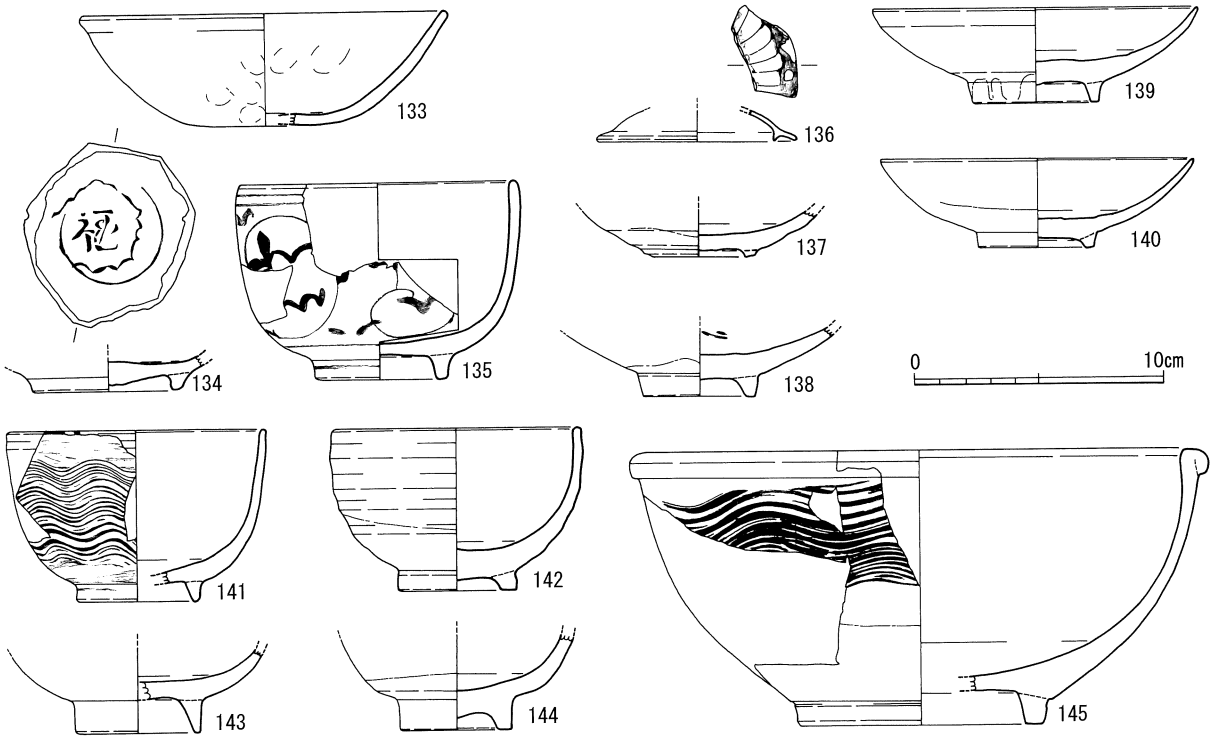
第139図192は寛永通宝文銭である。



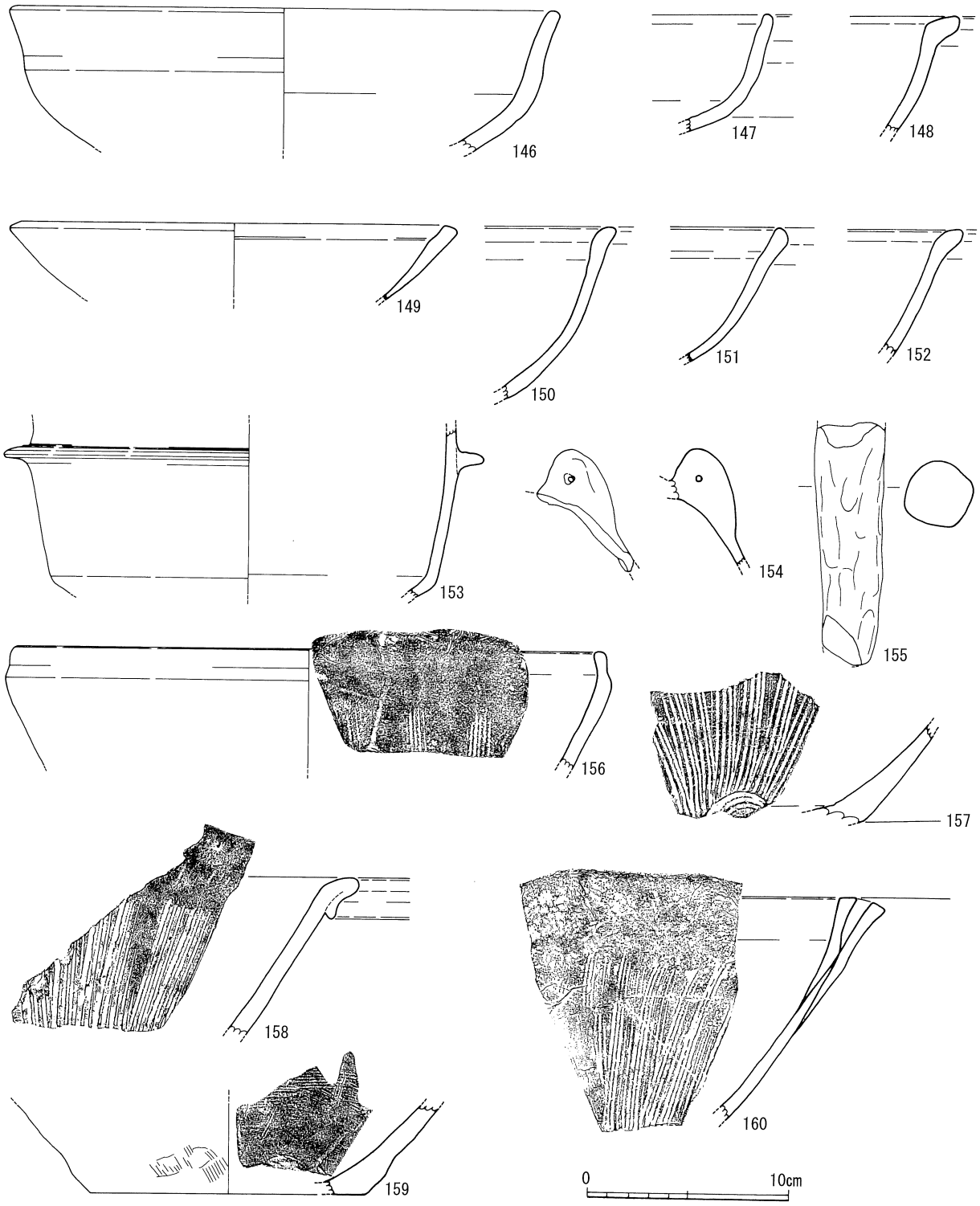


1．10～25cmの川原石層　2．にぶい褐色土（３～25cmの川原石をきわめて多く含む）
3．褐色土（１～２cmの焼土・１～３mmの白色礫・５cmの川原石を含む）
4．暗褐色粘質土（大石を含む）　5．にぶい褐色土（１～２mmの焼土・白色礫を多量に含む。２～10cmの川原石を含む）
6．褐色土（１～２mmの焼土・白色礫を多量に含む。５～25cmの川原石を含む）　7．褐色土（大石を含む）
8．褐色粘土　9．灰褐色土（１cmの焼土を微量に含む。５～20cmの川原石を含む）
10．褐色土（１cmの焼土を微量に含む。５～20cmの川原石を含む）　11．褐色粘質土

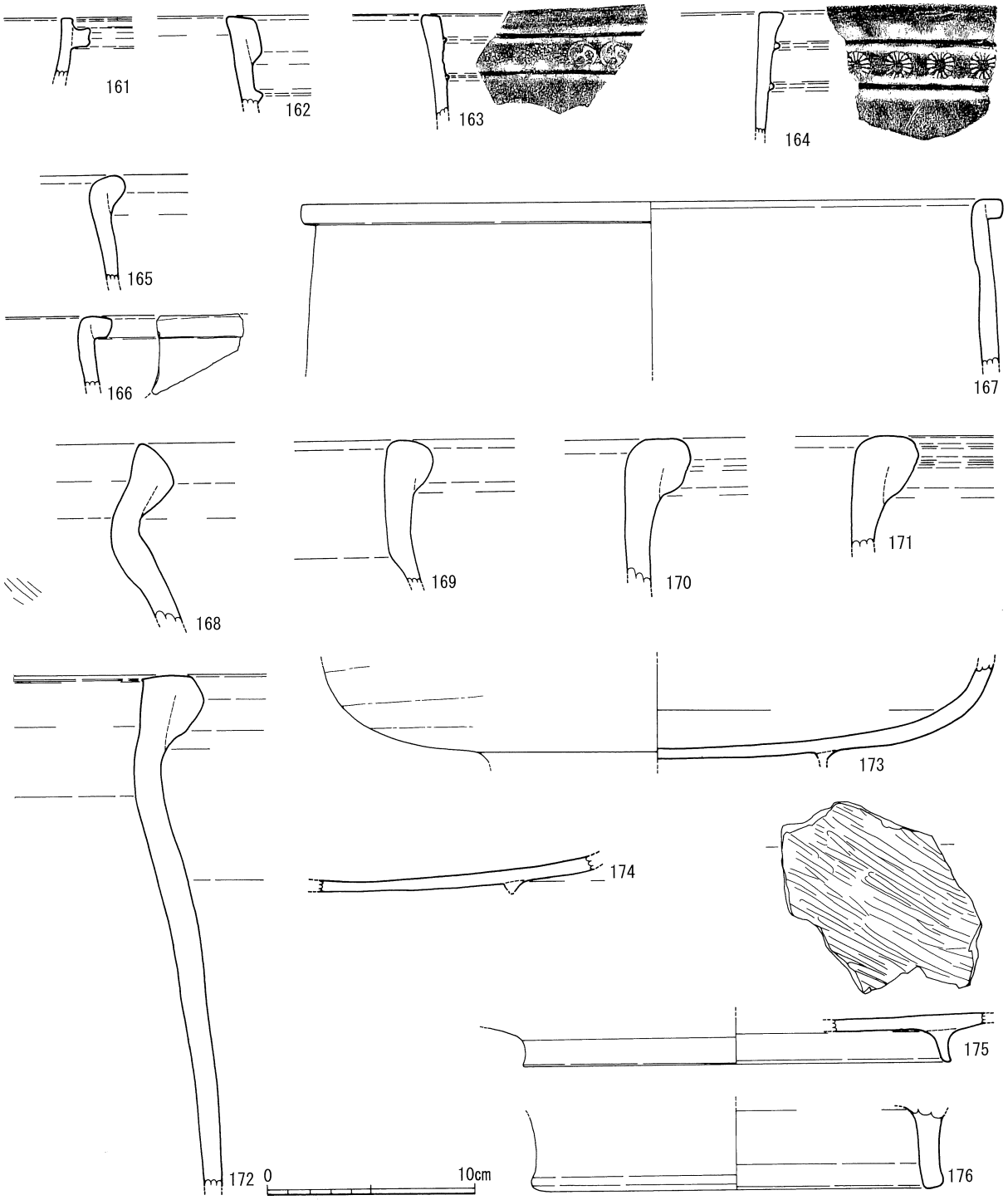
第131図　木内遺跡１次Ⅱ区SD003・SD005（1/100）



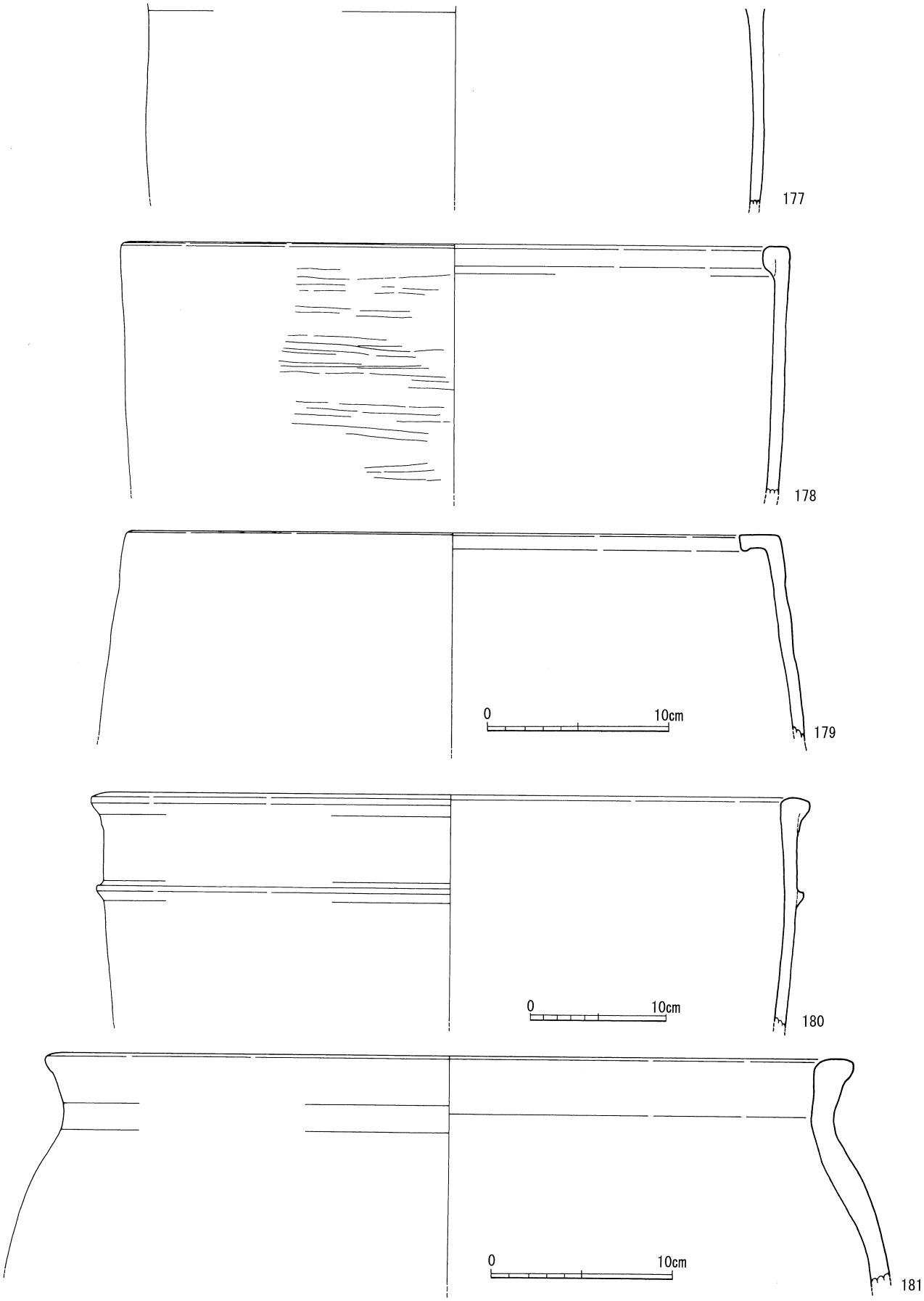
第132図　木内遺跡１次Ⅱ区SD003出土遺物①（1/3）



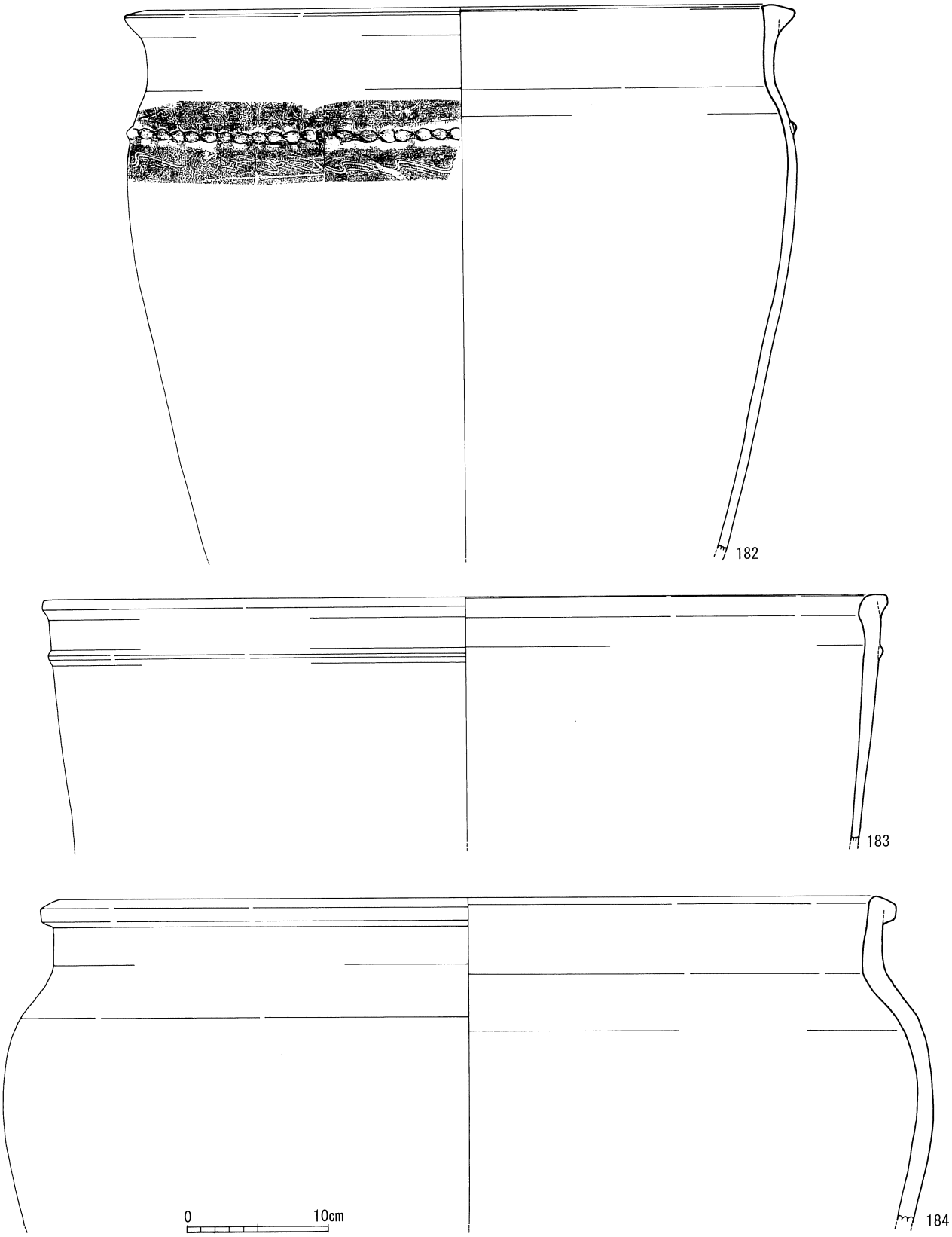
第133図　木内遺跡１次Ⅱ区S003出土遺物②（1/3）



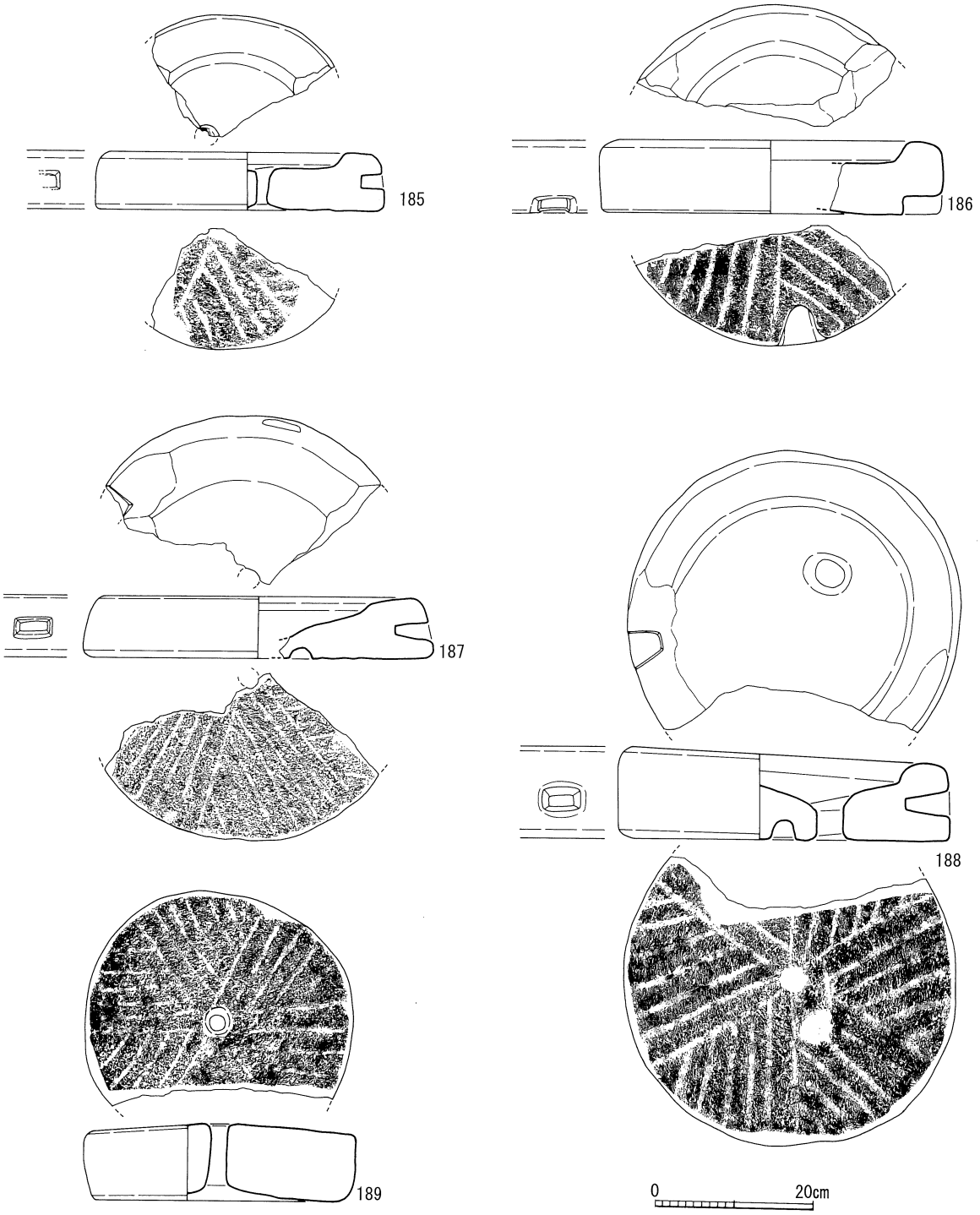
第134図　木内遺跡１次Ⅱ区S003出土遺物③（1/3）



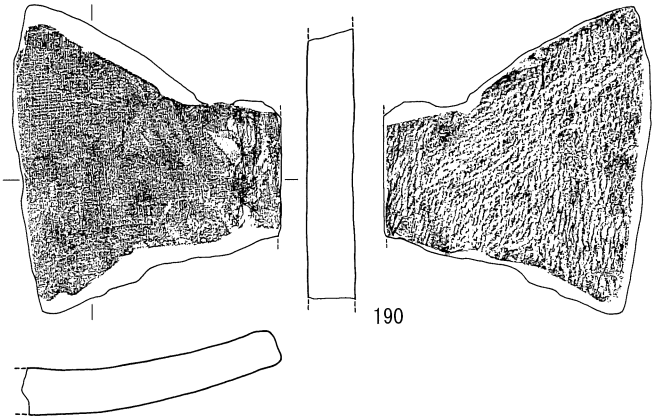
第135図　木内遺跡１次Ⅱ区S003出土遺物④（1/3・1・4）

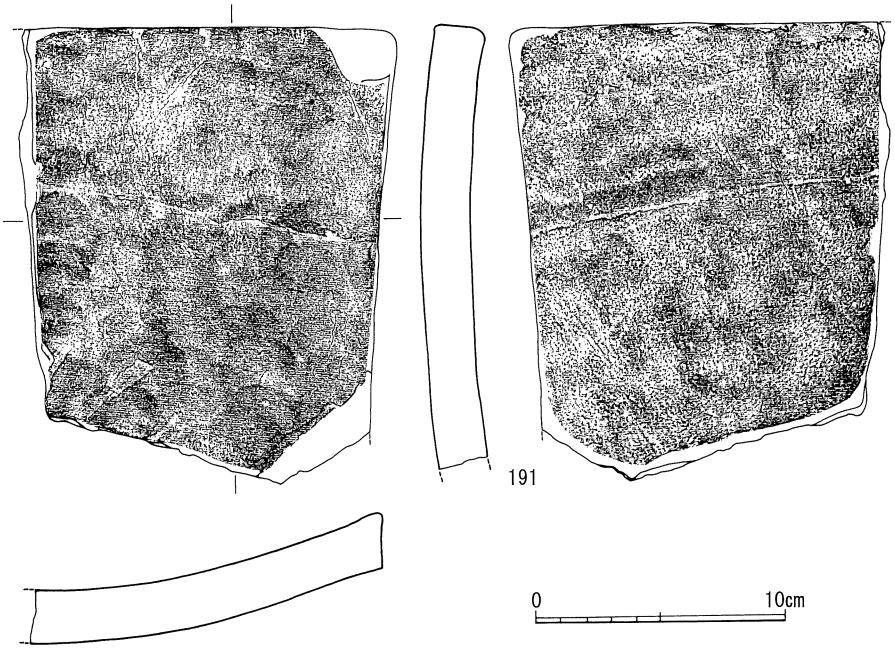


第136図　木内遺跡１次Ⅱ区S003出土遺物⑤（1/4）

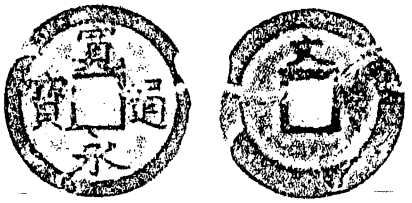


第137図　木内遺跡１次Ⅱ区S003出土遺物⑥（1/8）





第138図　木内遺跡１次Ⅱ区S003出土遺物⑦（1/3）



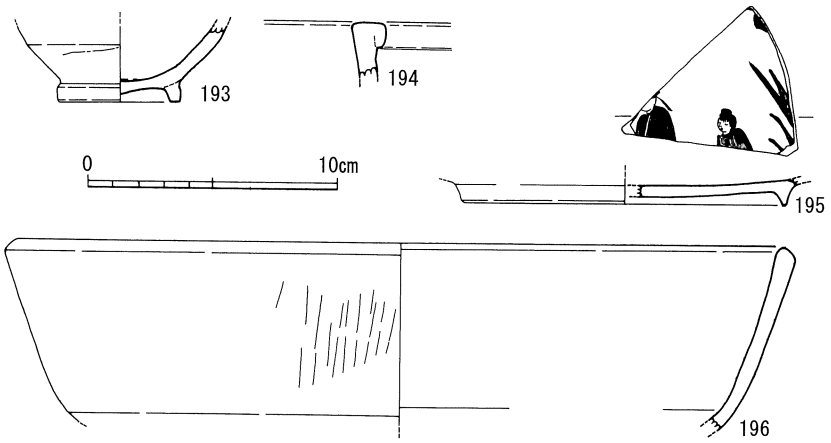
第139図　木内遺跡１次Ⅱ区S003出土遺物⑧（1/1）

SD005（第131図、写真図版10）

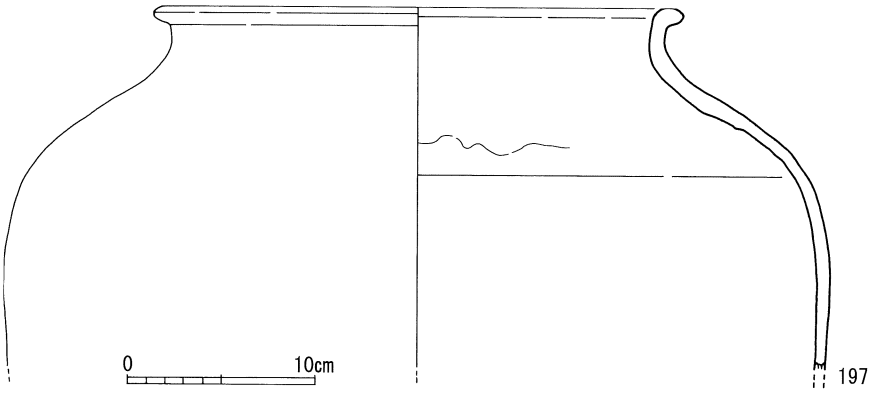
調査区の東側において確認できた東西方向に走る溝である。河岸段丘に営まれた水田の高位箇所である東側においてのみ確認でき、一段下の水田部分の西側においては確認できない。SD003と平行し、南側肩部のみが調査区に確認できた。西はSD003と合流する可能性が高い。深さは確認できている場所で60cm程度であり、埋土中にはSD003と同じく礫で埋め尽くされており、水田開削の際に不必要な礫を埋め込むために掘削された溝である様相をもつ。埋土中から出土する遺物は、上層出土、下層出土のものがしばしば接合するため、埋没した時期差はほとんどないものと思える。

出土遺物は第140・141図に示した。第140図193は唐津産陶器碗であり、土灰釉がかけられている。194は瓦質土器火鉢、196は瓦質土器鉢である。195は肥前産染付皿である。

第141図197は瓦質土器甕である。



第140図　木内遺跡１次Ⅱ区SD005出土遺物①（1/3）



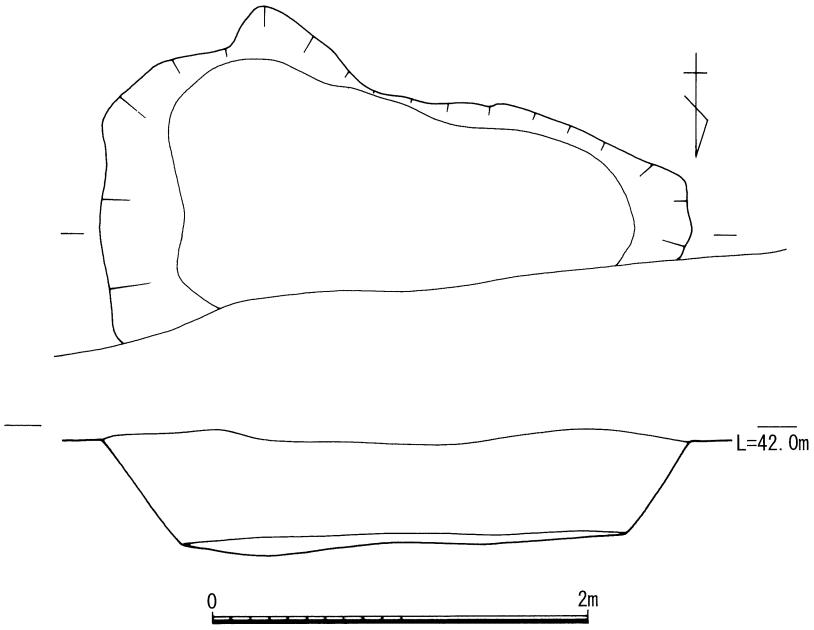
第141図　木内遺跡１次Ⅱ区SD005出土遺物②（1/4）

2）土坑

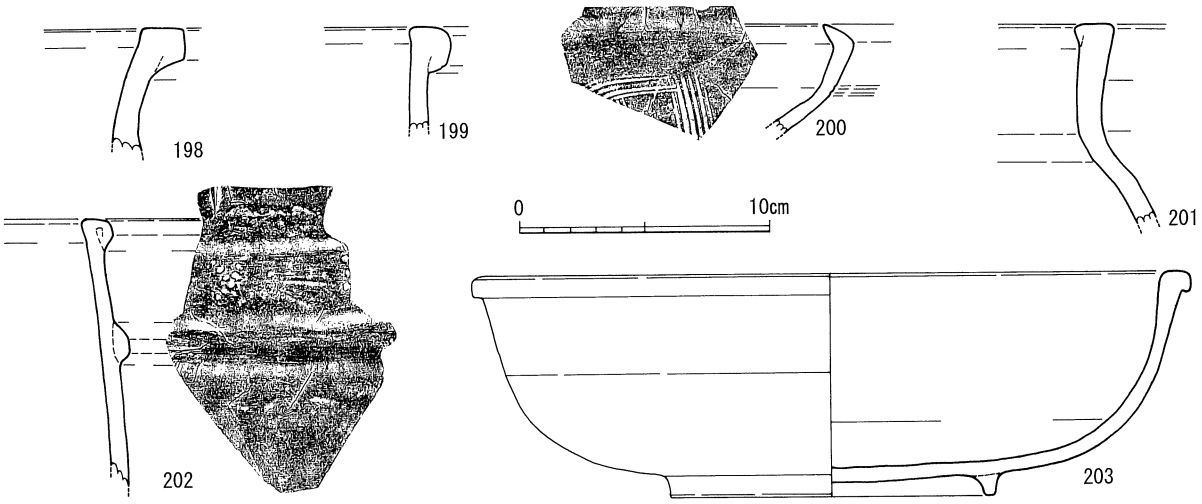
SK004（第142図、写真図版10）

調査区の東側において確認できた土坑である。SD003埋没後に掘削された長径３ｍを測る不定型の土坑であり、北側プランは調査区外に延びている。最深部は深さ50cmを測り、埋土は拳大の礫で埋め尽くされ、礫中から遺物が出土している。

出土遺物は第143図に示した。198・199は瓦質土器鉢であろうか。200は瓦質土器擂鉢である。口縁を２段に屈曲させ巻き込む特異な形態をもつ。201は瓦質土器甕であろうか。202は瓦質土器火鉢である。203は瓦質土器鉢である。



第142図　木内遺跡１次Ⅱ区SK004（1/40）



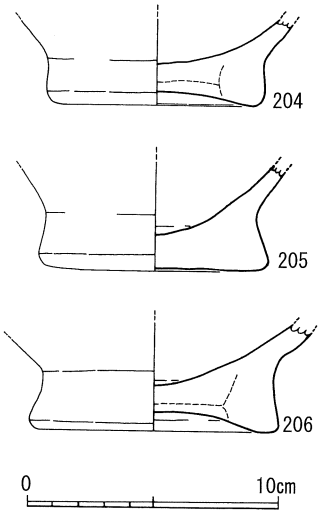
第143図　木内遺跡１次Ⅱ区SK004出土遺物（1/3）

3）包含層・表土出土遺物（第144・145図）

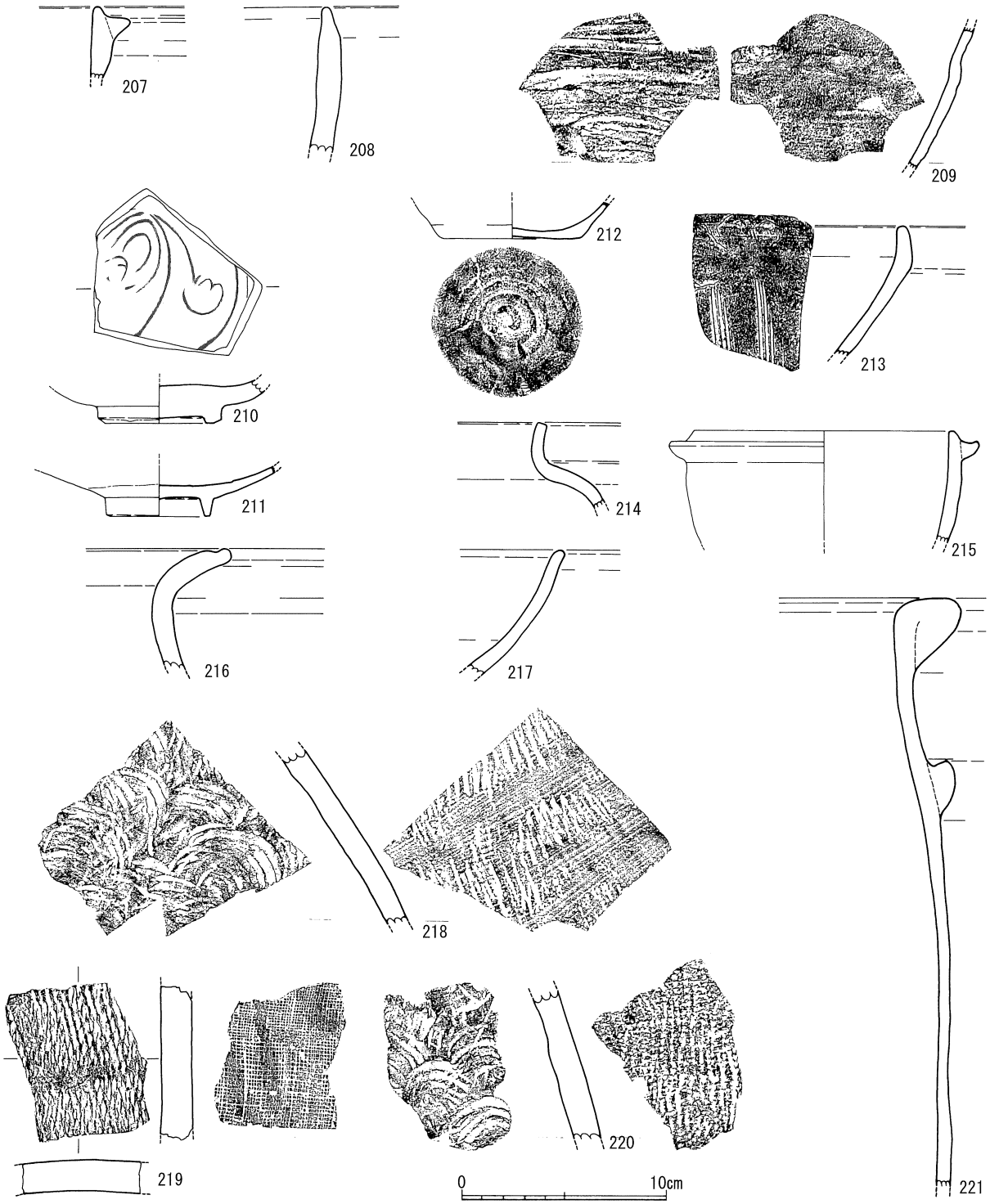
調査区西側において縄文時代の包含層が確認できた。溝状を呈していたため、SD007として遺物の取り上げを行ったが、地形の落ち込みに堆積した包含層であると認識すべきであろう。

いずれも縄文土器のみからなる包含層であり、図化しうるもののみ第144図に示した。204・205・206は縄文土器深鉢の底部片である。

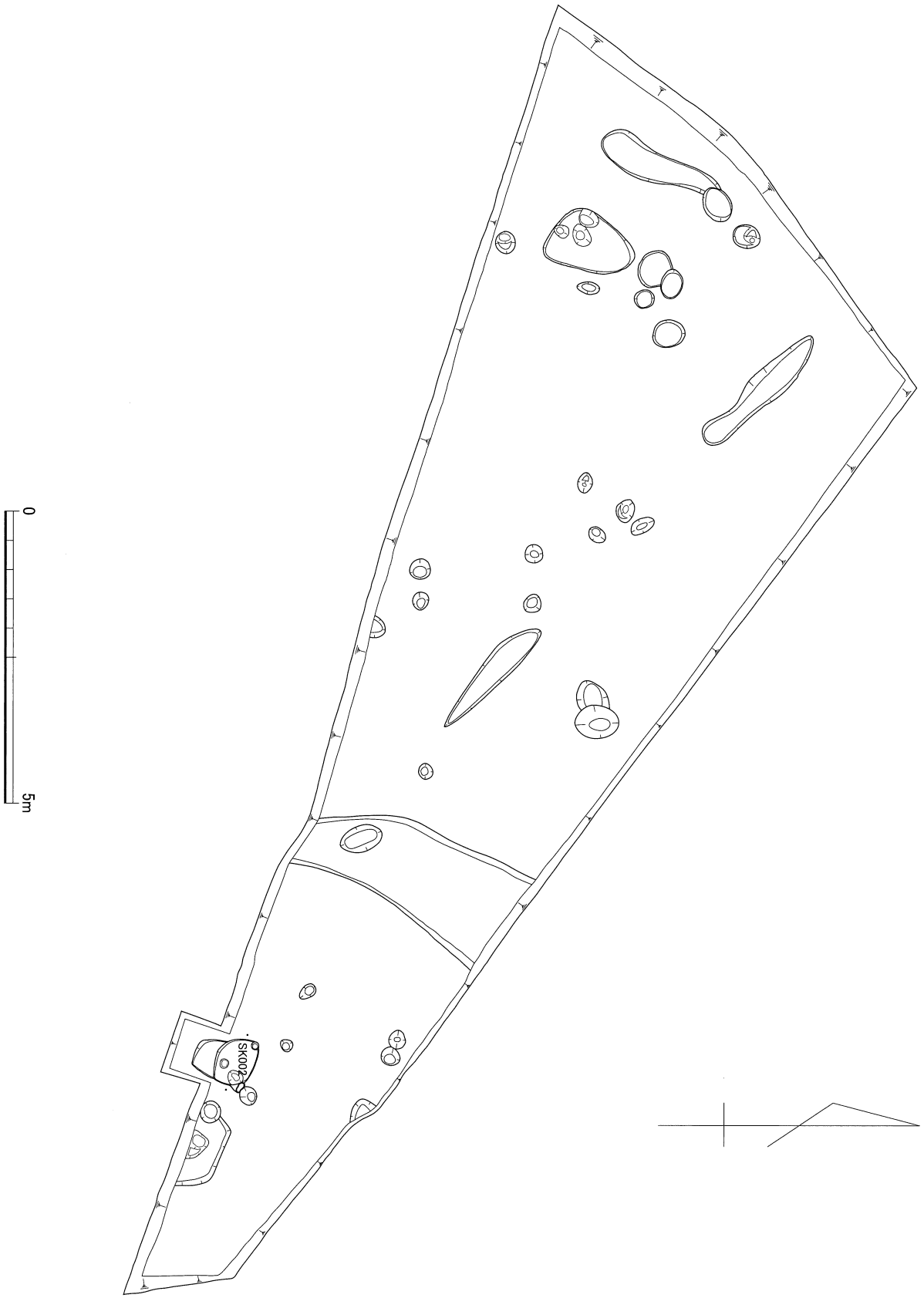
Ⅱ区全体の包含層表土中から出土した遺物は第145図に示した。207は土師質土器鍋である。208は縄文土器深鉢である。209は縄文土器深鉢であり、外面に貝殻条痕文がみられる。210は龍泉窯系青磁碗であり、見込みに片切彫りがみられる。211は皿であり、見込み部に蛇の目の釉剥ぎがみられる。212は土師質土器坏であり、底部はヘラにより切り離されている。213は土師質土器擂鉢である。214は瓦質土器壺である。215は土師質土器鍋である。216は常滑焼甕、217は土師質土器鉢、221は土師質土器甕である。218・220は須恵器甕である。219は平瓦であり、凹面に布目痕、凸面に縄目のタタキ痕がみられる。



第144図　木内遺跡１次Ⅱ区縄文時代包含層出土遺物（1/3）



第145図　木内遺跡１次Ⅱ区出土遺物（1/3）



第146図　木内遺跡２次遺構配置図（1/100）

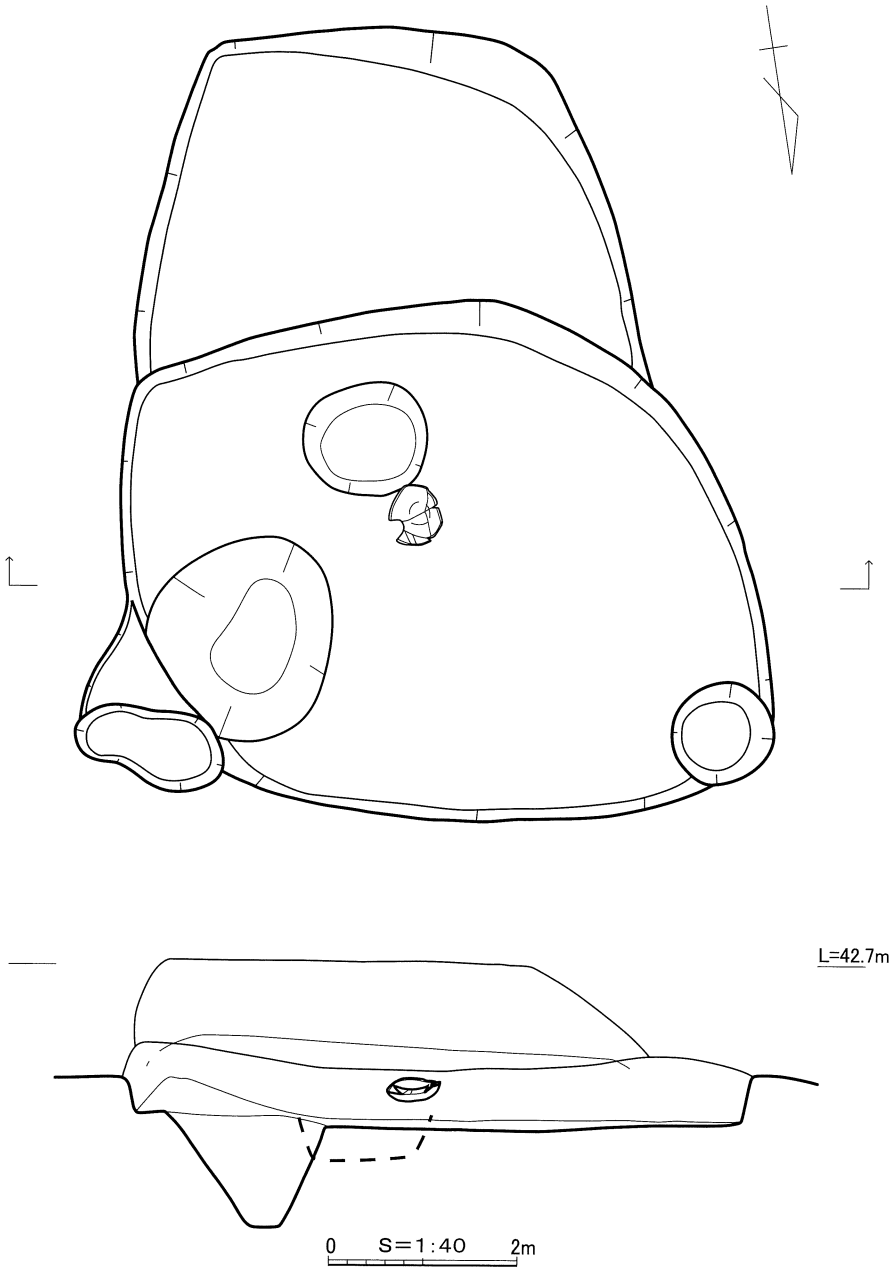
２次（平成24年度調査）

１）土坑

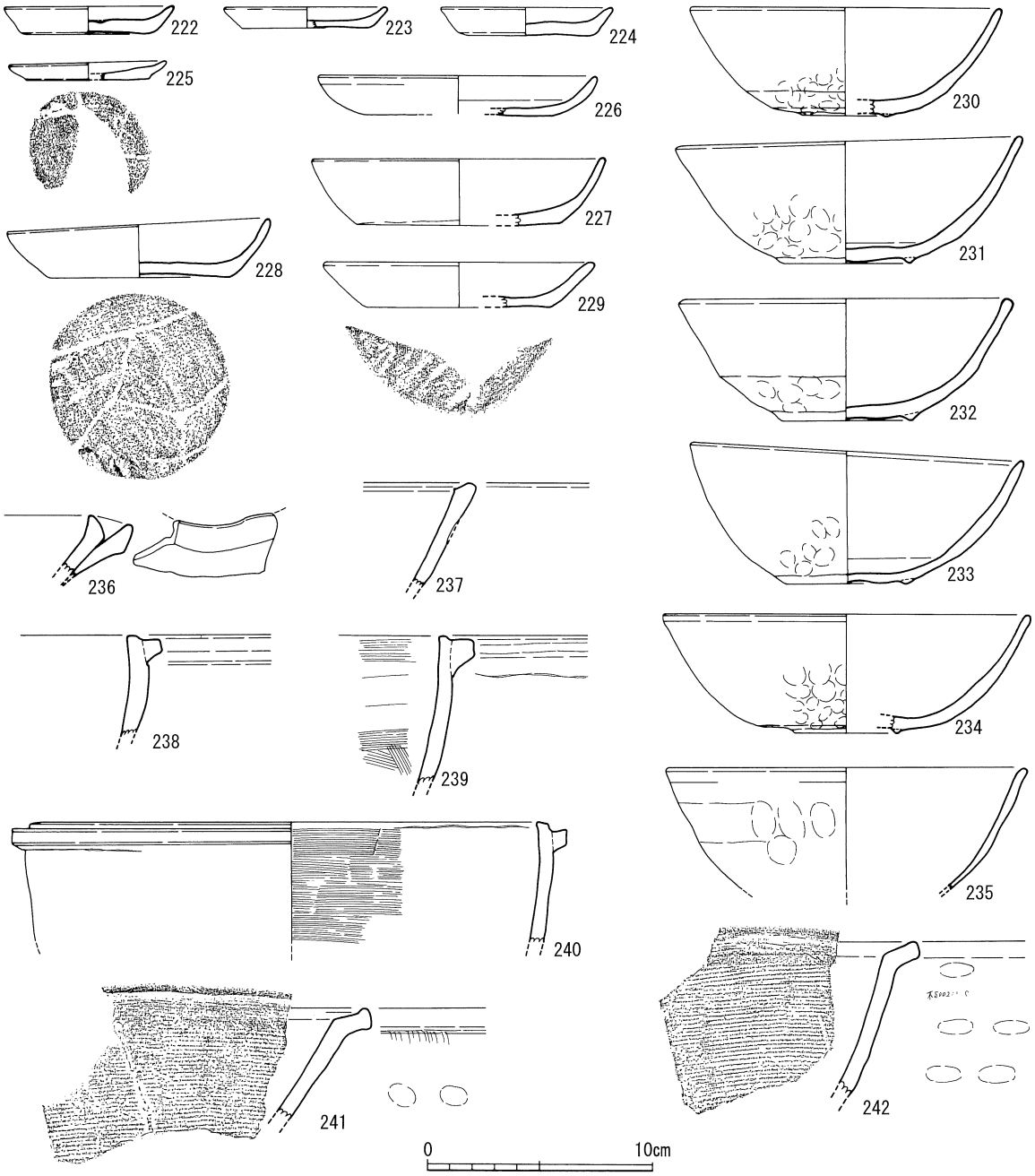
SK002（第147図、写真図版10）

調査区南西端から検出された土坑である。長径160cm、短径140cm、深さ15cmを測る長楕円形土坑である。土坑内にさらに、ピット状の遺構が３箇所で確認できた。遺物は比較的まとまりをもち出土したが、弥生時代終末～古墳時代の遺物は埋土中に混入したもので、この土坑に伴うものではないと判断できる。

出土遺物は第148・149・150図に示した。第148図222・223・224・225は土師質土器小皿、226・227・228・229は土師質土器坏である。228・229には底部に回転糸切り後に板状圧痕がみられる。230・231・232・233・234・235は瓦器椀であり、いずれも高台を小さく貼り付けている。236は東播系須恵器片口鉢である。237・238・239・240・241・242は土師質土器鍋である。



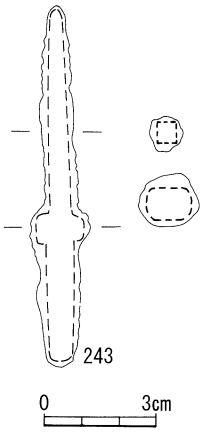
第147図　木内遺跡２次SK002（1/20）



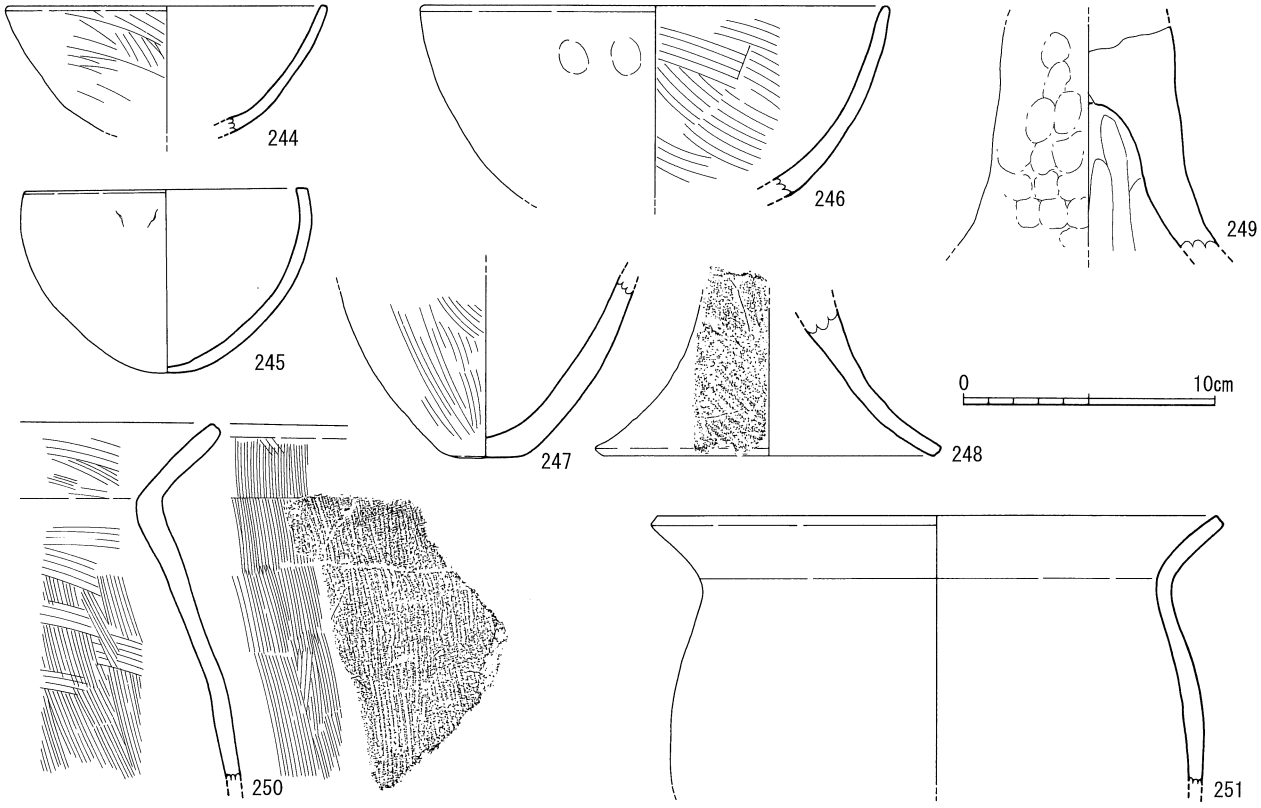
第148図　木内遺跡２次SK002出土遺物①（1/3）

第149図243は用途不明の鉄製品である。断面形は方形であり、先細りの形態をもち、中位にやや幅広の断面長方形の部位が確認できる。

第150図はSK002出土遺物であるが、SK002出土遺物うち、主要なものが14世紀代におさまるため、これらは埋土中に混入したものと理解すべきであろう。244・245・246は土師器鉢である。247は弥生土器甕、248は台付鉢の脚部であろう。249は高坏の脚部であろうか。厚みがあり、造りも雑である。250・251は土師器甕である。



第149図　木内遺跡２次SK002出土遺物②（1/2）



第150図　木内遺跡２次SK002出土遺物③（1/3）

第12表　木内遺跡出土遺物観察表（土器）①

図版番号	遺物番号	写真図版番号	種類	器形	生産地	法量（cm）（　）は復元径			遺構名
						口径	底（高台）径	器高	
106	1		口禿白磁	皿			(5.8)		1次Ⅲ区SE005
	2		瓦質土器						1次Ⅲ区SE005
110	4		鉄釉陶器	天目碗	唐津	(9.4)			1次Ⅲ区SD004
	5		鉄釉陶器	天目碗	唐津		4.6		1次Ⅲ区SD004
	6		陶器	高台付碗	肥前		4.8		1次Ⅲ区SD004
	7		磁器	高台付碗	肥前		(5.0)		1次Ⅲ区SD004
	8		青磁	蓋		(6.0)			1次Ⅲ区SD004
	9		瓦質土器	鉢					1次Ⅲ区SD004
	10		瓦質土器	火鉢？					1次Ⅲ区SD004
	11		瓦質土器	火鉢？					1次Ⅲ区SD004
112	12		土師質土器	小皿		7.8	5.8	1.0	1次Ⅲ区SK007
	13		土師質土器	小皿		(7.6)	(5.6)	1.2	1次Ⅲ区SK007
	14		土師質土器	小皿		8.3	5.6	1.2	1次Ⅲ区SK007
	15		青磁	碗	龍泉窯	(8.8)	(3.6)	4.7	1次Ⅲ区SK007
	16		土師質土器	坏		(11.6)	(7.6)	2.2	1次Ⅲ区SK007
	17		土師質土器	坏		(12.0)	8.1	2.4	1次Ⅲ区SK007
	18		土師質土器	坏		(14.4)	(10.4)	2.2	1次Ⅲ区SK007
	19		青磁	碗	龍泉窯		(6.0)		1次Ⅲ区SK007
	20		瓦器	椀		(15.6)	(6.8)	5.3	1次Ⅲ区SK007
	21		瓦質土器	鉢			(10.0)		1次Ⅲ区SK007
115	23		土師質土器	小皿		6.6	6.0	1.0	1次Ⅲ区SK010
120	25		土師質土器	小皿		7.9	5.6	1.1	1次Ⅲ区SP063
	26		土師質土器	小皿		7.5	5.0	1.0	1次Ⅲ区SP063
	27		土師質土器	小皿		(7.2)	(5.2)	1.0	1次Ⅲ区SP074
	28		土師質土器	小皿		8.1	6.7	1.0	1次Ⅲ区SP063
	29		土師質土器	小皿		8.6	6.2	1.4	1次Ⅰ区SP001
	30		土師質土器	坏		11.5	2.0	9.7	1次Ⅲ区SP066
	31		土師質土器	坏		(11.8)	(8.4)	2.5	1次Ⅲ区SP069
	32		瓦器	椀		(15.9)	7.0	5.3	1次Ⅰ区SP001
	33	11-2	瓦器	椀		15.1	5.9	5.2	1次Ⅲ区SP063
	34		瓦器	椀		(16.6)			1次Ⅰ区SP001
	35		瓦器	椀		15.1	5.9	5.2	1次Ⅲ区SP077
	36		瓦器	椀		16.4		4.7	1次Ⅲ区SP052
	37	11-1	瓦器	椀		15.2		4.5	1次Ⅲ区SP006
	38		瓦器	椀		16.6			1次Ⅲ区SP006
	40	11-3	青磁	碗	龍泉窯	(16.2)			1次Ⅲ区SP070
	41		青磁	碗	龍泉窯	(15.0)			1次Ⅲ区SP006
	42		青磁	碗	龍泉窯			(5.8)	1次Ⅲ区SP073
	43		瓦質土器	鉢					1次Ⅰ区SP001
	44		陶器	甕	常滑				1次Ⅲ区SP059
	45		土師器	甕		(22.2)			1次Ⅲ区SP018
	46		土師器	甕		(28.0)			1次Ⅲ区SP027
	47		土師質土器	鍋		(31.0)			1次Ⅲ区SP070
121	48		縄文土器	深鉢					1次Ⅲ区包含層
	49		縄文土器	鉢					1次Ⅲ区包含層
	50		縄文土器	深鉢					1次Ⅲ区包含層
	51		縄文土器	鉢					1次Ⅲ区包含層
	52		須恵器	甕					1次Ⅲ区包含層
	53		土師器	甑					1次Ⅲ区包含層
122	54		土師質土器	碗			(8.2)		1次Ⅲ区包含層
	55		土師質土器	小皿		(6.6)	(5.2)	1.0	1次Ⅲ区包含層
	56		土師質土器	小皿		6.7	5.0	1.0	1次Ⅲ区包含層
	57		土師質土器	小皿		(7.0)	(5.6)	0.9	1次Ⅲ区包含層
	58		土師質土器	小皿		6.8	5.4	1.1	1次Ⅲ区包含層
	59		土師質土器	小皿		7.1	5.4	1.1	1次Ⅲ区包含層
	60		土師質土器	小皿		6.2	5.4	1.0	1次Ⅲ区包含層
	61		土師質土器	小皿		6.9	4.7	1.0	1次Ⅲ区包含層
	62		土師質土器	小皿		6.8	5.0	1.0	1次Ⅲ区包含層
	63		土師質土器	小皿		7.4	5.9	1.2	1次Ⅲ区包含層
	64		土師質土器	坏		(13.4)	(9.6)	3.0	1次Ⅲ区包含層
	65		土師質土器	坏			8.2		1次Ⅲ区包含層
	66		青磁	碗	龍泉窯				1次Ⅲ区包含層
	67		磁器	碗					1次Ⅲ区表土
	68		青磁	皿	同安窯	8.8	5.0	2.3	1次Ⅲ区包含層
	69		白磁	碗					1次Ⅲ区包含層

第13表　木内遺跡出土遺物観察表（土器）②

図版番号	遺物番号	写真図版番号	種類	器形	生産地	法量（cm）（　）は復元径			遺構名
						口径	底（高台）径	器高	
122	70		青磁	小碗	龍泉窯	(9.4)			1次Ⅲ区包含層
	71		青磁	小碗	龍泉窯		(3.4)		1次Ⅲ区包含層
	72		青磁	皿	同安窯	(10.2)	5.0	2.0	1次Ⅲ区包含層
	73		青磁	碗	龍泉窯				1次Ⅲ区包含層
	74		白磁	皿		(9.4)			1次Ⅲ区包含層
	75		陶器	天目碗	瀬戸美濃				1次Ⅲ区表土
	76		青磁	碗	龍泉窯	(17.0)			1次Ⅲ区包含層
	77		青磁	碗	龍泉窯	(15.6)			1次Ⅲ区包含層
	78		青磁	碗	龍泉窯	(15.6)			1次Ⅲ区包含層
	84		瓦器	椀		(16.6)	(6.8)	5.2	1次Ⅲ区包含層
	85		瓦器	椀		(16.6)	(4.6)	5.9	1次Ⅲ区包含層
	86		瓦器	椀		(15.4)	(4.8)	6.1	1次Ⅲ区包含層
	87	11-5	青磁	碗	龍泉窯		6.3		1次Ⅲ区包含層
	88		青磁	碗	龍泉窯		4.8		1次Ⅲ区包含層
	89		白磁	碗			5.8		1次Ⅲ区包含層
	90		白磁	碗			4.8		1次Ⅲ区包含層
123	91		瓦質土器	鉢					1次Ⅲ区包含層
	92		瓦質土器	蓋					1次Ⅲ区包含層
	93		土師質土器	鍋脚					1次Ⅲ区包含層
	94		須恵器	片口鉢	東播系				1次Ⅲ区包含層
	95		須恵器	片口鉢	東播系	(26.0)			1次Ⅲ区包含層
	96		瓦質土器	擂鉢			(12.4)		1次Ⅲ区表土
	97		土師質土器	鉢					1次Ⅲ区包含層
	98		土師質土器	鍋					1次Ⅲ区包含層
	99		陶器	甕	常滑				1次Ⅲ区包含層
	100		陶器	甕	常滑				1次Ⅲ区包含層
	101		土師質土器	鍋		(21.0)			1次Ⅲ区包含層
	102		土師質土器	鍋		(26.0)			1次Ⅲ区包含層
	103		土師質土器	鍋		(26.4)			1次Ⅲ区包含層
126	107		青磁	碗	龍泉窯		(5.4)		1次Ⅱ区SD001上層
	108		磁器	碗	伊万里		(3.4)		1次Ⅱ区SD001中層
	109		磁器	皿	伊万里	(17.6)	6.8	4.3	1次Ⅱ区SD001下層
	110		土師質土器	鍋取っ手					1次Ⅱ区SD001上層
	111		瓦質土器	擂鉢					1次Ⅱ区SD001下層
	112		瓦質土器	擂鉢					1次Ⅱ区SD001上層
	113		瓦質土器	火鉢？					1次Ⅱ区SD001中層
	114		瓦質土器	火鉢？					1次Ⅱ区SD001中層
	115		瓦質土器	擂鉢					1次Ⅱ区SD001中層
	116		瓦質土器	甕？					1次Ⅱ区SD001上層
	117		瓦質土器	擂鉢			(11.2)		1次Ⅱ区SD001上層
	118		瓦質土器	擂鉢			(11.1)		1次Ⅱ区SD001上層
127	119		瓦質土器	火鉢					1次Ⅱ区SD001上・下層
	120		瓦質土器	火鉢					1次Ⅱ区SD001上層
	121		瓦質土器	火鉢					1次Ⅱ区SD001上層
	122		土師質土器	鍋取っ手					1次Ⅱ区SD001中層
	123		瓦質土器	鍋					1次Ⅱ区SD001中層
	124		瓦質土器	瓶		(13.0)			1次Ⅱ区SD001中層
	125		瓦質土器	火鉢		(21.3)		15.7	1次Ⅱ区SD001中層
	126		瓦質土器	甕？					1次Ⅱ区SD001上層
	127		瓦質土器	甕					1次Ⅱ区SD001上層
	128		瓦質土器	鉢		(30.3)			1次Ⅱ区SD001上・中・下層
	129		瓦質土器	火鉢		(37.4)			1次Ⅱ区SD001上・中層
	130		瓦質土器	火鉢			(24.8)		1次Ⅱ区SD001上層
	131		瓦質土器	火鉢					1次Ⅱ区SD001中層
130	132	11-6	土師質土器	坏					1次Ⅱ区SD002
132	133		瓦器	椀		(14.2)	(5.7)	4.5	1次Ⅱ区SD003上層
	134		青磁	皿	龍泉窯		5.7		1次Ⅱ区SD003下層
	135		陶器	碗	肥前	(10.8)	5.0	7.7	1次Ⅱ区SD003下層
	136		磁器	蓋		(8.0)			1次Ⅱ区SD003中層
	137		陶器	皿	上野高取		4.4		1次Ⅱ区SD003下層
	138		磁器	皿	肥前				1次Ⅱ区SD003最下層
	139		磁器	皿		(12.8)	5.0	3.7	1次Ⅱ区SD003上・中・下層
	140		磁器	皿	唐津	(12.4)	4.6	3.5	1次Ⅱ区SD003上・中・下層
	141		磁器	碗	唐津	(10.0)	(4.6)	6.7	1次Ⅱ区SD003下層
	142		陶器	碗	唐津	(9.6)	4.6	6.4	1次Ⅱ区SD003下層

第３表　木内遺跡出土遺物観察表（土器）③

図版番号	遺物番号	写真図版番号	種類	器形	生産地	法量（cm）（　）は復元径			遺構名
						口径	底（高台）径	器高	
132	143		陶器	碗	肥前		(4.7)		１次Ⅱ区SD003下層
	144		陶器	碗	唐津		4.4		１次Ⅱ区SD003中層
	145		磁器	鉢	唐津	(21.1)	(10.8)	9.6	１次Ⅱ区SD003下層
133	146		土師質土器	鉢		(26.1)			１次Ⅱ区SD003
	147		瓦質土器	鉢					１次Ⅱ区SD003下層
	148		瓦質土器	鉢					１次Ⅱ区SD003下層
	150		瓦質土器	鉢		(20.8)			１次Ⅱ区SD003
	151		瓦質土器	鉢					１次Ⅱ区SD003
	152		瓦質土器	鉢					１次Ⅱ区SD003
	153		瓦質土器	鍋					１次Ⅱ区SD003下・最下層
	154		土師質土器	鍋取っ手					１次Ⅱ区SD003下層
	155		瓦質土器	鍋足					１次Ⅱ区SD003中層
	156		瓦質土器	擂鉢		(28.5)			１次Ⅱ区SD003下層
	157		瓦質土器	擂鉢					１次Ⅱ区SD003中層
	158		陶器	擂鉢					１次Ⅱ区SD003
	159		瓦質土器	こね鉢			(13.6)		１次Ⅱ区SD003下層
	160		瓦質土器	擂鉢					１次Ⅱ区SD003中・下層
134	161		土師質土器	鍋					１次Ⅱ区SD003中層
	162		瓦質土器	火鉢					１次Ⅱ区SD003下層
	163		瓦質土器	火鉢					１次Ⅱ区SD003上層
	164		瓦質土器	火鉢					１次Ⅱ区SD003
	165		瓦質土器	鉢					１次Ⅱ区SD003
	166		瓦質土器	火鉢					１次Ⅱ区SD003
	167		瓦質土器	火鉢		(32.4)			１次Ⅱ区SD003下層
	168		瓦質土器	甕					１次Ⅱ区SD003上層
	169		瓦質土器	甕					１次Ⅱ区SD003
	170		瓦質土器	甕					１次Ⅱ区SD003中層
	171		土師質土器	甕					１次Ⅱ区SD003
	172		瓦質土器	甕					１次Ⅱ区SD003中層
	173		瓦質土器	鉢					１次Ⅱ区SD003下層
	174		瓦質土器	鉢					１次Ⅱ区SD003下・最下層
	175		瓦質土器	鉢			(20.4)		１次Ⅱ区SD003中層
	176		瓦質土器	鉢			(19.8)		１次Ⅱ区SD003中層
135	177		瓦質土器	火鉢		(32.3)			１次Ⅱ区SD003下層
	178		瓦質土器	火鉢		(35.5)			１次Ⅱ区SD003下層
	179		瓦質土器	火鉢		(35.2)			１次Ⅱ区SD003上・中層
	180		瓦質土器	火鉢		(57.6)			１次Ⅱ区SD003中・下層
	181		瓦質土器	甕		(42.0)			１次Ⅱ区SD003上・最下層
136	182		瓦質土器	甕		(44.0)			１次Ⅱ区SD003中・下層
	183		瓦質土器	火鉢		(57.6)			１次Ⅱ区SD003中・下層
	184		瓦質土器	甕		(57.3)			１次Ⅱ区SD003上・下層
140	193		陶器	碗	唐津		(4.8)		１次Ⅱ区SD005上層
	194		瓦質土器	火鉢					１次Ⅱ区SD005下層
	195		磁器	皿	肥前		(12.8)		１次Ⅱ区SD005下層
	196		瓦質土器	鉢		(30.5)			１次Ⅱ区SD005上層
141	197		瓦質土器	甕		(28.0)			１次Ⅱ区SD005下層
143	198		瓦質土器	鉢?					１次Ⅱ区SK004
	199		瓦質土器	鉢?					１次Ⅱ区SK004
	200		瓦質土器	擂鉢					１次Ⅱ区SK004
	201		瓦質土器	甕？					１次Ⅱ区SK004
	202		瓦質土器	火鉢					１次Ⅱ区SK004
	203		瓦質土器	鉢		(27.3)	(12.8)	9.8	１次Ⅱ区SK004
144	204		縄文土器	深鉢			8.8		１次Ⅱ区包含層（SD007）
	205		縄文土器	深鉢			8.5		１次Ⅱ区包含層（SD007）
	206		縄文土器	深鉢			9.4		１次Ⅱ区包含層（SD007）
145	207		土師質土器	鍋					１次Ⅱ区
	208		縄文土器	深鉢					１次Ⅱ区包含層
	209		縄文土器	深鉢					１次Ⅱ区
	210		青磁	碗	龍泉窯		6.0		１次Ⅱ区包含層
	211		磁器	皿			5.2		１次Ⅱ区包含層
	212		土師質土器	坏			6.6		１次Ⅱ区包含層
	213		土師質土器	擂鉢					１次Ⅱ区包含層
	214		瓦質土器	壺					１次Ⅱ区包含層
	215		土師質土器	鍋		(12.5)			１次Ⅱ区包含層
	216		須恵器	甕	常滑				１次Ⅱ区包含層

第15表　木内遺跡出土遺物観察表（土器）④

図版番号	遺物番号	写真図版番号	種類	器形	生産地	法量（cm）（　）は復元径			遺構名
						口径	底（高台）径	器高	
145	217		土師質土器	鉢					1次Ⅱ区包含層
	218		須恵器	甕					1次Ⅱ区
	220		須恵器	甕					1次Ⅱ区
	221		土師質土器	甕					1次Ⅱ区包含層
148	222		土師質土器	小皿		(7.2)		1.2	2次SK002
	223		土師質土器	小皿		(7.0)	(5.8)	1.1	2次SK002
	224		土師質土器	小皿		(7.5)		1.2	2次SK002
	225		土師質土器	小皿		7.0	5.5	0.8	2次SK002
	226		土師質土器	坏		12.2	(8.2)	1.7	2次SK002
	227		土師質土器	坏		12.8	9.0	3.0	2次SK002
	228	11-7	土師質土器	坏		11.5		2.6	2次SK002
	229		土師質土器	坏		(11.8)	(8.2)	2.0	2次SK002
	230		瓦器	椀		(13.6)	(4.0)	4.8	2次SK002
	231	11-9	瓦器	椀		15.4	5.8	5.6	2次SK002
	232		瓦器	椀		14.3	6.0	5.3	2次SK002
	233	11-8	瓦器	椀		14.6	5.4	6.3	2次SK002
	234		瓦器	椀		(16.2)	(4.6)	5.2	2次SK002
	235		瓦器	椀		(15.8)			2次SK002
	236		須恵器	片口鉢	東播系				2次SK002
	237		土師質土器	鍋					2次SK002
	238		土師質土器	鍋					2次SK002
	239		土師質土器	鍋					2次SK002
	240		土師質土器	鍋		(22.0)			2次SK002
	241		土師質土器	鍋					2次SK002
	242		土師質土器	鍋					2次SK002
150	244		土師器	鉢		(12.6)			2次SK002
	245		土師器	鉢		(10.8)		7.2	2次SK002
	246		土師器	鉢		(18.4)			2次SK002
	247		弥生土器	甕			3.4		2次SK002
	248		土師器	台付鉢			(13.0)		2次SK002
	249		土師器	高坏					2次SK002
	250		土師器	甕					2次SK002
	251		土師器	甕					2次SK002

第16表　木内遺跡出土遺物観察表（石器）

図版番号	遺物番号	写真図版番号	種類	材質	法量（cm）（　）は復元径				遺構名
					縦（cm）	横（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	
123	104		石鍋	滑石					1次Ⅲ区包含層
	105		石鍋	滑石					1次Ⅲ区包含層
	106		石鍋	滑石					1次Ⅲ区包含層
137	185		石臼（上臼）	安山岩	(36.0)		7.3		1次Ⅱ区SD003
	186		石臼（上臼）	安山岩	(42.6)		9.1		1次Ⅱ区SD003
	187		石臼（上臼）	安山岩	(44.0)		7.6		1次Ⅱ区SD003
	188		石臼（上臼）	安山岩	40.0		9.6		1次Ⅱ区SD003
	189		石臼（下臼）	安山岩	34.0		9.6		1次Ⅱ区SD003

第17表　木内遺跡出土遺物観察表（土製品）

図版番号	遺物番号	写真図版番号	器種	法量（cm）（　）は復元径				遺構名
				縦（cm）	横（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	
106	3		土師質土錘	4.1	1.2	4.8		1次Ⅲ区SE005
112	22		土師質土錘	4.4	1.4	7.9	2.0	1次Ⅲ区SK007
117	24		土師質土錘	(3.7)	1.1	(4.8)	2.5	1次Ⅲ区SX008
120	39		土師質土錘	4.4	1.1	5.6	2.5	1次Ⅲ区SP076
122	79		土師質土錘	4.3	1.2	4.5	2.5	1次Ⅲ区包含層
	80		土師質土錘	(2.5)	1.0	(2.0)	2.5	1次Ⅲ区表土
	81		土師質土錘	4.5	1.0	4.9	2.5	1次Ⅲ区包含層
	82		土師質土錘	4.0	1.0	4.5	2.5	1次Ⅲ区包含層
	83		土師質土錘	4.7	1.0	6.4	2.5	1次Ⅲ区包含層

第18表　木内遺跡出土遺物観察表（瓦）

図版番号	遺物番号	写真図版番号	種類	器形	生産地	法量（cm）（　）は復元径			遺構名
						全長	幅	厚さ	
138	190		瓦	平瓦					1次Ⅱ区SD003下層
	191		瓦	平瓦					1次Ⅱ区SD003中層
145	219		瓦	平瓦					1次Ⅱ区

第19表　木内遺跡出土遺物観察表（銭貨）

図版番号	遺物番号	写真図版番号	銭貨名	種類	初鋳造年	法量		遺構名
						重さ（g）	径（cm）	
139	192		寛永通宝	文銭	1668	2.3	2.5	1次Ⅱ区SD003中層

第20表　木内遺跡出土遺物観察表（金属製品）

図版番号	遺物番号	写真図版番号	材質	器種	法量※（　）は残存数値		遺構名
					縦（cm）	横（cm）	
149	243		鉄	不明	9.5	1.3	2次SK002

3　小結

今回の調査区から比較的まとまって検出された鎌倉時代・江戸時代の遺構・遺物の他に、縄文土器・古代瓦・平安前期の土師質土器などが確認されている。

縄文時代後期の土器は、大分県下の縄文時代の遺跡立地として、河川に近接した河岸段丘上に占地されていることが多く、木内遺跡もこのような立地をもち、本調査区周辺に同時期の遺跡が存在する可能性が考えられる。

また、古代瓦が出土することや平安時代前期の土師質土器坏を含む溝の存在は、確実にこの地に同時期の遺跡が広がることを物語っている。周辺地域を概観すると、2.5km北東の宇佐市上元重には、古代瓦が出土する小倉池廃寺が存在し、また、1.7km西南の岩屋にある天福寺奥の院には奈良時代の塑造三尊仏以外に、平安時代前期の作とみられる60体をこえる木彫仏群が伝えられている。この狭い岩屋の中で、これ程大量の仏像が祀られていたのではなく、廃寺となった周辺の他の寺から持ち込まれたのだろうと考えられており、仏教文化が華開いた地であったことがわかる。大分県下では平安前期の遺跡は数少ない。当地周辺にこのような遺跡が存在することの嚆矢となる発掘調査であり、今後の周辺地の発掘成果に期待をもたせる成果であった。

木内遺跡のすぐ南には、トロイデ状の山容を示す標高406mの稲積山が存在する。11世紀初頭の作と考えられている『宇佐八幡宮弥勒寺縁起』には辛嶋氏の神は豊前香春岳を経て、「宇佐郡辛国宇豆高島」に天降るとあるが、この場所は稲積山を指すものと考えられている。稲積山山頂からは長寛元年（1163）銘をもつ石柱塔婆3基が発見されており、その銘文中に「僧頼厳聖人」の名がみえる。頼厳は彦山・求菩提山の中興の祖であり、稲積山麓の妙楽寺が終焉の地とされている。この妙楽寺境内からは、稲積山を仰ぎ見る位置から12世紀の埋経遺構３基が発見され、中から経筒や四耳壷、写経紙を巻いた経巻が出土している。

木内遺跡からは鎌倉時代の土坑・柱穴・柵列等が確認されており、これらの遺構群が存在する時期には確実に妙楽寺が存在していたことがわかる。一般的に大分県下における中世集落は、14世紀後半に集村化が進み、戦国期にそのピークを迎え、現在に残る集落景観は中世集落を踏襲する場合が多い。それ以前は散村形態をとることが多く、生活空間の広がりも単発的に終わる。今回の調査区の北には、現在に続く集村化した集落が確認できる。この集落の始まりと今回の調査区で確認された鎌倉期の生活空間が継続性をもつものかは明らかでない。今回の調査区では、中世後半期の遺構・遺物がきわめて乏しいことからしても、継続性をもつ可能性が低いものと思える。また、平安後期に地域を代表する寺院である妙楽寺の前面に広がる集落でありながら、調査区が狭いことと関連するであろうが、鎌倉時代の土坑・柱穴・柵列等の様相からして、必ずしも有力者の生活空間とは言いきれない一般的な集落遺跡であることが明らかとなった。

これに続く、纏まった遺構群としては、近世まで下ってしまう。Ⅱ区を中心に検出された溝や土坑からは、土師質土器・瓦質土器を中心にした17世紀後半から18世紀前半の土器類が比較的多く出土するとともに、１ｍを超える岩をはじめ、人頭大・拳大、さらに小さな礫で埋め尽くされている状態であった。溝の場合、調査区が細いため、その全貌がうかがい知れないが、広さや深さも場所によってまちまちであり、水路として掘削されたものではない様相をもつ。そこで、その機能として考えられるのが、水田開墾の際、礫や岩の処理方法として、大岩を用地外に持ち出すよりは、開墾時に事前に溝や大型土坑を掘り、より効率的に床土下にまとめて埋め込む方法である。この方法は、古くから考えられたものであり、近年の圃場整備の際にも採用された手法である。Ⅱ区の溝や土坑は、この様子を残すものではないだろうか。

この場所の水田は、昭和期の圃場整備以降、広瀬井路から用水を引いているが、それ以前は稲積山北麓の妙楽寺奥の石井池から引水していたと地元で伝えられている。石井池は『四日市年代記』によれば、貞享元年（1686）に築立されているが、この時期は木内遺跡Ⅱ区の溝が埋没した時期に重なる。この場所の水田の開墾が石井池築立と連動していたことは、大いにあり得ることではないだろうか。

（原田　昭一）

第６節　丸尾城跡

１　現状

城郭のある丘陵は雑木林および杉林なっている。現状では畑地はない。丘陵の東側の谷には小さなダムが造られており、その堰堤の横の丘陵斜面には神社があった形跡が残されている。さらにここから尾根の鞍部に向けては山に入る道が延びており、ある時期まで里山として機能していたことを窺わせる。

２　発掘調査

東九州自動車道は、丸尾城の南端を僅かにかすめる。そのため、現状で堀切状に窪みの見られた尾根の暗部にトレンチを設定し、地山まで掘り下げた。その結果、地山面に達する掘り込みは確認できなかった。しかし、表土が流出するなどして、本来あった掘切が浅くなっていた可能性もあり、掘切の有無については明確な手がかりを得ることが出来なかった。

３　縄張り

周囲の沖積地から、比高差約40mほどの丘陵先端部に作られた城郭である。丘陵は南東部から延びてきて、一度鞍部を作り、再びやや幅を広げながら高くなり北西に延びる。鞍部の幅は約20mで、ここには前記したように浅い堀切状の溝が南西に向かって下っている。その北側は溝に沿って土塁状にやや高くなっている。さらに、その堀切状の溝の頭部は幅２mほどの通路状に高くなっており、もしこの溝が堀切であれば、東側にも同様の堀切が入れられ、その間が土橋状になっていたことが想定される。

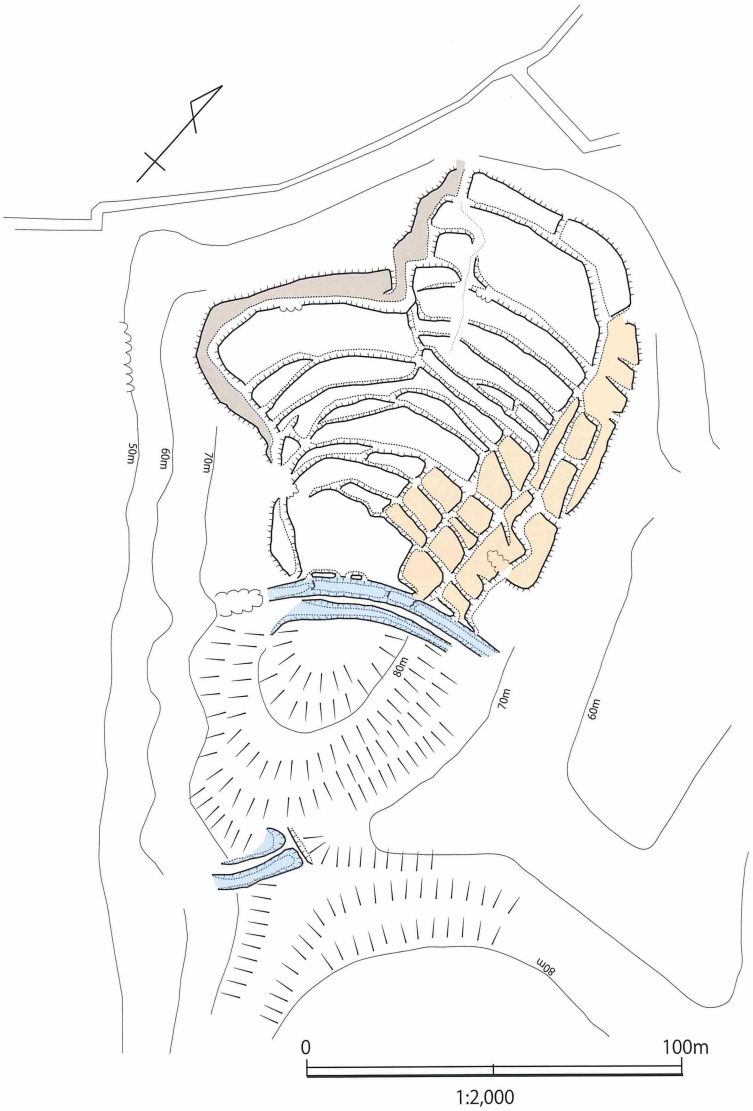
確実に城郭に伴う堀切は、この鞍部から50mほど（高さにして10mほど）登ったところにやや湾曲しながら南西から東北方向に２本入れられている。幅は５mで、全長は南側のもので45m、北側のもので65mである。深さは１～1.5mほどで、２本の堀の間は土塁状に高くなる。堀切の西端は急崖に接して終わり、東端はやや緩やかな崖に接して終息する。北側の堀切の北側には部分的に土塁が残る。本来は北側の曲輪に沿って土塁があったものと思われる。

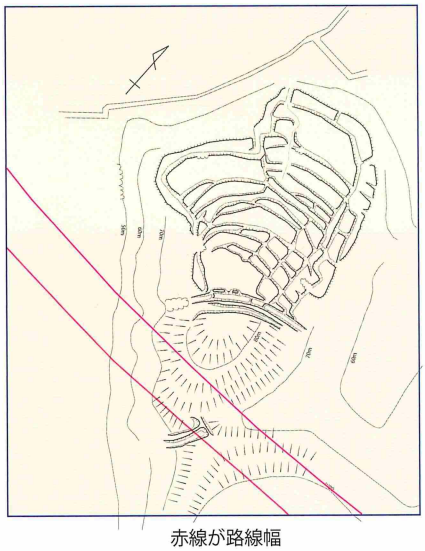
この２本の堀切の北側に接した30×20mほどの面が最も高く、主郭である。しかし、面は必ずしもきれいに平坦とはなっておらず、やや東に向けて下る。この主郭から北側に向かって尾根は幅を広げるため、細長い曲輪が段々畑状に半同心円状に取り巻くことになる。この段々畑状の曲輪は、ほぼ中央で東西で互い違いの段差を有する。図でオレンジ色で網掛けをした部分については、後世の削平に伴うものである可能性が高いが、全体的には中世段階の姿を残しているとみて良い。

この城郭の城道は、丘陵の先端(北側)から登ってくる道が最下段の曲輪に取り付いたところから城内となり、曲輪の西側を曲輪から見下ろされながら登り、さらに３度曲輪の崖面（切岸）によって屈曲し、そして、尾根の西側（曲輪群の西側）を大きく回り込む形で主郭から４段下の曲輪の西側にたどり着くこととなる。これは、曲輪にたどり着くまでに、曲輪面から幾度も横矢が掛かる形となり、至って頑強な虎口と言うことが出来る。

４　小結

発掘調査によっては、新たな情報を得ることはできなかった。しかし、城郭そのものは比較的よく残されており、一定の評価は可能である。構造的には尾根を堀切で切断し、内部を切岸で処理をするものであるが、注目されるのは城道の使い方である。この城道のあり方や曲輪に接するという堀切の位置からして、戦国末期に作られたものである可能性が最も高い。在地領主クラスの城郭であろう。　（小柳　和宏）





第151図　丸尾城跡平面図（1/2,000）

調査区全景（南から）

2区全景

1区全景

1区SB2・SD3・SP14

1区SB2

2区SK19

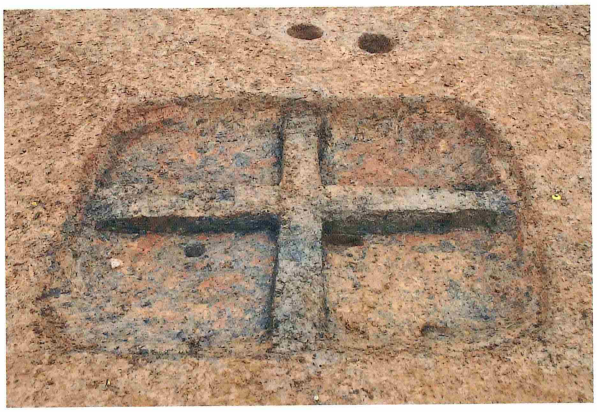
調査区全景（東から）

調査区全景

南北トレンチ堀土層断面

SK56

SK292

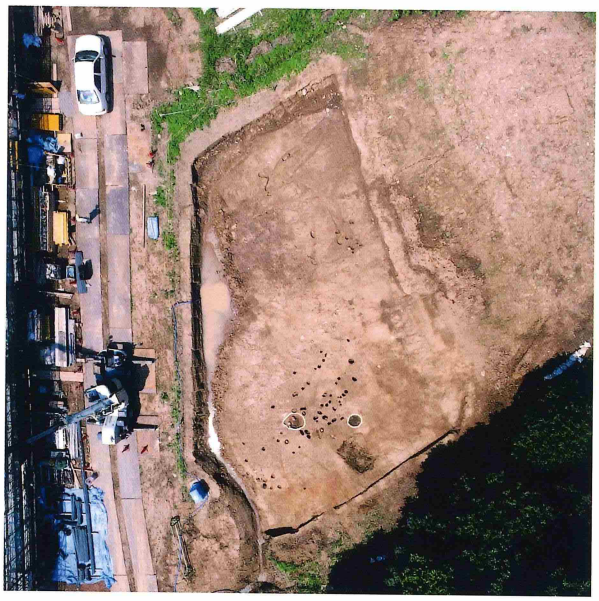


SK54

調査区全景（東から）

西区全景

西区SB126ほか



東区全景

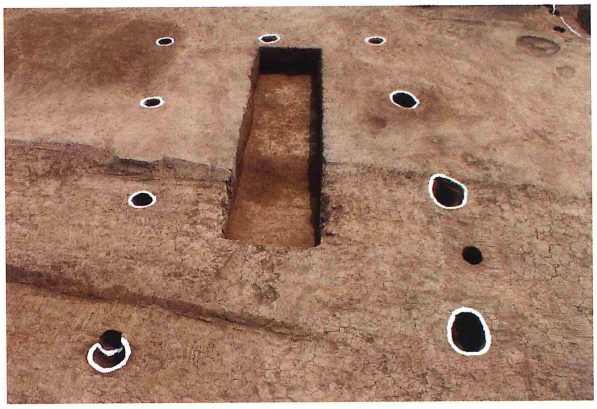
西区SE136

東区SK01・02・03

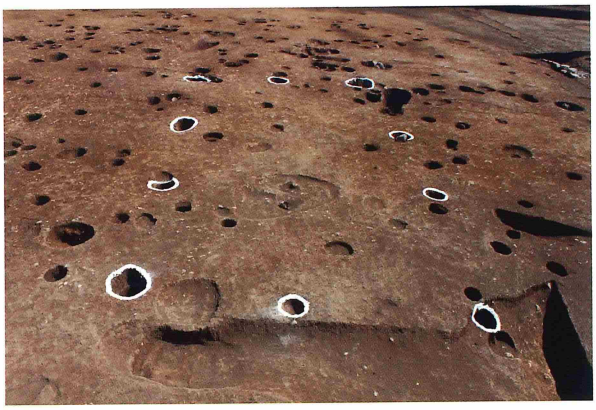
東区SK01

東区SK02

東区SK03



東区SB10



東区SB126

東区SA158・SA163

東区SA54

東区SD111ほか

調査区遠景（南から）

調査区全景（南西から）

第1・2・3・4平坦面

調査区全景（東から）

SK027

ST240

ST240

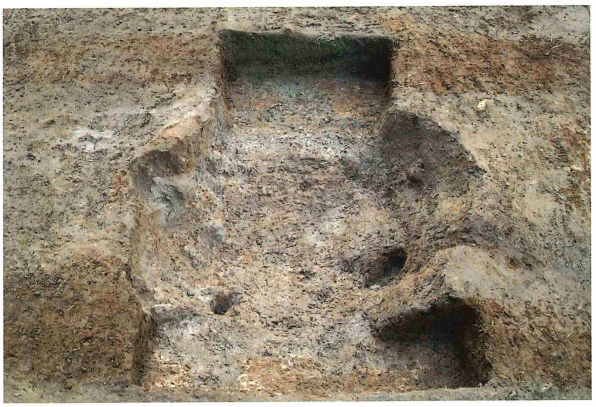
ST240

ST240人骨出土状態

SA252

SP229

第４平坦面整地層土層断面図



SK107

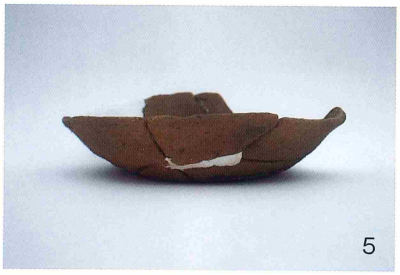
SK244・SP241

SK244

SP241

第15平坦面土塁状遺構

SX239



今成館跡出土遺物

1次調査区全景（南から）

1次調査区全景（北から）

1次調査区全景（西から）

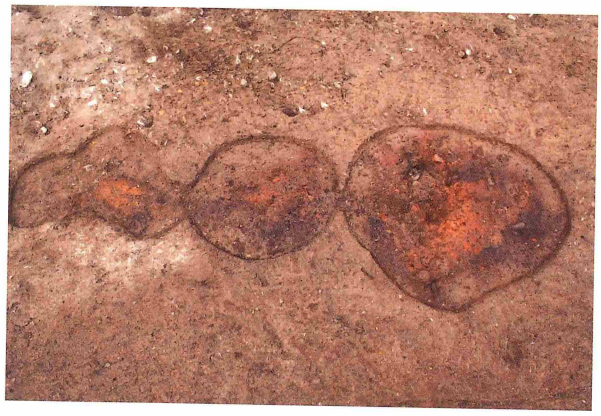
1次調査区全景

1次調査Ⅲ区SE005

1次調査Ⅲ区SA015（南東から）

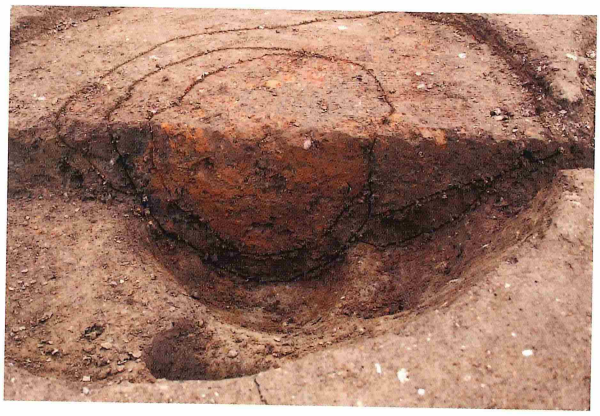
1次調査Ⅲ区SD004（南から）

1次調査Ⅲ区SK007

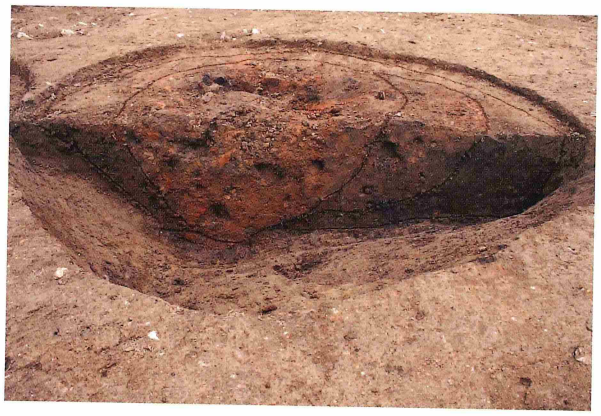


1次調査Ⅲ区SK001・002・003

1次調査Ⅲ区SK001



1次調査Ⅲ区SK002



1次調査Ⅲ区SK003

1次調査Ⅲ区SK001・002・003完掘状態

1次調査Ⅲ区SX008・009

1次調査Ⅲ区SX008・009完掘状態

1次調査Ⅱ区全景

1次調査Ⅱ区SD001

1次調査Ⅱ区SD002

1次調査Ⅱ区SD003・005

1次調査Ⅱ区SK004

2次調査Ⅱ区全景

2次調査Ⅱ区SK002

木内遺跡出土遺物

丸尾城跡遠景（西から）

報告書抄録

ふりがな	にしまくさおおさこいせき・はるばたけいせき・かしみいせき・いまなりやかたあと・きうちいせき・まるおじょうあと
書名	西秣大迫遺跡・春畑遺跡・カシミ遺跡・今成館跡・木内遺跡・丸尾城跡
副書名	東九州自動車道（県境－宇佐間）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	（1）
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第71集
編著者名	小柳和宏・原田昭一・越智淳平
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113　大分市大字中判田1977番地
発行年月日	2014年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西秣大迫遺跡	中津市三光西秣	203	285	33° 31′ 58″	131° 14′ 5″	20110817 ～ 20111007	1365	東九州自動車道 （県境－宇佐間）
春畑遺跡	中津市三光下秣	203	286	33° 31′ 20″	131° 15′ 6″	20120111 ～ 20120309	1989	
カシミ遺跡	中津市三光下深水	203	283	33° 31′ 16″	131° 15′ 13″	20110606 ～ 20110810	2070	
今成館跡	宇佐市今成	211	345	33° 30′ 20″	131° 17′ 46″	20091116 ～ 20100219	6700	
木内遺跡１次	宇佐市木内	211	340	33° 30′ 20″	131° 17′ 57″	20090703 ～ 20090825	1630	
木内遺跡２次	宇佐市木内	211	340	33° 30′ 15″	131° 17′ 59″	20121105 ～ 20121108	130	
丸尾城跡	宇佐市木内	211	340	33° 30′ 15″	131° 18′ 7″	20120604 ～ 20120612	49	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西秣大迫遺跡	集落	中世	溝，掘立柱建物跡，焼土坑	土師質土器，瓦器，瓦質土器，青磁	
春畑遺跡	集落	中世	土坑，柱穴	瓦質土器，土師質土器	
カシミ遺跡	集落	中世	掘立柱建物，溝，井戸	瓦質土器，青磁	
今成館跡	集落	中世	集石墓，土坑，柱穴	土師質土器，瓦質土器，瓦器，青磁	
木内遺跡１次	集落	中世	掘立柱建物，溝，井戸，土坑	土師質土器，瓦質土器，瓦器，青磁	
木内遺跡２次	集落	中世	土坑，柱穴	瓦質土器，土師質土器	
丸尾城跡	集落	中世			

要約	

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第71集

西秣大迫遺跡・春畑遺跡・カシミ遺跡
今成館跡・木内遺跡・丸尾城跡

－東九州自動車道（県境－宇佐間）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）－

2014（平成26）年３月31日

発行　大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL 097-597-5675

印刷　佐伯印刷株式会社
〒870-0844　大分市古国府1155-1
TEL（097）543-1211